フロイド精神分析學全集

日常生活の精神分析

大槻憲二譯

精神分析學研究所

春陽堂

フロイド精神分析學全集

日常生活の精神分析

大槻憲二譯

精神分析學研究所

春陽堂版

FREUD

譯者序文

本書は『フロイド精神分析學全集』の第三卷に相當する。原名は『日常生活の精神病理』"Zur Psychopathologie des Alltagslebens"であるが、分り易いために、只今假りに御覽の如き名を用ゐた。私の就いた原書は一九二四年第十版で、同時にブリル A. A. Brill の英譯(一九二三年、第九版)を參照したが、ブリルの譯は原書よりも舊版であるせいか、ないか、とにかく大分に省略されてゐるし、實例も英譯者自身の報告の形にしたものを以て置換へてある個所が少くない。本書のブリルの英譯は『夢の註釋』英譯ほどの好成績ではないらしく思へた。私は能ふ限り原書に近くした。

引用フランス文の飜譯竝びに義解は友人中島祐神氏の教示に負ふ。記して感謝の辭に代へる。

本書の初版は何年に出たものか、只今のところ判明せぬが、ロシア語譯が一九〇九年に出てゐるところを見ると、それ以前に出たものに相違ない。本書はロシア、ポーランド、イギリス、オランダ、スペイン、フランス、ハンガリーの諸國語に既に譯せられてゐる。只今日本譯が更に加へられたわけである。(初版は一九〇四年なることをその後に至つて發見した。)

フロイドの他の著書を讀んで未だ精神分析に服しなかつた者も、本書を讀むに及んで斷然改宗したと云ふ心理學者、醫學者は少くない。私自身もこの書は始めより終りに讀み進むに從つて愈々興味の深くなりまさつたことを告白せざるを得ぬ。フロイドが『精神分析入門』中に於いて日常生活の精神病理に關する項を開卷の諸章に置いてゐるのは偶然でないと思ふ。

本譯稿殆ど成る頃（八月三十日）、フロイドはゲーテ賞を得たとのフランクフルト發電報が各新聞紙上に見えた。永年學界の反感と無視とに戰つて來た斯學鼻祖の前にも、やうやく一般の承認と推讃との日の到來した事を證明するものとして、併せて本譯書の完成と殆ど時期を等しくすると云ふ記念のためにも一言この事に觸れておく。（昭和五年秋日）

以上は初版の序文である。初版公刊以後五年にしてこゝに再版を上梓することゝなつた。五年前を顧みてわが國に於ける斯學の發達を思ふ時、感慨無量なるものがある。如何に不遇なりと雖も、遂に「眞理は勝つ」のだ。

昭和十年九月

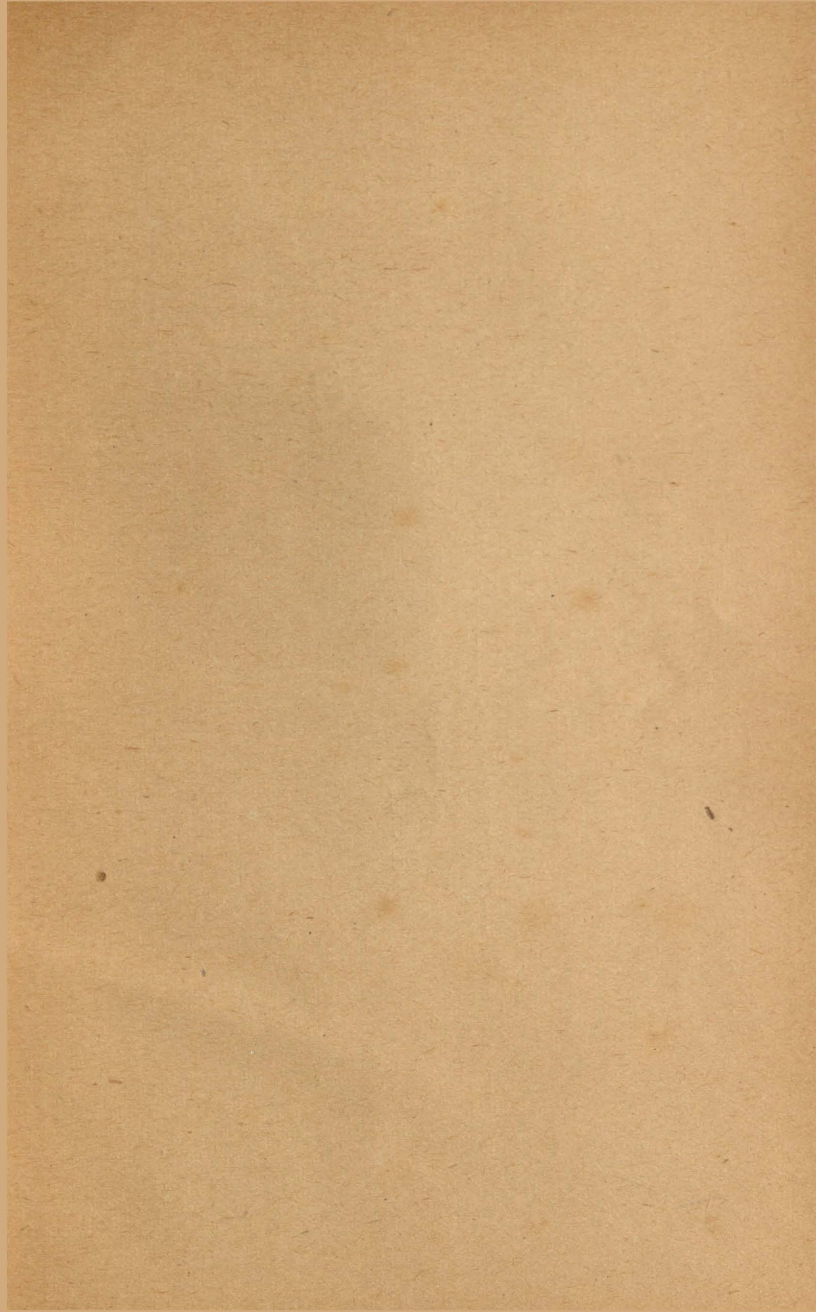
大槻憲二識

目次

（口繪）フロイド像（塑像、年代不詳、多分一九三四年ならむ）

日常生活の精神分析

今は怪異があたりの空氣に滿ちて
どうして避けてよいか分らぬ。

――ファウスト第二部第五幕――

第一章

固有名の忘却

一八九八年中に私は『忘却の精神的機制に就いて』(一)一小試論を發表した。私は玆にそれの内容を繰返し、それを出發點として議論を進めて行きたいと思ふ。私はその論文の中で、固有名の度忘れの一つの有觸れた場合を精神分析して見たのである。さうして私自身の觀察した一つの含蓄ある實例からして、私は、記憶てふ精神機能にあり勝ちな、實際上重要ならぬこの出來事に對して、この現象の普通の效用以上に出でた說明を下すことが出來るとの結論に到達したのである。

【註】(1) Monatschrift f. Psychiatrie.

もしかいなでの心理學者に、どうして我々は慥に我々が知つてゐる筈の名を思ひ出し得ないやうなことが屢々あるのかと訊ねて見ると、彼は恐らく、固有名は他の如何なる記憶內容よりも忘れられ易いものであるといふだけで滿足してゐることであらう。或は彼は、固有名のこの『忘れられ易さ』に對して、尤らしい理由を與へるかも知れない。併し彼はこの現象に對して何等深い決定要素を指示し

ようとはしないであらう。

私は度忘れの現象には或る特殊さがあつて、それは一般的ではないが、併し或る場合には明白に見えるものであるから、その特殊さを觀察してゐる内に、段々とこの度忘れの現象を徹底的に檢べて見るやうになつたのである。その特殊さが明白に見えるといふ或る場合に於いては、忘却のみならず、また間違つた回想もそこにあるのである。忘れた名を思ひ出さうと努める者は、違つた名を――代償名を――意識に齎し來る。この違つた名はその違つてゐる事は直ぐに分るが、併し非常に執拗に出しやばつて來るのである。忘れた名の想起に導くべき過程が、云はゞ轉位せられてゐて、そのためにこのやうな正しからぬ代償を摑むやうになるのである。

さてこの轉位なるものは、精神が出鱈目にするものではなくて、合法的な合理的な道程に從ふものであると云ふのが、私の假定なのである。換言すれば、私は、この代償名（代償名は二個以上の事もある）が、失はれた名稱と直接關係があると假定するものである。で、首尾よくその關係を實證出來て、名稱を忘れることの起源を闡明して御覽に入れたいものである。

私が一八九八年に分析しようと思つて選び出した實例の中には、オルヸエトー（Orvieto）の寺院に豪莊な『最後の審判』の壁畫を描いた巨匠の名を想起しようとして徒勞に終つたことがある。忘れら

れたシニョレリ（Signorelli）と云ふ名の代りに、ボッティチェリ（Botticelli）とボルトラフィオ（Boltraffio）と云ふ他の二人の藝術家の名が出しやばつて來たが、私の理性は即座にそれ等の名を誤れるものとして斷乎と斥けたのである。その時或る第三者が正しい名を敎へて吳れたので私は少しも躊躇はずに直ぐに成程さうだつたと知つた。このシニョレリからボッティチェルリ及びボルトラフィオへ轉位する原因となつてゐる影響や聯想の道程を檢べて見ると、次のやうな結果になつた。

（一）このシニョレリなる名前が記憶されてゐない理由は、この言葉そのものに親しみがないといふことにも發見せられないし、またこの言葉の有つ心理的關係の特質にも發見せられないのである。私にとつては、この忘れられた名は代償名の一つであるボッティチェリと殆ど同じ程度に親しみの深いものであるし、また他の代償名たるボルトラフィオは、その名の所有者がミラノ派に屬した人であつたといふこと以外には殆ど私は何も知らなかつたのであるから、これよりは寧ろシニョレリの方が却つていくらか親しみが優つてゐるほどなのである。この名を忘れるやうになつた事情も、私には大したことゝ思はれないし、またこの事情だけではこれ以上、何とも說明の下しようがないのである。私はダルマチヤ（Dalmatia）のラグーサ（Ragusa）から來た一旅行者と一緖に、ヘルツェゴヴィナ（Herzegovina）の一停車場へ馬車を驅つてゐた。恰度私達の會話はやがてイタリーの旅行の事になつて行つたが、私

は連れに向つてオルヰエトーに行つたかどうか、そしてそこで……の手になる有名な壁畫を見たかどうかと訊ねたのである。

（二）　この名を忘れたことは、この會話の直前に話してゐた題目を、私が再び思ひ起すまでは説明出來なかつたのである。從つてこの忘却は、その前に論じられてゐた事柄のために新に割込んで來た題目が攪亂されたものであると分つた。簡單に云へば、私がオルヰエトーに行つたかなどと旅の道連れに訊ねる前に、我々はボスニヤ(Bosnia)やヘルツェゴヴィナに住んでゐるトルコ人の習慣に就いて話しあつてゐたのである。私はトルコ人の間で醫者を開業してゐた同僚から聞いた話を、即ちトルコ人が醫者には絶大な信頼を示し、運命には全然柔順であると云ふことを述べてゐたのであつた。止むを得ず彼等に患者はもう助からないと知らせると、彼等トルコ人は答へるのである。『先生、(Herr)何も申し上げることはございません。もし助けられるものならば先生はお助け下さるのでせうから。よくわかつて居ります。』これ等の文章の中だけにでも、我々は、シニヨレリ、ボッティチェルリ及ボルトラフィオの三語間に、一聯の聯想として挿入され得べきボスニア、ヘルツェゴヴィナ及先生(Herr)といふ言語や名稱を發見することが出來るのである。

（三）　私はボスニアに於けるトルコ人の習慣その他に關する考への流れのために、次の考へが攪亂

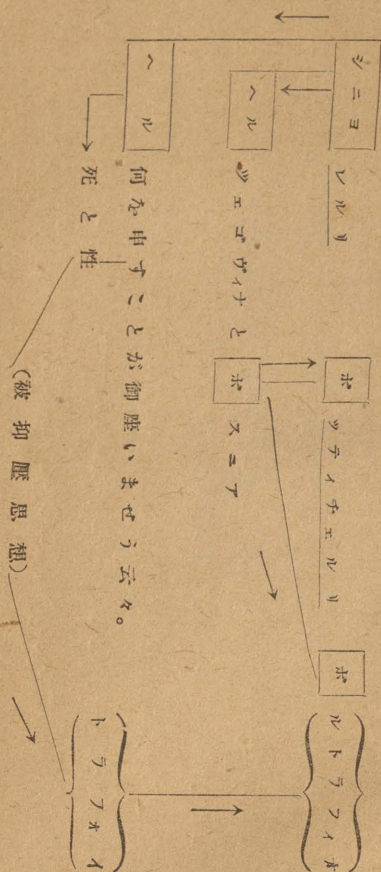
されたのだと思ふ。何故ならば、私はその考への流れが終る前に、自分の注意をその流れから引き退らせたからである。つまり、私は、自分の記憶中にある、最初の話と隣り合つてゐる第二の話を語り度いと思つた事を想ひ起すのである。これ等のトルコ人は他の何事にもまして性的快樂に價値を置いてゐて、性的障害に際會すると全然絶望に陷り、それが、彼等の生命を失ふ危險に瀕して示す諦めと不思議な對照をなすのである。私の同僚の取扱つた患者の一人が彼に次のやうに云つたことがある。『だつて先生さうぢやございませんか、そいつが止んでしまへば、人生なんてもう何も面白いことは御座いませんよ。』

私は初對面の人との話に、そのやうなデリケートな問題に觸れ度くなかつたので、このやうな特異な事を語るのは差控へたのである。しかし、私はやはり會話を續けて行つた。で、私は自分の心の中で『死と性』てふ題目と結びついたらうと思はれる思想の續きから自分の注意をそらせもしたのである。その時の私は、二三週前トラフォイ (Trafoi) にほんの暫くの間逗留してゐた際に受取つた、ある通知の餘波をまだ留めてゐたのである。自分が非常に骨を折つた或る患者が、不治の性的障害のために命を隕したのであつた。私はこの悲慘な出來事と、これに關する總ての事柄が、ヘルツェゴヴィナに於けるかの旅行に際して、自分の意識的追憶に立戻つて來なかつたのをよく知つてゐる。併しながら、ト

ラフォイとボルトラフィオとの間の一致は、當時私が自分の注意をいろ〳〵廻らせやうとしたにも拘らずこの回想が活動してゐたことを假定せざるを得ざらしめるのである。

（四）私には最早、シニョレリと云ふ名を忘れたことを、偶然な出來事とは考へられない。私はこの過程の中に或る動機の影響を認めないわけには行かないのである。そこにはさま〳〵な動機があつて、それ等が私の各思考（トルコ人の習慣などに關する）の交渉を妨害し、またこれ等の動機に關聯してゐる思考を自分の意識から除外するやうな影響を後に私に及ぼしたものであり、更にトラフォイに於ける出來事に關した報知へと私を導いて行つたのである。——即ち、私は或る事を忘れたかつたのだ。或る事を抑壓したのだ。確に私は、オルヰエトーの巨匠の名とは別の或る事を忘れ度いと思つてゐたのである。然しこの別の思考が、その思考自體と巨匠の名との間に聯想的關聯を作り上げたために、私の選擇行爲はその目的を誤つて、自分の意志に反して前者を忘れたが、而も自分のつもりでは後者を忘れ度かつたのである。この思起すのが厭だといふことは、一つの内容に反いて進み、記憶出來ないと云ふことは他の内容で現れてゐる。この記憶するのが厭だといふことゝ、記憶出來ないと云ふことゝが、もし同一な内容に關してゐるならば、問題は明らかに一層單純であらう。二つの代償名稱は最早このやうな解說が無かつた頃ほど完全には是認されないで、私に（妥協の形式に從つて）

記憶したいと思つてゐたことゝ同じ程度に、忘れ度いと願つてゐたことを思出させ、且つ或る事柄を忘れやうとする自分の目的が、完全に成功もしなかつたしまた失策りもしなかつたのを示すのである。

（五）忘却した名稱と抑壓された主題（死と性慾等、またボスニア、ヘルツェゴヴィナ及びトラフォイ等の名稱をも含む）との間に出來た聯想の性質はまた不思議なものである。一八九八年に發表したものであるが、これに依つて以上の諸聯想を圖示しようと試みるものである。

シニヨレルリといふ名は、かくして二個の部分に分たれてしまつた。一方の綴音（シラブル）(elli)は、代償の一

つに於いて變化されずに戻つて來たのである。然るに他方の二綴音は、Signor (sir, Herr)を譯すことによつて、抑壓された問題中に含まれてゐる名稱に對して多くのさまぐな關係を贏得たのであるが、それの代償は一つの轉位が、意思出さうとした時にはその抑壓のために失はれてしまつたのである。それ故これ等の名稱は、この過程に於ては、恰で形を變へて味や聽覺の限界に頓着なく、同じ聯想――『ヘルツェゴヴィナとボスニア』――に伴うて生じた事を示唆するやうな風に、構成されたのである。それ故これ等の名稱は、この過程に於ては、恰で形を變へて判じ繪となさるべき文章を、影像に書いたやうに取り扱はれてゐる。このやうに、シニヨレリと云ふ名稱の代りに代償名稱となつた全過程に關しては、意識は何等の知るところもないのである。一見したところでは、シニヨレリと云ふ名稱を含んでゐる主題と、それにすぐ先行する抑壓された主題との間には、何等の關係もなさゝうに見えるのである。

右のやうな解説は、記憶の再現及び忘却に關して他の心理學者達に依つて假定されてゐる條件――彼等はある種の關係や配列の中にそれを覓めてゐるのであるが――と撞着するものでないことを述べておくのも、餘計なことではあるまい。長い間名稱忘却の原因と認められて來た素因に、我々は或る場合にだけ一つの動機を附加し、かくして錯誤記憶の機制を闡明して來たのである。彼等の假定した配列は我々の場合に於いてもまた、抑壓された要素が尋ねる名稱を聯想的に引張り出して來たり、そ

の名稱を己れと共に抑壓してしまふことの出來るためには、緊要缺くべからざるものである。恐らくこの事は、思ひ出すのにもつと差支へのない他の名稱であつたらば起らなかつたのであらうと思はれる。何故ならば、禁壓された要素は絕えず何等かの他の方法で自己を主張しようと心組んでゐるが、これが成功するのは、たゞ適當な條件に遭遇する場合だけであるといふことが全くありさうなことだからである。他の場合に於ては、この禁壓は、機能の障害なしに、若しくは症狀なしに（と云つても毫も差支へないものであるが）成就するものである。

名稱忘却竝びに誤れる追想の條件を撮要すると次のやうになる。

（1） その名を忘却する或る種の配列（性質）

（2） 直前に起つた禁壓の過程、及び

（3） 當該名稱と豫め抑壓された要素との間に外的聯想を確立し得ること。

この最後の條件が過度に重要視されることは恐らくないであらう。何故と云ふに、聯想は一寸でもその必要があると、多くの場合にこの條件を生ぜしめる傾向を有してゐるからである。然しかゝる外的聯想が、禁壓された要素をして所期の名稱の想起を妨げしめるやうな適當な條件を實際に供し得るかどうか、或は、要するに二つの主題間の一層緊密な關係が必然的に要求されないかどうかと云ふこ

とは、自ら別の、一層立ち入つた問題なのである。皮層な考へでは、我々は後の方の要求を拒否し、且つ全然異つた內容の一時的な合致を滿足なものとして考へるやうになるかもしれない。然し、一層完全に考査して見ると、二個の要素（抑壓されたものと新しい外的聯想によつてゐるものと）はこれの外に內容的關係を有してゐることが愈々屢々分つて來るのである。さうしてこのことは、シニョレリの實例に於いてもまた證明し得られるのである。

シニョレリの實例を分析して知り得たことの價値は、我々がこの場合を典型的な過程として說明すべきか、或はまた單純なものとして說明すべきかに懸つてゐることは勿論である。で、今や、誤れる追想を伴つてゐる名稱の忘却は、シニョレリの實例に於て實證したのと同一な過程に異常に屢々從ふものであると主張しないわけに行かない。私が自分の心內にこのやうな現象を觀察した時には、殆どいつでもそれを右に示したやうに、抑壓に依つて發動されたものとして說明することが出來たのである。私は更に我等の分析の典型的な性質のために、また他の觀點をも擧げておかなければならない。私は、誤れる追想を伴ふ名稱忘却の場合と、不正確な代償名稱が出しやばつて來ない場合とを區別するのは正しくないと信じてゐる。これ等の代償名稱は自發的に起る場合が澤山にあるが、それ等が自發的に浮上つて來ないやうな他の場合では、注意を集中することで彼等を表面に引き出すことが出來

る。引き出してみるとそれ等は、抑壓された要素と失はれた名稱とに對して、自發的に發生して來た時と、同一な關係を示すのである。二個の因子が代償名稱を意識に持ち來たすに一つの役目を演じるやうに思はれる。即ち、第一は注意する努力であり、第二は精神材料に粘着してゐる內的決定要素である。私は後者が二個の要素間の所要の外的聯想を形成する多少の便利となつてゐるのを發見出來たのである。それ故、誤れる追想を伴はない名稱忘却の非常に多くの場合は、代償名稱形成を伴ふ場合に屬して居り、それの機制は、シニョレリの實例に於ける機制に相當してゐる。併し乍ら私は、名稱忘却の一切の場合は同一（種類）に屬すると斷言するやうな冒險はしない。勿論、名稱忘却が遙に單純な方法で行はれる場合のあることも疑はない。我々が名稱の單純な忘却以外に、なほ抑壓によつて發動された他の忘却もあると言つて置くならば、我々はこの間の消息を十分注意深く表現することになるのである。

第二章
外國語の忘却

我々の自國語の普通の語彙は、常態な機能の限界内では、忘却されることはないと思はれるが、外國語から來た言葉に就いては全然趣を異にしてゐる。この種の言葉を忘れる傾向は、總ての品詞に行渡つてゐる。實際、我々自身の一般的狀態や疲勞の程度の如何に依つて、機能障害の最初の顯現は、外國語彙に對する我々の統制の不規則さとなつて出て來る。或る一聯の場合に於いては、この忘却はシニョレルリの實例で闡明されたものと同じ機制(メカニズム)に從つてゐる。これの實證として、私はラテンの引用句から來た言葉(名詞ではないが)の忘却に關する分析を一つだけ報告しておかう。併しこの分析は價値ある特徵を有するものである。で、その分析の報告をする前に、この短い挿話の一伍一什を十分明かにしておくことを許されたい。

去年の夏、私が休暇で旅行をしてゐる際に、私は大學時代の若い知己と舊交を溫めたのであつたが私はその人が私の著書の二三を讀んでゐるのを、直ぐに知つた。我々は話の中で——どうした次第か

らであつたかは今では記憶してゐないが――我々二人が屬してゐる種族(この社會的地位に言ひ及んだ。彼は覇氣ある青年であるから、彼の時代が、彼の口吻に依ると、不具になるやうに運命づけられてゐるといふ事實を、才能を伸し欲望を滿すことの阻止されてゐる事實を、嘆いたのである。彼はその情熱的な、感情亢まつた演說を、ヴーヂル Virgil の有名な詩句を以て結んだ。それは Exoriare……云々の詩句で、その中で不幸なディドー Dido はエネアス Aeneas に對する復讐を子孫に托するのである。『結んだ』と云ふよりは『結ばうと思つた』と私は云ふべきであつた。何故ならば、彼はその引用句を終りまで云ふことが出來ず、次のやうに言葉を置換へることに依つて彼の記憶中の空隙を匿さうと試みたからである。

"Exoriar (e) ex nostris ossibus- ultor !"

靑年はとうとう不機嫌になつて云つた。『どうぞ、私が困つてゐるのを痛快がつてゐるやうな、人を小馬鹿にしたやうな顏をしないで、私に敎へて下さい。この詩句の中に何處か忘れたところがあるのです。間違ひなく云ふとどうなんでせう?』

『よう御座います、お教へしませう』と私は答へて、その詩句を正しく引用した。

"Exoria (e) aliquis nostris ex ossibus ultor !"

『こんな言葉を忘れるなんて、あんまり馬鹿げてゐる』と彼は云つた。『さう云へば、貴方は忘却には理由がなくはないと主張してゐられるやうですが、私がこの不定代名詞の aliquis を忘れるやうになつたのはどうした次第でせうか。何とか承りたいものですね。』

私は自分の蒐集を殖したいと思つてゐたので、喜んでこの挑戰を受け容れ、さうして云つた。『それはおやすいことですが、併しその忘れた言葉に、別に特殊の意圖なく注意を集注した後に、心に浮び來る一切の事を、何の批評も加へずに、あけすけに貴方は云つて呉れなくてはいけませんよ。』(二)

【註】(一)　フロイドはユダヤ人である。(譯者)

(二)　これが匿れた觀念を意識に齎し來る普通の方法である。『夢の註釋』參照。

『承知しました。妙な考へが浮んで、この言葉を次のやうに分ちます。a と liquis とにです。』

『それはどう云ふわけです?』

『分りません。』

『それに就いて何か他に思ひ當ることはありませんか？』

『考へはかう進んで行きます。Reliquien（遺物）――Liquidation（清算）――Flüssigkeit（流動性）――Fluid（液體）と……。』

『それで何か意味が思ひ當りますか？』

『いゝえ、いくらやつても……。』

『まア、やつて御覽なさい。』

『私はトリエントのシモンのことを考へますよ』と彼は皮肉な笑ひ方をしながら云つた。『彼の記念品を私は二年前にトリエントの教會堂で見たのでした。私はユダヤ人に對して再び加へられた迫害のことを思ひます。このやうな所謂犧牲の中に救世主の、云はゞ、再來を、復活を見るクラインパウルKleinpaul の書を思ひます。』

『この思ひ當りは、貴君がラテンの言葉を忘れた前に我々の論じてゐた題目と全然無關係ではないのです。』

『仰言る通りです。私は近頃讀んだイタリーの雜誌の中の或る論文を思ひ出します。その題は「聖

アウグスティヌスは女の事を何と云つたか」と云ふのであつたと思ひます。こんな話はどうでせう?』

私は何とも云はなかつた。

『今の題目とは慥に何の關係もありませんが、或ることを私は思ひます。』

『いや、そんな批評めいたことは一切拔きにしてね――』

『さうだ〳〵。私は先週旅行してゐた時に遭つた立派な老紳士を思ひ出します。大分變つた人(オリギナール)でした。まるで大きな肉食鳥のやうな風でした。彼の名は、云つた方がよければ云ひますが、ベネディクトと云ふのです。』

『おや〳〵、大層聖者や教父たちが揃ひましたね。聖シモン、聖アウグスティヌス、それから聖ベネディクトですね。オリギネスと云ふ教父もあつたと思ひますよ。そればかりでなく、この内三つまでが、クラインパウルの中のパウルのやうに、聖名ですね。』

『今、私には聖ヤヌアリウスと彼の血の奇蹟が思はれて來ました。――思想は機械的にどん〳〵進んで行つてゐますよ。』

『鳥渡、待つて下さい。聖ヤヌアリウスと聖アウグスティヌスとは暦に多少關係がありますね。あの血の奇蹟の事を私に想ひ出させてくれませんか?』

『あの事を御存知ないですか？　聖ヤヌアリウスの血はナポリの教會の内に、罎の中に保存してあります。それは或る奇蹟に依つて、一定の祭日には再び流動するやうになるのです。人々はこの奇蹟の事を大いに考へ、この流動が少しでも遲れると、例へばフランスの占領のあつた時の如きがさうですが、非常に亢奮するのです。その時の總大將――たしかガリバルディ Garibaldi であつたと思ひますが、違ひますか――その總大將は僧正を脇に呼んで、非常に大袈裟な様子で、外に竝んでゐる兵士の方を指し示し、奇蹟は間もなく起るであらうとの彼の希望を述べた。ところが果してその奇蹟は起きたのです。……』

『で、それからどうしましたか？　どうしてさう躊躇してゐるのです？』

『實は、或る事が私に起つたのですがね。併しそれはお話しするにはあんまり立入つた事でしてね。とにかくお話しするだけの關係もないし、必要もないと私は思ふのです。』

『關係のあるなしは私の方の問題です。勿論、私は貴君に不快なことを話すやうに強ふることは出來ません。併し強ふる事が出來ないとなると、貴君はどうして 'aliquis' と云ふ語を忘れたかを私に訊くことも出來ませんよ。』

――『本當ですか？　さう信じてゐられますか？　さう、私は突然、或る婦人の事を思ひ出しました。

その婦人からは容易に便りを得ることは出來るのですが、それは我々二人には非常に不快な便りであらうと思ひます。』

『その婦人の月のものがないと云ふのですか?』

『どうしてそんなことが分ります?』

『それは別にむつかしくはない。貴君はその準備を、大分前から私に與へてゐたから……。だつてさうでせう、暦の聖者たちでせう。一定の日に血が流れ出すことでせう。それが起きないと亢奮することでせう。それからその奇蹟をどうしても起きさせなければ已まぬと云ふ明かな威嚇でせう。……實際、貴君は聖ヤヌアリウスの奇蹟の話をその婦人の月經の事に、巧みに暗示してゐましたよ。』

『それは私の全く氣の付かぬ事でした。で、貴方は私がその 'aliquis' と云ふ言葉を思ひ出し得なかつたのは、さう云ふ熱心な期待があつたゝめだと本當に仰言るのですか?』

『それは疑ふまでもないことだと私は思ひます。貴君が a—liquis と分けたのを思ひ出して御覽なさい。それから Reliquien（遺物）、Liquidation（清算）、Flüssigkeit（流動性）と聯想したことを思ひ出して御覽なさい。それからも一つ貴君が遺物の事から考へついた、あの子供ながらに殉教した聖シモンの事もこれに關係させせますかね。』

『どうぞもう止して下さい。私が本當にさう云ふ考へを抱いたにしても、それをあんまり大袈裟にとらないで下さると有難いですな。併し白狀しますが、その婦人と云ふのはイタリー人で、私は彼女と一緒にナポリに遊んだのです。併しこれは總て偶然の符合ではないでせうか？』

『これ等の總ての事を偶然の符合で說明出來ると貴君がお考へになるなら、それは貴君の判斷にお任せしますが、併しこれと似たやうな場合を分析して見ると、總てかう云ふ驚くべき「偶然の符合」に導かれて行くと云ふことだけは云つておきますよ。』（一）

【註】（一）この一小分析は幾多の人々の注意を牽き、盛んな議論を招いた。ブロイラー E. Bleuler は、宛もこの分析に依つて、精神分析的註釋の信じ得べきことを數學的に把握しようと試みた。さうしてこの分析は幾千の論難せられざる醫學上の『認識』よりも實らしさの價値があり、またこれが人々に不思議に思へるのは、人々が心理上に實らしさを持つた科學を信じ馴れてゐないためであるとの結論に到達したのである。（醫學に於ける訓練なき思想とその克服、ベルリン・一九一九年）。

私がこの旅の伴侶のお蔭で得たところのこの一小分析を尊重する理由は、澤山にあるのである。第一に　この場合に於いては、私は他の場合では不可能であらうやうな源泉から竭すことが出來たからだ。私がこゝに輯めた日常生活の精神機能の攪亂の實例は、私自身の觀察から採らなければならなか

つたのである。私は自分の取扱つた神經症患者から得た遙かに豐富な材料は避けようと試みるものである。何となれば、私はそれ等は單に神經症の結果であり顯現であるに過ぎないではないかとの反對を受けたくないからである。であるから、神經症には緣のない人が、そのやうな試驗のための對象として己れを提供してくれることは、私の目的のためには特別の價値があるのである。この分析はまた他の點に於いても重要である。と云ふのは、代償的記憶の生じないところの語忘却の場合をそれは明示し、又かくて前に私の擧げた命題、即ち正しからざる代償記憶の顯れる顯れないは本質的の差違をなさないとの命題を確證するからである。(一)

【註】(一) なほ仔細に觀察して見ると、『シニョウレルリ』の分析と aliquis の分析との間には、代償記憶に關する限りに於いては、反對のあることが分る。後の場合に於いてもまた、この忘却には代償構成が隨伴してゐるやうである。私が後にわが同伴者に、彼がその忘れた語を想起しようと努めてゐた時に、何か代償が思ひ當りはしなかつたかと訊いたに對して、彼は始めの內には ab を詩句に入れて nostris ab ossibus (多分 a-liquis の離れた部分であらう) としようかと思つたが、後には exoriare と云ふ語が可成り明瞭に執拗にのさばつて來たと云つた。なほ懷疑的であつた彼は、それは詩句の最初の語であると云ふ事實のためらしいと附け加へた。併し、exoriare からの聯想に注意を集めるやうにと私が云つたら、彼は Exorzismus (惡魔祓)と云ふ語を擧げた。そこで私は、この想起に於ける

exoriare の助勢に、事實上そのやうな代償構成の價値があつたと考へることが出來るのである。諸聖者の名前から Exorzismus が出て來たのは、多分聯想に依つてゞあらう。併しこのやうな細いことは、別に何の價値をおく必要もない。さて、何等かの種類の代償記憶の現れると云ふことは、抑壓に依つて原動せられた故意的忘却の不斷の——而もまたゞ特色的の、併し人を誤らせ易い——徵證であると云ふことは、あり得べきことに思へる。この代償構成はまた、正しからざる代償名が現れない場合に於いてさへも、忘却せられたものに近似した一要素の助勢となつて存在することもあらう。で、シニョウレルリの例に於いては、畫家の名前は私に思ひ出せないのに、その間中、私は彼の全部の壁畫の、更にまたある畫の一隅にある彼自身の像の、少くとも平常よりは明瞭な視覺的記憶を浮べてゐたのである。また、一八九八年の私の論文中に報ぜられてゐる別の場合に於いては、私は或る他所の町に於ける不快な往訪に關聯した街の名と番地とを忘れてしまつて、何とも仕樣がなかつた。ところが家の番號は、如何にも皮肉に、特別に明瞭に覺えてゐるのだ。一體私は數の記憶には不斷非常に困難する方であるのに……。

併し aliquis の實例の主要價値は、シニョレルリの場合との今一つの區別點に存する。後者の方の例に於いては、名前の想起の妨げられたのは、或る思想の流れがその少し前に起つて、さうして遮られたが、併しその內容はシニョレルリてふ名前を包含してゐる新題目と何等判然たる關係を持たないところの、その思想の流れの後に殘した効果のためである。抑壓せられたものと忘れられた名前を含む

題目との間には、そこに一時的の接觸關係が生じただけであつて、かゝる關係の生じたのは兩者が外的聯想に依つて結合を構成し得んがためである。(一) また aliquis の例に於いては、その直前に意識的思想を占有し、やがて攪亂者として反響し來るやうな、さう云ふ獨立的な被抑壓題目の何等の名殘りをも認めることは出來ないのである。想起の攪亂は、この場合は、觸れられた題目の內部から生じ來り、引用句中に表はされた願望觀念に對する矛盾となつて無意識的に起きて來たのである。

【註】(一) シニョレルリの場合に於いて、二つの思想の流れの間に、內的結合が缺けてゐたとは十分に納得出來ないのである。死と性生活とに就いての題目に關する被抑壓思想を注意深く辿つて行くと、我々はオルギエトーの壁畫のことに近い關係のある一觀念に逢着するのである。

その起源は次のやうな風に說明しなければならない。——話者は現代の自分の同族者がその權利を剝奪せられてゐる事を嘆じ、さうしてディドーのやうに彼は、新時代者がその壓制者に對して復讐をなすべきことを豫言したのである。かくて彼は後代に對する願望を表白した。その瞬間に於いて彼には一つの矛盾した思想が浮んで來たのである。『實際、お前は後代に對してそれほど多くの願望を抱いてゐるか。それは本當ではない。現に、もしお前が知つてゐる或る方面からお前が後代を期待せねばならぬとの報導を只今受取つたとしたら、お前は如何に慘めな有樣になるか! いや、お前は後代な

どを期待してはゐないのだ。期待してゐるとすれば、それはお前の復讐のためにするのだ。』この矛盾は、丁度シニヨレルリの例に於ける如く、觀念要素の一つと被抑壓願望の一要素との間に外的聯想を構成することに依つて、效力を發して來る。併しこの場合は、不自然な聯想の迂路に依つて非常に無理なやり方で發して來るのである。シニヨレルリの例との第二の本質的な一致は、その矛盾が抑壓せられた源泉から發し來り、注意の轉向をなさしめるやうな思想から出て來てゐることから結果してゐる。――名稱忘却の二つの見本の相違と內的關係とに就いては、これだけにしておく。吾人は忘却の第二の機制を、即ち、抑壓から發し來る內的矛盾に依つて思想が攪亂せられることを、知るやうになつたのである。この論を進めて行くうちに、かう云つた現象に幾度も遭遇するであらうが、段々理解し易くなるだらうと思ふ。

第三章

名稱の忘却と文句の忘却

外國語からの文章の一部を忘却する現象に就いて、さま〴〵な經驗を述べて來たが、さう云ふ經驗をして見ると、我々は一體自國語の文章を忘れる場合には、全然別の説明を要するものであるかどうかと云ふ事を問題にするやうになる。暗記してゐる法則や詩が、暫く經てば變化したり間が拔けたりして不完全にしか思ひ出せなくても誰だつて驚きはしない事は確である。更に、この忘却は、一緒に覺え込んだ事物の何れにも等しく及ぶものではなく、或る一定の部分をそこから拾ひ出すやうであるから、この種の誤つた想起の例を分析的に吟味して見ることは、我々の努力に價することであらう。

或る若い同僚が私と對談中に、母國語に於ける詩の忘却は外國語の文中に於ける個々の要素の忘却と多分似たやうな風のもので、これはまた同時に研究の對象となるものであらうと云ひ出した。で、私はどの詩に就いて試驗をして見ようと思ふのかと訊いたところ、彼は『コリントの花嫁』„Die Braut von Korinth“を撰んだ。(一)

【註】（一）これはゲーテの物語詩（バラーデ）の傑作の一つとして名高いものである。詩の筋を話しておく方がこの場合の分析内容の理解に便利であるから茲に簡單に云ひ添へておく。——或る青年が許嫁に會ふためにアテナからコリントへと行く。二人の關係は彼と彼女との兩方の兩親が取定めたものである。その約束のあつて後、彼女の方の一家はキリスト教に改宗した。ところが『新たに信仰の芽が萠え出でると、愛と眞とは屢々惡しき雜草のやうに毟りとられるものである。』そんな變化が起きてゐようとも知らずに、若者はコリントへ着いた。着いた時は夜も既に遲かつた。家内の者等は寢鎭まつてゐたが、併し晩餐は彼の室へ運ばれて、彼は獨りで放つておかれた。若者は疲れてゐたので、別に食慾はなかつた。彼は着物も脫がずに寢臺の上に横たはつた。うと／＼してゐると、突然扉が開いて彼の室に這入つて來たものがある。燭を採つてすかして見ると、面紗を被り白衣を身につけ、額のあたりに黑と金のバンドを結んだ少女である。彼女は青年を認めて、驚いて白い手を擧げた。彼女は逃げ出さうとしたが、青年は彼女を鎭まらせ、押停めて、酒肴を指してこゝにケレス、バックスの神々の賜物ありて御身またアモール神を齎し來りしに非ずやとて、彼女を已れの側に坐せしむ。彼女は併し云ふ、彼女には既に歡喜はなく、神々はこの靜かな家を見捨てゝ去り、たゞこゝに尊崇せらるゝものは天上なる唯一神と十字架上の一人のみと。青年はこれ等の言葉の意味を解せず、たゞ彼女を已れの花嫁とみるのみである。彼女は自分が既に僧院に送られた身であるといふが、青年はそんな言葉に耳傾けようともしない。眞夜中の時は打つて彼女は安心したやうに見えた。彼女は蒼白の唇に紫色の酒を飲んだが、青年のさし出すパンを受取らうとはしなかつた。彼女は青年に金の鎖を與へ、その代りに彼の頭髮の一ま

きを受取つた。彼女は靑年に自分は氷のやうに冷いと云ふが、靑年はよしんば彼女が墓穴から出て來たものにもせよ、愛が彼女を熱くせざれば已まぬことを信じてゐた。愛は兩人を近付けた。彼女は靑年の唇から熱心に熱をとつた。二人は互に相手の内にのみ存在を意識した。併しこの吸血の花嫁は愛に依つて溫められても、彼女の胸に心臓は高鳴ることはなかつた。この怪しき情慾の不思議な場景を描き出すことは不可能である。生と死との合一とでも云ふべきか、塚の上に建てられた婚神の祭壇とも云ふべきか。そこへ母親が現れる。母親は靑年の室に囁きや接吻の音を聞き、自家の奴隷女が行つてゐるものと思つて憤りに滿ちて靑年の室に行くと、そこにゐるのは、あらう事か自分の娘である。娘は影のやうに立上つて母親がこれ等の邪魔をするのを難ずるのであつた。『お母さんは 妾を早く墓場にお遣りになつたゞけで澤山ではないですか？』と彼女は難ずる。併し墓場は彼女を止めておくことは出來なかつた。僧侶の聖歌、祝福は彼女の上に何の力をも及ぼしはしなかつた。大地は愛を殺すことは出來なかつた。彼女は歸つて來た。彼女は已れの鎖を彼に與へ、彼の頭髮を受取つてゐる。明日、彼は半白となるであらう。彼は已れの靑春をも一度墓の中に求めねばならぬ。彼女は母に乞ふて荼毘の柴堆をしつらへしめ、棺を開いて彼と彼女とを共に燒き、神々の許に急ぎ行かうと願つたのであつた。……こゝで鎖と頭髮とを若き二人が交換することは、そこに性的象徵の意味があるやうに思ふ。サラムボウの金の鎖を思ひ出したゞけでも大きな暗示とならう。頭が男性器の象徵であることは普通の事であつて見れば、そこに生ずる頭髮が何を意味するかは自明の事であらう。（譯者）

これは彼の愛誦の詩で、少くとも各節とに暗誦してゐると信じてゐるものである。ところが想起し

始めからして、彼は抑々呆れた不正確を呈露したのである。『「コリントからアテネへと引寄せられて」„Von Korinthus nach Athen gezogen‘ でしたかな、』と彼は訊いた。『それとも「コリントへアテネから引寄せられて」‚Nach Korinthus von Athen Gezogen, でしたかな』』私も暫時、躊躇してゐたが、遂に笑ひながら云つた。『コリントの花嫁』と云ふ詩の表題から見ても、その若者がどちらの道をとつたかは、疑ふまでもないことではないかと。第一節だけはやがて滿足に、或は少くともあまり呆れた間違ひもなく想起出來た。第二節の第一行以下で、その同僚は暫く考へてゐたが、やがて語を進めて次のやうに暗誦した。

Aber wird er auch willkommen scheinen,
Jetzt, wo jeder Tag was Neues bringt ?
Denn er ist noch Heide mit den Seinen
Und sie sind Christen und——getauft.

私は既に前からをかしいと思つて聽いてゐたが、この最後の行の終つた後には、我々二人はこゝに何か違つたところがあると云ふことに一致した。併しその違つたところを正すことが我々には出來なかつたので、自分等は書庫に急いで、ゲーテの詩集を繙いて見たところ、驚いたことにはこの節の第

二行は全然語音が違つてゐた。本音の語音は云はゞ同僚の記憶から投げ出されて、一見無緣のものがその代りに置かれてゐた。本當はかうであつた。

Aber wird er auch willkommen scheinen,
Wenn er teuer nicht die Gunst erkauft?
（併し彼もまた喜ばしげに輝くであらうか、
彼がその恩惠を高く（自力で）購うたのでないのに？）

„erkauft"（購ふ）は „getauft"（洗禮を受ける）と韻が合つてゐる、それに Heide（異敎徒）、Christen（キリスト敎徒）、Getauft などの觀念群座が、原文想起に際してあまり促進されてなかつたのが、私にはをかしいのである。

私は同僚に訊いたのである、貴君はそれほどよく暗誦してゐる筈の詩の中でその行をそんなにすつかり落してしまつたことは何とか說明出來ますか。また貴君はどう云ふ關係でさう云ふ代償が這入つて來たか見當かつきますかと。

彼はその說明をすることは出來たのである、いさゝかそれをするのはうれしくないやうではあつたが——。『Jetzt, wo jeder Tag was neues bringt（每日新たな消息のある今となつて）と云ふ行が出て

來たのは、私は分つてゐます。私はこれ等の言葉を少し前に、私の業務に關係して用ゐたに相違ありません。その業務が大いに盛んなので、御存知の通り、私は只今のところ非常に滿足してゐるのです。併しどうしてそんな言葉がこのやうなところへ這入つて來たでせう？　私には或る一つの關係が分つてゐます。,Wenn er teuer nicht die Gunst erkauft‘（彼は高くその恩惠を購つたのでないのに）と云ふ行は、私には明かに愉快でなかつたのです。それは最初の時には駄目になつたが、只今私の物質上の事情が非常によくなつたので、も一度繰返さうと思つてゐる或る求婚の事に關係があるのです。これ以上お話申上げることは出來ませんが、併し今は話はまとまりさうなんですけれども、それでも私は一種の勘定が當時に（今でもさうですが）事件を決定したことを思ひ出すのが、確にいやなのです。』

この話は十分にあの事を說明するものであると私には考へられた。またそれ以上細々した事情を知る必要が私にはなかつた。併し私はなほ進んで訊いた。ところで貴君はどうして貴君自身と貴君の關係とを『コリントの花嫁』の本文中に混入するやうになつたのでせうか？

『新たに信仰の芽が萠え出ると
愛と眞とは屢々惡しき雜草のやうに

毟りとられるものである。』

„Keimt ein Glaube neu,
wird oft Lieb' und Treu
wie ein böses Unkraut ausgerauft"

と云ふ意味の宗教的信仰の差別があの詩の中に出てゐるが、貴君の場合に於いてもさう云ふ差別が、多分存してゐるのではないですか？

私は正當に考へ付いたのではなかつたが、併し私の質問は圖星を指したらしく、彼には忽ち一切の事が明白になり、今まで彼自身にも確かに分つてゐなかつた事を、答へとして私に述べる事が出來るやうになつたのには、驚いた次第であつた。彼は惱ましげな、さうしてまた不機嫌な眼付で私を眺めつゝ、この詩のずつと後の方の個所を口ずさんだ。——

Sieh sie an genau!
Morgen ist sie grau.

彼女をよく見よ
明日になれば彼女は老いてしまふのだ。(三)

【註】（一）同僚はこの詩のこの美しい個所を、その語音に於いても、その適用に於いても、いさゝか變へてゐるのである。詩中に出て來る怪しの少女は、その花婿に向つてから云ふのであつた。——

Meine Kette hab' ich dir gegeben:
Deine Locke nehm' ich mit mir fort.
Sieh sie an genau!
Morgen bist du grau,
Und nur braun erscheinst du wieder dort.

（妾の鎖は貴方に差上げました、
貴方のお髮の毛は妾が頂いておきます。
よくそれを御覽なさい
明日になれば貴方は老いてしまふのです。
さうして黑くなつて再び現れ出るのです。）

さうして直ぐ云ひ添へた、彼女は私より少し年長なのです。彼になほこれ以上苦痛を與へないために私はこの質問を切上げてしまつた。分るだけの事はこれで十分のやうに私には思へた。併し、この記憶の大した事でもない失敗をその根柢にまで辿らうと骨折つてゐるうちに、相手のこのやうに遙かな祕かな、惱ましい思ひの纏はつてゐる事柄に觸れるやうにならうとは、確に驚くべき事である。

有名な詩文の一節を忘れる事の今一つの實例はユング C. G. Jung の論文(一)中にあるから、それを著者の言葉のまゝに引用して見よう。

【註】(一)『早發性痴呆症の心理に就いて』,,Über die Psychologie der Dementia praecox" 1907, Seite 64.

『或る人が ,Ein Fichtenbaum steht einsam usw.' (松が淋しく立つてゐる云々)の、誰でも知つてゐる詩を口ずさまふとした。ところが ,Ihn schläfert' (彼は睡くなつて來た)の行になつて、彼は、,mit weisser Decke' (白布を以て)のところで、行詰まつて動きがとれなくなつた。このやうな有名な詩句を忘れると云ふのは甚だをかしなことに私には思へた。で、私は、彼が『白布を以て』と云ふ言葉を思うたときに、どんなことが彼の心に起きたか、それを想ひ出すやうに云つた。すると彼は次のやうに聯想を述べた。「白布は屍骸の上に被せるリンネルの白布を思はせる。——(間)さう云へば、私は一人の親友の事を思ひ出します——彼の兄弟はまだほんの若いのですが、全く突然に死にました——彼は卒中で死んだのでせう——彼はまた非常に肥滿してゐました私の親友もやはり肥滿してをりまして、彼も同じやうな目に會ふのだらうと思ひました——多分彼は運動不足でせう——私がこの死を聞いた時に、私は忽ち怖ろしくなりました、私も同じ運命に會ふのだらうと思つたのです。私自身の家族も脂肪過多になる傾向がありまして——私の祖父は心臟病で死んだのです——私自身もやはり

多少肥滿の方でして、そのために私は數日前から脂肪過多の治療を始めてゐるのです。』』

そこでユングは云ふ。――『で、その人は白布を以つて被はれたる松の木に、自分を直ちに同一化したのである』と。

文句の一節を忘れる次の實例は、ブダペストのわが友人フェレンチ博士 Dr. Ferenczi に負ふものであるが、これは前の實例とは違つて詩の一節に關するものではなく、自分で作つた言葉に關するものである。この實例はまた、瞬間的な欲望のために品位を保つことを忘れようとする危險のあるとき品位を保つための用を務めて忘却が現れて來ると云ふ甚だ變つた場合を我々に示すものでもある。誤謬はかくて有用なる機能にまで進んでゐる。我々が迷ひから再び醒めた時に、始めは忘却として、精神的不能として現れて來たかの內的の努力を、正解することが出來るのである。

『或る會合の席で、,Tout comprendre c'est tout pardonner.'（總てを解することは總てを赦すこと）との言葉が出た。それに對して私は云つた、この文章は始めの方だけで澤山だ、「赦す（パルドンネ）」とは傲慢であらう。それは神樣と坊樣とに一任してあるのだ。そこに居合せた一人がその言葉は非常によいと思ふと云つたので、私は却つて大膽になつて――多分、好意ある批評家のよき意見を保證するためであるらしく――さき頃私には何かもつとよい考へが浮んだことを私は云つた。併しこのよい考へを述べ

ようとすると、どうしても私はそれを思ひ出すことが出來なかつた。そこで私は直ぐにその會合の席から退いて隱蔽思想(代償思想)を書きつけた。——先づ私はその(探してゐる)思想の見證者とも云ふべき友人の名とブダペストの街の名とが出て來た。次にまた別の友人の名マックス Max が出て來た。彼のことは我々は平生マクシ Maxi と呼んでゐるのである。それに伴れて Maxim(格言)と云ふ語が思ひ出され、またその時も(只今の場合と同じやうに)有名な格言を變更してゐたのだと云ふことが想ひ出された。不思議なことに、私はそれに就いて何の格言も思ひ出さず、たゞ『神已れの姿にかたどりて人を造りたまふ』と云ふのと、その作り變へであるところの『人已れにかたどり神を造る』と云ふのを思ひ出した。すると忽ち探ねてゐることが想ひ出された。私の友はその時、アンドラッシ街 Andrássystrasse で私にかう云つたのだ。『凡そ人間的なるものには、我には他所ごとならず。』と。それに對して私は——精神分析的の體驗に基いて——かう云つた。『君は百尺竿頭一步を進めて、かう告白しなければならぬ、凡そ獸的なものは我には他所ごとならず』と。

『併し私は遂に自分の探ねてゐることを想ひ出しはしたのだが、會合の席へ歸つてそれを云ふことは出來なかつた。無意識の獸性に就いて思ひ出した友人の若い細君も出席者の內にゐて、私は彼女がそのやうな面白からぬ見解を受容れる用意のないことを認めざるを得なかつた。かの忘却に依つて私

は彼女から不愉快な質問をあびせかけられること丶、やつてもはじまらぬ論議とから遁れたわけである。で、正にそれこそはかの「一時的健忘」の動機でなければならなかつたのだ。』

『實際探ねてゐる命題に於いては人間に於ける獸性が說かれてゐるのに、隱蔽記憶としては神が人間の發明物となり下つてゐる命題の出てゐるのは、甚だ興味あることである。つまり capitis diminutio（準死）が兩方に共通的である。問題全體は明かに、この會話に依つて觸發された。理解すること丶赦すこと丶に關する思想の流れの續きに過ぎないのである。』

『探ねてゐる文句がそのやうに直ぐに出て來たといふのは、私が會合の席から人氣のない部屋に退いたためであつて、人中ではその文句は檢閲のために抑壓されてゐたのだ。』

私は爾來、文句の忘却や間違つた想起の幾多の場合を分析したが、これ等の探究の結果の一致するところを見ると、„aliquis“ の例や『コリントの花嫁』の例に見られる忘却の機制が殆ど普遍的に妥當するものであることを假定せざるを得ないのである。それ等の分析を報告するのは常に甚だ不都合なことが多い。それは既に擧げた例に就いて見ても分る通りに祕密な、被分析者にとつて苦痛な事柄に這入つて行くからである。で、私は實例はこれだけにしておかうと思ふ。材料の如何を問はず、總てこれ等の場合に共通的なものは、忘れられ又は歪められた材料が、何等かの聯想的な道に依つて、無

意識的な思想內容と結合するといふことである。(忘却となつて現れる效力はこの無意識的思想內容から出て來るのである。)

私は今や再び、名稱の忘却に戾つて行く。名稱の忘却に就いては、私はこれまでその症狀に就いても動機に就いても、徹底的に考究しては見なかつたのである。かう云ふ種類の行り損ひは私には時々豐富に私自身の內に觀察せられるので、この方の實例には私は事缺かないのである。私は今なほ輕い偏頭痛を病んでゐるが、それが起る時には數時間前に名稱を忘れてしまふので豫知出來るのである。さうしてその發作の高頂に達した時には、その間私は自分の仕事をやめなければならないほどではないのだが、私は屢々一切の固有名詞を想ひ出すことが出來ないのである。さて、この私のやうな場合は、我々の分析的努力に對する根本的な反對の動機を供するものではなからうか。そのやうな觀察からして、人々は忘却、殊に名稱忘却の原因が腦の循環的竝びに一般的の機能障害に存し、從つてまたこのやうな現象を心理的に說明する必要がないとの歸結に到達するであらうか。私はさうは考へない。それはいつも同じである或る現象の機制と變化する機制とを混同するものである。併し私は兩者の區別をする代りに、比較を以て反對說に應へようと思ふ。

私が非常に不注意な人間で、或る大都市の人氣のない方面に夜中に散步に出て、時計と金入れとを

盜られたと假定しよう。最寄の交番に立寄つて、私は次のやうに報告をする。――『私はこの通りとあの通りとを歩いてゐまして寂寞と暗黑とが私の時計と金入れとを盜みました。』これ等の言葉には別に間違つたところはないが、併しこの報告の言葉ぶりからして、頭がどうかしてゐると考へられる危險はある。正確には、この事件は、場所が寂しかつたのを好都合とし又暗黑であつたお蔭とで、知らない間に惡漢が私の貴重品を竊取したと云ふべきである。果してさうであるならば、名稱忘却の場合とても別に變つたことではない。精神虛弱と週期的障害と亢奮とを好都合として、知らぬ間に或る精神力が私の記憶に所屬する固有名詞の支配を私から奪ふのである。それは他の場合に於いて、健康と行動力とが完全である時に、同樣な忘却を齎し來る同じ力である。

私が自分に起るそれ等名稱忘却の場合を分析して見ると、その忘れられた名は必ずわが身に交涉ある問題に何かの關係があり、さうして强くまた屢々苦しい感情を自分の内に惹起す力あるものである事が分る。チウリッヒ派（ブロイレル Bleuler, ユング Jung, リクリン Riklin）の便利な、且つ推薦に價する實施に倣つて、私は同じことをまた次のやうな形に云ひ表はすことが出來る。――忘れられた名は私の內に一つの『個人的コムプレックス』を作つたと。その名の私個人に對する關係は思ひもよらないもので、多くの場合表面的の聯想（言葉に二重の意味があつたり、音が似てゐたり）によつてな

されるのである。大抵は側面關係と呼ぶことが出來る。かう云ふ關係の性質を最もよく說明する單純な實例數個を擧げておく。

（一）或る患者がリヴィエラ Riviera に於ける療養所を推薦して吳れと私に依賴した。私はヂェノアに非常に近くさう云ふ場所を一つ知つてゐた。私はまたその療養所を經營してゐるドイツの同僚の名前をも思ひ出した。ところが場所自身の名前は想起することが出來ない、勿論それをよく知つてゐるとは信じてゐながら――。で、私は已むなくその患者に鳥渡待つてくれと云つて、自分の家族の女たちの方に直ぐに向き直つた。『あのN博士が小さい療養所を持つてゐるヂェノアの近くの場所は何と云つたつけね。某夫人が永い間治療を受けてゐたぢやないか？』『勿論、あんたはその名前はお忘れになりますよ。ネルフィ Nervi つて云ふんですもの。』慥に、私は神經（ネルフエン）(Nerven)のことに携つてゐるものである。

（二）また他の患者は近くの避暑地のことを話して、二つの知れ渡つた宿屋の他に第三のがあると主張した。私は第三のはないと云ひ張り、自分はその近くに七度も避暑したので彼よりもその邊のことは詳しいと云ひ添へた。私の反對に激したが、併し彼は名前を想起してゐた。その第三の宿屋の名は『ホーホワルトナー屋』der Hochwartner と云つた。そこで私は勿論それを認めざるを得なかつた。

實際、私は七夏の間、私が現にそれほど強くその存在を否定した宿屋の直ぐ隣りに過ごした事を告白せざるを得なかつた。ところで私は何故その場合、名と宿屋とを忘れたのであらうか？　その名が私のと同じ仕事をやつてゐるギィンの同業者の名と音が非常に似てゐるために、私の内に『職業コムプレックス』を起したのであると思ふ。

（三）　また或る時、私はライヘンハル Reichenhall の停車場で汽車の切符を買はうとしたが、私が屢々通過したことのある次の大驛の名がどうしても思ひ出せない。私はそれを時間表に就いて一生懸命に捜さねばならなかつた。その名はローゼンハイム Rosenheim であつた。それがどう云ふ聯想から忘れられたかは、直ぐに分つた。一時間前に、私はライヘンハルの近くにゐる私の姉妹の家を訪れたのであつた。私の姉妹の名はローザ Rosa であつたから、その家はやはりローセンハイム Rosenheim であつたのだ。この名は私の『家族コムプレックス』に依つて失念されたのだ。

（四）　このやうに『家族コムプレックス』が失念させる效力を有してゐると云ふことは、數々の實例に就いて證明することが出來る。

或る日私は或る青年から分析の相談を受けた。彼は私の扱つてゐる婦人患者の弟で、これまでにも屢々會ひ、私は彼を姓でなく名前で呼び慣はしてゐた。やがて、彼の訪問に就いて話さうとした時に

大して普通と變つた名前でもないと思ふのに、彼の名前がどうしても私には思ひ出せない。私はそこで街へ出て看板を見て歩いた。その名が目に入るや否や、直ぐにそれだと分つた。分析の結果、私がその弟と私自身の弟とを竝行にして考へてゐる事が分つた。さうしてその竝行の中心點は『私自身の弟はかう云ふ場合に遭遇したら同じやうな態度に出るだらうか、多分反對の態度に出るだらう』との抑壓された問題であつた。この他人と自分の家族とを同樣に考へる外的結合は、兩方の母親が共にアマリア Amalia と云ふ名を持つてゐたために可能となつた。やがてその後になつて私はまたダニエル Daniel とフランツ Franz と云ふ代償名稱を理解した。これ等の名前は、どう云ふわけだか、執拗に出て來た。ダニエル、フランツはアマリアと共にシルレルの戲曲『盜賊（ロイベル）』の中に出て來る名前であつて、それ等總てにギィンの無賴漢（ごろつき）ダニエル・スピッツェルの洒落が結び付いてゐるのだ。

（五）　また或る時、私は自分の青年時代に關係のある或る患者の名を想ひ出すことが出來なかつた。いろ〳〵迂路を通つて分析した結果、やうやく目指す名を發見することが出來た。患者は失明するのではないかとの不安を述べてゐた。それに就いて、私は銃丸のために失明した或る青年を思ひ出してゐた。それから更にピストル自殺した或る他の青年の姿が浮んでゐた。この後者の青年は第一の患者とは何の親戚關係もないのだが、同じ名を持つてゐた。この名は併し、これ等二青年の場合から

の心配が私自身の家族の一員に轉嫁せられた事が知れた後になつて、漸く分つた。
このやうに『自己關係(アイゲンベチーフング)』の不斷の流れが私の思想を通つてゐるのだ。さう云ふことは自分では氣付きもしないが、併しこのやうな名前の忘却をするところから見ると暴露せられるのである。恰も、私は他人に就いて私の聽く總てのことをわが身にひき比べざるを得ないかのやうに、また私の個人的コムプレックスは他人からの一切の見聞に依つて亢奮させられるかのやうに思はれる。これは私の個人的特質と云ふは不可能である。それどころか、それは『自分以外の事柄(アンデレス)』一般を理解すべき方法への一つの暗示を含んでゐなければならないのである。

この種の最上の實例を、レーデラーと云ふ一紳士が自ら經驗したことであるとして、私に報告せられた。彼がヴェニスへ新婚旅行をしてゐた時、ほんの一面識しかない或る人に出會して、彼はその人を自分の新妻に紹介しないわけに行かなかつた。彼はその人の名前を忘れてしまつてゐたので、最初の時はそれを聞こえないやうにウヤムヤに云つて、やうやく具合の惡いその場を遁れた。併し、ヴェニスではこれは仕方のないことだが、二度目に會つた時には、彼はその人を小脇に呼んで、貴君の名を失禮ながら忘れてしまつたのだが、困つてゐるのだから敎へて下さいと云つたところ、相手の答へは人間性を知ること甚だ高いものがあつた。曰く——私の名をお忘れになつたのは御尤ですよ、私は貴君

と同名、レーデラーです。

自分と同名の他人に出會すと云ふことは誰しもいさゝか不快なものである。私は近頃甚だ明白にさう云ふ感情を經驗したが、それはジグムンド・フロイドと云ふ一紳士が私の分析取扱を受けに來たことであつた。併し私自身の批難者の一人の確證するところに依ると、この點に關してはその人は私とは全然反對の感を持つさうである。

（六）『個人關係』の効果はまた、ユングに依つて報導せられてゐる次の實例に於いて、これを認めることが出來る。（1）――

【註】（1）Dementia praecox, S. 52.

『Yなる男が空しくも或る婦人に戀したが、その婦人はその後間もなくXなる男と結婚した。ところがY君はX君を既に久しく知つてゐるに拘らず、且つまたX君と商賣上の關係あるに拘らず、彼は幾度でも相手の名を忘れる。さうしてX君に手紙を書かうと思ふ度毎に、その名を他の人々に問はなければならなかつた。』

併し、この場合は前の場合よりは忘却の動機は明白であつて、この場合の動機は個人關係の觀念群座の間にあるのだ。忘却はこの場合ではY君が幸福なる競爭者を好まないことの直接結果である。彼

は相手に關して何事に依らず知ることを欲しないのだ。『考へることさへしてはならない』のだ。

（七）　名前を忘れる動機はまたもつと微妙なものである場合もあり得る。その名の保持者に對する所謂『昇華された（スブリミイルテン）』憎惡に存することがある。ブダペストのK孃と云ふ人が斯う書いてゐる。

『妾は一小理論を自分のために立てました。と云ふのは、妾は畫才のある人間は音樂には何の感覺も持たないものであり、またその逆も眞だとのことです。さき頃、妾は或る人とその事に就いて話してゐました。その時妾はかう云ひました「妾の觀察は今までいつも中つてゐたが、或る人だけは例外です。」と。ところでその人の名前を想起しようと妾は思つたが、どうしても想起出來ない。そのくせその人は妾の親友の一人であることが分つてゐるのだが――。數日後、その名が偶然に擧げられるのを聽いた時には、妾はそれが私の理論の攪亂者であるがためであると云ふことが勿論すぐに分つた。私が無意識的に彼に對して抱いてゐた憎惡は、平常は妾にはあれほど親熟してゐた名前を忘却せしめることゝなつて現れたのであります。』

（八）　フェレンチに依つて報告せられた次の場合に於いては、自己關係がまた別途を通つて名稱忘却となつてゐるのである。これを分析して見ることは、殊に代償思想（シニョレルリに對するボッティチェルリ、ボルトラフィオの如き）の説明に依つて分析して見ることは、ためになるのである。

精神分析を多少聞き知つてゐる某婦人が、精神療法家ユング(Jung)の名を思ひ出せない。その代りに次のやうなのが思ひ出される。Kl.(名前)――Wilde――Nietzsche――Hauptmann. 私はそれ等の名はみな違つてゐることを彼女に告げ、それ〴〵の想起から自由に聯想を走らせるやうに要求した。

Kl. に就いては彼女は直ちに Kl. 夫人を考へた。』その夫人はおしやれの氣取屋で、年齢の割合には達者に見えた。『あの奥さんは年をとらない。』ワイルドとニイチェとに關する共通的の、根本的の概念としては、彼女は『精神病』と云ふことを擧げた。やがて彼女は嘲弄的にかう云つた。『フロイド派の彼等は精神病の原因を探つてゐる間に、自分で精神病になるでせう。』彼女はなほ語を續けて云ふ、『妾はワイルドやニイチェは御免ですわ。妾には分りません。ワイルドもニイチェも同性愛であつたと云ふぢやありませんか。ワイルドは若い男たち(Junge Leute)と關係した人ですつてね。』(彼女はこゝで既に正しい名を云つてゐるに拘はらず、それに氣がつかないのである。)

ハウプトマンに就いては Halbe(半分)と Jugend(青年)とが聯想された。で、妾がそのユーゲンドと云ふ言葉に彼女の注意を促したので始めて、彼女は彼女の求めてゐる名がユングであることを知つたのである。

『この婦人は三十九歳にして夫を失ひ、再婚の見込みがないので、靑年だの老年だのに關する一切を想起するのを避けようとする根據が十分にあるのである。こゝに注意すべきは、隱蔽想起が忘れられた名前に對して純然たる內容的の聯想であつて、語音の聯想の缺けてゐることである。』

（九）また別の、その動機の更に微妙な名稱忘却の一實例を擧げよう。これは當事者が自分でその說明を與へてゐるものである。

『副課程としての哲學の試驗を受けてゐる時に、私は試驗官からエピクルスの學說に就いて問はれた。續いてまた、後の世紀になつて誰がエピクルスの學說を祖述したかと問はれた。私はピエール・ガッセンディ Pierre Gassendi と答へたが、實はこの名は二日前にカフェでエピクルスのお弟子だと人の云つてゐるのを聽いたのであつた。どうしてそんなことを知つてゐるかと云はれたので、自分は大膽にも以前からガッセンディには興味を持つてゐたのだと答へた。その結果、自分は優等で卒業したが、併し後になつて遺憾ながら、自分はガッセンディの名を執拗に忘れるやうになつた。どんなに骨折つてもその名を今だに覺えてゐられないのは、私の良心の苛責のためであらうと信じてゐる。その當時はそのやうな名を知らねばならぬこともなかつたのだ。』

この話者が試驗の挿話の想起を甚しくいとうのは何故か、それを正しく理解するためには、吾々は

彼にとつてドクトルの學位が如何に有難いものであり、この代償が如何に多くの他のものに相當するかを承知せねばならぬ。

（十）私は更にこゝに町の名を忘れた一例を附加しておかう。この實例は右に述べ來つた諸例ほどには恐らく單純なものではないが、併しそのやうな探究に親熟してゐる人々にとつては信じ得べく、價値あるものであらう。或るイタリー都市の名が或る婦人の名と遙かなところで音が似てゐるために記憶から逸してしまつた。その婦人の名に對してはさまざまな感動的な、たゞの報告だけでは竭すことの出來ない立入つた記憶がまつはつてゐるのである。フェレンチ（ブダペスト）はこれを自分で取扱つたのであるが、これを夢か色情的觀念を分析するやうに取扱つてゐる。それは慥に正しいことである。

『私は今日舊馴染の家を訪れたが、そこで上部イタリーの都市の話が出た。それ等の都市にはオースタリーの感化が今なほ見られると或る人が云つた。これ等の都市の二三の名が擧げられたので、私も一つ云はうと思つたがどうしても出て來ない、而も私はそこで愉快な一日を過したことを承知してゐるのだが――。これは勿論フロイドの忘却說とは一致するものではない。――探してゐる都市名の代りに、次のやうな名が執拗に浮び上つて來る。Capua（カプア）――Brescia（ブレスチア）――ブレスチアの獅子。

『この獅子を私は大理石像の形で目前に立つてゐるのを見たのである。併しこの獅子はブレスチアに於ける自由の像の獅子（それを私はたゞ畫で見たゞけである）よりは、トゥイレリーで殪れたスヰスの守護兵のためのルーツェルンの記念碑上で見た、あの大理石の獅子に似てゐることを、自分は直ぐに氣付いた。私は遂に求めてゐた名前を想起した。それはヱロナ Verona であつた。

『私はまた直ちにこの健忘の原因の何人に存するかを知つた。私がその時訪れた家の、以前の女中のためであつた。彼女の名はヱロニカ Veronika と云つたが、これはハンガリィ語ではヱロナ Verona であつた。この女は人相がよくなくて、聲が皺嗄れて、ケン〳〵してゐて、その上にたまらない自恃（長い間奉公してゐるので、彼女はそれくらゐの事は當然の資格だと心得てゐるのだ）を持つてゐるので、私は大嫌ひであつた。またその女が家の子供達を扱ふ暴君的な遣方が私にはたまらなかつた。そこで、私はその代償思想の意義が分つた。

『カプアに就いては、私は直ぐに caput mortuum（髑髏）を聯想した。私はヱロナの頭を非常に屢髑髏に比較してゐた。ハンガリー語の kapzoi（金錢に貪慾）は、慥にこの轉位に對する決定要素を供した。勿論私はまた、カプアとヱロナとを地理上の觀念としても、同一リズムを有つイタリー語としても、結合するところの、一層直接的な聯想をも發見してゐた。

『同じことはまたブレスチアにも宛てはまる。これに於いてもまた私は觀念聯想の側道を發見したのである。

『私の反感はその時分非常に激しくなり、ヹロニカのやうな醜惡な女にでも戀愛生活があり愛されるといふのが不思議であると屢々云つた。「あんな女をキッスするなんて、嘔吐を催す」と私は云つたりした。併しとにかく彼女はお氣に入りのスヰスの番兵と云ふ觀念を起させるやうな關係にあつた。

『少くともこのハンガリィに於けるブレスチアは獅子を以て名付けられずに、寧ろ或る他の野獸で名付けられる。このハンガリィでは、北部イタリィに於いてもさうだが、最も憎まれてゐる名はハイナウ Haynau 將軍の名である。彼は簡單にブレスチアの狼(ヒエネ)と呼ばれてゐる。憎まれたる暴君ハイナウからして、かくて一つの思想の道はブレスチアを經てヹロナ市に導き、他の思想の道は聲の皺嗄れた墓堀り野獸(これは記念墓碑の考へと合致する)の觀念を經て頭骸骨に、私が無意識中で非常に殘酷に侮蔑してゐた、ヹロニカの無味な道具(オルガン)に導いたのである。彼女はその當時に於いては、この家の中で、宛もハンガリィとイタリィとが自由のために抗爭した後にオーストリーの將軍ハイナウが暴虐に支配したと同じやうに暴虐であつたのだ。

『ルーツェルンに就いては、私はヹロニカが主家の人々と共にルーツェルンの附近のフィヤワルド

スタット湖で過した夏を聯想してゐたのだ。更にまた「スキスの番兵」に就いては、彼女が子供等ばかりでなく、成人した家族の者等をも暴虐することを承知し、自分に婦人番兵の役をふり宛てゝゐたことが聯想されたのである。

『私のエロニカに對する反感は、意識的には、既に永く克服してゐる事柄に屬してゐることは明かに分つてゐる。彼女はその内に、外見上でも様子に於いても變つて行つて段々よくなつた。で、私も彼女に正しい友情を以て對することが出來るやうになつた（尤も、さう云ふ機會は滅多になかつたが——。）併し私の無意識はいつものやうに、始めの印象に固執してゐた。無意識は「補充的（ナハトレーグリヒ）」であり怨恨的（ナハトラーゲント）である。』

『トゥレイリーは第二の人物に對する暗示を表はしてゐる。即ち實際上この家の婦人たちを「番（ガルディーレン）」してゐた、さうして大人からも小人からも尊敬され、また畏怖されてゐたフランスの老婦人に對する暗示を表はしてゐた。私は永い間彼女の弟子（エレーヴ）となつてフランス語の會話を教はつてゐた。弟子（エレーヴ）で思ひ出したが、私が今日の主人（あるじ）の義兄弟の許を北方ボヘミヤに訪れた時に、田舍の人達は森の學校の生徒（弟子（エレーヴ））たちを獅子（レーヴェン）と呼んでゐたので大笑ひをした事であつた。またこの愉快な追憶が獅子を狼に轉位するやうにさせたものらしい。』

（十一）次の實例も、當時その人を支配してゐる自己コムプレックスが、さまぐ〳〵な道程を經て、名前を忘却させることを示すものである。（一）

『老若二人の人物が以前にシシリー島に六ケ月の間旅行したことがあつたが、その愉快な内容豊かな日々の思ひ出を語り交した。若い方が云つた、「あのゼリヌントへ遊びに行つた前晩に宿つたところは何と云ひましたつけね。カラタフィミ Caltafimi でしたかね？」――年長の方へ答へた、「さうぢやなかつたらう、併し僕もやつぱり名前は忘れちやつた。そのくせ、僕はあそこでの滯在の個々の事柄は非常によく覺えてゐるのだがね。僕は他人が名前を忘れたと知ると、僕も釣り込まれて忘れてしまふやうになるんだよ。一つその名前を想ひ出さうぢやないか。併し、僕にはカルタニゼッタ Caltanisetta とよりは想ひ出せないのだ。併しこの名は慥に正しい名ではないのだが――。」――「いや」と若い方は云つた、「その名は慥かWで始まつてゐたか或は中にWの字が這入つてゐたと思ひますね。」――「だつて、イタリー語ではWの字はないからね。」と年長者の方は云ひ返した。「いや、私はVと云ふつもりでWと云つちまつたが、これは自分の母國語でさう云ひ慣はしてゐるものだからです。」――年長者は併し、そのVに反對した。彼は云つた、「僕は一體既にシシリーの名を澤山忘れてしまつたと思ふ。

【註】（一）Zentralblatt für Psychoanalyse, I, 9, 1911.

まァ一つ片端から思ひ出して見よう。あの、昔はエンナ Enna と云はれた高いところにあつた場所は何と云つたつけね？——あゝさうだ、分つた、カストロヂオヴンニ Castrogiovanni だ。」——その次の瞬間に、若い方はまた忘れてゐた名前を思ひ出した。彼は、カステルヱトラーノ Castelvetrano だと叫んで、V のそこに在ることを證し得て喜んだ。

『老人の方はまだ暫くそのやうな氣がしなかつた。併し、なるほどさうだつたと分ると、何故その名を忘れたかを彼は證明することが出來た。彼は考へた、「慥かにこの語の後半 vetrano が Veteran (老)に關係してゐるからだ。僕は自分で老のことを思ひたくないのだ。そのことを思はなければならないとなると、反動が起きて來るのだと云ふことが分つてゐる。で、現に僕は近頃或る非常に尊敬してゐる友人を「彼は既に夙く青年期を過ぎてゐる」といふ間違ひのない言葉で思ひ出した。何となれば、嘗て以前に彼が私に對するお世辭から「私ももう若くはありません」と云つたからだ。カステルヱルトラーノと云ふ名の後半に對して私の內に抵抗が起きたことは、その前半が代償名たるカルタニセッタの中に現れてゐるに徵して明かだ。」——「では、カルタニセッタと云ふ名前そのものはどうですか」と若い男は尋ねた。——「それは僕にとつてはいつでも、若い女の愛稱のやうな氣がしてゐたのだ。」と年長者の方は白狀した。

『暫くたつて彼は云ひ添へた。「さう云へばエンナに對する名前もやはり代償名であつた。で、今は私にも分つたが、理窟づけの助力を借りて執拗に浮び上つて來たカストロヂオヴンニと云ふ名前は明かに Giovane（若）に結びついてゐる、それは丁度忘れられた名前のカステルヱルトラーノがヱテラン（老）に結びついてゐるのと同じだ。」

『年長者はこれで自分の名稱忘却の説明はしてしまつた氣になつてゐた。併し若い方の人が何故あのやうな忘却をしたか、その動機の探究はまだされてゐなかつた。』

名稱忘却の動機の外に、それの機制がまた我々の興味に訴へる。多くの場合に於いて、名稱はそれ等の動機を喚醒ますが故にのみ忘れられるのではなく、またその名稱の同音類音のために他の名稱に干渉するからでもある。このやうに諸條件が弛緩することに依り名稱忘却の特に容易に起り得ることは、人々の理解するところである。現に次のやうな實例がある。

（十二）ヒッチュマン博士 Dr. Ed. Hitschmann の報告――

『N氏は圖書會社ギルホーフェル・ランシュブルグ Gilhofer & Ranschburg を或る人に説明しようと思つた。ところが、幾ら考へて見てもランシュブルグといふ名前だけしか思ひ出せない。平常はこの會社の名は彼にはスラ〳〵と出て來るのに拘らず――。で、いさゝかの不滿を抱いて彼は自家に歸つ

て來たが、どうしても重要なことになつたので、どうやら既に寢てしまつたらしい弟に會社の名の前半を尋ねた。弟は立ちどころにそれを答へた。そこでＮ氏は直ちに「ギルホーフェル」に對して「ガルホーフ」Gallhof と云ふ言葉を思ひ出した。「ガルホーフ」に於いて彼は數ケ月前に、或る魅力ある娘と共に思出多き散歩をした。その娘は記念として彼に或る品物を與へたが、その品物には「美はしかりしガルホーフの思ひ出にとて」(Zur Erinnerung an die schönen Gallhofer Stunden)と誌されてあつた。その名を忘れる前の最後の日に、この品物の抽斗を急いで閉める拍子に、どうしたはずみか、Ｎはこの品をひどく毀してしまつた。この事を彼は――症狀行爲の意味はよく承知してをりながら――罪の感なくしては考へることは出來なかつた。この日彼はその婦人に對していさゝかアムビヴレント(憎愛二元的)な氣持を抱いてゐたのだ。彼女を彼は愛してはゐたが、併し彼女が結婚したいと云ふに對しては躊躇してゐたのだ。』(Internat. Zeitschrift f. Psychoanalyse I, 1913.)』

(十三)　ハンス・ザックス博士の報告――

『ヂェノアとその近邊のことを語り合つてゐる内に、或る若人はまたペッリ Pegli と云ふ場所の名を擧げようと思つたが、併しその名を非常に苦心して考へた揚句、やうやく思ひ出すことが出來た。家へ歸るうちに、彼はこの平常はよく覺えてゐる名前を苦しくも忘れたことを考へてゐたが、その時彼

は音の似たやうなペリ Peli, と云ふ語を思ひついた。これは南海島の名で、そこの住民は二つの著しい習俗を保存してゐることを知つてゐる。それに就いては彼はさき頃、或る人類學書を讀んで知り、さうしてその時、彼はこの報告を一つの獨特の假定に利用しようと考へたのであつた。やがて彼はペリもまた、彼が興味と愉快とを以て讀んだ物語、即ちラウリッヅ・ブルウン Laurids Bruun の作『ファン・ツァンテンの最も幸福な時代』の舞臺であることを思ひ出した。――この日に殆ど絶え間なく彼の心を捉へてゐた思想は、丁度その朝彼の非常に戀しく思つてゐる婦人から受取つた手紙に結びついてゐた。この手紙のために彼は約束の會合をやめねばならぬことを虞れてゐた。彼は終日を最も不快な氣分の内に過してたが、夕方になつてもうそんな癪な考へ事にクヨ〱しないで、彼を樂觀させ、また彼が殊の外高く評價してゐる社交性を出來るだけ自然に享樂する氣になつて出掛けて行つた。ペッリと云ふ語に依つて彼のその心持が痛く傷けられ得ることは明かである、何となればこの語はペリと甚だ音が似通つてゐるからである。ところがそのペリなる語は人類學的の興味に依つて彼の自我關係を喚醒ましてゐるのであるから、これに依つてファン・ツァンテンは具體的存在となつてゐるばかりでなく、また彼自身の「最幸福の時代」も具體的となつてゐるのである。さうしてそのために、彼が終日惱んで來た心配事も具體的となつた。この簡單な註釋も、第二の手紙が來て直ぐに會へることが喜ばしく

も確かになつた曉に、始めて成功したと云ふことは注意すべきだ。』

この例を觀察するにつけ、これにまァ非常に近接した例——ネルフィと云ふ地名の想起出來なかつた例(第一の實例)——を考へ合せて見ると、一語の二義が二語の類音に依つて如何に代償せられるものであるかと云ふことが分るのである。

(十四) 一九一五年にイタリーと戰爭になつた時に、私はそれまで容易に想起出來てゐたイタリー各地の名稱を隨分澤山に、急に忘れてしまつた。非常に多くの他のドイツ人と同樣に、私はフェリーン Ferien の一部をイタリーの地域上に持つて來るくせがついたが、而もこの澤山の名前の忘却が當然イタリーに對して從前は偏愛を抱いてゐたその代りに敵愾心を抱くやうになつた、その表現であることには氣がつかなかつたのである。名稱忘却のこの直接的の動因の他に、また同じ影響に歸すべき間接的の動因のあることが分つた。私はまたイタリー以外の地名をも忘れる傾向があつたが、この事實を調べて見ると、それ等の地名が禁壓せられた敵地の名と何等かの點で遙かに類音であることが分つた。で、私は或る日メーレン Mähren の都市ビゼンツ Bisenz の名を想起するのに非常に苦んだ。遂にその名を想起した時に、私はこの忘却がオルギエトーに於けるビゼンチ宮殿 Palazzo Bisenzi の代りを勤めてゐるのだと云ふことを直ぐに知つた。その宮殿の中にはベル・アルティ・ホテルがあつて、

私はオルギエトーに滞在する時には何時でもこのホテルに宿つたのである。最もなつかしい思ひ出は勿論、變更せられた感情の具合に依つて最も強く傷けられたのである。

またこれ等の名稱忘却の行り損ひを如何にさまぐ\な見地から眺めることが出來るかと云ふことを二三の實例に依つて學んでおくのも固より無意味ではあるまい。

（十五）　シュトルフェル A. J. Storfer の報告（意圖忘却の保證としての名稱忘却）――

『スヰスのバーゼル市の一婦人は或る朝、そのベルリンの幼馴染の女友達ゼルマ Selma X. が新婚旅行の途次バーゼルに立寄つたことを知らせられた。ベルリンの婦人はたゞ一日だけバーゼルに滯在する筈になつてゐたので、バーゼルの婦人は直ちにホテルへと急いだ。二人の婦人が別れる時に、彼等は午後にはも一度會つてベルリン婦人の出發するまで一緒に居ようとの約束をした。午後になつてバーゼル婦人はその會合の事を忘れた。何がこの事を忘れさせたか、それは私には分明しないが、併し正にこの立場（既に結婚した幼馴染の一友と會合すること）の中には、も一度會合することへの禁壓を條件づけるさまぐ\な典型的な觀念群座がある。この場合に於いて興味のあるのは、第二の行り損ひに依つて第一の行り損ひの無意識的保證を表してゐることである。ベルリンからの友達と再會する筈の時分に、バーゼルの婦人は他の場所の會合に列席してゐたのである。そこで話はたまく\、さ

き頃結婚したヸインのオペラ女優クルツの事に及んだ。バーゼルの婦人はこの結婚に對して批難的口吻(!)を洩したが、併しその時そのオペラ女優の名（フォルナーメ）(姓でなく)がどうしても思ひ出せない。(今更云ふまでもないが、一綴音の姓（ファミリエンナーメ）を云ふ場合には、我我は名（フォルナーメ）も一緒に云ふ傾向がある。)バーゼル婦人はオペラ女優クルツの歌ふのを幾度も聽いたことがあるし、それに今迄はいつでも姓名ともに直ぐに出て來たのにと思ふと、愈々自分の記憶力の薄弱が腹立たしく思はれて來た。その前には誰もクルツの名（フォルナーメ）を云つたものがなかつたらしく、會話は他の方向に流れて行つた。——その日の夕方、このバーゼル婦人は午後の會合と一部分では同じ仲間から成る他の或る會合に出てゐた。そこでまた偶然、話はあのヰインのオペラ女優の事に及んで行つた。ところがその時は何の困難もなしに、ゼルマ・クルツ Selma Kurz と云ふ姓名が出て來た。と同時に彼女は叫んだ、「あら、すつかり忘れてゐたわ。妾幼馴染のゼルマと今日午後會ふ事になつてゐたのに。」時計を見ると、もう彼女は出發して了つたに相違ない時刻になつてゐた。』(Internat. Zeitschrift f. Psychoanalyse, II, 1914)

この素晴らしい實例を、それの有するあらゆる角度から鑑賞するだけの用意は、多分我々には缺けてゐる。次に擧げる實例はもつと單純であるが、これに於いては名前ではなくて、その立場に內具す

る一動機からして或る外國語を忘れるのである。(既に云つた通り、吾人はこれ等の現象が、固有名稱に、名(フォルナーメン)に、外國(單)語に、又は文句に關係があるならば、取扱ふのである。)この實例に於いては、或る青年が金(ゴールド)に對する英語(ドイツ語と同じであるのに)を忘れるのであるが、それは彼が自分に願はしい行爲に對して動因を與ふるためである。

(十六) ハンス・ザックス博士の報告――

『或る青年が男女共通の寄宿寮で英國の婦人を知り合ひ、彼女が好きになつた。彼女を知つた最初の夕に、青年はほんの僅かしか喋舌れない彼女の母國語で話し合つてゐたが、その時「金」,Gold'に當る英語を使はうと思つたが、いろ〳〵考へて見ても何としても、その語が思ひ出せない。それに對してその代償語としてフランス語の or, ラテン語の aurum, ギリシア語の chrysos などが剛情に出て來て、それ等の語は求めてゐる語と何の關係もないと云ふ事を百も承知してをりながら、それ等を拒けることがなか〳〵骨であつた。彼は遂に百計盡きて彼女が指に嵌めてゐる金指輪に觸れるより外に、それを知る途はなかつた。ところが聞いて見れば、その長く考へぬいた語はドイツ語のと同音で、つまり Gold であるのを知つて彼女に對して誠にきまりの惡い思ひをした。このやうに忘却のお蔭で手を觸れることが出來たことは、摑んだり觸れたりしたい衝動を何等のさし障りなく滿足させた(その

事だけならば、戀人等が熱心にその機會を求めて可能でないことはなからうが）爲めに高い價値があるのみではなく、更にまた求婚の見込みのあることを闡明し得てゐるために一層價値があるのである。婦人の無意識は、殊にそれが會話の相手に對して好意的になつてゐる時には、無難げな假面の下に匿されてゐる忘却の色情的（エロチッシュ）な目的を感ずるであらう。男が手を觸れた事やその觸れた目的を婦人が如何に受けるかと云ふことは、只今丁度始まつた戀愛三昧の機會を知らしめるための無意識的な、併し甚だ意味深長な方法となり得るのである。』

（十七）ステルケ J. Stärcke に依つて、私はなほこゝに一つ、固有名稱の忘却及び想起の興味ある觀察を報告しておく。この實例の特色は、『コリントの花嫁』の實例と同じで、名前を忘れることが或る詩の文句の僞造と結びついてゐることである。

『法律家にして言語學者なるZと云ふ老人が或る會合の席でかう話した。彼が學生時代にドイツにゐた時、或る學生を知つたが、その學生は非常に馬鹿で、その馬鹿さ加減に就いてはいろ〳〵面白い逸話があるのを知つてゐると……。ところが、彼はその學生の名前がどうしても思ひ出せない、何でもWで始まつてゐたと信じるのだが、それとてもあとであやしくなつて來た。彼はこの馬鹿な學生が後には酒屋（Weinhändler）になつたことを思ひ出した。やがて彼は再びこの學生の馬鹿さ加減に就い

て話し、も一度その名を思ひ出すことの出來ないのをいぶかつた。やがて彼は云つた。「彼はラテン語を繰返しても教へても注入することが出來るとは今なほ考へられないほどの鈍物であつた。」一瞬の後に彼はその求める名が……man(マン)で終つてゐたことを思ひ出した。そこで我々は彼にやはりman(マン)で終る名で何か他に思ひ出すのはないかと尋ねると、彼はErdmann(エルドマン)と云つた。――「それは一體、誰です？」――「これもやはりその時分の學生ですがね。」――ところが、彼の娘さんが、やはりエルドマンと云ふ教授があると云ひ出した。なほいろ〳〵話して見ると、このエルドマンといふ教授は近頃彼が送つた原稿をたゞ簡略にしたゞけのものを自分の編輯して居る雜誌に載せさせ、自分も幾分それを承知してやらせたと云ふこと、それからそのことを彼がいさゝか不快に思つてゐることなどが分つて來た。(それればかりでなく、なほこれは後になつて分つたのだが、Zは教授Eが現在受持つてゐる科教授にならうと嘗て以前に考へたことがあつた。で、その意味でもエルドマンの名は彼には多分急所に觸れるものであつた。)

今や突然、その馬鹿な學生の名が思ひ出された。リンデマンLindemannだ！この名がman(マン)で終つてゐることは彼も夙く思ひ出してゐたのであるから、つまりLindeが永く抑壓されてゐたわけである。リンデに就いて何か思ひ當ることはないかと訊いて見ると、彼はまづ「それに就いては何も思ひ

當ることはありませんね、」と云つた。併し何か思ひ當ることがあるだらうと私が更に追及したので、彼は眼を上にやり、手で空中に身振りしながら「左樣、菩提樹(リンデ)は美しい樹ですね」と云つた。それでも彼は何も思ひ當ることがない。總ての人々は沈默し、各人はそれぞれの讀書を續けたり他の仕事を續けたりしてゐたが、遂に彼は夢見るやうな調子で次の詩句を口ずさんだ。――

Steht er mit festen

Gefügigen Knochen

Auf der Erde,

So reicht er nicht auf,

Nur mit der Linde

Oder der Rebe

Sich zu vergleichen

(右の大意)

彼は確乎たる、軟弱の骨をもて

大地(エルデ)の上に立つとも、

彼はたゞ
菩提樹（リンデ）又は葡萄樹と
自らを比較するにさへ
達しないのだ。

私は凱歌の叫びを擧げた。「そこにエルドマンが出て居る」と私は云つた。「大地の上に立つその人」は大地人（エルデマン）即ちエルドマンであつて、彼は菩提樹（リンデ）（リンデマン）又は葡萄樹（レーベ）（葡萄酒屋（ワインハンドラー））に自らを比するにさへ達しないのだ。云ひ換へると「あの馬鹿な學生で後には葡萄酒屋となつたあのリンデマンは既に鈍物であつたが、このエルドマンはこれも遙かに大馬鹿で、このリンデマンに對してさへ比較にならない。」――このやうな、無意識中に含まれてゐる輕侮又は批難の辭は甚だ普通のものであつて、それ故にこの名稱忘却の主要原因の何たるかは、今や私に明となつて來たのである。

そこで私は尋ねた、口誦した詩句はどこから出たものかと。Zはこれがゲーテの詩で

Edel sei der Mensch
Hilfreich und gut!

高尙なれ、人よ、

他を助け善良なれ！
を以て始まり、更にまた

Und hebt er sich aufwärts,
So spielen mit ihm die Winde.

また彼は己れを高く持し
かくて風は彼をもて遊ぶ

てふ一節もあつたと信ずると云つた。

その翌日、私はこのゲーテの詩を調べて見たが、この實例は始めに思つたよりは遙かに面白い（併しまた錯雜した）ものであることが分つた。

（a） 最初の引用句はかうである。（前掲詩句參照。）――

Steht er mit festen
Markigen Knochen

彼は確乎とした、
活氣ある骨もて立つとも、

軟弱(ゲフューギゲ)の骨と云ふは、いさゝかそぐはぬ結合である。併しこの事はまた後に云はうと思ふ。

（b）この節は次のやうに續いてゐる。(前揭引用句參照)。

Auf der wohlbegründeten
Dauernden Erde.
Reicht er nicht auf,
Nur mit der Eiche
Oder der Rebe
Sich zu vergleichen.

永久動きなき
大地の上に――。
たゞ柏または葡萄樹と
自分を比するにだに
達しないのだ。

この通り、菩提樹などは、この詩の中の何處にも出て來ないのだ！　柏の代りに菩提樹を出したこ

とは、たゞ（彼の無意識が）「大地（エルデ）――菩提樹（リンデ）――葡萄樹（レーベ）」と云ふ洒落をやりたいための仕業に過ぎないのだ。

（c）この詩は「人間性の限界（グレンツエン・デル・メンシハイト）」と云ふ題で、神々の全能と人間の無力との比較を示すに過ぎないのだ。

Edel sei der Mensch,

Hilfreich und gut!

高尙なれ、人よ、

他を助け、善良なれ！

で始まつてゐる詩は、また別の詩で、數頁離れたところにある。題は「神々しさ（ダス・ゲットリッへ）」と云ひ、同じく神神と人間とに關する思想を示してゐる。このことはこれ以上詮鑿せられないから、私は次の事を高々推察することが出來るだけである。卽ち、生と死と、一時的なものと永遠なものと、固有の弱き生と生が始まつたら將來は死ぬこと、などに關する思想がそこに一つの役割を演じてゐると――。』

幾多のこれ等の實例に於いては、名稱忘却の說明をなすために、精神分析のあらゆる細々した技術を用ゐてゐる。も少しさう云ふ業績を知りたく思ふ人は、ロンドンのジョーンズ E. Jones の報告を

參照なさるがよろしい。それ等の報告は英語からドイツ語に飜譯されてゐる。(一)

【註】(一)Analyse eines Falles von Namenvergessen. Zentralblatt für Psychoanalyse, II, 1911.

(十八)　フェレンチ Ferenczi は名稱の忘却もヒステリー的徵候として扱ふことが出來ると云つてゐる。名稱忘却にも一つの機制があるが、それは行り損ひの機制とは遙かに違つたものである。どうしてさう云ふ違ひがあるかと云ふに、それは彼の報告を見れば自ら分る。

『私は一人の婦人患者を、老孃を取扱つてゐるが、彼女は極めて普通の、且つ彼女に最も知られてゐる固有名稱を思ひ出すことが出來ないのである。そのくせ彼女は平常は記憶力は非常によいのである。分析してゐる內に、彼女はこの病徵に依つて自分の無學を證明せんとするものであることが分つて來た。ところがこのやうに自分の無智を證明して見せることは、そもそも彼女に十分な學校教育を許さなかつた兩親に對する詰責であるのだ。また彼女が强迫的に綺麗好き(「家婦精神症」)であることも、一部分はこの同じ源泉から生じて居るのだ。これ等に依つて彼女は恐らくかう云ひたいのだ。――貴方がたは妾を女中にしておしまひなさつたのです。』

私は名稱忘却の實例をもつと殖し、それに就いての議論をもつと續けることも出來るのであるが、殆んど總ての見地はなほ後に出て來る主題を考査するに就いて必要なもので、それ等を始めにこゝで

論じておくことは避けておきたいと私は思ふのである。だが、私はこゝに報告した諸分析の結果を一つの命題に敢へて要約しておかう。――

名稱忘却の(更に正しく言へば、度忘れの、一時的忘却の)機制は、名稱の有意的想起が別方面の、その時には意識されない思想の流れに依つて攪亂せられることに存する。妨げられた名稱と妨げたコムプレックスとの間には、豫めの聯結が存在する事もあるし、或はそのやうな聯結が屢々人爲的に現れ來る道程上に於いて表面的(外部的)聯想に依つて恢復して來ることもある。

妨げるコムプレックスにはさま〴〵あるが、中でも自己關係(フイゲンベチーフング)のもの(個人的、家族的、職業的のもの)が最も效果を強く示す。

意義多様なるため多くの思想圏(錯綜(コムプレックス))に屬する名稱は、或る思想の流れの聯結の中で、それが他の思想の流れにも適するがために、一層強い錯綜に陥るやうになる。

これ等の攪亂の諸動機の中でも、記憶に依つて不快を呼醒まされるのを避けようとの考へは一番光つてゐる。

名稱忘却には概して二つの主要な場合のあることが分る。その一つは名稱それ自身が不快なことに觸れてゐる場合であり、他はその名稱が他の名稱と結びつき、それ等の名稱それ自身のため、或はそ

れ等に近き、又は遙かな聯想關係のためそれ等の名稱想起が障碍せられるやうな結果になる、さう云ふ場合である。

この一般的命題を一見したゞけでも、吾人は一時的の名稱忘却が我々の行り損ひとして最も屢々我我の觀察の中に現れて來ることが理解出來るのである。

（十九）　吾人は併し、これ等諸現象のあらゆる特徴を數へ上げたのでは固よりないのである。私はなほ、名稱忘却が非常に傳染的なものであることを云つておきたい。二人の人間が會話してゐる場合に、その内の一人が相手にもこの名稱あの名稱を度忘れさせるために自分はそれを忘れたと云ふことが屢々ある。而もかうした忘却が起つてゐる時に、その忘れられた名前が一層容易に浮んで來ることもある。この『集合的』忘却は嚴密に云へば群集心理上の一現象であるが、これはまだ精神分析的探究の對象となつてはゐない。唯一の、併し特に美事な實例に於いて、ライク Th. Reik はこの注意すべき現象に就いての說明を立派に與へてゐる。（一）

【註】（一）『集合的忘却に就いて』„Über kollektives Vergessen. Internat. Zeitschr. f. Psychoanalyse, VI, 1920. またライクの『自國の神と他國の神』„Der eigene und der fremde Gott," 1923, 參照。

『或るアカデミーの小會合があつて、そこに二人の婦人の哲學研究者が來合せてゐた。その時、話

はいろ〳〵の問題に觸れて行つたが、特にキリスト敎の起源、文化史、宗敎科學などが論ぜられた。若い婦人の一人はこの話の仲間に這入つてゐたが、彼女は自分が近頃讀んだ英國の小說の中で、當時を動かした多くの宗敎運動の一つの興味ある插圖を發見したことを想起した。彼女は更に、その小說中にはキリストの誕生から死歿までの全生涯が描寫されてゐることを云ひ添へたが、その小說が何と云ふ題であつたかどうしても思ひ出せない。(而もその書物の裝幀、表題の活字の有樣などの視覺的記憶は非常に判然としてゐるのだ。)その時の出席者の中の三人の男子はやはりその小說を知つてゐると云つたが、而も不思議なことに、その名をどうしても思ひ出すことが出來なかつた……。』

この若い婦人はこの名稱忘却の說明のために分析を受けた。この書物の表題は Ben Hur (by Lewis Wallace) であつた。その代償名として彼女は Ecce Homo—homo sum—quo vadis? と云ふのを想起した。その少女は『自分竝びに他の少女がその書の名を忘れたのは、その名が——ましてや若い男たちの間で——用ゐたくなるやうな言葉を含んでゐたからである』ことを自分でも知つてゐる。この說明に更に興味ある分析を施して見ると、もつと深いことが分つて來る。實は、嘗て homo の譯語たる『人間』に或るいやな意味を含んでゐるやうな關係に觸れたことがあつた。ライクはそこでかう結論してゐる。——例の若い婦人はその忘れられた表題を若い男たちの前で口にすることが、宛も自分の人格

には不似合な、苦々しいことゝして拒けてゐる願望に靡くことになるかのやうな風に、その言葉を取扱つてゐるのだ。更に簡單に云ふと、無意識に於いては彼女は „Ben Hur“ を口にすることは、性的な申出をすることゝ同じにしてゐるのである。で、彼女の忘却は、從つて、この種の或る無意識的な試みの保護に相當してゐるのである。同樣な無意識の現象が若い男たちの忘却の條件となつたと云ふことを假定するの根據は吾人にあるのである。彼等の無意識は少女の忘却をその現實的な意味に於いて把み、さうしてそれを……云はゞ解釋したのである……。男たちの忘却はそのやうな控へ目な態度に對する顧慮を表してゐる。……つまり、彼等の對話の相手たる少女が急に記憶力の弱まつたことに依つて一つの明白な目くばせを與へ、それを男たちが無意識的に恐らくよく理解したものであるやうである。

また連續的に名稱が忘却されることがあつて、諸々の名稱の連鎖の全部が記憶から逸失してしまふのである。忘れた名前を思ひ出すために、それと密接に結びついてゐる他の名前を搜さうとすると、またこのおとりとして求めた別の名前までが逃げてしまふ場合が稀でない。忘却はこのやうに一つから他に飛火して行く、宛も容易に取除き難き障碍の存することを證明するものゝ如くに——。

第四章　幼時記憶と隱蔽記憶

第二の小論(二)に於いて、私は豫期しない方面にある我々の記憶に一定の目的のあることを實證することが出來た。私がその出發點とした注意すべき事實は、人が最も初期の、どうでもいゝやうな、從屬的なものを屢々記憶するらしいのに、この時機の重要な、感動深き印象に就いては、何等の痕跡をも成人の記憶中に(一般的ではないが、屢々)殘してゐないといふ一事であつた。ところで、記憶は隨意に取捨出來る印象の中から一定の選擇をするものであることが知られてゐるから、この選擇は知識の圓熟期に於いては、小兒期に於いてとは全然異つた原則に從ふものであると假定するのが合理的のやうに思はれる。併しながら、細密に研究して見ると、このやうな假定は無駄であることが分る。重要ならぬ小兒期の記憶はその存在を轉位の過程に負ふてゐる。それ等の記憶はその再現(想起)に於いて、他の實際有意義な印象の代償(その本體の想起は何等かの抵抗に依つて妨げられてゐるが故に)となるものである事は、精神分析の明示し得るところである。それ等はそれ自身の內容に依つて記憶

されてゐるものではなくそれ等の內容が他の抑壓された思想に對する聯想的關係に依つて記憶されてゐるのであるから、私が與へた『隱蔽記憶(デツクエリンネルンゲン)』といふ名稱が丁度適當してゐるのである。

【註】（1） Monatschrift für Psychiatrie u. Neurologie（1899）所載。

前述の小論中では、私は隱蔽記憶の關係及び意義に於ける種々相に單に觸れたに過ぎないのであつて、決してそれだけで盡したといふのではない。十分に分析した實例に於いて、私は特に隱蔽記憶とそれに依つて隱蔽される記憶の內容との間の一時的關係に於ける特異性を强調しておいた。その實例に於ける隱蔽記憶の內容は、初期小兒時代に屬してゐるが、而もそれに依つて代表せられてゐる思想は、實は無意識中に沈んでゐるのであるが、その思想は當該個人の一層後の時代に屬してゐるのである。私は轉位のこの形態を逆行的、若しくは退行的形態と稱してゐる。恐らく我々は逆轉された關係に一層屢々遭遇するであらう。——卽ち、最も幼い時代の、重要ならぬ印象は、意識中に於いて隱蔽記憶となるものであつて、この記憶は、その直接的再現が抵抗に依つて妨げられてゐる早期經驗のお蔭に依つて、纔に存在してゐるものであるといふのである。我々はこれ等を、割込的或は間接的隱蔽記憶と呼びたい。記憶に最も關りのあるものは、此處では年代的に隱蔽記憶の彼方にある。最後に、第三番目の場合があり得る。卽ち、その隱蔽記憶は、それが隱蔽する印象と、その內容に依つて結合

するばかりでなく、また時間の近接に依つて結合するのである。これが同時的或は近接的隱蔽記憶である。

我々の記憶の總量のどれほどの部分が隱蔽記憶の範疇内に屬し、またそれがさまざまな神經的な隱蔽現象の内に演ずるかなどの諸問題の價値に就いては、吾人は今まで觸れなかつたし、また只今ここでそれに觸れやうとするものでもない。私はたゞ間違つた回想を伴ふ固有名稱忘却と、隱蔽記憶の形成とは同一物であることを强調せんとするに過ぎない。

一見したところでは、兩現象間の相違はその本然の類似よりは甚だしいやうに思へるであらう。前者の現象に就いては固有名稱を取扱ひ、後者の現象に就いては、現實上の經驗にせよ思想上の經驗にせよ、完全な印象を取扱ふた。前者では吾人は記憶機能の明白な破綻を取扱ひ、後者では我々にをかしく思へる記憶行爲を取扱つた。また前者では、瞬間的の攪亂を問題にし、――何となれば、只今忘れられた名前は以前には百度でも正しく想起されたし、また明日からは再び正しく想起されるからだ――後者では嘗て忘れられることのない永續的の把持を問題にした、何となれば、子供時代の重要ならぬ記憶も我々の永い生涯の期間中我々に伴ふことがあるものだからである。これ等二つの場合に於いて、謎は全然別の方法で解決されるやうに思へる。我々の科學的好奇心を刺戟するものは、前者に

於いては忘却であり、後者に於いては記憶である。更に深く調べて見ると、二つの現象はその精神的材料及び時間的連續に於いては異るに拘らず、合致點は遙かにこれを償ふて餘りあることが分る。前者も後者も記憶の失敗を取扱ふ。記憶に依つて正しく想起さるべきものが出て來なくて、その代りにその代償となるものが現れて來る。名稱忘却の場合に於いても、代償名稱の形に於ける記憶行爲は缺如してはゐないのだ。隱蔽記憶の形成されるのは、他のもつと重要な印象の忘却される場合である。何れの場合に於いても、吾人は知性的の感受力に依つて、そこに一つの攪亂(邪魔)が——尤も各々ではその現れる形は違ふが——這入り込んで來ることを知るのである。名稱忘却の場合に於いては、吾人は代償名稱が間違つてゐることを知つてゐるが、隱蔽記憶に於いては我々が抑々さう云ふものを持つことに驚くのである。そこで、もし、兩方の場合に於いて代償形成が、轉位に依り、同じ方法で、表面的聯想に從つて出來上るものであることが心理學的分析に依つて證明されるものとすれば、兩現象がその材料、時間連續、及び集中に於いて相違してゐるためにこそ、我々が何等かの重要な、一般的なものを發見したのだとの我々の期待も高まつて來るのである。この一般的なものと云ふのは、想起の機能の停滯し逸失することは、そこに一つの偏見的要素が、傾向が入込んで來て、それが或る記憶は抑へ或る記憶は浮ばせるやうにするのだと云ふことを、我々の考へるより以上に屢々示すと云ふ

ことなんである。

幼時記憶の問題は私には非常に重要であり興味あることであるから、今まで云つたより以上のことをそれに就いてこゝになほ數言つけ加へて云つておきたいと思ふ。

我々の記憶は小兒期の何時頃まで戻ることが出來るであらうか。この問題に關する研究としては兩アンリ V. et C. Henri (一) 及びポトギン Potwin (二) のものを私は承知してゐる。そのやうな試驗の結果は個人に依つてまち〳〵であると彼等は云つてゐる。或る者はその最初の記憶を生後六ヶ月まで辿ることが出來、また他の者は六歳乃至八歳の終まで何等想起するところがないと云ふ有樣である。併し小兒期記憶の態度がこのやうにまち〳〵であることは何に關係があるのか、またそこに如何なる意味があるか。この問題に對する材料を蒐集調査に依つて具へるだけでは固より十分ではない。更にその材料を仕上げせねばならぬが、それにはその報告をした人物が參與せねばならぬ。

【註】（一） Enquête sur les premiers souvenirs de l'enfence, L'annee psychologigue, III, 1897.

（二） Study of Early memories. Psycholog. Review, 1901.

吾々は幼時健忘、即ち人生の最初の數年間の記憶の逸失することの事實をあまりに輕々に取扱ひ、そこに稀有の謎を發見しそこなつてゐると私は思ふのである。如何に高い知性的行爲を、また如何に

錯雜したる感情の亢奮を約四歳の少兒が持ち得るかと云ふことを、我々は忘れてゐる。で、何故に幼年の記憶がこれ等の心的過程を、多くの場合殆ど保存してをらぬかを我々は不思議に思ふのである。殊にこれ等の忘れられた小兒期行爲がその人の生長に何等かの痕跡を殘さずして消え去つてゐるやうなことはなく、寧ろその全將來に對して決定的な感化を殘してゐると考へるべきあらゆる理由が存するから、我々はそれを不思議に思ふのである。而も、これほどの比較を絕した效果を及ぼしてをりながら、それ等は忘れられてゐるのだ！　この事は記憶（意識的想起の意味に於ける）には特別にしつらへられた、我々に認識出來なかつた、條件の存することを示してゐる。そこでこの幼時忘却こそは我々の新しい研究に依つて一切の神經症狀の根柢に橫たはると知り得たところの、かの健忘を理解すべき鍵となるものであることが察知せらるゝのである。

これ等の保有せられてゐる少兒期記憶の內、或るものは我々によく分るが、或る他のものはどうも不思議でわけが分らない。兩方の種類に就いてその誤りを正すことは困難でない。或る人物の保有してゐる記憶を分析試驗して見ると、それが正しいと云ふ證據のないことが容易に確められる。記憶影像の或るものは確かに間違つてをり、不完全であり、また時間的にまた空間的に轉位されてゐる。分析試驗を受けてゐる人間が、自分の最初の記憶は多分二歲の頃にまで戾ると云つたりしても、それは

信用出來ない。これ等の經驗が如何にして扮裝され如何にして轉位されたかを說明すべき動機は直ちに發見されるが、それ等の動機に就いて見ると、これ等の追憶錯誤は單純な記憶不正がその原因でないことが分るのである。後年の生活中から得た强大な諸勢力が小兒期體驗の追憶能力を形成するのであるが、我々が大抵の場合、我々の小兒期を知ることを非常に遙かな、不思議なことゝ思ふのは多分それ等の諸勢力のためであるらしい。

成人の回想はさまぐな心的材料に依つてなされることは誰しも知つてゐる。或者は視覺的影像に依つて回想する、彼等の回想は視覺的性質を帶びてゐる。或はまた自分の經驗の最も必要な輪廓をも想起し得ない者もある。そのやうな人間を『聽覺者』“Auditifs” 及び『運動者』“Moteurs” と呼んで、これを『視覺者』“Visuels” と對比せしめる。これ等はシャルコー Charcot の與へた術語である。夢に於いてはこれ等の區別はなくなる、我々は總てを視覺偏重の影像に於いて夢見る。併しながらまたかう云ふ成り行きは小兒期記憶の中にも見られるのである。小兒期記憶は後年の記憶に於いては視覺的要素が缺けてゐるやうな人々に於いてさへも造形的であり視覺的である。それ故に、視覺的記憶は嬰兒的回想の型を保存してゐる。私に於いても最も早い小兒期記憶は視覺的性質のもののみである。それ等は正しく造形的にしつらへられたる場景であつて、たゞ舞臺裝置にのみ比すべきものである。これ

等の小兒期の場景に於いては、それが本當であらうと嘘であらうと、我々は輪廓に於いても服裝に於いても小兒である自分自身を見るのが常である。これは不思議なことに思へるのである、何となれば成人せる視覺者は後年の經驗を記憶に泛べた場合にはそこにも早自分の身體を見ないからである。(一)また小兒の注意は彼等の體驗に際しては、專ら外的印象に對して向けられると云ふよりは自分自身に向けられると云ふのも、我々の總ての經驗と矛盾することである。さまぐ〵な方面から考へて見るに我々は所謂最早時の小兒期記憶に於いて、實際の記憶の痕跡を有するのでなく、それに對して後に加工したものを所有してゐるのだと云ふことを假定せざるを得ない。その加工されたものには各種萬態の後年の心理的諸勢力の感化が及んでゐることであらう。個人の『幼時記憶』はまづ殆ど大抵の場合は『隱蔽記憶』の意味を帶びたもので、而もそれが傳說や神話となつて殘つてゐる民族の幼時記憶と著しい類似を示してゐるのである。

【註】(一)　私はこの事を自分で試みた調査の結果として主張するのである。誰でも精神分析の方法を以て多數の人間を精神的に調べて見た者は、その仕事の結果としてあらゆる種類の隱蔽記憶の實例を豐富に蒐集してゐるのである。併しながら、幼時記憶は後年の生活に對して、前に論じた通りの性質の關係を持つてゐるものであるから、これ等の實例を報告することが非常

に困難なのである。一つの小兒期記憶を隱蔽記憶として價値づけるためには、當人の全生涯を示すことが屢々必要となつて來よう。たゞ次の美事な例に示されてゐる如く、極まれには、個々の小兒期記憶をその周圍のものから取出して報告することが出來る。

二十四歳になる或る男が五歳當時の記憶として次のやうな影像を保存してゐる。彼は或る夏季別莊の庭で椅子に腰かけてゐる。彼の側には叔母が居て、一生懸命に彼に文字の知識を授けてゐる。mとnとの區別が非常にむつかしくて、彼は叔母にどうしてこれとあれと違ふことが分るのか敎へてくれと賴む。叔母はmは一つだけ劃が、第三の劃がnよりも多いと云ふことを注意しなさいと云つた。——この小兒期回想の確實さを問題にすべき何等の理由もない。併しながら、その意味は實は他の少年時代の知識慾の象徴的代表であることが後になつて分つたのである。といふのは、丁度彼がその當時にmとnとの區別を知りたいと思つたと同じやうに、後には彼は何とかして少年と少女との區別を知りたいと思ひ、また他ならぬこの叔母が師匠となつて與れゝばよいと思つたのであつた、彼はまた、この區別が似たものであり、少年にはまた少女の持たぬ一つの部分があることを發見したのであつた。で、この認識の當時に於いて彼は、それに呼應する小兒的知識慾に就いての記憶を呼醒ましたのであつた。

も少し後期の小兒年代からの今一つの實例を擧げておく。その戀愛生活を痛ましくも妨げられた、今では四十歳以上になつてゐる男があつて、彼は九人の子供の最年長である。末の妹が生れた時、彼は十五歳であつた。然るに彼は自分の母親が身重になつてゐるのを嘗て見たことがないと頑張るのである。そんな筈はないと私が追及したので、彼は嘗て十一二歳の頃に母親が鏡の前で急いで着物を弛めた(aufbinden)ことを思ひ出した。すると今度は別に追及もしないのに、彼は母親が街から歸つて來て、思ひがけない痛みに襲はれたことがあると云ひ添へた。ところが、着物を弛める(aufbinden)事は分娩する(Entbinden)ことの隱蔽記憶である。そのやうな『言葉の懸橋(ヴォルトブリユッケン)』の用ゐられてゐる場合はまた他のところで出會すであらう。

分析して見るまでは何の意味も含んでゐさうになかつた小兒期記憶が、分析的仕上げに依つてどのやうな意味を獲得するものであるかと云ふことを、私はなほも一つの實例に就いて示しておきたいと思ふ。私が四十三歳の時、自分の子供時代から殘つてゐる記憶に興味を向け始めるや、一つの場景が思ひ浮んだ。その場景は長い前から——ずつと以前からと私は考へたのだが——時々意識に現れ來りさうしてそれは(これは相當信ずべき特徴に依つて云ふのだが)滿三歳にならない前のことであつた。私は駄々を捏ね泣叫びながら大きな箱の前に立つてゐるところである。その箱の蓋を私より二十だけ

年長の異母兄(ハルプブルーデル)が開けて抑へてゐる。その時忽ち、美しいほつそりとした私の母が、丁度街から歸つて來たやうな風にその部室の中に這入つて行つた。これ等の言葉で私は自分が具象的に見た場景を表したのであるが、その他にはこの場景に就いて別に何も手がかりがなかつた。私の兄がその大箱——その場景を始めに云ひ表はしたところでは「戸棚(シユランク)」となつてゐた——を開けようとしたのか閉めようとしたのか、何故私がその時泣いたのか、そこへ母親が來たことがそれと何の關係があつたのか、總てそれ等のことは私に判然しないのである。私としてはそれは兄が私を揶揄し母がそれを抑止したのだと解釋したい氣がしたのである。記憶中に保存されてゐる小兒時代の場景のそのやうな誤解は稀ではない。我々は或る場景を思ひ出すが、併しそれには中心がないのである。その場景の何れの要素に精神的强點を置くべきかを我々は知らないのである。骨を折つて分析した結果、私は全く思ひもかけない解釋をこの場景に就いて下すやうになつたのである。私は母親を失ひ、母親がこの戸棚又は大箱の中に閉込められてゐるのでないかと思ひ、兄にそれを開けてくれと要求したのである。兄が私の云ふ通りにして吳れて、母親が大箱の中に居ないことを確めると、私は泣き始めたのである。この瞬間が確乎と私の記憶中に保存せられてゐるのであつて、それに直ぐ續いて母親が出て來て、それで私の心配や戀しさはなだめられたのである。

併し一體子供が居なくなつた母親を大箱の中に搜すといふ考へは、どうして持つやうになつたか。同じ時分に見た夢には仄かに或る乳母の事が出て來る。彼女に就いてはまた別の回想が纏つてゐるのである。例へば、彼女は私がお小使ひとして小さな錢を貰ふ度にそれを彼女にお渡しなさいと尤らしく私の良心を強いたものである。この事は後々の事の隱蔽記憶としての價値を要求し得る一小部分である。そこで私は今度は自分の註釋の勞を輕減しようと思ひ、今は年寄つてゐる母にこの乳母のことを尋ねることにしたのである。それで何もかも分つたが、殊にこの悧巧な、併し不正直な女は私の母の産褥にある間、盛んに家内で盜みをしたが、兄の告訴に依つて審判されることになつた。この話を聞いて私は恰も一種の靈感に打たれたかのやうに、例の小兒期場景が理解されたのである。乳母が急に居なくなつたことに就いては私は無關心でゐられなかつた。で、私はその事に就いては兄が一役を演じてゐることを氣付いてゐたので、私は彼女が何處へ行つたかと云ふ質問を兄に向けた。すると兄は例に依つてうまくはぐらかし、言葉の洒落で以て『(箱に)片付け（アインゲカステルト）』ちやつたと答へた。私はその答へを子供らしく解釋したが、併しもうその他に經驗することもなかつたので、それ以上訊くこともしなかつた。その後、或る時母が私を殘しておいて出掛けて行つたので、意地惡の兄は乳母と同樣に母をも片付けたものと思つて、そのために箱を開けて呉れと云つて兄を攻め立てたのであつた。ところ

で私はまた、その視覺的の小兒場景の云ひ表はしに於いて、何故に母のすらりとしてゐることが强調されてゐるのかゞ分つた。彼女の產後のやつれが私の眼をひいたに相違ない。その時生れた妹より私は二歲半だけ年長である。さうして三歲になつた時、異母兄とは別居することになつた。〔二〕

【註】（一）このやうな少兒年代の精神生活に興味を持つてゐる人々は誰でも、兄に寄せられた要求懇願にはもつと深い條件のあることを容易に知るであらう。三歲未滿の子供にして、末の弟妹は母の肉體內に生育するものであることを了解したのである。併しこの生育と云ふことゝ、母の身體がまだ〳〵別の子供を生むことが出來ると云ふことゝは一致はしなくて、不信の內にその事を案じてゐるのである。戶棚だの大箱だのは彼には母の身體の象徵である。そこでこの箱を覗いて見たいと云ふ氣になり、それに就いて兄をあてにするやうになる。ところがこの兄は、他の材料に依つて知れたところに依ると、父の位置に對する子供等の競爭者であるのだ。この兄が自分の居なくなつた乳母を『片付け』てしまつたのだとの根柢ある疑ひが兄に懸るのみならず、また彼は最近に生れた赤ん坊を母の身體內に押込んでしまつたのだとの何等根柢のない疑ひをも懸けるのである。箱が空になつてゐるのを發見した時のやうな失望の感が、今や子供らしい要求の表面的動機から出て來る。より深い努力のためには、この失望の感は悪い位置に立つてゐる。これに反し、歸つて來た母親のすらりとしてゐることに就いての高い滿足は、このより深い層からして始めて完全に理解することが出來る。

第五章

云ひ損ひ

我々が母國語で話す時の普通の材料は容易に忘却せぬやうに思へるけれども、この材料の驅使とてもまた或る他の攪亂に一層屢々委せられてゐる。それが誰しも知つてゐる『云ひ損ひ』である。常態の人間に於いて見られる云ひ損ひは、病理的條件の下に現れる所謂『失語症（パラファジエ）』の前階だと云ふ印象を與へる。

私はこゝで例外的に、拙著以前にこの問題を取扱つてゐる書に言及することが出來る。一八九五年にメリンガー Meringer とマイヤー C. Meyer とは『云ひ損ひと讀み損ひ』とに關する研究を公表してゐるが、その見地は私のとは遙かに違つてゐるのである。彼等著者の內一人は本文の言責者であつて、彼は言語學者として言語學上の興味からさまぐ〵な云ひ損ひの間に存する法則を調べるやうになつたのである。彼はこれ等の法則からして『或る言葉の音や或る文章の音や、またさまぐ〵な言葉が相互の間に於いて全く獨特の遣方で聯想され結合せられるところの』『或る一定の精神上の機制』が存

在することを結論しようと思つたのである。（第十頁）

彼等は自分等で蒐集した『云ひ損ひ』の實例を先づ、純粹に記述的な見地に從つて類別した。即ち前後轉置（例へば、ミロのヸナスと云ふべきところをヸナスのミロと云ふが如き）、音の前響 Vorklänge 又は取越 Antizipationen （例へば、es war mir auf der Brust so schwer と云ふべきところを…… auf der Schwest と云ふが如き）、音の後響 Nachklänge 後置 Postpositionen （例へば „Ich fordere Sie auf, das Wohl unseres Chefs anzustossen“ （貴君は我々の親分のために祝盃を擧げてくれるものと私は思つてゐる。）と云ふべきところを anzustossen の代りに aufzustossen と云つたりする。）汚染 Kontaminationen („Er setzt sich einen Kopf auf“ 及び „Er stellt sich auf die Hinterbeine“ （彼は後足で立上る——反抗する」から „Er setzt sich auf den Hinterkopf“ が生じ來るが如き。）代償（例へば、„Ich gebe die Präparate in den Brütkasten.“ と云ふべきところを Briefkasten と云ふ如き。）などであつて、これ等の主要範疇の外になほ多少のより少く重要なる（我々の目的のためには、より少く有意味なる）範疇が附加せられてゐる。この分類に於いては、轉置や歪みや混淆などが語や綴音の單一の音に關係するのか、或は當該文章の全體の言葉に關係するのか、そこの區別が與へられてゐない。

云ひ損ひのさまぐな種類を説明するために、メリンガーは發音の種々なる心理的價値を假定して

ゐる。或る語の最初の綴音又は或る文章の最初の語が我々の神經組織に影響を與へると、刺戟の過程が直ちに次なる音及び次なる語に打向ひ、さうしてこれ等の神經作用が相互に同時的である場合にはそれ等は互に影響を與へ合ひ變化させ合ふ事があるのである。心理的に一層激しい音の刺戟は前響し又は後響する、またかうしてあまり重要でない神經過程を攪亂するのである。それ故に、何れが或る語の最も重要なる音であるかを決定することが必要である。メリンガーは云ふ『或る語の何れの音が最高の强度を有するかを知らうと思ふならば、或る忘れた語、例へば名前を想起しつゝ觀察して見るのである。まづ意識に戻り來る音が、忘却前に最大の强度を持つてゐたのである。（一六〇頁）かくて最も重要なる音は語根綴音の最初の音と語自體の最初の音とであり、また强音ある何れかの母音である。』（一六二頁）

こゝに至つて、私は抗議を申出でざるを得ないものである。名前の最初の音がその語の最も重要なる要素に屬してゐようとゐまいと、その音が失語の場合に最初に再び意識に出で來ると云ふは正しくない。右の法則は、それ故に何等の用をなさない。或る忘れられた名稱を探ねてゐる間の我々自身を觀察して見ると、我々はその名稱が何等かの文字で始まつてゐるにきまつてゐるとの考へを比較的屢言表はさざるを得ないのである。ところがこの考へは、根據のあることもあるが、ないことも屢々

である事が分る。實は私は、多くの場合に於いて我々が間違つた最初の語を想起するものであるとさへ云ひたいのである。また、吾人の『シニヨレルリ』の實例に就いて見ても、代償名稱に於いては最初の音が缺け、また主要綴音もなくなつてゐる。而もあまり重要でない二綴音エルリ elli が代償名稱ボッティチェルリ Botticelli に於いて記憶中に蘇生つてゐる。

代償名稱が忘れられた名稱の最初の音を如何に大して尊重せざるものであるかと云ふことは、例へば次の場合に就いて知ることが出來よう。——或る日、私はモンテ・カルロを首府とする彼の小國の名を思ひ出すことが出來なかつた。それの代償名稱は、ピーモント Piemont, アルバニエン Albanien, モンテギデォ Montevideo, コリコ Colico などであつた。アルバニエンの代りに間もなくモンテネグロ Montenegro と云ふのが現れて來た。そこで私は Mont（モンと發音して）なる綴音は最後のを除いて一切の代償名稱に現れてゐることに氣が付いた。で、私はアルバート侯の名からして、今まで忘れてたモナコ Monaco を容易に想起することが出來た。コリコは綴音の具合や律音に於いて忘れられた名に酷似してゐる。

名稱忘却に於いて指摘されたのに似たやうな機制が云ひ損ひの現象にも働くものであるとの假定が許容せられるならば、我々は云ひ損ひの場合に就いて一層確實な判斷の基礎に到達したことになる。

云ひ間違ひとして現れる言語の攪亂は、まづその同じ言語の他の構成分子の影響に依つて惹起される。つまり、前響又は後響に依つて、又はその文章或は前後の文章中に包まるゝ(話者の云ひ表はさうと欲するものとは違つた)他の意味に依つて、惹起される。――前にメリンガーとマイヤーとから借りて擧げておいた實例は總てこれに所屬する――。ところが第二に、攪亂はシニョレルリの場合の現象と類似して、その語、その文、又は前後の文章以外の影響に依つて、我々が云ひ表はさうと欲しながつた要素から、攪亂に遭つて纔かにその力を意識するやうになつたさう云ふ要素からして、惹起されることがあるのである。云ひ損ひのこれ等二種の起源にとつて、共通的なものは亢奮(刺戟)の同時性であり、相反的なものは同一文章又は前後文章の內部又は外部の具合である。相反點は始めの程はそれほど大であるとは思へないのであるが、云ひ損ひの症狀研究から抽出された或る結論を考査するにれほど大であるとは思へないのであるが、云ひ損ひの症狀研究から抽出された或る結論を考査するに及んで如何にその大であるかを知るに至るのである。併し、音や語を云ひ表はす上に相互に影響を及ほし合ふやうに音や語を結び付けるその機制に關する結論を、(つまりあの言語學者が云ひ損ひの研究から獲ようと望んだ結論を、)云ひ損ひの現象から抽出し來る見込みは、たゞ第一の場合にのみ存することは明かである。同一文章又は前後文章以外の影響からして攪亂の起きた場合には、まづその攪亂的要素を知悉することが先決問題であらう。次に問題となるのは、この攪亂がまた言語構成の假定的

法則を暗示するものではないかと云ふことである。

メリンガーやマイヤーが、言語は『錯雜せる心理的影響』に依つて、卽ち同一語、文など以外の要素に依つて、攪亂されることがあるものである事を看過してゐるとは、何人も主張し得ない。實際、彼等も、音の心的不等價說は、嚴格に云へば、たゞ音の攪亂竝びに前響後響の說明にのみ適用せられ得ることを氣付いてゐたに相違ない。語の攪亂が音の攪亂に還元され得ない場合には、例へば語の代償、又は汚染の場合には、彼等はまた何の躊躇もなく、言ひ損ひの原因を前後文章以外に求め、這般の事情を證明するに適切なる實例を以てしてゐるのである。例へば、次のやうな例が擧げてある。

（六二頁）『ルー（Ru.）君は內心では「豚のやうなこと」‚Schweinereien‘ と考へてゐる或る出來事を話してゐる。併し彼は何とか和やかな形式もがなと思つて、かう切り出した。「その時、併し、事實は Vorschwein へと到達した。」と。そこに居合せたマイヤーと私とに、ルー君は自分では‚Schweinerien‚ と考へてゐたのだと白狀した。この考へられてゐた言葉が ‚Vorschein‘ の代りになつて出て來たと云ふことは、これ等の二語が非常に似てゐるからと云ふだけで十分に說明がつくと思ふ。』

（七十三頁）『汚染の場合のやうに、代償の場合に於いてもまた、而も一見非常により高い程度に於いて、「浮遊する」又は「漂浪する」語象が大きな役割を演ずる。それ等の語象は意識の閾域下にある

にしても、而もなほ效果を及ぼすだけの近くにあるので、相似のために容易に錯綜に導かれ得るのである。さうして、かくて語列を交錯せしめる。「浮遊する」又は「漂浪する」語象は、人々の云ふやうに、ほんの只今口外せられた言語過程の落伍者（後響）であることが屢々である。』(二)

【註】（一）なほ同書九十七頁參照。

意識の閾域下にあつて口外せらるゝに到らなかつた『漂浪する』語象に對する顧慮と、話者が總て考へてゐるところを話してしまひたいとの要求とが、我々の『分析』時の事情に依つて、如何に近く出て來るものであるかと云ふことは誤解すべくもあらぬことである。また我々は無意識の材料を求むるものであつて、さうして尤より同一道程に依つてゞはあるが、たゞ吾人は被分析者の思ひ起しから攪亂的要素の發見に至るまで、錯綜せる聯想群を通じて一層長い道程を辿り戻らねばならないのである。

私はそれから、メリンガーの實例が證據となるところの、或る他の興味ある行爲を論じておかう。著者自身の洞觀するところに依ると、云はうとする文章中にある或る言葉と他の云はうとしない言葉との間に何等かの類似があるために、その云はうと思はない言葉が歪み、混合、妥協形成（汚染）などを惹起すことに依つて意識中に割込んで來るのである。例へば、——

sagen, dauert, Vorschwein.

jagen, traurig, ... Schwein.

と云ふ風である。

さて、私は『夢の註釋』に關する拙著の中で、夢の潛在思想から所謂夢の顯在內容が生じ來るに際して、凝縮の仕事が如何なる役割を演じるかを示しておいた。事物にせよ言語表象にせよ、無意識材料の二要素間に何等かの類似の存する時は、それが原因となつて第三の要素が生ずる、それが混合表象又は妥協表象である。この第三要素は夢の內容に於いては兩方の構成分子を代表し、またその起源から考へて見ても多くの矛盾した個々の決定要素を包藏してゐることが屢々である。それ故、云ひ損ひに於いて代償や汚染が出來るのは、夢の構成に於いて最も活潑な働きをする事を我々の知つてゐるかの凝縮の始まりである。

一般讀者向きの或る小論文（„Neue Freie Presse“紙、一九〇〇年八月二十三日號所載、『如何にして人々は云ひ損ひをするやうになるか。』）の中で、メリンガーは語の交換せられる或る場合、つまり或る語が他の意味反對の語に依つて置換へられる場合の特別な實踐的の意義を高唱してゐる。彼は曰ふ、『吾人はさき頃オーストリー衆議院長が開會を宣したその宣し振りを想起することが出來る。院長

は云つた、「議員諸君！　私はこゝにかく多數議員諸君の出席を告げ、併せて議會の閉會を宣します。」と。議場が哄笑したので議長は始めて氣付いて失言を訂正した。この場合に於いて、議長はどうせ香ばしいこともなさゝうなこの議會を只今既に閉會する位置にありたいと思つてゐた、そこで――これは屢々起ることだが――その考へは少くとも部分的に這入り込んで來て、その結果「開會」の代りに「閉會」となつたのである、つまり云はうと思ふところとは反對の宣言となつたのだと説明するのが多分當つてゐるであらう。併し、種々な觀察を重ねた結果私は吾人が相反の言葉を甚だ屢々置換へるものであることを知つたのである。それ等の言葉は既に我々の言語意識に於いて聯想せられてをり、從て間違つて喚起せられ易いのである。』

ところが、この議長の實例に於いては云ひ損ひが單に話者の云ふ言葉に反對して内的思想中に起つた矛盾であるとするのが本當らしく思へるが、相反代償のあらゆる場合がみなさう單純ではないのである。吾人は aliquis の例の分析に於いて類似の機制を見出したのであつた。そこに於いては内的矛盾はその反對語に依つて代償せしめる代りに或る語を忘却すると云ふ形で現れて來てゐる。併しその差異を差引するために、吾人はかう云ふことも出來よう、その aliquis てふ小語は『開會』と『閉會』に似たやうな相反語を持ち得ないし、また『開會』なる語は話の慣用の成分であるがために忘れよう

とて忘れられないのだと。

メリンガー、マイヤー等の最後の實例は吾人に、言語攪亂が前響、後響の影響、竝びに語られることになつてゐた同文中の語の影響に依つて惹起されると共に、また云はんとする文章外の語の効果（こんな場合でなければそれの刺戟は思ひもよらないことであつたらう）に依つても惹起されるものだとのことを示したとすれば、吾人は次に、それ等云ひ損ひの二種を果して確定的に分離することが出來るか、また如何にして一方の實例を他種の場合と區別することが出來るかを發見したく思ふであらう。

併し論述のこの段階に於いて、吾人はまたヴント Wundt の說を考へて見なければならない。彼は言語の發達法則に關する廣汎なる著書（『民族心理學』Völkerpsychologie, 1. Band, 1. Teil, S. 371 u. ff., 1900）中に於いて、また云ひ損ひの現象をも取扱つてゐる。これ等の現象、竝びにこれ等に關係ある他の現象に於いて必ず隨伴するものは、ヴントに依れば、何等かの心的影響である。『そこにはまづ積極的な條件として、發言せられた音のために刺戟せられた音聯想と語聯想との流れが屬してゐる。その流れのある上に、これを遮げる意志の效果の弛緩、竝びにこゝにまた意志の機能として働く注意力の消滅が、消極的契機として生じて來る。聯想のかの働きが、來るべき音の豫想され、先行音の再現

されるてふ事實となつて現れるか否か、或は慣習的に用ゐられてゐる音が他の音の間に割込んで來るのか否か、或はまたそのやうな音は全然別々の音が、語られた音と聯想的に關係してこれ等の上に働きかけるのであるか、——總てこれ等の問題はたゞ單に起りつゝある聯想の方向の差違を、またせいぜいその聯想の働きの差違を、示すに過ぎなくて、その聯想の一般性を示すものではないのである。或る場合に於いてはまた、何う云ふ形の時に一定の攪亂が生じるか、または原因錯綜の原理に應じて（二）、そのやうな攪亂を多數動機の混合に歸した方が一層正しくはなからうかと云ふことは疑問になる。』（三八〇—三八一頁）

【註】（一）圈點は著者の附加するところ。

私はヴントのこれ等の說を甚だ正しいと思ふばかりでなく、また敎へらるゝところも大である。多分我々はヴントより以上の大きな確信を以てかう强調することが出來ると思ふ、卽ち云ひ損ひを惹起させる積極的契機（つまり禁止せられたる聯想の流れ、その消極的契機は禁止する注意の弛緩）は、大抵の場合相互に效果を及ぼすやうになる、そこで兩素因は同一現象の決定要素たるに過ぎないのであると。この禁止する注意が弛緩すると共に、禁止せられざる聯想の流れが活動し始めるのである。弛緩すると共に、と云ふのが曖昧な云ひ方であるならば、弛緩するためにと云はう。

私の蒐集した云ひ損ひの實例に就いて云へば、ヴントの所謂『音の接觸效果』なるものにだけ言語攪亂を歸せざるを得ないものは殆ど一つも見當らないのである。これもさることながら、殆ど必ず私は、云はうとする話以外の何物かの攪亂的影響を發見するのである。その攪亂する何物かは個々の無意識的思想（それが云ひ損ひに依つて表はれ、また屢々分析の洞察に依つて始めて意識面に引出されて來るのである）である場合もあるが、またそれはもつと一般的な精神的動機として全體の話に反對して向ふものである場合もある。

（一）林檎に嚙みつきながらいやな顏をする私の娘を見て、私は聯句を口づさまうと思つた。

『猿は奇妙な顏をする
殊に林檎を嚙るとき。』

„Der Affe gar possierlich ist,
Zumal wenn er vom Apfel frisst."

ところが、私は Der Apfe……と云ひ始めたのである。これは „Affe"（猿）と „Apfel"（林檎）との汚染（妥協形成）であるらしい、それともまた既に準備されてゐた „Apfel" の豫想とも考へられる。併し、實際の事情をもつと精しく云ふとかうであつた。私は既に一度その暗誦をやつてをつたのだ。

さうして始めての時は別に云ひ損ひはしなかつたのだ。娘はその時他の方に氣をとられて私の云つたのを聽いてゐなかつたので、私は繰返すことが必要になつたのだが、その時に私は間違へたゞけだ。これを繰返すことの上にこの言葉を早く云つてしまひたいとの焦慮も加はつて、それが私の云ひ損ひの動機の一つになつてゐると私は考へざるを得ない。それでこの云ひ損ひは、凝縮の機能をとつてゐる。

（二）　私の娘は『シュレージンガー夫人に手紙を書きます……』„Ich schreibe der Frau Schresinger" と云ふ。そのまゝの名は實はシュレージンガー Schlesinger である。この云ひ損ひは發音を容易にしようとの傾向に職由するのであらう。何となればrを三度も發音したあとでlを發音するのはやり難いからだ。併し私は、この間違ひが私の „Apfe" と „Affe" との間違ひの數分後に起つたものであることを云ひ添へておかねばならない。一體、云ひ損ひなるものは非常に傳染的で、その點名稱忘却と似てゐる。名稱忘却が傳染的であることはメリンガーとマイヤーとも氣をつけてゐる。この精神的傳染に就いては、私は何の理由も與へることが出來ない。

（三）　『妾はタッセンメッシャー Tassenmescher（ポケット・ナイフ）——いやタッシェンメッサー Taschenmesser のやうにはまり込んでゐます』と或る婦人患者は分析取扱の始めに云つたが、このやうに音が

入替りになると云ふのは、これまた發音の困難のためにさうなつたと云ふことが出來よう。云ひ損ひに注意されて、彼女は直ちに答へた。『えゝ、だつて先生は今日「眞劍に」„Ernscht“と仰言つたんですもの。』實際私は彼女の分析を始める時に『今日は一つ眞劍にやりませう』と云つたのであつた。(何となれば、今日で分析も終ることになつてゐたから――。)さうして『眞劍に』„Ernst“を『眞劍に』„Ernscht“と冗談半分に云ひ換へたのであつた。診療の時間中、彼女は幾度でも云ひ損ひをしてゐる。で、私も到頭、それは彼女が私の眞似をしてゐるばかりでなく、何か無意識中にErnstと云ふ語を名前としてこだはる特別の理由があるからだと云つた。(二)

【註】(一) 彼女は妊娠や避妊に關する無意識的思想の影響を受けてゐたことが分つて來た。『ポケットナイフのやうにはまり込んでゐます』と云ふ言葉は、意識的には彼女は不平として云つたのであるが、實は母胎内に於ける子供の位置を記述しようとしたものである。私の云つた『エルンスト』と云ふ言葉は、彼女をしてギインのケルトナー街にある商事會社を想起せしめたのである。この會社は避妊の道具を賣るために始終廣告してゐるので有名である。

(四)『妾は風邪をひいてゐまして、あなでひき(Ase natmen)が――いや、鼻で呼吸が出來ません』と同じ婦人患者はまた別の時に云つた事がある。彼女はどうしてさう云ふ云ひ損ひをしたか、直ぐに分つた。『妾は毎日ハーゼンアウエル街 Hasenauerstrasse で電車に乘りますが、今日早く電車を待つてゐ

る間に、かう云ふことを考へました。妾がフランス人であつたなら、妾はアーゼンアウエル Asenauer と發音するだらう、何故ならばフランス人は發音に際してHを落してしまふからと。』彼女はやがて、自分の知つてゐる若干のフランス人に就いての一聯の回想を試み、遂にいろ〳〵迂廻した道程を經てかう云ふ記憶に到達した。それは彼女が十四歳の少女の時、„Kurmärker und Picarde“ の小曲に於いてピカルデを演じ、その時間違ひだらけのドイツ語を舌喋つたことであつた。彼女の客館にパリからの客人が來たと云ふことが、偶然にも記憶群の全體を喚醒ました。發音の間違ひはこのやうに、全然思ひがけない關係にある無意識的思想に依つて攪亂された結果である。

（五）　これとよく似たのは、或る他の婦人患者の云ひ損ひの機制である。彼女は永らく忘れて居た少時の記憶を想起する最中に自分の記憶力を失つてしまつた。いたづらな、みだらな或る人の手が彼女の肉體の何處の部分を摑んだかを、彼女の記憶が告げて呉れないのである。その事あつて直ぐ後に彼女は或る女の友達を訪れたが、談たま〳〵夏期別莊のことに及んで、彼女の小屋は何處にあるかと訊かれた時、彼女は『山腹のなだらかなところ』(Berglene) と答へる代りに、『山の腰』(Berglende) と答へてしまつた。

（六）　また或る別の婦人患者は、治療時間の濟んだ後に、私が叔父さんはどうしてゐられますかと

訊いたに對し『妾は存じません、妾は叔父には此頃ではたゞ in flagranti（現場に於いて）會ふだけです。』と答へた。その次の日、彼女はまづかう云ひ出した。『妾はほんとにきまりの惡い思ひを致しました、貴方にあんな馬鹿々々しい間違ひを申上げてしまひまして……貴方はさぞ妾が始終外國語を間違へてゐる無教育な奴とお思ひなさつたで御座いませうね。妾は en passant（序ながら）と云ふつもりだつたので御座いますよ。』その當座は我々は彼女が何處からこのやうな間違つて適用された外國語を採つて來たか分らなかつた。ところがその時、やがて彼女は前日の問題の續きとして一つの回想を持出して來た。その回想に於いては in flagranti（現場を）押へられると云ふことが主要な役割を演じたのであつた。で、前日の云ひ損ひは、その當時まだ意識されなかつた記憶に先行したのであつた。

（七）或る他の婦人患者に對して、私は分析の或る個所に於いて、我々が取扱を始めた當時に於いて、彼女が自分の家族を恥ぢ、その父に對して我々にはまだ知られない批難をしたやうに思ふと云はざるを得なかつた。彼女はそんな覺えはないが、まさかそんなことはありさうにないと云つた。併し彼女は自分の家族に就いて、氣をつけながら話しを進めた。『妾の家族にはなるほど一つだけ誰でも氣のつく點がありますよ。うちの人達はみんな貪慾(ガイツ)(Geiz)を——いや精神(ガイスト)(Geist)を持つてゐますと云ふつもりだつたのです。』して見ればこれはやはり彼女が記憶から追出してしまつてゐた批難であ

つたのだ。人間が控へておかうと思ふ丁度その考へが、云ひ損ひになつて押出て來ると云ふことは屢屢起ることである。（メリンガーの報告してゐる、Vorschwein に到達したと云ふ場合とを比較せよ。）たゞ違つてゐるのは、メリンガーの場合の人物は彼が意識してゐる何事かを抑制しようとするに對し、私の婦人患者は抑制せられてゐることを知つてゐないのである、或は彼女が何事かを抑制してゐることを、また何を抑制してゐるかを知つてゐないのだと云ふことも出來よう。

（八）次に擧げる云ひ損ひの實例もまた、故意的抑制にまで辿られねばならない。私はかつて白雲石の中で、旅行家の服裝をした二人の婦人に會つたことがある。私は暫く彼女等について歩いたが、その時我々は旅行生活の樂しさ苦しさに就いて語り合つた。一人の方の婦人はかうして日を送ることはいろ〳〵苦しみのあるものだと云つた。彼女は曰ふ、『本當に晝間陽の照る中を歩き廻つて上衣も下衣も汗みどろにして了ふのは氣持のいゝものでは御座いませんよ。』こゝまで來て彼女は一寸云淀んだが、更にそれに打勝つて言葉を續けた。『併し股引（ホーゼ）(Hose) へ來て、着物を着換へることが出來る時には……』この云ひ損ひを說明するには、別に試驗をして見る必要はないと思ふ。この婦人は明かに、上衣、下衣、股引と全部數へ上げて云ひたいとの考へを持つてゐたのだ。第三の洗濯物を數へ上げることは、不作法であると云ふ理由で抑制したのだが、併し次の、內容的には獨立してゐる文章に於い

て、その抑制せられた言葉は、『家へ(ハウゼ)』(nach Hause) てふこれに似た言葉の出來そこなひとなつて頑張り出て來たのである。

(九)『貴方はもし敷物を買ひたいとお思ひになるなら、マトイス街(ガッセ)のカウフマンの許へお出でなさいまし。あそこも貴方にお薦め出來ると妾は信じてをります。』と或る婦人は云つた。で、私は繰返した。『では、あのマトイスの許で……いや、カウフマンの許でと云ふつもりで……。』私が一つの名前を他の名前の出るべきところに出したと云ふ事は、ぼんやりしてゐたゝめであるやうに見える。婦人の話のために實際私はぼんやりしてはゐたのだ。何となれば、彼女は私の注意を敷物よりももつと重要な、他のものゝ方にそらしてしまつたからである。マトイス街には、實はこの婦人が花嫁となつて行つた家が立つてゐるのである。その家の入口はまた別の街にあつた。ところが今やこの街の名を忘れてゐるので、まわりくどい道を經てこれを意識しなければならなくなつてゐることを、自ら氣付くのである。私が拘泥してゐるこのマトイスと云ふ名は、私が忘れてゐる街の名の代償名であるのだ。この名の方がカウフマンと云ふ名よりはその代償名に適するのである。何となれば、マトイスは必ず人名であるが、カウフマンはさうでない。而も忘れたのはやはりラーデツキー Radetzki と云ふ人名からつけられてゐた町名である。

（十）次の實例は、も少し後に論ずべき『間違ひ』の中に入れてもよいのであるが、こゝに入れることにした。と云ふのは、言葉の代償作用が結果するやうになつたその根原たる音の關係が特に明白であるからである。某の婦人患者が私に夢を語つた。――或る子供が蛇に咬ませて自殺しようと決心した。彼はその決心を遂行した。彼女は子供がその苦闘の内に跳いたり何かするところを眺めてゐた。今や彼女はこの夢に對する晝間の聯結を發見しようとする。彼女は直ちに想起した、昨夜彼女が蛇に咬まれた時の最初の手當に就いて通俗的な講演を聽いたことを。成人と子供とが同時に咬まれたならば、まづ子供の怪我を世話せねばならぬ。彼女はまたその講演者が手當のために如何なる處方を與へたかをも想ひ起した。またその人がどう云ふ種類のに咬まれたかと云ふことも大いに問題になるとも講演者は云つた。こゝで私は口を挿んで彼女に訊いた。――ではその講演者はかう云はなかつたですか、我々の地方にはあまり有毒な種類の蛇はゐない、さうしてどう云ふのが恐るべき種類であるかと。『さうで御座います、講演者は響尾蛇（Klapperschlange）が特に恐ろしいと申しました。』私が笑出したので、彼女は自分が何か間違つた事を云つたのだと氣がついた。彼女は併し今やその名を訂正せずして、自分の云つたことを撤回した。『さうでした、いやその響尾蛇のことは話が出ませんでした。講演者は蝮（Viper）のことを話されたのでした。併しどうして響尾蛇のことなど云ひ出したで御座いま

せうね。』私は彼女の夢の背後に隱れてゐる思想を參考にしてから推察した。蛇に咬ませて自殺することは美しきクレオパトラ(*Kleopatra*)への一つの暗示以外の何物でもない。兩語の音の甚しい類似、Kl…p…r など文字上の一致、語の同じ順序の一致、a に强音あることとの一致などは見落すことは出來ない。響尾蛇(クラッパー)とクレオパトラとの二つの名の間に立派な關係があるために、彼女は判斷を瞬間的に制限せられたのだ。そこで彼女は、響尾蛇に咬まれた時の取扱方に就いてその講演者がボィンに於ける彼の聽衆を敎へたとの主張に於いて何のをかしさも感じなかつたのである。彼女は平常、この蛇が我我の鄕國にはゐない動物であることを、私と同樣よく承知してゐるのである。吾人は彼女が響尾蛇をエヂプトの方へ持つて行つたことはあんまり考へがなさすぎると云つて責めやうとは思はない。何となれば、吾々は一切の非ヨーロッパ的なものを、異鄕的なものをごつちやにする習慣があるからである。現に私自身も、響尾蛇は新世界にのみ居る動物だと云ふ主張を樹てるまでには、一瞬間考へて見なければならなかつたほどである。

なほ立入つた事柄は分析を進めるに從つて段々分つて來た。夢の當人は昨夜始めて、自分の住居の近くに樹てられたストラーセルのアントニウス群を見たのであつた。で、つまりこれが夢の第二の動因であつた。(第一は蛇に咬まれることに就いての講義である。)彼女は夢を見續けて行く内に、一人

の子供を腕に抱いてゐる。この場面は彼にグレーチェンを思はせた。更に聯想を續けて行く內に、彼女は『アリアとメッサリナ』„Arria und Messalina“を追想した。こんなに澤山、演劇中の名前が夢の思想の中に現れると云ふことは、夢の當人が若い時分に女優の職をひそかに志望してゐた事を旣に示してゐるのである。夢の初めに、『或る子供が蛇に咬ませて自殺しようと決心した』とあるのは、彼女が子供の時分にいつかは有名な女優にならうと目論んだことを意味するに外ならない。メッサリナの名からして遂にこの思想の道は分岐して、この夢の本質的な內容へと導いてゐる。最近の或る事件が彼女の心配の種になつてゐるのである。それは、彼女の唯一の弟が或る非アリアンの女 Arierin と身分の違ふ結婚を、不釣合の結婚 Mésalliance をすることである。

（十二）或る全然無難な、つまり我々にはその動機が闡明せられてゐない實例を、こゝに擧げておかう。その實例に依つて我々は一つの明白な機制を知ることが出來るからである。

イタリーを旅行中の一ドイツ人が、自分の損傷したトランクを縛り直すために革紐を求めた。辭書をひいて見ると『革紐』Riemen のイタリー語は Coreggia となつてゐる。この語なら容易に覺えられる、何しろ畫家のコレッギオ Correggio を考へればいゝと彼は考へた。彼はやがて革紐店に行つて„una ribera“と云つた。

彼の記憶中に存するドイツ語をイタリー語を以つて置換へることは彼には一見成功しなかつたやうであるが、併し彼の骨折りは全的に不成功でもなかつたのである。彼は或る畫家の名を覺えてゐなくてはならないことを知つてゐた。で、例のイタリー語に類音の畫家名を想起せずに、ドイツ語のリーメン（Riemen）に近似した他語を拾出した。私はこの實例をこゝで云ひ損ひの場合に出してもよいが、また勿論、名稱忘却の場合に出してもよかつたのだ。

私が本書の第一版のために云ひ損ひのさまぐな經驗を蒐集してゐた時に、まづ自分自身から範を示して、自分の觀察し得る一切の場合を、その内にはあまり印象に殘らぬやうなのをまで、分析に附することにしたのである。それ以來、他の多くの人々が云ひ損ひを蒐集し分析することの樂しい骨折りを試み、さうしてその多くの材料から選擇をすることを私に許したのである。

（十二）或る若い男がその妹に云つた。——Dとは僕は今では全然絶交してゐるのだ。もう挨拶もしない。妹は答へた。——一體血正の Lippschaft（リツプシャフト）は……と。彼女は Sippschaft（シツプシャフト）（氏族）と云ふつもりであつたのだ。併し彼女は、この云ひ損ひの中に二重の意味を緊縮してゐるのである。即ち、彼女の兄はかつてその家族の娘とふざけたことがある。さうしてこの娘が最近に或る眞劍な許されざる情事 Liebschaft（リツブシヤフト）に耽つたと云はれてゐる事と。

（十三）　或る若い男が街上で或る婦人に次のやうな言葉で話しかけた。『何なら、お孃さん、お伴して(begleit-digen)もいゝと思ひますが……。』彼は明らかにかう考へたのだ、彼は喜んで彼女と同伴し(begleiten)たかつたのだが、併しその申出が彼女を迷惑がらせる(beleidigen)ことを恐れたのだ。これ等二つの相互に矛盾する感情が一つの言葉——云ひ損ひにもせよ——となつて表れたところを見ると、この若者の本來の意志は、何れにもせよ、非常に明白なものではなく、また彼のこの意志はこの婦人に對して迷惑らしいものに見えたに相違ないことが分るのである。併し彼が恰もこれを彼女の前に匿さうと試みてゐる間に、彼の無意識はいたづらにも彼の本來の意志を裏切り、かくて彼は併し他方に、その婦人から『えゝ、でも妾など御同伴下さつてもどうなりませう、からかつて(beleidigen)ゐらつしやるんでせう。』との云はゞ月並の挨拶を先取したのであつた。（オットー・ランクの報告）

ステーケル W. Stekel は『ベルリーネル・ターゲブラット』紙の一九〇四年一月四日號に『無意識的告白』の題下に一論を揭げてゐるが、そこから若干の實例を取出すことが出來る。

（十四）『次の實例に依つて私の無意識的思想中に不愉快な一片のある事が明らかになつた。私は前以て斷つておくが、醫師としての私の本性中に於いて私はかつて自分の利得の事を考へず、常に患者のためをのみ眼中においてゐるのである。實際それは自明の事である。私は或る婦人患者の傍に行つ

た。この患者は非常に重病の後で恢復期に入つたので、私が代診を助けて世話してゐたのだ。我々は日夜隨分苦しい目を見た。私は彼女が快くなつたのを見て嬉しかつた。で、アブバジア(一)に滯留して靜養することの樂しさを語り、さうしてその時、次のやうな言葉を用ゐた。「貴女がどうぞ、早くこの寢臺から去られないやうになつたら――。」明かにこれが出て來た基はこの裕福な病人をも少し長く取扱つておきたいとの無意識の利己的動機にある。私の覺醒意識は全然知らないところの、さうして私は不快を以て拒否するであらうところの願望にある。』

【註】(1) Abbazia, 南米の靜養地。(記者)

(十五) 他の一例(ステーケル)『私の家內が某フランス女を午後に來て子供の世話して吳れるやうに賴んだ。相互に條件がきまつて後に、妻は契約書を置いて行つて貰ひたいと云つた。フランス女はそれを持つて歸らして貰ひたいと賴んだが、その時彼女はかう云つた。「妾は午後の分を、いや、午前の分を搜してゐるのです。」„Je cherche encore pour les après-midis, pardon, pour les avant-midis". 明らかに彼女は他の方面を物色してもつとよい條件の家を搜したいと考へてゐたのだ、さうしてそれを彼女は實行した。』

(十六) (ステーケル博士)『私は或る婦人に話して聽かせる事になつてゐた。抑々この事を依賴し

て來た彼女の夫と云ふ人が、その時扉の外に立つて聞いてゐた。云つて聞かせたことは十分な印象を與へたことがあり〳〵と見えたが、それが終つて後に私は云つた。「これでおしまひにしておきます。××君」,Küss', die Hand, gnädiger Herr!' と云つてしまつたので、分析の經驗ある人には、私の言葉は扉の外の夫君に向けて彼のために云つたものであることが分つてしまつた。

（十七）ステーケル博士は自分自身に就いてかう報告してゐる。彼はトリイストから來てゐる二人の患者を取扱つてゐたが、その二人を始終取違へて挨拶してゐた。アスコーリ Askoli に對しては『お早う、ペローニ Peloni 君』と云ひ、ペローニに對しては『お早う、アスコーリ君』と云つてゐた。始めの程は彼はこの間違ひに深い動機があるとは思はず、兩人の間に相似の點が多いからだと思つてゐた。併し彼はこれが一種の見得を張つてゐることであるのを容易に自認することが出來た。即ち、彼は自分のイタリー人の患者の何れもに對し、自分の醫療を求めに來るイタリー人は必ずしも貴君一人に非ずと云ふことを知らせたかつたのだと云ふことを。

（十八）ステーケル博士自身は或る混亂してゐる總會の席で云つた。――我々は今や議事日程の第四項に論争（ストライテン）Streiten（到達（シュライテン）schreiten）いたします。

（十九）或る教授が就職講演の際に云つた。――『私は自分の非常に優秀な先行者たちの功績を云

云する氣(ゲナイグト)が geneigt（器(ゲアイグネツト)で geeignet）ありません。』

（二十）　ステーケル博士がバゼドウ病患者と睨んだ或る婦人に云つた。――『貴女はお妹さんよりは甲狀腺種(クロツプ) kropf（首(コツプ) kopf）だけ大きい。』

（二十一）　ステーケル博士報告。――或る人が二人の友人の關係を說明しようと思つた。その內の一人はユダヤ人である事を明かにしておかなければならなかつた。彼は云つた、二人は宛もカストール Kastor とポラーク Pollak とのやうに生活したと。これは決して洒落ではなかつたのだ。話した當人は自分でもその間違ひに氣付かず、私に注意されて始めて知つたのである。

（二十二）　時として云ひ損ひは一つのくだくだしい說明の代りとなる。自家の家政を執つてゐる或る若い婦人が、病める夫の事を私に語つた。夫は身體によからうから節食しようかと醫師に尋ねに行つたが、併し醫師はそれには及ばぬと云つた。『宅は何でも妾の（飲み喰ひしたいと）思ふものを飲み喰してよいので御座います。』

ライク Theodor Reik の次の二つの實例（『國際精神分析學雜誌』三號、一九一五年）は、云ひ表はし得るよりも抑制しなければならない方が多いために特に云ひ損ひの起り易いやうな立場から生じたものである。

（二十三）　最近に夫を喪ふた或る若い婦人に或る若い紳士が弔みを述べ、さうして更に云ひ添へた。――『何しろお子供衆にすつかりかまめ（widwen,—widmen「身を捧げる」「かまける」の誤り）なされば、それが慰めになりますよ。』と。こゝに抑壓せられてゐる思想は、別種の慰めのことを暗示してゐるのである。つまり、若い綺麗なやもめ（Witwe）は間もなく新しい性的喜びを味ふやうになるであらうと。

（二十四）　同じ紳士が同じ未亡人と或る夜會に於いて、復活祭に際してベルリンに催さるゝ大演藝會に就いて話し合つてゐた時に訊いた。――『今日ヴェルトハイムでの窓飾り Auslage を御覧になりましたか。すつかり抜衣紋 dekolletieren になつてゐます。』　彼は美しい婦人の抜衣紋に就いての自分の驚嘆を露骨に云ひ表はすことは出來ないので、今や彼は品物の店飾りのデコラチョン Decoration を抜衣紋のデコレターゲ Dekolletage と置換へ、それと共にまた店飾り Auslage と云ふ言葉に無意識的に二重の意味を含ませる事に依つて、その禁ぜられた思想を表白してしまつたのである。

かう云ふ條件はまた或る種の觀察にも宛てはまる。それに就いてはハンス・ザックス博士が次の如き詳細な調査を與へようと試みてゐる。――

（二十五）『某婦人が私に或る共通の知人の事を語つた。彼は彼女がこの前會つた時には、例に依つ

て優雅な服裝をしてゐたが、とりわけ非常に見事な赤の半靴を穿いてゐたさうである。一體何處で會つたのかと訊いたに對し、彼女は云つた。「あの人は妾の家の扉を鳴らされましたので、私は引下された巻日防け(ルーロー)の間から覗いて見たのです。併し妾は扉を開けもしなかつたし、また人の氣配も見せませんでした。何故ならば、妾は自分がもうこの町にゐることをあの方に知られたくなかつたからです。」私は聽いてゐて一人で考へた、彼女は今私に何かを匿したな、どうやら彼女は一人でなく、また訪問を受けるべく化粧室に入つてゐなかつたから扉を開けなかつたのではないかと疑つた。で、私はやゝ意地惡く訊いた。「では、貴女はその閉まつた日防け(ひよ)の間から彼の家靴(ハウスシウエ)を――彼の半靴(ハルブシウエ)を眺めて感心することが出來たのですね。」彼女の平常着(ハウスクライド)(Hauskleid)に就いての表現を禁壓せられてゐる思想が、「家靴(ハウスシウエ)」(Hausschuhe)に於いて表面へ出て來たのである。「半(ハルブ)」(Halb)と云ふ語はそれのみならず、また正にこの語に於いて「貴女は半分しか本當のことを言はない、さうして半分しか着物を着てゐなかつたことを祕してゐるのです」と云ふ禁止せられた答への中核が存するからして避けようとせられたものである。またこの間違ひは、直ぐ前に件の紳士の結婚生活に就いて、彼の「家庭の幸福」„häusliches Glück“に就いて、我々が語り合つた事のためにも必要になつたのである。この事は多分彼の人物への轉位を決定するに與つたものであらう。最後に私は、多分私の嫉妬がこの優雅な紳士に家

靴を穿かせて街頭に立たしめたのであることを告白しなければならない。實は私自身も極最近に赤の半靴を買つたのであるが、それは決して「非常に見事な」ものではなかつたのである。』

現在のやうな戰爭時代には幾つかの云ひ損ひが生ずる。それを理解することは大して困難ではない。

（二十六）『貴女の御子息はどの武器についてゐられますか』と或る婦人は尋ねられて、彼女は答へた、『第四十二殺人（メルデルン）Mördern（臼砲（メルゼルン）Mörsern）に居ます。』と。

（二十七）ヘンリック・ハイマン中尉は戰場からかう書き送つた。『私は少しの間、報道電信手を代表するために、或る面白くてたまらぬ書物を讀むことから引離される事になつた。それの反應は火砲屯所の電導試驗にかう表れて來た。――管理正確、休め（Ruhe）。正しくは、管理正確、終り（Schluss）とすべきであつたのだ。折角讀みかけてゐるところを妨げられたゝめの腹立たしさから、私の間違ひは説明することが出來る。』（『國際精神分析學雜誌』四號、一九一六―一七年）

（二十八）或る曹長が部下の下士たちに、自分等の宛名を詳しく家の方へ知らせておくよう、死物（Gespeckstücke, 荷物 Gepäckstücke の誤りか）が失くなつては困るからと云ひ渡した。

（二十九）次に擧げた、非常に美事な、さうしてその深い悲哀の背景に依つて意味深長な實例は、ツェーセル Czeszer 博士の報告に負ふものである。博士は戰時に於いて中立のスヰッツルに滯在して

ゐた間にこの觀察を得、さうしてこれを徹底的に分析したものである。私は彼の報告に多少の省略を施して玆に再錄しておく。

『唐突ながら私はこゝに、O市に於けるMN教授殿がさき頃の夏期學期中に述べられた感情心理に關する講演中に陷られた「云ひ損ひ」の一つの場合を御報告申上げようと思ひます。併し豫めお斷りしておかねばならない事は、この大學の講堂に於けるこの講演が、フランスの捕虜の非常な熱望の下に、また聯合國として味方の感を持つフランス側スキッツル人から殆ど成立つてゐるところの學生團の非常な熱望の下に、催されたと云ふことであります。O市に於いては、フランス本國に於けると同樣、boche（ボッシュ）と云ふ語が今や一般的となり專らドイツ人を形容するために用ひられました。併し公の報告、講演、その他それに類した場合には、高級の官吏、教授、その他責任ある地位の人々は、中立的の立場からしてそのやうな不吉な語を避けようと努めました。

N教授は今や正に、感情の實際的意義を論ぜむとし、それ自身としては興味なき筋肉勞働に快感を與へ、かくてそれを一層强烈なものとするように或る感情を意識的に搾り出して來ることの一實例を引用しようと目論んでゐました。そこで教授は、勿論フランス語で、當時この地の諸新聞が、全部ドイツ語の紙面に於いては掲載することを避けてゐたところの或るドイツの學校長の話を物語つたので

す。その學校長は學生に校庭で仕事をさせる時、强盛に勞働させるために、彼等に土くれをフランス人の頭蓋骨だと思つて打込めと敎へたのでした。講義の際、この話をするに當つて、N教授はドイツ人の話の出る度に、全く正しく Allmand（アルマン） と云つて boche（ボッシュ） とは云はなかつた。併しこの話のところへ來ると、彼は學校長の言葉を次のやうに云つたのです。——Imaginez vous, qu' en chaque moche vous écrasez le crâne d'un Francais. つまり motte（モット） の代りに moche（モッシュ） と云つたのです。

この正確な學者がこの話の始めから平素の口癖を出さぬやう、またそれを試みたりしないやう、聯合國側の布告に依つて文書の形で禁止されてゐる言葉を、大學講堂の壇上から口外するやうなことがあつてはならぬと如何に自分を誡めてゐたかは、我々には明かに見えるでないでせうか。さうして彼が幸にして最後の場合を正確に ,instititeur allemand' と云ひ終つて心中でほつとしていざ囚はれぬ終りへと急いだ丁度その瞬間に、骨折つて抑へてゐた單語が motte と云ふ語と類音なるためにそれに固着して出て來て、甚だ困つたことになつたのです。政治的無策に陷つてはならぬとの恐れや、この云ひ慣はした、且つ人々の期待してゐる言葉を使ふことの喜びを抑壓されてゐることや、更にまた生れつき共和的に民主的に出來てゐる者が自由なる意思表示に於けるあらゆる强迫に對する不興などが、この實例を正確に傳へたいとの主要意圖と撞着したのであります。その撞着的傾向は話者にも分つて

ゐたのです。で、彼は云ひ損ひの直前にその傾向のことを考へたのだ、と假定せざるを得ないのであります。

N教授は自分の云ひ損ひを氣付かなかつた。少くとも云ひ直さうとはしなかつた。大抵の場合、人はさう云ふ風に一人でにするものであるが――。ところがこの誤りは多くのフランスの聽衆に依つて眞の滿足を以て受入れられ、宛然一の故意的な語呂のやうな效果を及ぼしたのでした。併し私はこの一見無難な出來事を純正に內的の亢奮を以て辿つたのです。何となれば、精神分析法から云つて面白いこの問題を教授に向つて提示することを、私がさま〴〵な目前の理由から差控へねばならなかつたとしても、併しこの云ひ損ひは、誤謬が何に依つて決定されるかに就いての、また云ひ損ひと機智洒落との間の類似及び關係に就いての貴殿の說の正しいことを立派に證明するものだと私に思はれたからであります。』

（三十）戰時の悲慘な印象の下にあつて、次のやうな云ひ損ひが起つた。これは歸國したオーストリーの一士官が報告したものである。

『私がイタリーの戰時捕虜となつてゐた幾月かの間、我々二百人の士官どもは或る狹い山莊に置かれてゐた。その時に我々の仲間の一人が流行性感冒のために死んだ。この出來事のために與へられた

印象は、當然甚だ深刻なものであつた。何となれば、當時の我々の境遇から云つても、醫者のゐない點から云つても、別に何の施す術のない點から云つても、惡疫の蔓延は火を見るよりも明かであつたからだ。――我々は死者を窖に横たへておいたのだ。夕方になつて、私は一友と共に家の周りを巡回する時に、我々兩人は屍骸を見ようぢやないかと云つた。私が先づその窖に這入つて行つて見ると、そこの光景は私を非常に驚かせた。何となれば、私は柩がそんなに入口に近く据えてあるとは思はなかつたし、またゆらめく蠟燭の光に依つて氣味惡くなつてゐる顏をそんなに近く見ようとは豫期しなかつたからである。併しその忘れ難い影像を心に擔ひつゝも我々はその時巡回を續けたのであつた。滿月の光りの中にゆらぐ遊園や、明かに照らし出された牧場や、彼方に輕やかに垂れてゐる夜霧などの眺められる地點まで來た時、私はそれ等と聯結してゐる想像に表現を與へて、似合の松の木の並んでゐる下あたりで妖精の輪舞してゐるところを見たのである。

翌日の午後、我々は死んだ友を埋葬したのである。我々の牢獄から近所の小さな場所の墓地までの道は、我々にとつては一樣に痛ましく屈辱的であつた。何となれば、生意氣な騷々しい靑二才や、侮蔑的な冷嘲的な衆愚や、粗野な喧噪者どもが、この時だとばかりに、彼等の好奇心と憎惡との混じた感情を表現したからである。このやうな武裝解除の狀態に於いてさへも不快にならざるを得ないこの

感覺、このやうな非禮暴慢に對する嫌惡、それ等は夕方まで私の氣分を苦々しく支配してゐた。前日と同じ時刻に同じ友に伴はれて、我々はまた今度は家の周りの砂利道を歩いて行つた。さうして屍骸がその背後に横たへてあつたところの窖の格子戸の前を過ぎようとして、私は屍骸を見た時の印象を想ひ出した。昨日同樣滿月の光りに照らし出された遊園の見えるところまで來ると、私は立停つて友に云つた。――「一つ墓(グラーブ)(Grab)――草(グラース)(Grass)に座つて夜曲を沈む(ジンケン)(sinken)でもよからうね。」二番目の云ひ損ひをして私は始めて氣がついた。最初の方は私も訂正してゐるが、勿論間違ひの意味は意識はしなかつた。今や私は熟考してから並べて見た。『墓の中に……沈む』ins Grab ―― sinken! 忽ち次のやうなさま〴〵な影像が浮んで來た。月光中に舞踏し浮遊する妖精の群。柩に納まつた友、その印象の喚起。埋葬の個々の場面。嫌惡の感と悲嘆の感。突發した疫病に關する個々の會話の記憶、大抵の士官が恐怖の表情など。後になつて私はこの日が自分の父の命日に當つてゐることを想ひ出した。この事は平素甚だ日付の覺えの惡い自分としては珍らしいことであつた。

その後なほ熟考して見てから云ふことが明かになつた。兩夜ともに外的條件に於いて一致してゐること、ほゞ同時刻、月明、同一場所、竝びに同一同伴者。私は、惡疫の蔓延の恐れに就いて論じてゐた時に感じた不快を思ひ出した。併しまた同時に、私が恐怖に襲はれないやうに內的に禁壓したこと

も想ひ起す。また「我々は墓の中に沈んでもよからうね。」„Wir könnten ins Grab sinken" と云ふ文は、たゞ最初に „Gras"（草）を „Grab"（墓）と誤つたのは明白ならずして起つたのだが、それがまた „singen"（歌ふ）を „sinken"（沈む）に間違へたと云ふ第二の誤りに依つて引續かれ、かくて抑壓されたコムプレックスに適當な效果を保障したのだと云ふことが分つた時に、その意味が意識されたのである。

更に私は云ひ添へておくが、私は當時甚だ氣になる夢の事で心配してゐたのだ。その夢の中で私は自分に甚だ近い繫累の一人が繰返し〳〵病氣に罹り、一度の如きは死んでしまつたところを見たのであつた。私は自分が捕虜になる極少し前に、この惡疫が丁度この繫累者のゐる故鄉に於いて特別な激しさを以て猖獗してゐるとの報告に接し、その繫累者に私の痛切な危懼を表白して遣つた。二三ケ月經つて、丁度只今述べて來た出來事のあつた二週間前に、その繫累者が傳染病の犧牲となつたとの報道を受取つたのであつた。』

（三十一）　次に揭げた云ひ損ひの實例は、醫師の運命たる苦しい葛藤の一つを電光の如く照らし出す。どう見ても助かりさうもないが、併し診斷がまだ確定しない或る男が結節の解除を期待してギィンへと遣つて來た。さうして有名な醫者になつてゐる舊友に取扱を依囑したが、その舊友は一應斷つたが遂に引受けることになつた。病人は或る病院に入る筈になつてをり、件の醫師は『ヘラ』„Hera"

療養院を薦めた。あれは併し或る一定の目的のための病院（産院）だらうと病人は異議を申立てた。いや〳〵、と醫師はムキになつて云つた、『ヘラ』に於いてはあらゆる病人を殺（ウムブリンゲン）す（umbringen）――いや、收容（ウンタブリンゲン）する（unterbringen）ことが出來ると云ふのだよ。彼はやがて彼自身の云ひ損ひの解釋に對して激しく抗爭した。『まさか僕が君に對して敵意を抱いてゐるとも君は信ずまいね。』十五分の後に、彼は自分に跟いて出て來た病人付添の婦人に向つて云つた。『僕にもどうも分りません、また何か施すべきことがあるとも信じません。併し已むを得ない時には適度のモルヒネを服ませることもよろしからうと思ひます。さうすれば樂になりますよ。』彼の友は彼がもうこれ以上施すべき術がなくなつたときまつた時には藥品を以て自分の苦痛を短くすることの條件を彼に許してゐたのだ。で、その醫師は實際上自分の友を殺（ウムブリンゲン）すことの役目を引受けたことになつてゐたのだ。

（三十二）こゝに一つ誠に教へられるところ多き云ひ損ひの實例がある。これは私に報告してくれた人の云ふところに依ると二十年ばかりも前の事ださうだが、私はこれを割愛するには忍びないのである。或る婦人が集會の席で話した。言葉そのものが非常な情熱と多くの祕密な感情の抑壓の下に出て來るのであつた。「さうですわ、女は男の氣に入るためには美しくなければなりません。男はその點ずつといゝですわね。男は五本の眞直な手脚があれば、それだけでよいのですから！」この實例は凝

縮と汚染とに由る云ひ損ひ（八五頁參照）の內奧の機制を誠によく呈露するものである。こゝには二つの同じやうな云ひ表はし方の混融があることは明かである。

男は四本の眞直な手脚がありさへすれば、

男は五つの感官が揃つてさへをれば、

或は、併し、gerade（ゲラーデ）（眞直な、正しい）と云ふのが二つの云ひ表はし方の共通要素であるかも知れない。もしさうならばかうなる。

男は手脚が眞直（ゲラーデ）でありさへすれば、

五つが揃つて正しく（ゲラーデ）ありさへすれば、

これ等二つの云ひ表し方――即ち五つの感官との云ひ表し方と眞直な五本との云ひ表し方と――が相働き合つてこの眞直な手脚に就いての文章中に於いて、先づ一つの數字を擧げ次いで意味深長な五が當然な四の代りに出て來たのだと云ふことは確かのやうである。併しかゝる混融は、もしこの誤りから結果した形に於いて面白い意味を表はさなかつたら、もしそれが婦人として露骨には云ひ表し難いやうな皮肉な眞理を表現しなかつたならば、かく美事に出て來なかつたに相違ない。――最後に、注意を促しておかざるを得ないことは、この婦人の云つた事はその言葉の意義內容から見て、愉快な

云ひ損ひと同様、立派な機智(洒落)になつてゐると云ふことだ。それはたゞ彼女がそれ等の言葉を意識的に企てゝ云つたか、或は無意識的に企てゝ云つたかと云ふ事に依存してゐるのだ。我々の場合に於いては、話した婦人の態度から云ふと到底意識的に企てた云ひ損ひとは思へない。だから機智(洒落)であることにはならない。』

云ひ損ひが機智に近似することの甚しさはオットー・ランク O. Rank に依つて報告せられてゐる場合を見れば分る。その場合に於いて云ひ損つた本人は遂に機智の如くそれで吹き出してしまつたのである。

(三十三)『或る若い結婚したばかりの男があつて、彼の新妻は少女らしい外貌の失はれることを恐れてあまりに屢々性交することを不承不承に許した。その新郎が、後には彼にとつても彼の妻にとつても甚だ愉快となつた話を私に語り聞かせた。――彼が妻の節制提案を又もや破却した一夜の後、彼は朝になつて彼等の共通の寢室に於いて顏を剃り、その時まだやすんでゐた妻の白粉刷毛(Puderquaste)が夜の小箱の上に載つてゐるのを、いつもの通り便宜上、利用することにした。皮膚の色光澤を極端に氣にする妻君はこれを既に幾度となく斷つたのであつた。で、彼女はそのために焦立つて彼に云つた。『また貴方は貴方の刷毛で妾に粉をふりかけるの!』

彼女は『貴方はまた妾の刷毛で粉をふりかけるの！』と云ふつもりであつたのだが、男が笑ひ出したので、彼女は初めて自分の云ひ損ひに氣がつき、自分でも可笑しくなつて吹き出してしまつた。(Pudern「粉をふりかける」はヰィンの人々には性交の意として通じてゐる。さうして刷毛は性器の象徴であることは殆ど疑ふ餘地がない。)』(國際精神分析學雜誌、一九一三年、一卷)

(三十四)　次の如き場合に於いては機智(洒落)に意圖あることが考へられよう。(ストルファーA. J. Storfer, 報告。)

どうやら精神的な起源のものらしい疾患に惱んでゐたB夫人が、精神分析者のXに相談して見てはどうかと幾度も注意を受けてゐた。彼女はそれをいつも、さう云ふ治療は正しいものではない、何でも性的な方面に持つて行くからと云つて斷つてゐた。遂に、彼女はその注意に從ふ氣になつて、尋ねた。――『ぢやア、そのX先生は何時平凡(ordinärt)(治療 ordiniert の云ひ誤り)なさるの？』

機智(洒落)と云ひ損ひとの間に關係あることは、云ひ損ひが屢々云ひ縮めに外ならぬ事に依つて證明がつく。――

(三十五)　或る若い娘が學校を廢めて後、時世の潮流を斟酌して醫學の研究に記名した。一學期經つや經たずの後に、彼女は醫學を化學と取換へた。このやうに始終變つてゐることに就いて、彼女は

一年ほど經つて後に、かう云ふ風に語つた。――妾は概して解剖の時は可怖(こわ)くはないのですが、併しかつて屍體の指から釘を拔かねばならなかつた時に、すつかり――化學への興味を失つてしまつたのです。

(三十六) こゝにも一つ云ひ損ひの場合を並べておくが、それの解釋は大して技術を必要としない。『教授は解剖に於いて內臟學上一般に非常に難かしい部とされてゐる鼻腔の說明のために苦心してゐた。自分の說明がよく呑込めたかと彼が尋ねた時、聽者たちは大抵揃つて「分りました」と答へた。それに對して、評判の自己意識の强い教授はかう云つた。――どうだかね、だつて鼻腔の事の分るのは廣いヰインにも一指を以て、いや失禮、十指を以て數へるほどしかないと云ふつもりだつたのだ。』

(三十七) 同じ解剖學者はまた別の時にかう云つた。――『女性器に對しては、我々はいくら誘(フェルズッ)惑(フンゲン)(Versuchungen)して見ても、いや失禮、試驗(フェルズッヘ)(Versuche)して見ても……。』

(三十八) ヰインのロビツエック博士 Dr. Alf. Robitsek は、或る古代フランス學者の觀察した云ひ損ひの二つの場合を私に知らせてくれた。それ等を私は原文のまゝにこゝに掲げるであらう。Brantôme (1527—1614) Vies des Dames galantes, Discours second;.. Si ay-je cogneu une très belle et honneste dame de par le monde, qui, devisant avec un honneste gentilhomme de la cour des affaires de la guerre

durant ces civiles, elle luy dit ;„ J' ay ouy dire que le roy a faict rompre tous les c……de ce pays là, Elle vouloit dire le ponts. Pensez que, venant de coucher d' avec son mary, ou songeant à son amant. elle avoit encor ce nom frais en la bouche ;et le gentilhomme s'en eschauffer en amours d'elle pour ce mot.‘

„Une autre dame que j'ai cogneue, entretenant une autre grand dame plus qu' elle, et luy louant et exaltant ses beautez, elle luy dit après ; Non, madame, ce que je vous en dis': ce nést point pour vous *adulterer*‘; voulant dire *aduler*, comme elle le rhabilla ainsi ; pensez qu' elle songeoit à adultérer. “

『又私（ブラントーム）は內亂當時戰時朝廷の非常に美しい社交的の官女を知つてゐた。其の女は或る一人の男にかう話した。「國王はその國の c （c は多分 cocu 卽ち姦婦の夫と云ふ意味ならむと或るフランス人の說）を殺（破壞）させたと云ふ噂を聞いてゐます」と。彼女は橋（の破壞）と云はうとしてゐたのである。思ふに自分の夫と同衾して來たばかりか、それとも自分の愛人の事を考へてゐたのでこの名詞（cocu）がまだ生々しく彼女の口先に殘つてゐたのである。そして紳士はこの言葉で彼女を愛する（姦婦の夫を殺すと云ふので間男たるこの紳士は喜ぶ筈）やうになつた。』

『私の知つてゐるも一人の婦人は自分より身分の高い婦人と話をしてゐたが、その婦人の美を讃美

して彼女にかう云つた。――「いえ、妾が貴女に申上げたことは貴女を僞造（adutérer）するためではありません」と。あとで彼女が云ひ直したやうに彼女は「貴女に諂ふ（aduler）ためではありません」と云はうとしてゐたのである。恐らくこの際彼女は姦通（l' adultère）の事を考へてゐたのであらう。』（以上意譯）

（三十九）云ひ損ひに依つて性的の二義を示すことに就いては勿論またもつと近代の實例がある。F夫人は或る語學課程の最初の時間に就いて物語つた。――『全く面白いことに、先生は親切な、若い英國人でした。先生は丁度最初の時間に、妾に寧ろ個人教授を施したいと云ふ事を悟らせるために寛衣（ブルーゼ）（Bluse）を、いや花（ブルーメ）（Blume）を妾に呉れました。』（ストルファー報告。）

私は神經症狀の消散及び除去のために精神療法上の手續きをしてゐる内に、患者の偶然的發言や思付きからしてその思想内容を私は屢々發見することになるのである。それ等の思想内容は如何に匿さうとしても、さまぐ\な形で思はず馬脚を露はすものである。かくて云ひ損ひは屢々最も價値のある務めを盡すものであつて、それは私が何人もこれを見ては納得せざるを得ない程な、而も他方に最も特殊な實例に就いて證明することが出來ると思ふ。例へば患者が自分の叔母の事を話しつゝ、後にその誤りを氣付かずして彼女の事を『私の母』と呼ぶ。或は、夫の事を『兄さん』と呼ぶ。かくの如く

にして私は、彼等がそれ等の人物を母や兄と『同一化』してゐる事に氣がつくのである。彼等がそれ等の人物を彼等の感情生活に對しては同じ型の繰返しを意味するところの同じ範疇内に置いてゐる事を知るのである。また、二十歳の或る若い男が私の診療時間に私の前に現れて次のやうに云つたことがある。――『私は先生に御治療願ひましたＮＮの父で御座います――いや、弟で御座いますと申すつもりでした。實際、彼は私よりは四つも年上で御座います。』と。この云ひ損ひに依つて彼が、兄同樣自分も父の缺點のために病氣になつたのだとのことを云ひ表はしたかつたのだと云ふことが私には分る。兄同樣自分も治療を要するが、併し分析治療を最も必要とするものは父であると云ひたかつたのだ。また他の場合には、異常な言葉の配列が、强ひて表はした云ひ方がなされた。それ等に於いては抑壓された思想が患者の他の動機の話に關與してゐることが明かに分るのである。

以上のやうな微妙な話し違ひとても、もつと單純なのと同樣、云ひ損ひの内に包含せしめることが出來るが、それ等の何れに於いても私は、その云ひ損ひの起源を決定するものは語音の接觸效果ではなくて、云はうとする話以外の思想である事を知るのである。語音が相互に影響し合つて變化を生ずることに就いての法則を私は疑はうとは思はない。併したゞそれのみのために話しの正しい運びが亂されるのだとは私には考へられない。私が細かく研究し洞察した實例に於いては、それ等はたゞ豫め

形成せられた機制を表はすのみであつて、それが一つの一層遥かな心理的動機に依つて便宜的に利用せられてゐるのである。併しながら、この一層遥かな心理的動機はこれ等語音關係の勢力分野には交渉を持たぬのである。云ひ損ひに依つて生ずる多くの代償語に於いては、そのやうな語音上の法則は存しないのである。この點に於いては私は全然ヴントに一致するものである。ヴントもまた私と同じく、云ひ損ひの基く條件は複雜であつて、語音の接觸效果よりも遥か以上に出づると論じてゐる。

ヴントの所謂『一層遥かなる心理的勢力』を確實なものと認めるにしても、他方に、話しを急いでゐて然も注意が多少他にそれてゐる場合には、云ひ損ひの條件はメリンガー・マイヤー方則だけで十分であることを私は承知してゐる。併し彼等兩家に依つて蒐集せられた材料の內の或るものに於いては、もつと複雜した解決を下す方が一層眞實であるものがある。私は前にも擧げた場合を玆に持出して見る。(八五頁參照)

Es war mir auf der Schwest……

Brust so schwer.

この場合、價値の對等な Bru が Schwe を前音として前へ押出したのだと云ふやうな簡單なことでよいであらうか。Schwe なる音は殊に或る一つの特別な關係に依つてこのやうに前方へ押出されるや

うになつたのだと云ふことは、殆ど否むべくもない。して見れば、これは Schwester（姉妹）——Bruder（兄弟）、又は Brust der Schwester（姉妹の乳房）等の聯想に相違なく、それがために別の思想圏内に導いて行かれたのである。この背景となつてゐる見えざる力が當然ならば格別の事もない Schwe に援助を與へて、このやうな云ひ損ひとなつて表はれて來たのだ。

他の云ひ損ひに對しては、みだらな言葉や意味に觸れることが本來の原因であると云ふことが出來る。單語や成句をわざと變へたり歪めたりすることは卑俗な人々の屢々好んで行ふところであるが、その目的たるや何でもなさゝうな言葉を用ひてみだらなことを思ひ出させるにあるのだ。で、このやうな惡戯はあまり度々あることで、もしわざとらしくなく、またその意なくして出た場合には別に驚きもしないほどである。Eischeisweibchen が Eiweissscheibchen（蛋白小圓板）の代りに出、Apopos Fritz が Apropos の代りに出、Lokuskapital が Lokuskapitäl の代りに出るなどの諸例は、更にまた聖マグダレナの Alabusterbachse（Alabusterbüchse 石膏箱）の如きも多分、恐らくこの範疇に屬するのである。(1)——„Ich fordere Sie auf, auf das Wohl unseres Chefs aufzustossen,“（『我等の上様の幸福を蹴飛してくれるやうにたのむ。』）とは、意圖的戲翻詩文（パロディー）の後響としての非意圖的の戲翻詩文以外の何物でもあり得ない。儀式の時にこの演說者がこのやうな云ひ損ひを捧げたその上様で私があつたならば、勝

誇つてゐる皇帝の兵士等に皇帝への内的反抗を嘲笑の歌で大聲に表白させたとは何とローマ人等は利口な者どもだらうと私は考へたでもあらう。――メリンガーは自分自身のことをかう語つてゐる。彼はかつて或る集會の最年長者に對して隔意なき尊敬として „Senex!" 又は „altes Senex!" と云ふ筈のところを、„Prost, Senex, altes!" と云つてしまつた。彼は自らこの云ひ損ひのことを語つてゐる。（五〇頁）。我々としては、これは „Altes!" が „alter Esel" （老驢馬、老耄者）と云ふ嘲罵の言に似てゐるものだから多分かうした云ひ損ひをしたものだと解釋することが出來る。老人に對する畏敬の念（即ち、幼時への退行だ、父に對する感情だ）を傷けたので、大きな内的懲罰が加へられたのだ。

【註】（一）私の扱つてゐる婦人患者の内の一人は症狀としての云ひ損ひが非常に永く續いて、urinieren（小便する）を ruinieren（廢滅する）で代用するやうな子供の戲談にまで退行してゐるのであつた。――云ひ損ひの狡計に依つて非禮な言葉や許されざる言葉を自由に用ゐようとの試みは、『過度補償的傾向のある』不全行爲に關するアブラハムの觀察の内にもある。（國際精神分析學雜誌 八巻、一九二二年。）個有名詞の最初の綴音を吃音のために繰返す傾向をいさゝか有する或る婦人患者は、Protagoras を Protragoras と變へた。その少し前に彼女は Alexandros の代りに――A―alexandros と云つたのであつた。彼女は子供の時分に a や po の如き始まりの綴音を繰返すと云ふ惡戲を好んでやつてゐたことが段々に分つて來た。から云ふ惡戲をしてゐると、子供は段々と吃音者になつて行く

ことが稀ではない。プロタゴラスの名前に就いては、彼女は最初の綴音中の r を逸して Po—potagoras と云ふ危險のあることを今や感付いたのである。ところが、それに對する防禦として彼女はこの r を痙攣的に摑へておき、更に餘分のみを第二綴音に押込んだのである。同じやうな風に、彼女はまた他の場合に、Parterre,（庭園）Kondolenz（哀悼）の二語を、Partrerre, Kodolenz と歪めてしまつた。それは彼女の聯想中に近く相隣接してゐるところの Pater（父）と Kondom を廻避するためである。またアブラハムの他の患者は、Angina の代りにいつも Angora と云ふ傾向を示した。それはどうやら Angina を云ひ損つて Vagina（膣）と間違へることを虞れてゐるためであらしい。このやうに、これ等の云ひ損ひは歪めの傾向の代りに防ぎの傾向が上位を占めてゐるために生ずるものであつて、アブラハムはこれ等の現象が强迫神經症に於ける症狀構成と甚だ類似してゐると云つてゐるが、それは至當のことゝ思はれる。

願はくは讀者諸氏は、それだけでは何とも證明の仕樣のないこれ等の解釋と、私が自分で蒐集し自分で分析證明した實例との間の價値の區別を忘れないで頂きたい。併し、一見單純な云ひ損ひの場合も、有意的關係以外に、抑壓されてゐる觀念に依る攪亂のためにも半ばは生ずるのだとの考へをなほも私が心中潛かに棄てないとするならば、さう云ふ考への方に私を誘ふものはメリンガーの甚だ尊敬に價する言葉である。メリンガーの曰く、何人も自分で云ひ損ひをしようと思ふものはないことは注意すべきであると。君は云ひ損ひをしたと他人から云はれて侮辱を感ずる甚だ謙讓にして正直な人々

がゐる。私はこの斷定が、メリンガーの所謂『何人（ニィマンド）も……ない』つきで云はれるほど、それほど一般的なものであるとは信じてゐない。併し云ひ損ひの證明にはつきものゝ、さうしてまた羞恥の性質を帶びた、感情の痕跡がそこにあるのは重要のことである。かくの如き痕跡は、我々が忘れた名前を想起出來ない時の憤りや、一見つまらない記憶がこびりついてゐる事に就いての驚きなどと同類のものであつて、これに依つて見ると云ひ損ひには何時でも必ず一つの動機の存することが判知出來るのである。

名前が多少でも違つてゐると云ふことは、それが故意的の場合には侮辱となるが、またそれが非意圖的の云ひ損ひと見える如何なる場合にも同じ意味を持ち得るのである。マイヤーの報告中にある事だが、嘗て或る人がフロイド Freud の代りに『フロイダー』„Freuder“ と云つた。それは丁度その前に『ブロイヤー』„Breuer“ と云ふ名を口にしたからである。（三八頁）その人がまた他の時に、フロイヤー・ブロイド法 Freuer Breudschem Methode に就いて云々した時（二八頁）には、多分同職者であつたのだが、この方法に就いて特別に熱心ではなかつたのだ。また名前が妙な風に變へられる場合があつて、これは以上のやうにしか何とも說明の仕樣がないが、これは後に書き損ひを論ずる場合に報告しようと思ふ。（一）

【註】（一）貴族と云ふものは自分の掛つてゐる醫者の名前をよく云ひ違へるものであると云ふことが出來よう。で、彼等は醫者を丁寧には取扱ひつけてはゐるが、内心ではあまり重んじてゐないのだと結論してもよからう。――當時トロントにゐたジョーンズ博士が本書の英文譯述書（アメリカ精神分析雜誌所載本書譯述書。一九年十月號）中に於いて名稱忘却に就いての二三の見事な觀察を下してゐるが、私はそれを茲に引用する。

『誰しも自分の名前が忘れられてゐる事を知つた時にはいやな氣のするものである。殊にその相手が自分の名を覺えてゐてくれゝばよいと願ひ或は期待してゐるやうな場合には猶更である。彼等はもし自分が相手の心にもつと大きな印象を與へてゐたならば、相手は自分を覺えてゐたであらうに（何となれば、名前は人格の必然的な一部分だから）と本能的に悟るのである。同樣に、大抵の人間にとつては、偉大な人物から思ひ掛けなく名さしで呼びかけられると云ふ事は、何よりも嬉しいことである。ナポレオンは人の上に立つ人々の常として、この術を十分に心得てゐた。一八一四年にフランスの慘憺たる敗戰の時に、彼はこの方面に於ける彼の記憶の驚くべき證據を示したのである。グラオンヌ Graonne 附近の或る町に彼が居た時、彼はこの町の長なるドゥ・ビュッシイ De Bussy に約二十年前、或る聯隊で會つた事を思ひ起した。その結果、感激したドゥ・ビュッシイは限りなき歸依を以て彼に奉仕すると申出た。それと同じわけで、相手の名前を忘れたやうな顏をするほど相手の感情を害ふに確かな方法はない。これはつまり相手がその名を記憶するの煩をとるに足らぬ人間であるとの意を示すものである。この工夫は屢々文學の中に表れてゐる。現にツルゲニエフの『煙』の中に次のやう

な一節がある。――『「貴君はやつぱりバーデンが面白う御座いますか。えゝと――リトギノフさん。」ラトミロフはいつでもリトギノフの名前を考へ〳〵云ふのであつた。いつでもそれを忘れてゐて容易に想起出來ないかのやうに。このやうにして、また彼に挨拶するとき高慢な樣子で帽子を上げたりして、彼はリト丼ノフの誇りを傷けようと思つた。』同じ著者はまたその『父と子』の中でかう書いてゐる。――『長官はキルヒノフとバザロフとを自分の舞踏會に招待した。さうして數分の後にまたこの招待を反覆し、その時長官は二人を兄弟と思つたらしくキサロフと呼びかけた。』こゝに於いては、彼が二人に話したことのあるのを忘れたこと、名前の間違つてゐること、二人の若者を區別し得ないことなどが、云ひ損ひの契機を造り上げてゐるのだ。名前を間違へて云ふと云ふことは、それを忘れるのと意味に於いて同じである。間違ひは忘却への第一步である。』

これ等の場合に於いては、擾亂の契機として批判と云ふことが這入り込んでゐるが、これは取除かねばならぬ、何となれば、批判はその瞬時に於いて話者の意圖に應じないからである。

その反對に、代償名稱を出すこと、全然見知らぬ名稱を知つてゐるやうに思ふこと、名前を云ひ損ふことに依つて同一化することなどは、何等かの理由でその瞬間背後に匿れてはゐるが、これを認知してゐると同じである。フェレンチ S. Ferenczi が學生時代にかうした體驗を有つたと云つて報告してゐる。――

『私が大學の一年級の時に私は（生れて始めて）公衆の前で（つまり全級の前で）或る詩を暗誦しなければならなかつた。私は十分に準備をしておいたのだが、暗誦を始めるや否や皆がドット笑ひ出したので面喰つてしまつた。やがて先生は一同が意外にも笑ひ出したことに就いて私に説明した。私はまづ詩の表題を『遙かなる彼方より』と讀み上げた。それはよかつたのだが、作者の性名を讀む段になつて、その詩人の姓名を讀まずに自分の姓名を讀んでしまつた。詩人の姓名はアレクザンダ・ペトーフィ Alexander (Sándor) Petöfi である。名の方が私のと同じであるところからついこんな混同をしてしまつたのである。併し本當の原因は實は私がその時、有名なるこの大詩人と自分を同一化してゐた事に存するのである。意識的にもまた、私はこの詩人に對して崇拜に近い愛着と尊敬とを抱いてゐたのだ。で、勿論全部の野心コムプレックスがこのやり損ひの背後にひそんでゐるのだ。』

似たやうな、名前を取換へる事に依つての同一化の話が報告せられてゐる。それは若い醫者で、彼は有名なギルヒヨウ Virchow の前に出ておづ〱と敬虔な態度でかう云つた。『私はギルヒヨウ博士で御座います。』教授は驚いて振向き、そして尋ねた。『おや〱、君もギルヒヨウと云ひますか？』と。私は野心あるこの若者がその云ひ損ひを何と辯解したかは知らない。またこの偉大な姓名の前に來て自分の姓名のあまりに小さく、遂に消失してしまつたのだと云つてうまく云ひ抜けたかどうか、

或はまた彼が、何時かは自分もまたギルヒヨウのやうな偉人になるであらうから、先生もどうぞあまりに眼中に置かないやうな取扱ひはしないで戴きたいと思つたのだと告白するだけの勇氣があつたかどうか、私は知らない。これ等二つの思想の一つが――それとも、多分二つともが――この若者の表象中に働いて彼をして云ひ損ひをなさしめたのかも知れないのである。

次に擧げる場合に對してもまた同樣な解釋が下され得るかどうかは、非常に個人的な動機から私はこれを懸案にしておかなければならない。一九〇七年アムステルダムに國際總會の催された時に、私の主張するヒステリーの學說が非常に活潑な論議の對象となつた。最も激しく私の說に反對した一人が、喋舌る時に頻りに間違ひをする。つまり私の位置に自分を置き、私の名に於いて話しをすると云ふわけである。例へば、彼はかう云つた。――『ブロイヤーと私とは、誰も知つてゐる通りに、……を證明したのであります。』と。ところが、彼としては『ブロイヤーとフロイドとは』と云つたつもりなのである。而も話者の名前と私の名前とは音が似ても似つかぬものなのである。この實例からしてまた名前を取換へることの云ひ損ひの他の諸例からしてもまた、我々は一つの事實を想起する。その事實は、云ひ損ひなるものが類音を俟つて始めて存在するのではなく、また隱れた關係に依つて內容上から支持されてゐたならば、その目的を達し得るものだとの事である。

その他なほ一層重要な場合は自己批評である。自分の云はうとする事に對する內的矛盾である。その矛盾に依つて云ひ損ひが起り、また云はうと欲した事とは正反對のことが出て來るのである。それから我々は、如何に或る斷定を與へてゐるその言葉がその言葉の意圖を裏切り、また云ひ損ひが內面の不正直を暴露するかと云ふことを知つて驚くのである。(一) 云ひ損ひは茲に於いては一つの物眞似的表現手段となるのである。さうして勿論屢々、人の云はざらむと欲するものを表白してしまひ、遂に自己裏切の手段となるのである。

【註】(一) 例へはアンツェングルーバー Anzengruber はその『良心の蟲』の中で欺瞞的橫領者にそのやうな云ひ損ひをさせて、彼が橫領者なることの烙印を刻してゐる。

さう云ふ次第であるから、例へば婦人に對する關係に於いて所謂常態の交りを好まない或る男が、コケットだと云はれてゐる或る娘の話をする時にかう切り出した。――『私との交際に於いては彼女は既にコエティーレン(Koëttieren)の習慣をやめてゐた。』と。これは勿論、koitieren(コイティーレン)(性交する)と云ふ別の語である事は疑ふまでもない。これが、kokettieren(コケティーレン)(媚びる)と云はうとしてゐた上に影響して上のやうな云ひ損ひとなつたのである。また次のやうな場合もある。『我々には一人の叔父があるが、彼は我々が一向訪問しないものであるから、この數月來非常に氣を惡くしてゐる。新しい家に引

越したのを機會に、我々は久しぶりで一度彼の許に赴いたのである。彼は如何にも我々を歡待してゐる風であつたが、別れに際して非常に感慨深げにかう云つた。――「これからは今までよりはもつといゝたまに會ひたいものだなァ。」と。』

言語の材料の或る偶然的な都合で、暴露の甚だしい效果や非常に面白い洒落の結果となるやうな云ひ損ひの實例が生み出されることが屢々ある。

例へば、ライトラー博士 Dr. Reitler が觀察し報告した次の如き場合がそれである。――

『「この新しい見事な帽子を、貴女はまァ御自分でお被りに(aufgepatzt)なつたのですか。」と或る婦人が驚いた調子で他の婦人に云つた。――故意的に賞讃することは、今はもうやめにしなければならなくなつた。何となれば、こんな〳〵帽子を被ること(Hutaufputz)は無細工なもの(Patzerei)であらうとの心中ひそかに抱いてゐた批評が困つた云ひ損ひとなつてあまりに明白に出て來てしまつて何とか月並の賞め言葉が出るべき筈のところが出なくなつてしまつたからである。』

次の實例に於ける批評はも少しお手柔かだが、併しまた判然したものである。――

『或る婦人が一知人の許を訪れたが、話がくどくて言葉數が多くてどうにも我慢が出來なくなつて來た。遂に、やつとのことで腰を上げ別れを告げることが出來たが、さて相手の婦人は玄關まで見送

つて來てなほもお喋舌りを續けてゐる。で、もう出て行かうとして扉の前に立つてゐて、またも新機に拜聽してゐなければならなかつた。最後に、彼女は相手の話に割入つて尋ねた。――「貴女は玄關には(im Vorzimmer)家に居らつしやいますか。」相手が面喰つたやうな風なので彼女は初めて自分の云ひ損ひに氣がついた。彼女は玄關にいつまでも立つてゐなければならないのに閉口して「貴女は午前中には(Vormittag)家に居らつしやいますか」との質問を以てこの會話を打切らうと思つたのだ。ところがこの通り、またも新たに突立たせられてゐることに就いての焦立たしさを洩してしまつたのであつた。』

マクス・グラーフ博士 Max Graf が自ら體驗した次の如き實例は、自己を愼むことへの警めとなる。『雜誌業者協會「コンコーディア」の總會に於いて、或る若い、いつも金を欲しがつてゐる一會員が激しく反對を唱へ、さうして亢奮のあまりにかう云つた。――,,Die Herren Vorschussmitglieder" (理別〈前金〉會員諸氏)と。これは,,Vorstands-oder Ausschussmitglieder" (理事又は特別會員諸氏)と云ふところであつたのだ。彼等會員諸氏は借金を承認する權限を有し、さうしてまたこの若き話者は借金の願書を提出してゐたのである。』

,,Vorschwein" の實例に於いて、人々が罵詈の言を抑壓しようとして努めてゐる時には容易に云ひ損

ひをするものであることを、我々は見たのであつた。人々は丁度この方面で氣を拔くのである。

次に擧げた實例は云ひ損ひに依る自己裏切の一つの重要な場合を示してゐる。二三の副的事情のために、ブリル博士が最初に『精神分析學中央雜誌』第二年號に於いて報告したものをそのまゝに轉載することが出來るやうになつた。

『一夕、フリンク博士と私とは散歩をしつゝニウ・ヨーク精神分析學協會の二三の出來事を話し合つてゐた。我々は同僚の一人R博士に會つたが、R君には私は久しく會つたことがなく、その個人生活に就いては私は何事も知らなかつた。——我々は久しぶりの會合を非常に喜び、私の發議で或るカフエに這入り、そこで二時間ばかり愉快に話し込んでゐた。結婚してゐるのかとの私の質問に對して彼は結婚してゐないと答へた。さうして「どうして僕みたいな人間が結婚など出來るものか。」と云つた。』

『カフエを出る時に、彼は突然私の方に向つて云つた。「かう云ふ場合に君が立つたとするとどうするかね、聞かしてくれたまへ。僕は或る看護婦を知つてゐるのだが、彼女は或る離婚事件に共同責任者として關係してゐたのだ。離婚事件の妻君の方は夫に賴んで離別を求め、その看護婦を共同責任者と指名した。さうして彼は離婚することが出來たのだがね。」私は彼の話を遮つて、「彼女は離婚する事

が出來たのだらう?」と云つた。彼は直ちに自分の誤りを正して、さうだ、彼女は離婚することが出來たのだ」と云つた。さうして更に話を續け、その看護婦が尋問のために非常に亢奮して、そのために神經質になり酒を飲むやうになつたと云つた。かう云ふわけなんだが、その看護婦はどう取扱つたらよいものか敎へてくれと云つた。

『私は彼の誤りを正すや否や、彼にその誤りの說明を求めたが、大抵の人が云ふやうに彼も呆れたやうな顏をしてかう云つた。誰だつて云ひ損ひくらゐはするだらうぢやないか、それはほんの偶然の事で、その背後に別に理由などはない、云々と。私はそれに反對して、一切の云ひ損ひには原因のあるものであり、もし私が彼からその結婚してをらぬと云ふ事を聞いてゐなかつたならば、問題の離婚の主人公は彼であり、その云ひ損ひは妻君でなく彼の方が離婚したがつた(さうなれば彼は手切金を出す必要がなく、且つニウ・ヨーク州に於いて再婚することが出來るからだ)事を示すものであると云ひたいところだと話した。

『彼は斷然私の解釋を否認したが、非常に感情を亢ぶらせてゐたし、それに故意らしく大聲に笑つたりしたので、私は愈々疑ひを强めたばかりであつた。「學問のために」眞實を語れと私が求めたに對し、彼は云つた、「君が僕に嘘をつかせようと望まないならば、君は僕がまだ結婚したことはなく、從

つて君の精神分析的解釋は總て間違つてゐる事を信じなければならない。』併しながら、彼はこんなつまらない事に氣を配つてゐる人間と一緒にゐるのは危險だと云ひ添へた。やがて、彼は別に用事の待つてゐる事を突然思ひ起して、辭去した。

『フリンク博士と私とは、二人とも彼の云ひ損ひに關する私の解釋が正しいことを信じてゐた。で私は更に探究を進めてそれの證據又は反證を擧げようと決心した。その翌日に私はR博士の隣人にして舊友なる人に會つたが、その人は私の解釋をあらゆる點に於いて肯定した。離婚はR博士夫人に對して與へられ、さうして一看護婦がその共同責任者として指名せられてゐる。數週間の後に、私はR博士に會つたが、その時彼はフロイド說の正しいことを全然確信すると云つてゐた。』

自己裏切(語るに落ちる)はオットー・ランクに依つて報告せられた次の場合に於いて、實に疑ふべくもない。

『或る父があつて、彼は全然愛國的感情を持合せない人で、自分の息子たちもまたこのやうな、彼にとつては無用のものと思はれる感情に囚はれないやうに敎育したいと思つてゐたので、彼の息子たちが或る愛國主義的の示威運動に參加したことを難じ、だつて叔父さんだつて參加したのですよとの息子たちの言葉に對して、かう答へた。——「何もお前たちは叔父さんの眞似をしなければならぬこ

とはあるまい。叔父さんは成程、痴呆者(Idiot)だがね。」平素さう云ふ物の云ひ方をしない父が今日に限つてどうしたことかと驚いてゐる息子たちの顔付を見て、父は始めて自分の云ひ損ひに氣が付き、辯解するやうな風にかう云つた。――「わしは勿論、愛國者(Patriot)と云ふつもりだつたのだがな。」』

會話の相手の婦人が或る云ひ損ひを自己裏切（語るに落ちる）だと解釋したとステルケ J. Stärcke (l. c.) が報告してゐる。さうしてこれに對して素晴らしい、然しながら解釋の任務以上に出でるやうな言葉を附加へてゐる。

『或る女齒醫者がその妹に約束した。もし妹が二つの臼齒の間に接觸(Kontakt)を持つてゐるならば（つまり、臼齒がその側面に於いて相互に相密接し、喰物の餘りがその間に殘留し得ないやうならば）、もう一度だけ後で見てあげようと。そこで妹はそんなことをされては遲くなつて仕方がないと不平を唱へ、さうして戲談にかう云つた。――「今は彼女は多分一人の同業者を取扱つてゐるが、併し彼女の妹はまだ〳〵待つてゐなければならない。」と。――女齒醫者は今やその妹を診察した。ところが實際、臼齒の一つに小さな穴があいてゐた。で、彼女は云つた。――「こんなに惡いとは思はなかつた。私はあんたには現金(Kontant)がなからうと思つたゞけであつたのに、……いや、接觸がなからうと思つたゞけであつたのに。」――「それ御覧なさいよ、お姉さん、」と妹は笑ひながら云つた。「お

姉さんが私を何時までも待たせておいて金を拂ふ患者さんばかり診ておあげなさるのは、慾のためなんですよ！』」——

（勿論、私は私自身の思ひ付きを彼女の解釋の上に附加へ、または彼女の解釋から何等かの結論を引出すことは許されない。併し、この云ひ損ひの話を聞いた時には、私の思想の流れは直ちにかう云ふ方に走つた。卽ち、これ等二人の愛すべき、活々とした若い娘たちはまだ結婚してをらず、さうしてまた若い男たちともあまり交際してをらぬのである。で、私は自問自答して見た、彼女等がもしもつと澤山に現金（コンタント）を持つてゐたならば、若い男たちともつと接觸（コンタクト）を持つたであらうと。）

次の云ひ損ひはライク Th. Reik の報告であるが、これまた自己裏切（語るに落ちる）としての價値を持つてゐる。——

『或る若い娘が、あまり好きになれない若い男と婚約をしなければならなかつた。若い二人を互ひに近付けるために、彼等の兩親は一つの會合を約束した。その會合には花嫁と花婿とは出席したのである。彼女の求婚者の方は非常にやさしく振舞つてゐたが、若い娘の方は自分の氣のない事を相手に悟らせないだけの自己抑制を十分に持つてゐた。併し、彼女の母親が娘に、あの若い男はどうかねと尋ねた時に、娘は丁寧に答へた。——「結構で御座いませう、あの方は非常に愛せない（リイベンスヰイドリヒ）(liebenswidrig)

方ですね！」』

【註】（一）譯者曰、これは愛に價する（リイベンスヴユルディヒ）(liebenswürdig)の云ひ損ひならむ。

オットー・ランクが『機智ある云ひ損ひ』と云つてゐる別の實例もまた、右に劣らず語るに落ちるの價値を具へてゐる。

『いろんなお話しを聞くことの好きな或る既婚婦人があつた。彼女はまた私通的交渉に對しても、もし相當の贈物をしてかゝるならば、必ずしも冷淡な方ではないとの噂があつた。彼女の好意を求めてゐる或る若い男が、何かの下心あつて、次のやうな、昔から知られてゐる話を彼女に語り聞かせた。二人の同業者があつて、その內の一は他方の男のいさゝかツンとした妻君を物にしようと思つて骨を折つてゐるが、遂に妻君は一千グルデンの贈物をするなら望みを叶へてやらうと云ふことになる。或る日、彼女の夫が旅行に出る時に、彼の友は一千グルデンの金を彼に借り、その金を翌日は妻君に返しておくと云ふ約束をした。勿論、彼はやがてその金を妻君に間男代であるやうに見せかけて手渡した。夫が歸つて來てその一千グルデンの金を妻君に出せと云ひ、おまけに云はれるまで出さなかつたのを罵つたので妻君はさては曝れたかと思つた。――若い男がこの話をする內に、その狡猾な男が「僕はその金を明日君の奧さんにお返しゝて（ツーリユツクゲーベン）(zurückgeben)おく」と云ふところに來た時に、話を聞いて

ゐた妻君は相手を遮つて意味深長な言葉を云つた。――「それはもう貴方は私に仰言つて、お返し下（ツウリユツクゲゲーベン）さつたのぢやなかつたですか。おや、失禮、お話し下（エルツエールト）さつたのぢやなかつたですかと云ふつもりでした。」彼女は同じやうな條件の下でならば靡いてもよいとの心持を直接的に云ひ表はさずに、これ以上明瞭に知らせる事は殆ど出來なかつたのであらう。』（國際精神分析學雜誌、一卷、一九一四年）

そのやうな『語るに落ちる』の好適例で結果の無難な場合を一つタウスク V. Tausk が報告してゐる。題は『父親の信念』である。『私の花嫁はキリスト教信者であつて』とA君は話した。『さうしてユダヤ教には移らうとはしなかつたので、結婚するためには僕の方からユダヤ教からキリスト教へと移らなければならなかつた。私は懺悔のやり直しをしたが、心の内にはいさゝかの反抗があつた。併しその目的は私には懺悔のやり直しを保證するにあるやうに思へた。そうして私が單に外面的にユダヤ教に屬してゐること、何等宗教的信念なきこと（そんなものは私は持合せてゐなかつたから）を否定しなければならなかつた時には、愈々さう云ふ氣がしたのである。それにも拘らず、私は後になつて常にユダヤ教に親しみを持ち、さうして私の洗禮を受けた事を知つてゐる知人は少なかつた。この結婚に依つて私は二人の息子を擧げたが、彼等はキリスト教の洗禮を受けた。子供等はキリスト教徒らしく生長してゐる内に、自分等がユダヤ教の出身者であることを知るやうになつた。併し彼等は學

校の反セミチック的感化に依つて、このやうな餘計な理由からして、父親に叛くやうなことはなかつた。――二三年前、私は子供たちと一緒に暮してゐた。その時彼等は或る教師の家族の許に、Dにある避暑地の民衆學校を訪れた。或る日、我々がこれまたやはり懇意にしてゐる家主のヤウゼンの許に坐り込んでゐた時、その家の主婦はその時の夏の來客がユダヤの傳統を持つ人々であらうとは思ひもよらないものであるから、ユダヤ人に對する非常に鋭い誹謗の言を二三口にした。私は「信念の勇氣」の實例を息子たちに示すためには自分たちがユダヤ教の家のものであることを今や敢然と宣言すべきであつたのだが、併しかうした知合の間でかう云ふ事を云ひ出すのは座が白らけ勝ちであることを私は虞れたのである。その他私は、もし我々の宿主が我々をユダヤ人なるが故に取扱の態度を冷やかに變へられたりしたならば、折角見付けたよい泊り場を出て行かなければならないし、またそれでなくとも短く切りつめた休養の期間をなほこの上切りつめねばならないやうになつては困ると云ふ氣もあつた。とは云へ、私はもしこのまゝ會話を續けてゐたなら自分の息子たちが呑氣に、何の囚はれるところもなく、奉ずるに難い眞理を洩すであらうと期待せざるを得なかつたからして、私は彼等をこの席から遠ざけやうと思ひ、庭の方へ送り出してしまつた。「庭へ出なさい、ユダヤ人（Juden）――」と云つて、私は直ぐに訂正した。「若いもの等は」（Jungen）と。このやうに、私はこの云ひ損ひに依つて私

の「信念の勇氣」を表現せしめたのである。他の人達はこの云ひ損ひに別に何の意味も附しなかつたからそこから何の結果をも引出しはしなかつたが、併し私は一つの說を引出さゞるを得なかつた。即ち、「父の信念」もその人が息子でありまた息子を持つ以上は、つらいながらも押潰さねばならないものであると。』(國際精神分析學雜誌。一九一六年、四卷)

次のやうな云ひ損ひの場合は、その及ぼすところが全く無難である。併しこの實例は、もし裁判官が訊問の間に、この蒐集のために自分で書留めておいてくれなかつたならば、私は報告を受けなかつたことであらう。

侵入の罪ある或る憲兵が云つた。――『私はその時以來、この陸軍の盜賊位置(ディブステルング) Diebsstellung を今なほ去つてをりませんし、また現在もなほ民衆庇護隊に屬してをります。』

云ひ損ひが、本人の抗議してゐる間に確證の手段として利用されるならば、甚だ愉快な結果を擧げることになる。そのやうな云ひ損ひは精神分析の仕事をしてゐる醫者には甚だ歡迎されることであらう。私は嘗て患者の一人に就いて、夢の解釋をしてゐた。その時、夢の中にヤウナー Jauner と云ふ名前が出て來た。夢の本人はヤウナーと云ふ名前の人間を一人知つてゐるが、何故にこの人が夢の中に出て來たのか分らない。そこで私は、それはその名がたゞ Gauner(ガウナー)(詐欺師)と云ふ罵詈の言葉と音

が似てゐるから出て來たのではないかと云ふ推量を敢へて下して見た。患者は大急ぎで一生懸命にそれに反對をしたが、併しその時云ひ損ひをして私の推量を確證した、彼は二度目にその代償名を用ゐたのであるから。彼の答へはかうであつた。——『併しそれはあんまり Jewagt（譯者曰、Gewagt「大膽」、「こぢつけ」の云ひ損ひか）であるやうに私には思はれます』と。私が彼にその云ひ損ひである事を注意すると、彼は私の解釋を容認した。

眞劍な討論に於いて、話さうと思ふことゝは反對の事を示すやうな云ひ損ひが討論者の一方に起きると、その人は直ちに相手に對して不利な位置に立つやうになるが、相手はそれを利用して優勢に立つやうなことを滅多にしないものである。

それと共に、人間は云ひ損ひに對しては勿論、他のやり損ひに對しても、私が本書に於いて示してゐるやうな解釋を極めて普通に下してゐる事が明かになつて來るのである。よしんば、彼等は理論に於いてはこれ等の見方を採らないにしても、またそれ等のやり損ひを突込んで分析せずに、そのまゝ看過する事の都合のよさを放棄しないにしても……。そのやうな云ひ損ひのあつた場合に、必ず人が笑つたり冷評したりするところを見ても、云ひ損ひが單に言葉の誤りであつて心理的には何等意味のないことであるとの表面上一般的に通用してゐる月並の考へ方が、如何に矛盾したものであるかゞ分

るのである。その尤なるものはドイツの宰相ビウロー公であつて、彼は一九〇七年に彼の皇帝のために辯護の演説をしようとして云ひ損ひをしたために却つて反對の效果に陷つたが、その時そのやうな反駁を試みて自分の立場を救はうとしたのであつた。

『さて、現在に關しては、ヰルヘルム二世陛下のこの新しい時代に關しては、私はたゞ一年前に申しました事を繰返すことが出來るばかりで御座います。卽ち、我々の皇帝の周圍にある不束(フェルアントヴォルトリッヘル)ならぬ(verantwortlicher)輔弼の臣の一群に就いて云々することは不當(ウンビリヒ)であり、不正(ウンゲレヒト)であると云ふことであります。(盛んなる彌次、「不束(ウンフエルアントヴォルトリッヒ)なる unverantwortlicher だ!」)……左樣、不束なる輔弼の臣の一群に就いてゞあります。云ひ損ひでした。失禮しました。』(彌次。)

併し、ビウロー侯の文章は『不束』だの『不正』だの『不當』だのと『不(ウン)』の重複したゝめに、多少は不明になつたのである。演説者に對する同情と、その困難な立場と思ひやつて、この云ひ損ひは大目に見られることになつた。一年の後に、同じ場所に於いて、一層具合の惡い云ひ損ひをした人がある。その人は皇帝に對して腹藏なき報告を申上げて欲しいと云はうとして、いやな云ひ損ひをした爲めに、彼の忠義なる胸の中に他の情感が宿つてゐると思はれたのである。

『ラットマン(ドイツ國民黨)――吾々は議事日程の根據の上から上奏書の問題に贊成いたします。

從つて議會はそのやうな上奏書を皇帝に提出するの權限を有するものであります。ドイツ國民は考へを一つにしてこの機會に於いて全會一致の上奏書を提出するやうにならうと信ずるのであります。さうしてもし吾々がそれを、至上の御滿足の行くやうな形式に於いて爲し得るならば、吾々はまたそれを骨ぬきに（リユツクグラートロス）(rückgratlos)致さねばなりません。（笑聲騷然、暫時やまず）。議員諸士よ、間違ひました。骨ぬきではありません、腹藏なく（リユツクハルトロス）(rückhaltlos)でありました。（笑聲。）さうして國民がそのやうに腹藏なく上奏いたすならば、我々の皇帝もまたこのやうな國家多難の際に當つてこれを嘉納せられるであらうと吾々は思ふのであります。』

一九〇八年十一月十二日の『フォルヴェルツ』紙はこの云ひ損ひの心理的意義を指摘することを怠らなかつた。——『恐らく未だ曾て議會に於いて議員が思はず本音を吐いて自分及び議員大多數者の對皇帝の態度をこれほど美事に、ユダヤ排斥者のラットマンほど美事に、呈示したことはあるまい。質問の第二日に於いて彼及び彼の味方は、自分等の意見を『骨ぬき』にして皇帝に云はうと欲するものであるとの告白を、彼は感動に滿ちた調子で洩らしたのであつた。——暴風の如き喝采は四方に起りために失言した演說者の後の言葉が聞こえなくなつてしまつた。彼は自分が本來は『腹藏なく』と云ふつもりであつたのだと云ふ事を辯明しておく必要があると信じてはゐたのだか——。

私はなほも一つ實例を附加しておくが、この實例に於いては云ひ損ひは丁度豫言のやうな氣味惡るさを具へてゐるのである。――一九二三年の一、二月頃に國際財産に人々をして瞠目せしめるやうな事件が起つた。卽ち、W市に於ける『成金』の内、恐らく最も新しい成金が、とにかく一番の大金持で而も一番年少のXと云ふ若い銀行家が、……銀行の株券の大多數を短時の競爭の後に手に入れ、その結果、重要な總會に於いて、舊い型の財政人たるこの銀行の老支配人たちは再選擧せられず　若いXがこの銀行の頭取となつたのである。再選擧せられなかつた老重役たちのためにと立つたY博士は送別の演說に於いて、屢々痛ましい云ひ損ひを口にした。彼は引退せらるゝ(ausscheidend)重役の代りに死に行かれる(dahingehend)重役と、連りに云つたのである。――それかあらぬか、この總會の二三日の後に、再選せられなかつた老頭取は死んだのである。併しその人はもう年齡八十の上を超してゐたのである。(ストルファー報告)。

ワレンシュタイン(ピコロミニ、第一幕、第五場)に誠に美事な云ひ損ひがあるが、これは話者の自己裏切りと云ふよりは、場景外に立つてゐる聽者に悟らせるためである。で、詩人はこのところでこのやうな方法を用ゐてゐるところを見ると、云ひ損ひの機制と意義とをよく心得てゐたことが我々には分る。マクス・ピコロミニ Max Piccolomini はこれまでの場面に於いては侯爵側に非常に熱烈に左

祖してゐた。さうしてまた平和の祝福に就いても熱心であつた。この平和の祝福は、彼がワレンシュタインの娘に從つて陣營に行つた時に知つたのである。彼は自分の父と宮庭の使節クエステムベルクとをあとにして去るので、彼等は非常に恐慌を來すのであつた。そこで第五幕目はかう始まる。——

クエステムベルク　困つたことになつたものだ！　本當かね？　そんな馬鹿々々しい考へを以て行かせてしまつてよいものかね、君。直ぐに喚戻して眼を開けてやらうではないか。

オクタヰオ（深き沈思より我に返へりて）ところがあちらの方でこちらの眼をあけてくれた。お蔭で有難くないことまでが見えて來た。

クエステムベルク　何だつて、君？

オクタヰオ　この旅もいやになつた！

クエステムベルク　何故か。どうしたと云ふのだ？

オクタヰオ

お出でなさい。私は直ぐに呪はしい足跡を辿つて行かねばならない。自分の眼で見屆けなければならない。――おいでなさい。（彼を引立てゝ行かうとする。）

クエステムベルク

さうしてどうするのだ？　何處へ行くのだ？

オクタヰオ（せき立てゝ）

彼女のところへ！

クエステムベルク

誰へ――？

オクタヰオ（云ひ直して）

侯爵のところへ！　さァ行かう。云々。

『彼のところへ』の代りに『彼女のところへ』と云つた一寸した云ひ損ひだが、我々はこれに依つて、この父親が息子の變節の眞の動機の奈邊に存するかを知つてゐたこと（然るに、廷臣は『彼は全く謎のやうなことを一人言してゐる』などと云つてゐる）を悟るのである。

詩人が云ひ損ひを利用してゐる又別の實例がシェークスピアにあることをオットー・ランクが發見してゐる。『中央精神分析雜誌』一、三、に揭載されてゐるランクの報告を玆に引用する。

詩として非常に微妙な動機から出で、技巧上素晴らしく利用されてゐる云ひ損ひは、例へばフロイドが『ワレンシュタイン』の中に指摘してゐるもの丶如きは、詩人がこれ等の云ひ損ひの機制と意味とをよく心得てをり、さうして聽者の方にはそれがよく通じることを豫想してゐることを示してゐる。そのやうな云ひ損ひはシェークスピアの『ヴェニスの商人』(第三幕、第二場)の中にある。父君の嚴命とあつて、籤に依つてその夫を選ばなければならなかつたポーシャ姫は、これまでは氣に入らない求婚者を運よく遁れて來たが、遂にボッサニオと云ふ氣に入つた求婚者が現れたが、彼もまた籤を引損ふのではなからうかとの心配が姫に起つた。もし籤を貴方が引そこなつても、私の愛に變りはないと彼女は心をこめて云ひたいと思つたが、併し彼女は自分の誓ひに依つてそれを遮げられた。このやうな心中の葛藤の内に彼女をしてこれ等の言葉を愛する求婚者に、詩人は云はしめてゐる。——

『戀の何のといふ意は微塵も御座いませんが、貴方樣とこのまゝ離れ〱になつてしまふやうな氣はいたしませせぬ。憎いと思へばこんなことを申上げる筈が御座いません。それはよくお分りの事と存じます。併しこれだけではまだ貴方樣の腑に落ちぬかも知れませせぬ故——とは云ふもの丶娘心の、思

ひはあれど口には出でず——ねえ、バッサニオ様、ならうことならもう一二ケ月こゝに御滯在になつて、その後に御抽籤なされては如何かと存じます。籤を正しく抽き當てるやうお教へ申上げたいは山山ながら、それでは私の誓ひが立たぬわけ、そんなことは出來ませぬ。またそれでは貴方様も私をお失ひなさるわけ。併しもし貴方さまがそれをなさるならば、私に誓つた罪を犯せと仰言せらるゝことになります。ほんに憎いは貴方様のお眼で御座います。そのお眼に魅せられたばかりに、私の身は二つに斷れ、半分は貴方様のものとなり、他の半分は貴方様のものとなり——おや、私自身のものとなりと申すところで御座いましたのに……。尤も、私のものは貴方様のもの、所詮はみな貴方様のもので御座います。』

『ポーシャ姫がバッサニオに云つてしまつてはならないが、仄かににほはせておかうと思つた丁度その事が、つまり籤を抽くまでもなく彼女は彼のものであり、彼を愛してゐると云ふ事を、詩人はその鋭い心理的感覺を以て、云ひ損ひとして彼女に口外せしめてゐるのである。この細い藝に依つて、詩人は愛人の堪へ難い不安を慰めさせ、また抽籤の結果に關しての聽者の同様な緊張を慰めさせてゐるのである。』

このやうに、多くの大詩人たちが、云ひ損ひに關する我々の考へを裏書きしてくれる面白さに調子

に乘つて、も一つ第三の實例を引用してもよからうと思ふ。これはアーネスト・ジョーンズの報告するところである。（中央精神分析學雜誌、一、一〇）——

『オットー・ランク は最近發表せられた或る論文の中で、シェークスピア がその曲中の人物ポーシャに云ひ損ひをさせ、それに依つて彼女が心中の思ひを聽者に悟らせるやうにしてゐるとの一實例を指摘してゐるが、私もまた英國の大小說家ヂォヂ・メレディス G. Meredith の傑作『主我の人（エゴイスト）』の中にも同樣な實例のあることを指示したいと思ふ。この小說の大體の筋はかうである。——ウィラビ・パターン卿 Sir Willoughby Patterne は周圍のものから非常に評判のよい貴族であつたが、コンスタンチア・ダラム Constantia Durham 孃と云ふ人と婚約した。彼は巧みに世間から祕してはゐるが、實は非常に主我の人であることを彼女は知つた。さうしてこの結婚を遁れるために、彼女はオクスフォード Oxford と云ふ船長と驅落ちした。一二年の後に彼はクレアラ・ミッドルトン孃 Miss Klara Middleton と云ふ人と婚約した。さうしてこの書の大部分は、彼女がまたパターンに於いて主我的なところを發見して心に起る葛藤の細微な描寫で埋められてゐる。外的な事情や名譽心からして彼女は自分の約束を守つてはゐたが、許約の男は彼女の眼には愈々厭はしいものに思はれて來た。彼の從兄弟にして祕書なるヴァーノン・ホヰットフォード Vernon Whitford（この男と彼女は最後には結婚するのだが）と、

彼女は一方親密にしてゐた。併しパターンに對する忠實のため、その他或る混合した動機からして、彼は三巴になることを避けてゐた。

クレアラは自分の惱みに就いての獨白に於いてかう云つてゐる。――「誰か身分のある紳士が妾をありのまゝに理解してくれて、妾に力を貸してくれないものかしら。あゝ、この荊棘の獄舍から連れ出してくれないかしら。妾は自分では拔け出すことが出來ないのだ。妾は臆病者だ。指一本で招かれても妾はふら〳〵としてしまふわ、屹度。妾も血を流したり泣いたり喚いたりしてもいゝから誰か友達のところへ行けるやうだつたら……。コンスタチアナは軍人さんを見付けたのだが、多分あの人はお祈りをして、その祈りが聽屆けられたのだらう。あの人のした事は正しくはない。併し、あゝ、妾は何とそのためにあの人をなつかしく思つてゐることであらう。相手の男の名はハリー・オクスフォードと云つたつけ。……あの人はぐづ〳〵してはゐなかつたのだ。鎖の環を斷ちきつたのだ。大つぴらに拔け出したのだ。あゝ、勇敢な娘だ。あんたなどからは妾は何と見えます？ だつて妾にはハリー・ホヰットフォードがないんですもの。妾は一人ぼつちですもの……。』ハリー・オクスフォードと云ふべき筈のところをハリー・ホヰットフォードと云つたことに突然氣がついて、彼女はどやしつけられたやうな氣がして、眞赤になつてしまつた。

男の名が兩方とも『フォード』で終つてゐることは、明かに兩者を混同せしめることを一層容易にした。さうしてまた多くの人はこれだけでその原因としては十分であると考へるであらうが、併しそれの本當の、根柢的の動機は作者に依つて明かに提示されてゐる。別の個所に於いて同じ云ひ損ひが起つてゐるが、さうすると直ぐ躊躇して話題を變へてゐる。これは精神分析に於いては、半意識的なコムプレックスに觸れた場合にのみあることで、精神分析法及びユングの著書に依つて明かに分つてゐる。パターンは庇護するやうな調子でホヰットフォードのことを云ふ、「とんでもない心配だ！ 善良なヴァーノンは普通と變つた事をしようなどとは考へないよ。」クレアラは答へた、「だつてもしオクスフォードさんが――ホヰットフォードさんが……おや貴方の白鳥が湖水を渡つて來ますよ。怒つてゐる時は何と立派なんでせうね。何を貴方に訊かうと思つてゐたんでしたつけ。誰か他の人間に對して明かに好意を持ち出した男と云ふものは元氣のなくなるものではないですか。」ウィラビ卿は忽ちハッと悟るところがあつて、身を剛張らせた。

また別の個所に於いて、クレアラは更に他の云ひ損ひに依つてヴァーノン・ホヰットフォードともつと親密な關係に立ちたいとの祕かなる願望を思はず洩してゐる。知合ひの少年に對つて彼女は云ふ、『ヴァーノンさんにさう云つて頂戴。――ホヰットフォードさんに云つて頂戴。』(二)

【註】（一）詩人が有意的として、而も多くは自己裏切（語るに落る）として描いたと考へざるを得ないやうな云ひ損ひの實例はなほ他にもある。例へば、シェークスピアの『リチャード二世』（第二幕、第二場）。シルレルの『ドン・カルロス』（第二幕、第八場、エボリの云ひ損ひ。）かうして擧げて行くならば、まだまだ隨分あることであらう。

こゝに示したやうな、云ひ損ひに關する考へ方は、非常に微細なところまで證明することが出來る。云ひ損ひの最も重要ならざる、最も自然な場合と雖も、十分な意味があり、且つ一層著しい實例と同樣の解釋を受くべきものであることを、私は繰返し證明することが出來た。私の意志に叛いて、自分の頑固な考へからブダペストへ一寸旅行して來ると云ふ一婦人患者は、僅か三日だけ行つて來るのだと辯解しようとして云ひ損ひ、三週間行つて來るのだと云つてしまつた。彼女は私の云ふことを聽かないで、私が彼女のためにはよくないと云ふ仲間へ三日間よりは三週間行つてゐたい意志を祕かに抱いてゐたことを暴露したのである。

或る晩、私は自分の妻を劇場に迎へに行つたが、連れ戾ることの出來なかつたのを辯解しなければならなくて、私はかう云つた。――『僕は十時十分過ぎに劇場に行つてゐたんだがね。』『貴方は十時前と云ふつもりなんでせう。』勿論、私は十時前と云ふつもりであつたのだ。十時過ぎでは、慥に辯解

にはならない。劇場のプログラムに『十時前閉場』と書いてありますからと云ふことは聞いてゐたのだ。私が劇場へ着いた時には、劇場の玄關は眞暗で、内側は人の氣もなかつた。確に芝居はとつくに終りになつて、妻は私を待つてはゐなかつたのだ。私が時計を見た時には、十時になるにはまだ五分を要したのであつた。私は家へ歸つて自分の方に都合のよいやうに少し大袈裟に云つてやらうと決心してゐた。十時に十分前であつたと云つてやらうと思つてゐた。ところが殘念ながら、云ひ損ひのためにすつかり自分の心組みが駄目になつて、自分の不正直が暴露されてしまつた。さうして自分の告白すべき以上の事を告白する事になつてしまつた。

そこでこれからは云ひ損ひでなく話し損ひの事になつて來るのである。それは云ひ損ひのやうに單語を亂すのではなく、全體の話の律動（リズム）や出具合を亂すものだからである。例へば、面喰つた時の吃りや云ひ澁りなどの如きである。併し話し損ひの場合でも云ひ損ひの場合でも、我々をしてまごつきに依つて話を裏切らせるものは内的の葛藤である。私は信ずる、皇帝を含む聽衆を前にした時や、眞劍に戀の口説をする場合や、陪審官の前に自己の名譽と名聲とを庇護する場合や、一言にして掩へば、（いみじくも世の人の云ふ如く）我々の全部がそこにゐる場合には、我々は云ひ損ひをするものではないと。或る作家の作風を批評する場合にさへも、個々の云ひ損ひの説明に缺くべからざる説明の原

理を持出してよいのだし、また平生持ち出してゐるのだ。明瞭にして曖昧ならざる書き方がしてあれば、その作家はよく自分と調和してゐるのだと云ふことが分るし、またいみじくも云はれてゐるやうに、一つ以上の目標を目ざして無理な、ごた〳〵した書き表はし方がしてあると、我々はかくて、完成せられざる錯綜した思想の介在してゐることを發見するのである。また我々はそれに依つて作者の自己批評の剛ばつた聲を聞くことが出來るのである。(一)

【註】(一) Ce qu' on conçoit bien
S' annonce clairement
Et les mots pour le dire
Arrivent aisément.—Boileau, Art poétique.

始めて本書が公刊されて以來、異國語の友や同僚が彼等の國語に於いて觀察し得る云ひ損ひに注意を向けるやうになつた。彼等は果然、やり損ひの法則は言葉の材料から獨立したものでないことを發見した。さうしてこゝにドイツ語を話す人々に就いて闡明したと同じ解釋を容認したのである。その報告は澤山にあるが、代表的に一つだけこゝに揭けておく。——

ブリル博士 Dr. A-A. Brill (ニウヨーク) は自分に就いて報告して曰く。『友人某或る神經症患者の

事を私に細く話して聞かせ、何とか出來ないだらうか云つてくれとの事であつた。私は答へた、何れ精神分析に依つてそれ等の症狀の一切は取除くことが出來ると信じてゐる、何故ならば、それは手間どる (durable) 患者だからと。自分としてはなほせる (curable) 患者だからと云ふつもりであつたのだが。』

最後に私は、多少の努力を吝まないところの、さうして精神分析に相當通曉してゐるところの讀者諸氏のために、一つの實例を附加しておかう。これに依つて見ても、云ひ損ひなるものが精神の如何に深いところから出て來るものであるかと云ふことが分るのである。

イェーケルス博士 Dr. L. Jekels 報告。――『十二月十一日に私は或る懇意にしてゐる婦人から、ポーランド語でいさゝか挑戰的に、傲慢に話しかけられた。――「どうして妾は今日、指が十二本あるなどと云つたのかしら?」――どう云ふ場合にそれを云つたのか、その場景を話してくれと私が要求したに對して、彼女はそれを語つた。或るところを訪問するために一緒に出掛けようと、彼女は娘のところへ出かけて行つてさう云つた。娘は今は大分癒つてゐる早發性痴呆症であるが、母にさう云はれて隣室で着物を着替へる。娘が再び歸つて來た時、母親はまだ爪磨きをやつてゐた。そこで次のやうな會話となつた。――

娘「それ御覽なさい。妾はもう用意が出來たのに、お母さんはまだでせう。」

母「だつてあんたは着物一枚だけれど、妾は爪が十二でせう！」

娘「何ですつて？」

母（焦々して）「あのね、妾には指が十二本だからつて云ふことさ。」

そこに居合せた一同僚が、どうしてその十二と云ふ數が出て來たのかと聞いたに對し、彼女は如何にもたしからしく頗る早く返答をした。――「十二と云ふのは妾にとつては別に（意味のある）日付ではありません。」

指に就いては彼女は多少の躊躇の後、次のやうに聯想を語つた。――「妾の夫の家族には足に六本の指（フインガー）（ポーランド語では趾（ツエーヘ）と云ふ本來の語がない）の者が出ました。妾達の子供が生れた時、指が六本でないか直ぐに調べて見ました。」外的の原因からしてこの晩は分析をそこまでにしておいた。

次の朝、十二月十二日に、婦人は私を訪れて見るからに亢奮しつゝ次のやうに話した。――「考へても見て下さい、妾としたことが、二十年來妾は夫の年取つた叔父の誕生日を祝つて來ましたのに、さうしてそれが丁度今日に當りますので、いつも十一日には手紙を書くことにして來たのですのに、今度はそれを忘れてしまひましてね、それで只今電報を打つて來ましたのですよ。」

さう云へば、婦人は昨晩私の同僚が十二と云ふ數に就いて訊いた時に、如何にも慥からしくその數字、（本來叔父さんの誕生日を想起させる筈の）は何等意味のある日付ではないと云つてはね付けてしまつた。

漸く彼女は白狀した。彼女の夫のこの叔父さんと云ふのは、その遺產を、殊に彼女の今日の逼迫した財政狀態に於いては、彼女がアテにしてゐる人なのである。

このやうにして彼の事が、それにつれてまた彼の死のことが、思ひ浮ぶや否や、二三日前に或る知合の女が骨牌に依つて豫言して、彼女が大金持になるであらうと云つたことが考へ出された。するとまた、その叔父こそは彼女が、從つてまた彼女の子供等が、金を受取ることの出來る唯一の人間であることがチラと彼女の頭をかすめた。さうしてその場景に連れて一瞬間、この叔父の配偶者が話の本人の子供等に遺產の渡るやうに遺言に認めておくと約束したことが想出された。ところが只今ではその叔母は遺言も書かずに死んでしまつてゐる。多分その叔母は自分の夫に（話の本人の叔父に）何かの委托を遺してゐることであらう。

彼女に豫言して聞かせた婦人が、「貴女は人々を嗾てゝ他人を殺させます」と云つた時には、叔父の死を望む心が非常に強く擡頭したに違ひない。

この豫言のあつた日と叔父の誕生日との間に介在する四五日の間に、彼女は常に、叔父の居住する處から出てゐる新聞を見て、そこに叔父の死の事が出てゐはしないかと捜してゐた。

このやうに、叔父の死をそれほど強く願望してゐた際であるから、最近に祝ふべき叔父の誕生日の事實と日付とが非常に強く抑壓され、永年續けて來た事柄を忘れるやうになつたばかりでなく、同僚の質問に會つてもそれが意識に上つて來なかつた程であつたのは、敢へて不思議ではない。

「十二本の指」と云ふ云ひ損ひに於いて、今やこの抑壓せられた十二は現れて來、さうしてこのやり損ひを決定する一因となつたのである。

私は一因となつたと云つたが、何となれば、「指」に就いて浮んで來た聯想は我々をして更に一層立入つた動機を詮鑿せざるを得ざらしめる。この聯想に就いて見ると、十二の事が何故に十本の指と云ふ無難な話を攪亂したかと云ふ事が分るのである。

思ひ出したところにかうある。――「妾の夫の家族に足に六本の指を持つた者がある。」と。六本の趾は慥に一つの不具(變態)の特徴である。で、六本の指は一人の不具兒であり、十二本の指は二人の不具兒童である。

さうして事實上、この事が只今の場合に現れて來たのだ。

この婦人は非常に若くて結婚したが、夫はいつも偏畸で變態的な人間であつて、結婚生活は永くなくてやがて死んでしまつた。夫の死後、唯一の遺産として殘されたものは二人の子供であつたが、その子供等はまたもや醫師達に依つて父系の遺傳を多く受け、變態であると折紙をつけられた。長女はカタトニーの重病に襲はれて最近家へ歸つて來たが、直ぐその後に、丁度年頃になつたばかりの次女の方も重い神經症に罹つた。

子供等の變態であると云ふ事と叔父の死に對する願望とがこゝで一つになつて、さうして強く抑壓されてゐる精神的要素と結合してゐる事を見ると、我々は變態的な子供等への死の願望もまたこの云ひ損ひの第二の決定素因となつてゐる事を假定せざるを得ない。

併し十二と云ふ數字が出たことが叔父の死への願望を主として意味するものであると云ふことは、話の本人の觀念に於いて叔父の誕生日が死と云ふ考へと非常に奥深いところで聯想されてゐる事から既に明かになつてゐるのである。何となれば、彼女の夫は十三日に息を引取り、丁度この叔父の誕生日の翌日である。その時、叔父の配偶者は若い寡婦に對つてかう云つた。――「昨日はこの人はまだあんなに心から親しくお慶びを述べてゐたのに、今日は早――。」と。

それのみならず、私はなほ附加へておきたいと思ふのは、この婦人が子供等の死んで呉れることを

願望してゐた實際上の根據が十分にあつたと云ふことだ。婦人は二人の子供に就いて何等の歡びを經驗せず、寧ろたゞ惱みと身の不自由とを嘗めるばかりであつた、さうして彼等のためにあらゆる戀の歡喜を放棄せねばならなかつた。

またこの時に彼女は、訪問のために一緒に出掛ける娘の機嫌を何とかして損じないやうに非常な骨折りをしたのである。で、早發性痴呆症の娘に對して母親が如何に多くの忍耐と我慢とを拂つたか、またその時如何に強くむか〳〵する心持を抑へ付けたかと云ふことは想像するに難くない。

そこで、この云損ひの意義は次の如くなるであらう。――

叔父は死んだ方がよい、これ等の變態の子供等も（云はゞこの變態家族の總てのものが）死んだ方がよい。さうして妾が彼等からその金を受取るべきだ。

この云ひ損ひは、私の見解に依ると、異常な構成の特徴を多く具へてゐる。で、――

（イ）二つの決定要素が一つの要素に凝縮せられて豫め存在してをり、

（ロ）二つの決定要素が豫め存在して二重の云ひ損ひ（十二の爪、十二本の指）となつたのではあるが、

（ハ）十二と云ふ語の片方の意義、即ち子供等の變態を表はす十二本の指が間接の表現を示し、精

神的の變態が肉體的變態に依つて、最も上層的なものが最も下層的なものに依つて、こゝでは表現せられてゐると云ふことは驚嘆すべきことである。

第六章

讀み損ひと書き損ひ

讀み損ひと書き損ひとに對しても、云ひ損ひに對すると同じ見地と觀察とが妥當するといふことは、これ等の機能の內的關係を想へば、敢へて驚くに足らぬのである。私は玆には二三の、注意深く分析した實例を報告するに止め、この現象の全般を包括する事は試みないでおく。

(A) 讀み損ひ

(一) 私はカフェーで、『ライプチッヒ繪入新聞』の或る號を斜に手にしつゝ目を通してゐたが、その時その頁に出てゐる畫の說明書きとして、『オディッシーに於ける婚禮』とあるので私は吃驚した。これはをかしいと思つて、その新聞を取り直して讀んで見ると、正しくは『オストゼーに於ける婚禮』とあつた。どうしてこのやうな馬鹿げた讀み違ひをしたものであらうか。私の考へは直ちに『音樂的幻影に關する實驗的研究』„Experimentaluntersuchungen über Musikphantome usw“と題するルート

Ruth の一書 (Darmstadt, 1898, bei H. L. Schlapp) に飛んだ。これは私が最近に關心してゐた書物である。何となれば、この書は私に興味のある心理上の諸問題に緊密に觸れてゐたからである。著者は近き將來に於いて『夢の現象の分析及び原則』,,Analyse und Grundgesetze der Traumphänomene.“ と題する一書を公刊するであらうと約束してゐる。丁度『夢の註釋』を公刊したばかりの私としては、非常な緊張を以て同書を待望したことは敢へて不思議ではない。音樂的幻影に關するルートの書中に於いて、目次の始めのあたりに、ギリシアの神話や傳説は眠りと音樂的幻想から、夢の現象と妄想とから發現するものだとの細い歸納的證明があると云ふ説明書きを私は發見したのである。私は直ちに本文を引繰返して、著者は果してオディッセウス Odysseus がナウジカア Nausikaa の前に現れる場面が普通の裸體の夢に基いてゐる事を知つてゐるかどうかを見ようとした。或る人が私にケルレル G. Keller の『綠色のハインリッヒ』の中の美しい個所を見よと注意して吳れた。そこではオディッセーのこの挿話は、遠く鄕里を離れてさ迷ふてゐる舟人の夢の客觀化として説明せられてゐる。私は更にそれは裸體の露出症の夢に關係のあることを附加へておいた。(7. Aufl. S. 170) ルートの書にはさう云ふことは見出せなかつた。この場合の私には明かに優先的の考へが働いてゐたのである。

(二) どうしたわけだか、私は或る日新聞を見てゐて、『ヨーロッパ中を樽の中で』,,Im Fass durch

Europa" と讀んだが、それは『ヨーロッパ中を徒歩で』„Zu Fuss durch Europa" の間違ひであつた。これを解決するに私は隨分永い間かゝつて骨を折つた。最初に思ひ當つたことはとにかくかう云ふ風な解釋であつた。――樽と云ふのはディオゲネスの樽でなければならぬ。さうして私はさき頃、或る美術史を繙き、アレクサンダー時代の藝術の事を讀んだ。それに連れてアレクサンダーの言葉として名高い『我もしアレクサンダーたらずんば、ディオゲネスたらむ』と云ふのが考へられた。また自分を箱詰めにして旅に出たヘルマン・ツァイツングと云ふ人のことも頭に浮んだ。さうしてそれ以上は這般の消息は明かにならなかつた。さうして例の言葉が私の眼についた美術史中のその頁を再び開き當てる事が私にはなかなか出來なかつた。漸く一ヶ月の後になつて、放擲してあつたこの謎が急にまた私に思ひ出された。そして今度はその解決も同時についたのである。或る新聞の論說に、萬國博覽會のためパリーへ來るのに何と奇拔な運輸の方法を人々は今や擇んだことであらうとの言葉のあつたのを私は思ひ出した。またそのところに、或る紳士が樽の中に這入りそれを人に轉がさせてパリーへ來る心算であると云ふことが冗談らしく書いてあつたと私は信じてゐる。勿論これ等の人々には何等他に動機があるのではない。たゞそのやうな馬鹿げたことをして人々の耳目を牽くだけのことなんである。ヘルマン・ツァイツングとは實はこの人間の名前であつて、彼はそのやうな變つた運輸方法の先鞭

をつけたものである。それから私は、自分が嘗て取扱つた患者のことを想起した。その患者は新聞を病的に恐れるのであるが、それは自分が有名な人としてそこに名の出るのを見たいと云ふ病的な名譽慾の反動であることが分つた。マケドニアのアレクサンダーは慥に、嘗て生存した人間の內最も名譽心の強い一人であつたに違ひない。彼は實に、自分の行動を詠んで吳れるやうなホーマーを發見し得ないことを嘆いた。併しどうして私は、また別のアレクサンダーが自分の近くに立つてゐる事を、つまり私の弟の名がアレクサンダーである事を考へずに居られよう。すると私は直ぐに、このアレクサンダーに關していやな、それを押除けて別のものをその代りに置くことを要するやうな思想と、さうしてそのやうな思想を惹起す實際の原因とを見出したのである。私の弟は稅や運輸（Transporte）の事には非常に精しくて、或る高等商業學校で教鞭をとつてゐるために何時かは教授の稱號を獲る筈になつてゐた。同じやうな Beförderung（昇進、運搬）を私は大學に於いて希望してゐたのであるが、私はなか〳〵得られなかつた。我々の母親は當時、自分の上の息子よりも下の息子の方が先に教授になるのは妙だと云つた事があつた。あの讀み損ひに對する解決のつかなかつたのは、その當時であつた。やがて、私の弟の方もむづかしくなつた。教授になると云ふ彼の機會よりもなほ以下になつた。併しその時、忽ちあの云ひ損ひの意味が私には分つた。それは弟の機會の少くなつた事が遮げを取除いて

そのために分つたやうであつた。私は弟の名を新聞で讀んだかのやうに思ひ、その時私は自分でかう云つた。——弟が職業としてやつてゐるやうなあんな馬鹿々々しい事で新聞に出る（つまり、教授と呼ばれる）なんてをかしな事だと。アレクサンダー時代のギリシア藝術に關する個所は、その後私は何の苦もなく捜しあてることが出來た。さうして前に捜した時も何度も同じ頁を讀んでをりながら宛も否定的な錯覺に支配されたかのやうに目指す文章を看過してゐた事を知つて呆れたのである。その文章を見付けはしたが、それに依つて自分は別に何も悟るところはなく、忘却しなければならないやうなことはなかつた。と云ふのは、その書物の中に見付けることが出來なかつた事のためにたゞ私は間違ひに導かれるやうになつたとの意である。私は思想聯結の續きを、自分が後に調べて見た時に障碍の横たはつてゐたその個所に、從つてマケドニアのアレクサンダーに關する何等かの觀念中に、求むべきであつたのだ。さうして同名の弟の事に就いてもつと確實に誘致されるべきであつたのだ。この事も申分なく出來たのだ。私は一切の自分の骨折りを擧げて、あの美術史中の見付からなくなつた個所を再び捜すことに盡したのであつた。

„Beförderung“（ベフエルデルング）の二重の意義（昇進、運搬）は、この場合に於いては、二つのコムプレックスの聯想の掛橋となつてゐる。即ち、新聞記事に依つて惹起された、あまり重要ならぬコムプレックスと、自分

をして讀違ひさせたところの興味はあるが不快なるコムプレックスとの二つである。この實例に依つて見ると、この讀み損ひのやうな現象を闡明することは常になかく容易でないことが分るのである。併し解決の時としては、我々は、謎の解決を都合のよい時期まで延しておく必要のあることもある。我々の意識仕事が愈々困難であればあるほど、さて遂に發見された（讀み損ひの原因たる）思想は、我々の意識的思考に依つては、そぐはない、正反對なものとして判斷せられるであらうことは、益々確かに期待せられるのである。

（三）　私は或る日、ギインの近くから一本の手紙を受取つたが、それには一つの驚くべき報導が記されてあつた。私は直ちに自分の妻を呼び、この事を知らせたのである。氣の毒なギルヘルム・M夫人は重病に罹り、醫者にも見離されたと云ふのである。私の同情を表はした言葉になかしな節があつたと見えて、妻は變だと云ひ出し、手紙を見せて御覽なさいと云つた。讀んで見たが、私が云つたやうなことは書いてない、何となれば誰だつて妻君の名を夫の名で呼ぶものはないからだと云つた。それのみならず、その手紙の筆者は問題の夫人の聖名をよく知つてゐるのである。何も夫の名を代用するには當らないのである。私は飽迄も剛情を張り普通に名刺には婦人が自分の夫の聖名を以て自分自身を呼ぶことがあるものだと云ふ事を盾にとつた。遂に、私はもう一度手紙を讀み直して見ることにな

つたが、そこには『氣の毒なギルヘルム・M君は』„der arme Wilhelm M.“とあつた。そればかりでなく、『氣の毒なギルヘルム・M博士は』„der arme Dr. Wilhelm M“とあるのを見落してゐた。私の見損ひは、して見ると、この悲報を夫の方から妻君の方へと轉向しようとする、云はゞ一つの痙攣的の試みであることを意味してゐる。冠詞と形容詞と名前との間にある學位稱號は、この悲報が妻君の事であるとするには都合の惡いものである。それ故に、この稱だけは、讀むときにぬかしてしまつたのである。併しこのやうな間違ひをした動機は、私がこの妻君に對して、夫君に對する程同情がないからと云ふわけではなく、この氣の毒な夫君の運命は私に近しい或る他の一人物に對する心配を惹起したからである。その人物はこの夫君と同病であることを私は知つてゐたのである。

（四） 私は休暇中に他所の市中の街を散歩してゐて始終或る讀み損ひをやるが、これは焦立たしいものであると共に、また可笑しいものである。その時私はあらゆる店の看板に、まるで似ても似つかぬ『骨董品』Antiquitäten なる文字を讀むのである。こゝに蒐集家の好奇癖が出るのである。

（五） ブロイラー Bleuler は彼の重要の書なる『感動、暗示、妄想症』„Affektivität, Suggestivilität, Paranoia“（1906）の一一二頁に於いてかう云つてゐる。――『私はかつて書物を讀んでゐて二行先のところに自分の名前が出てゐるやうな知的の感じを持つたことがある。ところが、驚いたことには、

そこには „Blutkörperchen“（血球）と云ふ語があつたゞけである。外邊的及び中心的視野の讀み損ひにして私の分析した幾千の場合の內、この讀み損ひの如きは最も顯著な場合である。私が自分の名前が出てゐると信じた時は、その原因たる語は大抵の場合に、私の名前の中の大部分の文字を近接して具へてゐて、そのためにさう云ふ間違ひが起きるのである。併しながら、その場合には關係の狂ひや幻覺を私は直ちに說明することが出來た。自分が讀んでゐたのは、學術書に於ける惡い書き方の一つの形式に關して述べた終りのところであつた。さうしてさう云ふ缺點は私にも全然なくはないものであつたのだ。』

（六）　ハンス・ザックス Hans Sachs の報告。――『世の人々に強く印象を與へるものを、彼はその剛情さ(Steifleinenheit)に於いて看過した。』併しこの言葉は私にをかしいと思はれた。で、もつとよく見直すと、それは文體の精緻さ(Stilfeinheit)であつた。この文章は私の尊敬してゐる或る著作家が私があまり同情を持たない或る歷史家に就いて過褒の言を弄してゐるところにあるのである。』

（七）　リヒテンベルグの『機智的及び諷刺的の思ひ付き』の中には、恐らく一つの觀察から出發し且つ讀み損ひの殆ど全理論を闡明するところの一つの言葉がある。――彼は常に „angenommen“（アングノムメン）の代りに „Agamemnon“（アガメムノン）と讀んだ、それ程彼はホーマーを讀んだのである、と。

大抵の場合に於いて、本文を改變し、また沒頭し關心するものを本文中に讀み込むのは、つまり讀者の心の中に既に用意されてゐるものである。本文の文字の形態が何等かの點で似てゐるためにのみ本文は讀み損ひの契機となるのであつて、その似てゐるところを讀者は自分の意味に於いて變更するのである。ざつと見たり、殊に不正確な眼で見たりすると、そのやうな幻覺が容易に生ずるものである事は疑ひがない。が、併しそれが讀み損ひの必然的の條件ではないのだ。

（八）戰時に於いては、我々は或る固執的な、持續的な先入觀念を抱くものであるが、殊に讀み損ひと云ふことは他種のやり損ひより以上に起り易いものである。私はそのやうな觀察を隨分澤山に獲てあつたのだが、遺憾ながら私はその内のたゞ少しゝか保存してない。或る日私は夕刊の一枚を手にして、そこに大字で『ゲルツの平和』„Der Friede von Görz," と刷り出してあるのを見た。ところがそれはさうでなく、『ゲルツ方面の敵』„Die Feinde vor Görz," であつたのだ。誰でもこの方面の戰場に二人の息子を戰士として出征せしめてゐる者ならば、さう云ふ風に讀み損ひ易いかも知れないのである。また別の人は或る個所に古い食パン券 alte Brotkarte の事が記されてゐるのを見たが、注意して見直すと、それは古い錦襴 alte Brokate であつた。更に云ひ添へておかねばならないことは、彼には始終行きつけの家があつて、そこの主婦に食パン券を讓り渡してやることに依つてお氣に入る習

はしになつてゐたのである。

讀む人の職業なり現在の立場なりが、またその人の讀み損ひのやり方を決定するものである。或る言語學者が自分の最近の立派な論文のために同方面の仲間と論爭してゐたが、その人は Schachstrategie（シャハストラテギー）（將棋戰法）を Sprachstrategie（シユプラハストラテギー）（言語戰法）と讀んだ。他所の町を散歩してゐた或る人が、治療のためにきまつて腸の活動する時間になつた時に、或る高い百貨店の一階のところに揭げてある大きな看板に „Klosetthaus“（クローゼツトハウス）（便所）と書いてあるのを見た。一方それでやれ〳〵とは思つたものゝ、他方またこの莊麗な建物の中に異常に多勢の人が這入つて行くのがをかしいとも思つてゐた。次の瞬間にはそのやれ〳〵と思ふ心持は消えてしまつた。何となれば、看板に書いてあるのはよく〳〵見ると „Korsett-haus“（コルセツトハウス）（コルセット店）であつたからだ。

（九）　第二群の諸實例に於いては、本文が讀み損ひ中に這入り込んでゐる處が遙かに大きいのである。そこには讀む人が防禦のために惹起したもの、彼には苦痛な報告又は强要が現れてゐる。で、それ故に彼はそのやうな讀み損ひをすることに依つて、拒否又は願望充足の意味に於ける一つの是正を經驗するのである。そこで、彼がこのやうな是正を經驗する前に、その本文がまづ正當に受入れられ判斷せられてゐると云ふことは、勿論否むべくもない。承認せざるを得ないのである。よしんば意識

はこの最初の正讀に就いては何事をも經驗してはゐないにもせよ……。さきに報告しておいた第三の實例は實にこの種のものである。もつと實際的な例としてはアイティンゴン博士 Dr. M. Eitingon が『國際精神分析學雜誌』第二卷（一九一五年）に報告してゐるものがあるから、それを玆に轉錄しておかう。

『戰爭外傷神經症のために我々の病院に這入つてゐたX少尉は或る日、既に夙く戰死した詩人ヴァルター・ハイマン Walter Heymann の『戰爭の詩と戰場の手紙』„Kriegsgedichte und Feldpostbriefe“ の或る作の最後の節の結句を私に誦して聞かせた。――

Wo aber steht's geschrieben, frag' ich, dass von allen
Ich übrig bleiben soll, ein andrer für mich fallen?
Wer immer von euch fällt, der stirbt gewiss für mich;
Und ich soll übrig bleiben? warum denn nicht?

（意譯）

併し俺は自問する、總ての人々の內で
俺が一人生殘つて他の人が俺の代りに
死ぬべきだと何處に書いてあるか。
君等の內凡そ死んだものは
慥に俺のために死んでくれたのだ。
さうして俺一人が生殘るべきなのか。
では、どうして生殘つてはいけないのか。

私がをかしいと云つたので、彼は氣がついて、いさゝかきまり惡げに讀み直した。

Und ſich soll übrig bleiben? warum denn i c h?
さうして俺一人が生殘るべきなのか。
では、どうして俺が生殘るべきなのか。

このXの場合を觀察したお蔭で、私はこの『外傷性戰爭神經症』の精神的材料に多少の分析的洞察を持つことが出來た。さうしてこの場合に就いて私は、何しろ我々のやうな治療の仕方にとつては甚

だ都合の悪い事には、攻圍は嚴しく醫者は手薄な野戰病院の狀態に於いて、「原因」として非常に尊重すべき榴彈爆裂に關して多少洞觀することが出來たのであつた。

（十）戰時の讀み損ひに就いては、またハンス・ザツクス博士が二三の實例を報告してゐる。――

『私の或る近しい知人が幾度も私に話して聞かせた。彼は自分の順番が來たならば、免狀に依つて保證されてゐる專門の敎養を利用せず、それに依つて相當な仕事を後方の地でやれてもそれを放棄して、前衞戰に出て働く氣だと、期日が來る少し前に、彼は或る日極簡單に、別に理由は說明しないでかう云つた。彼は自分の得業證書を當局に差出しておいたから、近い內に產業的な仕事に就くやうになるだらうと。その翌日、我々は或る役所で出會つた。私は机の丁度前に立つて字を書いてゐた。彼は私の方へ近寄つて來て、肩越しに暫く私の方を見てゐたが、やがて云つた。――何だ、その上の方の字は „Druckbogen‘（印刷全紙）だね。僕は 'Drückeberger‘（卑怯者、仕事を逃げる者）と讀んぢまつたよ。』（『國際精神分析學雜誌』四卷、一九一六――一七年）

（十一）電車の中に腰掛けて、私はこんなことを考へてゐた。私の靑年時代の友の多くはいつも懦弱であるといはれてゐたのに、自分なら到底堪へられさうもないやうな非常にひどい艱苦に今では堪へることが出來てゐる。丁度かう云ふ面白くないことを考へてゐた最中に、電車の進むまゝに活動の

看板の黒い大きな文字が、注意してゐるともゐないともない自分の眼に映じた。それは Eisenkonstitution"（鐵の如き體質）とあつた。一瞬の後にこのやうな語は看板の文字としては適當しないことを考へついた。ふり返つても一度よく見直すと、實は „Eisenkonstruktion"（鐵の家）であつた。』

（十二）夕刊を見ると、この際正しくないと認められてゐるルーター電報が出てゐる。曰く、ヒウズは合衆國の大統領に任ぜられたと。それに就いて、新聞任命の新大統領の略歴が添へてある。それを見ると、ヒウズはドイツのボン Bonn に於いて大學課程を終へたものである。併し私の不思議に思つたのは、選擧の日に先立つて一週間も續いて起つた新聞の論說に於いて這般の事情に關して少しも觸れてないことであつた。も一度よく調べて見ると、たゞアメリカのブラウン Brown 大學の事だけしか出てゐなかつた。このやうな馬鹿々々しい讀み違ひをするのは餘程大きな强制力が必要であつたわけだが、それは一部分は新聞を大ざつぱに走り讀みしたゝめでもあるが、その他では特にこの新大統領が將來の事情をよくする根據として中流勢力に對して同情があると云ふことが、政治上のみならず、更らにまた個人的理由からして好ましいと思つたゝめでもある。』

（B）書き損ひ

（一）主として職業上の日々の心覺えが手短かに書いてある或る紙の上に、九月の正しい日付の下に括弧して『十月二十日、木曜日』と間違つた日付が書いてあるのを發見して私は驚いた。この期待を一つの願望の表現として說明することは困難ではなかつた。數日前に私は自分の休暇から新たに歸つて來て、職業上の仕事にいくらでも就き得るだけの用意はあつたが、併し患者はあまりなかつた。私が着くと直ぐ、私は或る患者から手紙を受取つた。それには彼は十月の二十日に到着するとあつた。私が九月中にその日を書き込んだ時に私は慥かにかう思つたに違ひない。――『X君は直ぐに來ればよいのに、此の一ヶ月を如何にすべきだ。』と。かう云ふ考へから、私はその日付を一ヶ月夙く書き込んでしまつたのだ。この場合には、書き損ひをさせた原因の思想は不快であるとは云はれない。それ故に、この書き損ひに氣がつくと、直ぐに解決がついた。その翌年の秋に私は全然類似した、さうして同樣な動機から發した書き損ひを演じた。アーネスト・ジョーンズは同じやうな場合の研究を試みて、日付の書き損ひには大抵動機のあることを發見してゐる。

（二）『神經症學及び精神病學年報』への私の寄稿の校正刷を受取つて、私は勿論非常な注意を以て執筆諸家の名前を校正しなければならなかつた。それ等の諸家はそれ〴〵に別の國民を代表してゐるので、植字工にはいつも非常に厄介なものであつたのだ。實際に於いて、私は聞きつけない音の名前

をまだ少し訂正しなければならないことを知つてゐた。ところがをかしなことに、植字工は私の原稿中の或る一つの名前を正してゐるが、それには非常に尤な理由があるのである。私は Buckrhard（ブックルハルト）と書いてゐたが、それを植字工は Burckhard（ブルクハルト）の事だと判定したのである。私はこの産科醫の『出産が小兒麻痺の起源に及ぼす影響』と題する論文を立派な功績として賞めたのであつた。さうしてこの著者に對しても何も敵意を抱くことはなかつた。併し彼と同名の人にヰィンの或る文學者があつて、彼は私の『夢の註釋』に對して甚だ馬鹿げた批評を下したので私は非常に不快に思つてゐたのである。で、私は産科醫のつもりでブルクハルトと云ふ名を書いてゐながら、今一人のブルクハルトに關するいやな考へがそこにのさばり出て來たのであつた。さきに云ひ損ひのところでも既に述べたやうに、名前を變へると云ふ事は輕視を意味してゐる。（こ

【註】（一）シエークスピアの『ジユリアス・シーザー』の第三幕第三場に同じやうなところがある。

『シンナ――慥に私の名はシンナで御座います。
『バーガー――この男を寸斷してしまへ。此奴は裏切者だ！
『シンナ――私は詩人のシンナで御座います。裏切者のシンナでは御座いません。
『バーガー――どちらでもいゝ。名前のシンナに變りはない。その名をこやつの頭から消えさせてから放免してやれ。』

（三）このやうな主張はシュトルファー A. J. Storfer の或る自己觀察に依つて確證されてゐる。その自己觀察に於いてシュトルファーは、自分が競爭者と思ひ違つた人の名前を思ひ出し損ひ、且つ違へて書いたその動機の何たるかを、誠に感心する程の率直さを以て闡明してゐるのである。――

『一九一〇年の十二月、私はチウリッヒの或る書店の飾窓に於いて、ヒッチュマン博士 Dr. Eduard Hitschmann がフロイド風の神經症論に關して物した當時の新刊書を瞥見した。私は丁度その時分、フロイド派の心理學の原理に就いて某大學で試みる筈の或る講演の草案を書いてゐた。當時既に脫稿してしまつてゐた（その講演の）序說に於いて、フロイド派の心理學が應用方面の探究から歷史的に發展したことを、從つてその原理を統一的に表現することに或る種の困難あることを、さうしてまた未だ何等一般的に書いたものゝないことを論及しておいたのであつた。私がこの（今まで名前を知らなかつたこの著者の）書物を飾り窓の中に見た時に、始めにはそれを買はうとは思はなかつた。二三日經つてから私はそれを買ふことに決心した。その書物は既に飾窓にはなかつた。先日までそこに出てゐた書物の事を私は店の者に云つたが、著者の名を「エドゥアルド・ハルトマン博士」Dr. Eduard Hartmann と云つた。本屋さんは私の言を正し「ヒッチマンの事で御座いませう」と云つて、その本を私のところへ持つて來た。

やり損ひの無意識的動機は手近にあつた。私は精神分析學説の原理を纒め上げたのは慥に自分の功績であると考へてゐたから、ヒッチマンの書は自分の功績を輕減するものであるとして嫉妬と焦慮とを以て眺めてゐたことは明かである。名前の變改は無意識敵愾の行動であると、私は『日常生活の精神病理』に從つて獨語した。この説明で當時私は自ら滿足してゐた。

二三週間經つて私はこのやり損ひを書き記して居た。その機會に私は自分が何故エドゥアルト・ヒッチマンをエドゥアルト・ハルトマンに變へたかと云ふ疑問をも出して見た。たゞ名前が似てゐるためにこの有名な哲學者の方に曳き寄せられて行つたのであらうか。私がまづ思ひ立つたことは、ショウペンハウエルの熱心な崇拜者なるフーゴー・フォン・メルツル教授 Prof. Hugo v. Meltzl から聽いた言葉であつた。その言葉は大體かうであつた。——「エドゥアルト・ハルトマンは破壞されたる、その左側を覆されたるショウペンハウエルである」と。如何なる感情の傾向に依つて、忘却せられた名前のこのやうな代償が決定せられたかと云ふに、それはかうである。——「なアに、このヒッチマンと彼の考へ方とは大したことはあるまい。ショウペンハウエルに對するハルトマンのやうなことをフロイドに對してやつたのだらう。」と。

このやうに私は決定せられてゐる忘却に代償的思ひ付きの伴ふてゐるこの場合を、書きつけておい

た。

半年經つてこれを書きつけておいたその紙片が出て來たのを見ると、私はヒッチマン Hitschmann の代りにヒンチマン Hintschmann と書いてゐるのであつた。』(國際精神分析學雜誌、二卷、一九一四年。)

(四) 一見これよりはもつと眞劍な書き損ひの場合がも一つこゝにあるが、それは『行り損ひ』の中に入れても多分同樣に正しいと私は考へてゐる。——私は郵便貯金から三〇〇クローネの金を引出して、それを治療のために今は不在の或る親戚の者に送つてやるつもりである。その時私は自分の貯金が四、三八〇クローネになつてゐることを知つたので、丁度四、〇〇〇クローネにしてあとは當分手をつけないでおくことに決心した。小切手を振出して突然氣がついて見ると、私は始めのつもりのやうに三八〇クローネとは書かないで、四三八クローネと書いてゐるのであつた。私は自分ながら自分の行動の信用出來ないことに驚いたのである。直ぐに私は自分の心配が根柢のないことを知つた。私は以前よりは貧乏になつてをらぬからである。併し私の最初の心づもりを攪亂して而も自分をして意識せしめなかつたものは何であつたかに就いて、暫く考へて見なければならなかつた。

私は始めには間違つた道を進んだ。三八〇と四三八と云ふ二つの數字を相互に差引いて見たが、併しその差額に依つて何を始めてよいものか分らなかつた。遂に、突然或る考へが浮んで本當の事情が

判つた。四三八と云ふのは全額四三八〇クローネの丁度一割である。併し、書店もまた一割の値引をして寄越す。すると私は數日前に、私には既に興味のなくなつた醫書數冊を擇り出して本屋に三〇〇クローネで拂はうとしたことを想起した。本屋はそれではあまり高過ぎると思ふが、併し數日中にどちらともきめて返答をすると云つた。もし本屋が私の始めの要求を受容れるならば、私が病人のために費はうと思つてゐた丁度全額を出してくれることになる。私がこの出費をつまらないと思つてゐたことは慥である。私の間違ひを知つた時の感情は、そのやうな出費に依つて貧乏になることの恐れとして考へて見て一層よく理解出來るのである。併しこのやうな出費を遺憾とする心持と、それと結付いてゐる貧乏の恐怖との二つは、共に全く私の意識にまで知られなかつた。私がその全額を約束した時には、この出費を遺憾とも思はなかつた。で、さうした動機が下に潜んでゐるかも知れぬと云つたやうな考へ方は一笑に附したであらう。もし私が精神分析法に依つてそのやうな被抑壓的要素が精神生活中にあることを知悉してゐなかつたならば、さうしてまたもし自分が數日前に同じ解決を齎すやうな夢を見てゐなかつたならば、まさかさう云ふ感情が自分に存してゐることを承認しなかつたであらう。(一)

【註】(一)　本全集第一卷『夢の註釋』(大槻憲二譯)の中にこの夢の事が出てゐる。(同書五七頁參照。)

（五）ステーケル W. Stekel の報告に從つて私は次の一つの場合を擧げておくが、その正確なことに就いても同時に私は保證することが出來る。――『殆ど信ぜられない程な書き損ひと讀み損ひとの一實例が、或る流布してゐる週間新聞の編輯の內に起つた。この週間新聞は「買ふだけのことある」のを公然標榜してゐる。で、自己擁護と辯明とを書いておく必要があつた。そこでその辯明は非常なる熱心と非常なる感激とを以てなされた。同新聞の主筆はこの論說を讀んだ。筆者自身が一再ならず原稿でも校正でも眼を通したのだが……。皆のものがこれでよからうと云ふ事になつたのに、突然印刷所の校正者から、皆さんの見落してゐる明白な間違ひがあると云つて注意して來た。成程そこにはかうあつた。――「讀者諸賢は吾人が常に最も利己的に、一般のためを思つて務めてゐることを御認め下さるでありませう。」勿論これは最も非利己的にでなければならぬ。併し、感激的な口吻のために伴らざる考へが本來の力で出て來たのである。』

（六）妻君と喧嘩別れのやうにしてヨーロッパへ來て滯在してゐる或るアメリカ人が、今では妻君とも仲直りが出來ると信じて、或る時期に大西洋を渡つて自分の方へ來るやうに云つてやつた。で、彼はかう書いた。――『お前も僕のやうに「マウレタニア」Mauretania 號に乘つて來られるやうだつたらいゝがね。』と。併しこの文章の書いてある紙片を彼はその時封入して出してやる自信がなかつた。

その紙片を別に書き改める方がよいと思つた。何となれば、彼は船の名前を書き改める必要に迫られて正したのを妻君に氣付かれたくなかつたからだ。彼はつまり、始めには「ルシタニア」Lusitaniaと書いたのであつた。

この書き損ひは別に說明を要しない。それは直ちに判る。併し椿事の好都合であることに就いてはなほ二三付加へておくことがある。彼の妻君は戰爭前に始めてヨーロッパへ來たのであるが、それは妻君の唯一の姉妹の死んだ後であつた。私の記憶に間違ひがなければ、「マウレタニア」號は戰爭中に沈沒した「ルシタニア」號の生殘つてゐる姉妹船であつた。

（七）或る醫師が一人の子供を診察してその子供のための處方箋を書いてゐたが、そこにアルコールAlcoholを書き込むことになつた。彼が處方箋を書いてゐる間に、母親は愚にもつかぬ餘計な質問をするので彼は大變うるさいと思つてゐたが、心の中ではそんなことに腹を立てゝはならぬと考へてとにかくその考へをやり通した。併しさう云ふ考へのあつたゝめについ書き損ひをした。アルコールと書くべきところにアコールAchol（怒るな）と書いてあつた。

（八）材料上の關係があるから、私はこゝにジョーンズがブリルに報告した一つの場合を附加へておかう。ブリルは平素は酒を飲まないのだが、友達に薦められてしたゝか嗜んだ。翌朝、激しい頭痛

がしたので、友達の云ふまゝになつたことを後悔した。彼はエセルとEthelと呼ぶ或る婦人患者の名前を書く筈になつてゐたが、それをエチルEthyl（エチルアルコール）と書いてしまつた。その婦人患者と云ふのがいつも酒を飲み過ごす習慣のある娘であることも、ブリルのその時の氣分にとつては嫌な事と考へられた。

醫師が處方箋を書損ふことは他のやり損ひよりもその意義重大であるからして、私はこの機會において、そのやうな醫師の書損ひに就いて今まで公にせられた唯一の分析を精しく報告しておくことにしよう。

（九）ヒッチマン博士Dr. Ed. Hitchmannの報告（處方箋に於いて幾度も繰返して書損つた場合。）――『或る同僚が私にかう話した。永年の間に、彼は年寄りの婦人患者のために一定の藥劑を處方する場合に書き誤つたことは一再でない。二度目に彼は誤つて十倍の服量を書き込み、後になつて突然氣がついて、患者を殺しはしなかつたかと非常に心配になり、自分でも大變氣持が惡くなつて大急ぎでその處方箋を取返さうと努めた。この特殊な徵候（症狀）行爲は、個々の場合を細かく述べ、分析に依つて闡明するだけのことはあらう。

第一の場合。――老齡の域に入らうとする或る貧しい婦人の便祕に對して、醫師は處方箋を認めよ

うとして十倍も強いベラドンナ・ツェプシェン Belladonna Zäpfchen を書込んだ。彼は外來患者治療所を辭し、約一時間の後に、家に歸つてから、新聞を讀み朝食をしたゝめてゐる間に、突然自分の誤りを氣付いた。彼は心配になつて來たので、直ちに外來患者治療所に引返し、件の婦人患者の住所を尋ね、やがてそこから非常に隔たつてゐる彼女の住居へと赴いた。行つて見ると老婆はまだその處方箋に依つて調劑させずにゐた。それで彼は非常に喜び安心して家へ歸つて來た。彼は自分が處方箋を書いてゐる内に、移動病院のよく喋舌る院長が肩越しに眺め、さうして彼の心を亂してしまつたことを以て辯解の辭としたが、全然不當であるとは云はれない。

第二の場合――件の醫師は或るコケットな、色香美しき婦人患者の處方をすませて、或る老孃の許に往診しなければならなかつた。この往診のためにあまり時間の餘裕がなかつたので、彼は自動車を利用した。何となれば、彼はきまつた時刻に、その往診先の近處に、愛する若い娘の家を訪れなければならなかつたからである。この時もまた第一の場合と同じやうに、似たやうな苦痛を訴へられたゝめにベラドンナを指定しておいた。ところがまたもやその藥劑を十倍も強く處方するやうな失敗を演じた。患者は用件には關係のないことを面白さうに話し出した。醫師は言葉では抑へてゐたが我慢が出來なくなり患者を後にして媾曳にと出掛けて行つた。約十二時間經ち、朝の七時頃になつて醫師は

眼を覺ました。彼の書き損ひの追想と心配とは殆ど同時に彼の意識中に這入つて來た。そこで彼は、その藥がまだ藥局から屆いてゐないだらうと云ふことを一縷の望みとして患者のところへ大急ぎで使を遣つた。さうしてその處方箋をも一度調べて見たいから返してくれと頼んだ。併し彼は既に調劑の濟んだ處方箋を受取つたが、ストア的の諦めと、藥局の經驗をあてにしてゐたが、藥局の主任は勿論の事だから（とは云つたが或は多分讀み損ひか）藥量を少くしておいたと云つたので彼は安心した。

第三の場合――醫師は自分の母の姉妹、即ち老いたる伯母に對して、ティンクトゥラ・ベラドンナ Tinctura belladonnae とティンクトゥラ・オピイ Tinctura opii との混合を服量は無難であつたが書き損つた。處方箋は直ちに女中が藥局へ持つて行つた。と、やがて間もなく、醫師はティンクトゥラの代りに「エクストラクトゥム」extractum と書いたことを想ひ出し、即刻藥局へ電話してこの間違ひの事を尋ねて見た。醫師はまだ處方箋を完成しないのに知らない内に机の上から持つて行かれてしまつたのだと云つて辯解した。

書き損ひのこれ等三つの場合に驚くほど共通する點は、この醫師が常に同一の藥劑に就いてのみ誤つたこと、老齡の婦人患者に對してなしたこと、さうして服量をいつも強くし過ぎたことなどである。少しばかり分析して見たところでこの醫師の母親に對する關係が決定的な意義を有するに相違ないこ

とが明かになつた。つまり、彼がかつて――而も以上の症狀行爲の直ぐ前であるらしい――これまた同樣な老齡に入つた母親に對して同じ處方箋の書き損ひをしたことが想ひ出された。而も服量を普通のやうに〇・〇二にする方が彼には考へ付き易い筈だのに、〇・〇三にして母を根本的に快くしようと自分では考へたことが分つて來た。か弱い母親はこの藥劑の反應として腦充血と口腔乾燥とを直ちに示した。母親は戲談半分に、お前のやうな處方の書き方をされては危くて仕樣がないねと云つた。それに醫者の娘であるその母親の方でもまた、醫者である息子から時々貰ふ藥劑に對して、今度のやうに拒否するやうな、半ば戲談のやうな抗議を持出し、また毒になりはせぬかなどと云ふのであつた。

報告者ヒッチマン博士がこれ等母子の關係を洞觀した限りに於いては、息子は本能的に愛のある子であるが、併し母親を精神的に尊重する點に於いて、また個人的尊敬に於いて、必ずしも過ぎてゐると云ふ程ではない。自分より一歲だけ年下の弟と母親と共通の家に生活してゐるので、このやうな共同生活を自分の色情生活のために邪魔であると思ふこと既に年久しい。さう云ふ場合に於いては、我我は精神分析の經驗からして次のやうなことを知るのである。即ちそのやうな失敗行爲の原因はもつと內面的な原因の假托として誤用され易いものであると云ふことを。醫師は可成り滿足してこの報告の分析を受容れた。さうして笑ひながらかう云ふ意見を述べた。即ち、ベラドンナ Belladonna（＝美

女）と云ふ言葉はまた一つの色情的な關係を意味するかも知れないと。彼はこの藥劑を前から自分でも時々用ゐてゐた。』（國際精神分析學雜誌、一卷、一九一三年。）

そこで私はかう云ふ結論を下しておきたいと思ふ。卽ちそのやうな眞劍なやり損ひは無難な方法でなければ現れるものではない、何となればもしさうでなかつたならば、我々はそれ等を取調べるであらうからだ。

（十）次に擧げた、フェレンチ博士報告に懸る書き損ひの實例は、人或は甚だ無難なものと思ふであらう。我慢が出來なくなつたための凝縮行爲（九五頁所揭、猿（アッフェ）の云ひ損ひ參照）と解釋し、さうしてこの出來事に對して如何樣にか一層立入つた分析を施し、そこに一層力强い攪亂的要素の存することを證明して見せるまでは、自分の解釋を株守するであらう。

『アネクトーデ（Anektode）はこのやうな風であつた。』――と私は嘗て自分の手帳に書いた。勿論私はアネクドーテ（Anekdote, 物語）と書いたつもりであつた。而も、死（トーデ）（Tode）刑の宣告を受けて、自ら己れの磔刑となるべき木を擇ばせて貰ふことのなさけを乞ふた漂浪者の物語であつたのだ。（彼は一生懸命に搜したが適當な木を發見することが出來なかつた。）

（十一）今一つ別の場合は、これに反して、本當とも思へないやうな書き損ひが、急所に觸れた、

祕密の意味を表現せしめたのである。或る匿名の人が報告して曰く。——

『私は或る手紙をかう云ふ文句で擱筆した。「貴君の奥樣竝びに彼女の御子息に呉々もよろしく御傳言下さい。」,Herzlichste Grüsse an Ihre Frau Gemahlin und ihren Sohn.' その手紙を封筒に收めやうとして危く私は自分の間違ひに氣付き、ihren（彼女の）をIhren（貴君の、貴君等の）と改めた。この夫婦をこの前に訪問して家へ歸る時、私と一緒に行つた妻は、そこの息子がその家の親友の某に酷似してゐるのを觀て取り、屹度その男の子供に相違ないと云つた。』

（十二）　或る婦人、その妹が廣やかな新居に移つたのを慶んでやる手紙を書いてゐた。その時そこに居合せた一友、婦人がその手紙の受信人の住所を書誤つた事を氣付いた。それればかりでなく、驚いた事には、その住所が先方の今までゐたところではなく、ずつと以前にゐた所で、而も妹が始めて結婚した時にゐた家に宛てたのであつた。友達に注意を受けて婦人は云つた。『仰言る通りです。併し一體何が私をさうさせたのでせうか。』これに對して女は答へた。『多分妹さんが引越したその立派な大きな家が面白くないんでせう。でも、貴女は自分が肩身が狹いやうに感じるのでせうから。そのために妹さんを最初の家に引戻したわけなんでせう、最初の家なら別に貴女のお宅よりは立派と云ふわけではありませんから——。』『慥に、妾は妹の新居を面白くなく思つてゐます。』と婦人は正直に白狀

した。やがて彼女は附加へて云つた。『こんなことにかうまで卑しい心持になるとは、何と淺間しいことでせうね。』と。

（十三）アーネス・ジョーンズはブリル博士から聞いたと云つて、次のやうな實例を報告してゐる。ブリル博士に宛てゝ或る患者が手紙を寄越し、その內で自分の神經症の原因は木綿の危機に際して商賣上あんまり心配したり亢奮したりしたためであると云つて來た。彼は續けてかう云ふ。――『私の病は總てあの呪はれた冷酷な波亂に因るのです。新しい穀物を得べきための種子は全然御座いません。』と。彼は冷酷な波が種子をさらつたと云はうして、『波（ウエーブ）』(wave)の代りに『妻（ワイフ）』(wife)と書いてしまつた。彼の心の奧底では妻君が冷感で子供のないことを非難する氣持があつたのである。で、彼は已むなく節慾してゐることが自分の病氣の小さからぬ原因をなしてゐることを認めたも同然となつたのである。

（十四）ワーグネル博士 Dr. R. Wagner は『中央精神分析學雜誌』（一卷、一二號）の中で、自分自身に就いてかう報告してゐる。

『古い同人雜誌を讀んでゐた時に、私は一緒に書いてゐて非常に急いだために、一寸した書き損ひをしてゐたことを發見した。,Epithel' と書くべき筈のところを ,Edithel' と書いてゐるのである。第

一綴音にアクセントを付ければ、それは或る少女の名の愛稱になるのであつた。反省して分析して見ると、それは極めて簡單である。この書き損ひをした當時に、私とこの名の持主なる少女との間柄はたゞ全く表面的なものであつた。さうしてずつと後になつて彼女との間が親密になつて行つたのであつた。で、この書き損ひは、自分ではそも〳〵まだその事を思ひも寄らなかつた時分に於いて、無意識的には既に多少の傾向を持つてゐたことが暴露せられたもので、殊にこの愛稱の形でその名が出て來たことは、同時にそれに伴うてゐた自分の感情を明かに示すものである。』

（十五）　世間によく知られてゐる惡い洒落を以てそれ自身を匿しては居るが、この場合慥に洒落の意圖は認められないところの一つの書き損ひの實例がこゝにある。これはＪＧ氏の報告に負ふものであつて、同氏の他の寄書は既に揭げておいた。

『或る肺病療養所の患者となつてゐる時、私は遺憾ながら、自分の近親の者が同じ病に罹つた事を聞いて、何とか療養所を捜してやらねばならなくなつた。私は早速その近親の者に手紙を書き、或る專門家に、自分自身がその治療を受けてゐる有名な先生に、かゝるやうに勸めてやつた。その先生の醫療上の權威ある事は自分は十分に信じてゐるが、他方にその先生は不親切である事を難ずべき理由が十分にあつたのである。何となれば、その先生は極最近に、自分には非常に重要であるところの病

氣證明書を出してくれる事を拒んだからである。私の手紙に對して近親の者から返事が來たが、その中で私の手紙に書損ひのあつたことを指摘して來た。私はそれを見て、直ちにその原因が分つたので非常に可笑しくなつた。私の手紙の中にかうあつたのである。「……それから私はまた君に、何等の猶豫なく、X先生を侮辱する(in sultieren)ことをお勸めする」と。勿論、私は相談する(kon sultieren)と書くつもりであつたのだ。これは私にフランス語やラテン語の知識が乏しいためであらうと思はれるかも知れないが、そんなことはないことを特に斷つておく。』

(十六) 書き落しも、勿論、書き損ひと同じに說明することが出來る。『中央精神分析學雜誌』一卷、十二號にダットナー博士 Dr. jur. B. Dattner は『歷史中の書き落し』の著しい實例を報告してゐる。一八六七年中にオーストリー・ハンガリー兩國間の調停中に締結せられた財政上の義務を扱つた法律條項の一つに、ハンガリーの譯文中には『效力あり』,effektiv' なる一語が脫漏してゐる。ハンガリーの法制家たちがオーストリーの利益を出來るだけ少くしたいと無意識的に願望したことが、この脫落の一因をなすものであるとダットナーは論じてゐる。

吾人はまた、書きものや寫しものゝ場合に同じ言葉を屢々繰返すと云ふこと――卽ち、固執(ペルセベラチオーネン)――と云ふことは、矢張り意味のないことではないと假定すべき理由が十分にある。書いてゐる人が

既に書いてしまつた語をまた繰返して書くと云ふことは、彼がこの語から容易に離れられないことを彼がそれに似たことをもつと云ひ表はしたいと云ふことを、示してゐるのである。寫しもの丶時に固執の現象のあるのは、「俺もだ俺もだ」と云ふ語の代りであるやうに思へる。私は長い法廷醫師の判決を所持してゐるが、そこには書寫者の側に於いて、或る特に著しい個所に於いて固執が現れてゐる。それはその書寫者の沒個人的な立場に慊焉たるものあるかの如く、まるで俺の場合と同じだ、少くともよく似てゐるとの解決を下してゐるのだと私は解釋してもよからうと思ふのである。

（十七）　更にまた、誤植を植字工の『書き損ひ』として取扱ひ、大部分はそこに動機のあるものと見做すことも差障へはない。そのやうなやり損ひを組織的に蒐集することは興味もあり、得るところ甚だ多い結果とならうと思はれるが、自分はまだ手を着けてゐない。ジョーンズは本書中で屢々言及しておいた彼の著書中に於いて、『誤植（ミスプリント）』のために特に一節を割愛してゐる。また電文を打ち間違へることも電信取扱者の書き損ひとして解すべき場合が時々ある。夏期學校に於いて、私は出版書肆から電報を受取つたが、その電文が私にはとんと分らない。電文にはかうある。――

„Vor*iarte* erhalten, Ein*lad*ung X. dringend.“『チョキンシウケトッタXノショウタイイソグ。』この謎の解決はこの電文中にあるXと云ふ名前から手がついた。Xとはとにかく、私がその著書に序文を書

いてやる筈になつてゐる或る著者である。この序文(Einleitung)からして招待(Einladung)が出て來たのだ。それから併し私は、二三日前に同じ書肆から出てゐる或る他の書物への緒言(Vorrede)を送つたことを思ひ出すことが出來た。それの受取がかうして電報で來たのである。で、正しい電文は多分かうであらうと思つた。——

„Vorrede erhalten, Einleitung X. dringend.“『チョゲンウケトツタXノジョブンイソグ』我々の假定にして誤りがないとすれば、この電文は電信技手の食慾コムプレックスのために改作の犠牲となり、その際而もこの文章の兩半が、發信者自身の意圖したよりはもつと深いところに於いて關係づけられたのである。その上これは、多くの夢に就いて指摘され得る『第二次仕上げ』の現象の好適例である。(一)

【註】(一)『夢の註釋』參照。

ジルベラー H. Silberer は『國際精神分析學雜誌』第八卷、(一九二二年)に於いて『傾向的誤植』と云ふことが有り得ると論じてゐる。

そこに一つの傾向の存することを容易に抗爭し得ないやうな誤植が他の人々に依つて時々指摘される。例へばストルファーの『中央精神分析學雜誌』第二卷(一九一四年)に寄せた『政治的誤植鬼』の

如き、また同誌第三巻（一九一五年）の小論の如き——。これを私はこゝに轉載しておく。

（十八）『二つの政治的誤植が四月二十五日の「三月」の號に出てゐる。アルギロカストロン（一）からの手紙の中にツォグラフォス、即ちアルバニアに於ける暴動的エピロス人の指導者（或は、エピロス（二）の獨立統治の大統領と云つた方がよければそれでもよい）から聲明が出た。その内にかう云ふ文句があつた。——「自主的なるエピロス人はヸイド侯の最も基本的なる利益の内に躊躇するものである事を信じて下さい。エピロス人の上に侯は失脚して（Stürzen）よいのです。……」エピロス人たちが侯に提供する支持（Stütze）を受容することが侯の失脚となるであらうことは、この致命的な誤植はなくとも、アルバニア侯は恐らくよく承知してゐたのである。』

【註】（一）（二）トルコの地名。（譯者）

（十九）私は近頃自分で、ヸィンの或る日刊新聞紙上に、『ルウマニア治下なるブコヸィナ』との記事を讀んだのである。これの見出しを人々は少くとも倘早であると考へて當然であつた。何となれば當時に於いては、ルウマニア人は自分等の敵意をまだ認めてはゐなかつたからである。内容から見ると、疑ひもなくこのルウマニアと云ふはロシアでなければならないのである。併し檢閲者もこれを見落したところを見ると、彼にとつてもこの見出しはをかしくなかつたものと見える。

テッシェン Teschen に於ける有名なる出版書肆カール・プロカースカの印刷した回狀の中に、次のやうな正字法的の書き損ひを見るならば、それは一つの『政治的』誤植でないと考へることが困難である。——

『協商國側の裁斷に依つて、オルザフ河を境界として、シュレージェンのみならず、テッシェンをも二分し、その一はポーランドに、他はチエコ・スロワキアに過多(Zuviel)である。』(一)

【註】(一) Zufiel (歸した) の誤植ならむ。(譯者)

フォンターネ Th. Fontane はかつてあまりにも意味深長な誤植に對して、抗議を申込まざるを得なかつたが、その申込み方が非常に面白かつた。一八六〇年三月二十九日付で、彼は出版者ユリウス・シュプリンガーに對してかう書いた。——

拜啓

自分の小さな願ひが實現されて行くのを眺めてゐるのは私の運命でないやうに思はれます。こゝに同封した校正刷を一覽下さつたら私の云はうと欲するところの何であるかゞお分りになりませう。また私は前に云つたやうな理由からして校正刷を二枚入要なのですのに、一枚しか送つて下さらなかつたですね。また初校にも一度目を通す——つまり英語と英文とのために——ことを取計つて貰へなか

つたですね。これは私には重大なことなんです。例へば今日の校正の二十七頁の、ジョン・ノックスと女王との間の一場面に „worauf Maria a a srief"『その後で、マリアは土左衛門と叫ぶ』とあります。こんな有樣でもそちらでは誤植は實際なくなつてゐると安心してゐるのです。不幸にして „aas"(アース)(土左衛門)であつて „aus"(アウス)(出す＝叫び放つ)でないから愈々困るのです。だつて彼女(女王)は彼の事を實際心の中では土左衛門(アース)と呼んでゐるだらうからです。匆々。

フォンターネ拜

我々が云ひ損ひよりは書き損ひをやり易いものであると云ふことは容易に分るが、ヴント Wundt はこれに對して注意すべき證明を與へてゐる。(三七四頁)『正常の會話の間に於いては意志の禁壓機能は觀念の道程と發語運動とを互に調和させるやうに、いつもさし向けられてゐる。ところが書く場合のやうに、觀念に隨從する發語運動が機制的原因のために阻まれると、その結果そのやうな期待が特に容易に現れるのである。』

讀み損ひの起り易い條件を觀察して見ると一つの疑問が起つて來る。その疑問を私は不問に附しておきたくないのである。何故ならば、そのやうな疑問は、私の考へるところでは、一つの得るところ多き探究の出發點となり得るからである。聲を出して讀んでゐると、讀者の注意は本文から遊離して

讀者自身の思想の方に屢々向つて行くものである事は誰しも知つてゐる通りである。このやうに注意が遊離する結果、もし途中で遮られたり尋ねられたりしても何を自分が讀んでゐたか云へないことが屢々ある。換言すれば、彼はよしんば文字だけは殆どいつも正しくは讀んでゐるにしても、實は自律的に讀んでゐるのである。私はそのやうな條件のために讀み誤りが氣が付くほど殖えるとは信じない。總ての機能はそれが何等の意識的注意を伴はず、自主的になされた場合には、最も正確に活動するものであることを我々は常々認めてゐる。從つて、云ひ損ひ、書き損ひ、讀み損ひに於いて如何なる條件が注意を支配してゐるかと云ふことは、ヴントの假定（注意の離脱、又は減退）とは別の假定を下さなければならないやうに思はれる。我々が分析に附して來た多くの實例に就いて見ても、注意の量的減退がその原因であると見做す權利は我々に與へられてをらぬのである。我々はそれとは恐らく全然同一でないもの、注意を攪亂す見知らぬ思想の如きものを發見したのである。

×

『書き損ひ』と『忘却』との間に、誰かゞ署名をするのを忘れたやうな場合をさし加へることが出來よう。署名のない小切手は忘れられた小切手に過ぎない。そのやうな忘却の意義に對しては、或る小説の一節を引證しよう。これはハンス・ザックス博士が氣付いたものである。——

『精神分析的の意味に於けるやり損ひ、及び症狀行爲の機制の利用法を、詩人が如何に確實に知悉してゐるかの非常に有益な透徹した實例は、ジョン・ガルスウォージ John Galsworthy の小說 'The Island Pharisees' 中に發見せられる。富有な中流階級に屬する一青年が、深い社會的同感と自分の階級の因襲との間に立つて逡巡するのがこの作の中心點となつてゐる。第二十六章に於いては、彼がその獨創的な人生觀に牽付けられて二三度恩惠を施したことのある或る若い漂浪者の手紙に依つて彼が動かされるところが描いてある。その手紙には金を吳れと云ふやうなことは直接的には書いてはない。併し甚だしい貧困の狀態を細々と書かれてはその意味に解するより外はなかつた。手紙を受取つた彼はまづ、いくら遣つても決してよくなりはしない者に金を與へやうとの考へを拒み、その代り慈善事業を支持した方がよいと思ふ。同類の一人に救ひの手を、自ら進んで大金を、友達のやうな挨拶を與へると云ふことは、而も先方が困つてゐると云ふだけの理由で何等利害を顧慮せずして與へるとは、何たるセンチメンタルな馬鹿げた話だ！ いゝ加減なところで手を切らなくちや駄目だ！」併し彼がこのやうな決心を口ずさんでゐる間に、恰も彼の正義感が「嘘をつけ！ お前は金が惜しいのだよ、それだけの事さ！」と抗議を申込むかのやうに感ずるのであつた。

そこで彼女は友情に滿ちた手紙を書く。その手紙は「私はこゝに小切手を同封しておきます。さよ

なら。リチャード・シェルトンより」との文句で擱筆されてゐた。

「彼が小切手を書く前に、蠟燭の周りを飛び廻つてゐた蛾が彼の注意をそらしてしまつた。そこで彼はそれを捉へて戸外に放り出してしまつた。併しその間に、彼は小切手が手紙の中に入れてないことを忘れてしまつた。」手紙は實際そのまゝ出してしまはれたのである。

併し忘却は、出し惜みをする利己的傾向の一見征服されたものが擡頭して來るためと云ふよりは、もつと微妙な動機に因るものである。

シェルトンは將來自分の舅姑となる人の田舍の家で、許嫁、家族、客人等の間で淋しいやうな感じがしてゐた。彼のやり損ひに依つて見ると、彼は自分の周圍の同じ因襲に依つて同じやうな形にはめこまれたやうな無難な人々と完全に對蹠するやうな過去と人生觀とを有する味方を自分のために欲しがつてゐたのである。ところが二三日經つて實際やつて來たのは、支へてゐてやらなければ自分の位置に立つてゐることさへ出來ないやうな例の男で、彼は送つて呉れたと云ふ小切手が封入してないのはどう云ふわけかとその說明を求めに來たのであつた。』

第七章

印象及び意圖の忘却

精神生活に對する我々の現在の知識狀態を過大に評價する傾きのある人に對しては、須らく記憶機能の如何なるものであるかを惟うて卿等の態度を謙譲にせよと吾人は云つてやる必要がある。如何なる心理學說も記憶及び忘却の基本的現象を相關聯させて闡明し得たものはない。左樣、吾人が實際に觀察し得るところのものを完全に分解することは、未だ殆ど着手されてゐない。今日に於いては、忘却と云ふことは記憶と云ふことよりも一層わけの分らぬものとなつて來た。殊に夢や病的狀態の研究からして、我々が永い間忘れてゐたと信じてゐたことでも忽ち意識へと返り來ることが明かとなつたために、なほさらさうである。

實は吾人には多少の見地があるのだが、それが一般の承認を得ることを吾人は期待してゐる。吾人は、忘却が一つの自發的現象であつて、それが或る時に發出し來るものである事を假定するのである。忘却に於いても、與へられたる諸々の印象の間に或る選擇がなされるが、それと同じに、その各々の

印象や思考の單位の間でも選擇がなされると云ふ事を吾人は强調する。あたりまへならば忘れられてしまふものが記憶中にこびりついてをり、また記憶中に眼覺め來るには相當の條件があるが、その條件の二三を吾人は知つてゐる。併し日常生活の無數の場合に就いて見ると、吾々の認識が如何に不十分なものであり不滿足なものであるかと云ふ事が分るのである。例へばこゝに一緒に旅をして共通的な外的印象を受けた二人があるとして、暫く經つてからその二人が自分等の印象を語り合つてゐるのを聽いてゐて御覽なさい。一方の人の記憶にしかと殘つてゐる事を、他の方の人は宛もそれが起らなかつたかのやうに忘れてゐることが屢々である。よしんばその印象が一方の人に對しては他方の人に對してよりも、精神的に重要であつたとは云へないやうな場合に於いてもである。如何なる契機が記憶の選擇力を決定するか、その多くは我々にはまだ明かに知られてはゐないのである。

何が忘却の條件であるか、それを知ることに多少の貢獻をなしたいと思つて私は、自分自身の忘却の個人的の場合を精神分析に附する慣はしにして來た。概して、私は自分にその忘却がをかしい、これは覺えてゐさうなものだのに忘れるのはをかしいと思はれるやうな一團の場合だけを取上げて來た。更に私はこれだけは斷つておきたく思ふ、それは私が物事（自分の學んだ事はともかく、自分の經驗した物事）をあまり忘れない方であると云ふ事だ。また私は若い頃の一時には記憶の非常な離れ

業を演じて見せる事が出來たと云ふことだ。私の學童時代には自分の讀んだ本のその頁を空で云ふ位の事は何でもないことであつた。また大學に這入る前には科學的內容の通俗講演ならそれを聞いた直後には殆ど言葉までそのまゝで文章に書き下すことが出來た程であつた。最終の醫學上の試驗のために緊張した時にも、私はこの能力の餘りを用ゐたものと見えて、或る問題に於いて私は自分の思ふやうな答案を試驗官に提出したのであるが、それが教科書とそつくりそのまゝであつたのである。而も私は教科書をたつた一度きり、非常に急いで眼を通しただけであつたのだ。

自分の記憶の繰縱力はその時分以來だん〳〵と衰へて行つたが、併し最近に於いては、自分は或る技巧を用ふると普通では思ひ出せないことまで思ひ出すことの出來るものであることを確信するやうになつた。例へば、或る患者が診療時間中に來て、私が以前に彼に會つた事があると云ふが、その事實も時日も自分に想ひ出せないとすると、私は自分で探つて見るのである。つまり、私は現在から逆登つて幾年かを急いで心の中に思ひ出すのである。何かの記錄や確證が患者の方から出て私の想起力を助けて呉れると、十年以上の場合でも半年以上も間違ふことは殆どない。(二) 一寸とした知合ひの者に會つて、禮儀としてその小さい子供の事を尋ねるやうな時も同じである。相手が子供の生長に就いて話すならば、その子供は今幾つ位になつてゐるかゞ思ひ出せる。父親の語るところに依つて見當を

つけて大抵は一ヶ月か、大きな子供にしても三ヶ月位しか間違はない。そのくせ、何に依つてこの見當をつけるかは自分ながら分らないのである。近頃では私は非常に大膽になつて、自分の方から自發的に見當をつけて云ひ出すが、而も相手の子供に就いて何も知らない事を暴露して父親の氣を惡くするやうなことは滅多にない。このやうに私は自分の意識的記憶を、それよりも常に遙かに豐富なる無意識的記憶を誘發することに依つて眼覺めしめるのである。

【註】（一）普通には話をしてゐる間に、最初の訪問當時の事が意識に上つて來るものである。

そこで私は、多くは自分自身が觀察したところの、忘却の驚くべき實例二三を報告するであらう。私は印象及び經驗の忘却（つまり知識の忘却）と、思考（意圖）、即ち爲ないでおいた事の忘却とを區別する。多くの觀察の結果はきまつた形をとつた。これを定理の形にするとかうである。——あらゆる場合に於いて、忘却は不快の動機に基くこと明かなり。

（A）印象及び知識の忘却

（一）或る年の夏、私はそれ自身何でもない事のために妻に對して非常に怒つた。我々は共同食卓に、丼インから來てゐる或る紳士と向ひ合つて座つてゐた。その紳士を私は知つてゐたし、先方でも

私を多分想起してゐる事は分つてゐた。併し、私にはこの舊知を復活させないやうにとの理由があつた。私の妻は自分の前に座つてゐる男の虚名だけを聞いてゐるものであるが、その男が隣人と語り合つてゐる事に聽入つてゐる樣子を露はに示したものである。何故ならば、彼女は時々私の方に向いて彼等の話に糸口をとつた事を私に尋ねると云ふ有樣であつたからだ。私は我慢出來なくなつて遂に怒つてしまつた。數週間の後に、或る親戚の者に向つて妻のかうした態度に就いて不平を鳴らしてゐた。併し私はその紳士の會話の一語をだに想起することは出來なかつた。私は平素はどつちかと云ふと執念深い方で、腹の立つた點など細かいことまでなか〳〵忘れられない方であるが、この場合に限つて忘れたと云ふのは恐らく妻の事に氣をとられてゐたゝめであらう。最近にもまた同じやうな經驗をした。ほんの二三時間前に妻が云つた事を話して或る親友と笑ひ合はうと思つたのだが、どうしたわけだか、その妻の云つた言葉がどうしても思ひ出せないためにその計畫は駄目になつてしまつた。私はまづ妻に向つて、彼女が何と云つたのだつたつけねと訊かなければならなかつた。この場合に於ける私の忘却は、我々に最も近しい繫累に關する判斷の攪亂のために我々が動かされる、そのやうな攪亂の典型的なものに似てゐることは容易に分るのである。

（二）　ヸィンには始めて來た或る婦人のために、彼女の書類や金員を入れておく小さな鐵製の手提

金庫を心配してやることを私は引受けた。私がそれを引受けた時には、そのやうな器具の竝んでゐるところを見た建物が市內の目貫の所に立つてゐる影像がありありと眼前に彷彿したのであつた。私はその街の名を想起することは出來なかつたが、併し市中を散步してゐる內には慥にその店の前に出るに違ひないと感じてゐた。何となれば、自分の記憶ではその店の前を何度となく往來したことがあつたからである。ところが、私は市中の目貫の所を縱橫に步いて見たが、金庫店のある建物を發見することが出來ないで、焦々して來た。そこで私は營業案內で搜すより外に途はないときめ、もしそれでも搜出すことが出來なければ、市中の第二圈に行つて搜して見ようときめた。併し、そんなに骨を折るにも及ばなかつた。案內記の住所錄中に、私は自分の忘れてゐた家が直ぐに發見出來た。私がその飾窓の前を幾度となく通過ぎたことは事實であつた。併しそれはこの同じ建物の中に隨分幾年もの間住んでゐたM家族を訪れる度每に通り過ぎたのであつた。これほどの親交も全然疎遠になつてしまつた後には、私はその家竝びにその近所を出來るだけ避けるやうに氣をつけてゐた。と云つて、別に自分の行動の理由を考へてゞはなかつたのである。飾窓に金庫を尋ねて市中を步き廻る時、私はその近所の何れの街をも步いたのであるが、併し肝心の街は宛もそれが禁斷の地でもあるかのやうに避けてゐたのである。

この場合に於いて、私をして捜し得ざらしめた不快の動機なるものは首肯出來る。併し忘却の機制は上述の實例に於けるやうに、それほど單純ではないのである。私の反撥は勿論金庫の製造人に關してゐるのではなくて、私がその人に就いて何事をも知るを欲しない彼に關してゐるのであつて、後には私の反撥は後者からこの事件に移つて來、さうしてこの忘却となつたのである。同様に、さきに述べたブルクハルト Burckhard の場合に於いても、一方に對する不快が他方の名前を書き誤らせたのである。この場合では名前が同じであるために全然異つた思想の流に聯結をつけたのであるが、飾窓の場合に於いては場所が近接し連續してゐるために兩者が結ばれたのである。それのみならず、後者の場合に於いては兩者は一層密接に結びついてゐるのだ。何となれば、この家に住んでゐる家族との疎隔には金が大きな役割を果すものだからである。

(三)　ＢＲ社からその社員の一人を來診してくれとの依頼が私にあつた。この社のある建物へ行く途中で、私はその家へ旣に幾度も出向いたことのあるやうな氣が頻りにして來た。私は下の方の階にこの社の看板を常々見たやうに思ふのであるが、而も自分は上の方の階に向つて往診に赴きつゝある。併しながら、自分はどの家がそれであるか、また何時私がそこを訪れたか、想ひ出すことは出來なかつた。抑々こんなことはどちらでもいゝ事であり、また何等重要なことでもないのに、而も私はそれ

を問題にし、遂に例に依つて廻りくどい道程をたどり、これに關聯して私の想起するさまぐ〵な思想を搔集めて、BR社のあるより一つ上の階には、自分が屢々來診したことのあるフィッシャー館 Pension Fischer のあることを私は知つた。今や私は社と館とを包含する家をも知つた。

併しながら、如何なる動機がこのやうな忘却をなさしめたのであるか、なほ私には見當がつかなかつた。この會社自體に關しても、フィッシャー館に關しても、そこにゐる患者に關しても、私には別に不快な記憶などはなかつた。その動機となつてゐるものが非常に苦痛なものに關してゐないことも私には推察された。さうでなければ、先の實例の場合のやうに外的なものゝ助けを借りることなしに、忘れたものを迂路を辿つて摑む事は出來なかつたわけである。最後に思ひ當つたことは、新患者往診のために出掛ける丁度前に、或る紳士に街上で挨拶されたが、その人の何者であるかを思出すのに隨分骨を折つたことであつた。數ヶ月前に私はこの人を相當の重態に於いて診てさうして進行的の麻痺との診斷を下したのであつたが、併し後になつて彼の全快したことを、つまり自分の誤診であつたことを知つた。麻痺性痴呆症に於いては普通に發見される病勢輕減狀態を、我々がこの患者に就いて見たと云ふことは有り得ることでなかつたか。さうであるならば、私の診斷とてもやはり正しかつたのである。この邂逅の影響が働いて、私はBR社の近隣の館を忘れるやうになつたのである。さうして

忘れた事を發見しようとの私の興味は、問題の診斷のこの場合から移されてゐたのだ。併しこの密接ならぬ關係が内的聯想に依つて結ばれる事になつたのは、名前が同じであるためである。期待に反して全快した人はやはり、私にいつも患者を推薦してくれる或る會社の社員である。さうして私と一緒に、その問題の痲痺性患者を診察した醫者はやはり、その同じ建物にあつて私の忘れた館と同じくフィッシャーと云ふ名であつた。

（四）　物を置違へると云ふことは物を置忘れると云ふことゝ同じ意義のあることである。書類や本を扱ひつけてゐる大抵の人々と同じやうに、私もまた机のまわりをよく見當がついてゐて自分の入用なものは一氣に搜し出せるやうにしてある。他人には亂雜に見えても、自分にはチャンと秩序が立つてゐるのだ。では、何故に私はさき頃自分に送られたばかりの或るカタログを置違へてどうしても見付け出すことが出來なくなつたのか。そればかりでなく、そのカタログの中にある『言語に就いて』„Über die Sprache“ と云ふ書物は、その文體が生々として私は好きであり、またその心理洞察力と文化上の知識とを私が鑑賞したいと思つてゐる或る著述家の作であるから、自分が注文したいと思つてゐたのではないか。ところがそれこそは私がそのカタログを置忘れた理由に外ならぬと私は思ふのである。私はこの著者の書を啓發のために友人たちに貸してやるのが習はしになつてゐた。ところが數

日前に、或る人が自分にその著者の書物の一册を返しに來て云つたことがあつた。――『この著者の文體はそつくり貴方の文體ですね。それに物の考へ方も全く同じですよ。』と。その人はさう云ふことに依つて如何なる事に觸れつゝあるかと云ふことは知らなかつた。幾年も前に、私がまだ若くて人をあてにするやうな氣持の强かつた頃に、或る年長の同業者が今のと同じことを私に云つた。その同業者に對して私は或る知名の醫學者の文章を推薦したのであつた。『文體と考へ方も貴君にそつくりだ』と彼は云つた。非常に感化を受けて私はこの著者に手紙を出し親交を求めたが、併しその返事は甚だ冷やかなもので、私は自分の殼の中に引込んでしまつた。多分現在のこの經驗の背後に、もつと以前の、おや〳〵と思ふやうな經驗が匿れてゐるものであらう。私は置忘れたカタログを見付け出すことは出來なかつたからだ。で、私はこの事實のために問題の書物を註文することを實際上差控へることになつたのである。而も、私はその書物の名と著者の名とを記憶してゐたのであるから、カタログがなくなつた位では書物註文の眞の障碍にはならなかつたのではあるが――。

【註】（1）フィッシャー Th. Vischer 以來、偶然は對象の惡意に歸せられてゐるが、さう云ふ風なさま〴〵な偶然に對しては私は同樣な說明を下したいと思つてゐる。

（五）こゝにまた一度置忘れられて、後に再び見出されたその見出された方が面白いので注意に價

すべき置忘れの一實例がある。或る若い男が私にかう話した。――『數年前に私達夫婦の間に或る誤解がありました。妻はあまりに冷淡であると私は思ひました。さうして私は彼女のよい性質を十分に認めてゐたのに拘らず、吾々は互ひに優しみのない態度をとり合つてゐました。或る日、彼女は散歩に出て、私の興味を牽く書物を買つて持つて歸りました。私はこのやうな「配慮」のしるしに對して感謝し、何れ讀むからと云つて片付けたのですが、それがどうしても見付からないのです。幾月は過ぎたが、その間私は時々その失はれた書物を思ひ出し、いろ〳〵捜して見たが駄目でした。約半年の後に、我々とは別居してゐる私の實母が病氣になりました。私の妻は我が家を離れて、自分の姑を介抱するために出掛けました。病氣は重態となり、それが彼女としてはその最も善い一面を發揮する機會となりました。ある晩、私は妻の行爲に感激し感謝しつゝ我が家へ歸つて來ました。私は自分の机に寄り添ひこれと云ふ定まつた目的もなく、併し夢遊病者の確實さを以てその机の或る抽斗を開けました。ところがその中の一番上のところに、置き忘れて永い間捜してゐた例の書物がありました。

置忘れの動機が分つた時に再發見がわけなく出來た點に於いて右の實例と一致する置忘れの一つの場合を、シュテルケ J.Stärcke が述べてゐる。

（六）『或る若い娘が布片で襟を拵えやうと思つて、つい切損つてしまつた。それで隣りの女に來て

それを直して貰ふことになつた。隣りの女が來て、娘がその切損つた襟を慥に入れたと信じた抽斗からそれを出して見せようとした時に、それがどうしても見付からなかつた。娘は一番下のを上にひつくり返して見たが出て來なかつた。彼女はいら〳〵してどうして布は急に見えなくなつたのだらう、妾は多分捜し出したくないのかしらと自問した時に、彼女は襟のやうな簡單なものを仕損つたことを隣りの女の前に恥ぢてゐるのだと云ふことが分つた。さう考へると彼女は別の箪笥の前へ行き、今度は少しもまごつかずにその切損つた襟を取出して持つて來たのであつた。

（七）次に揭げる置忘れの實例は、精神分析者ならば誰しも知つてゐる一つの型にあてはまるものである。而もこの置忘れをやつた患者自身がその解決の途を自分で發見したのだと云ふ事を、私は云ひ添へておきたい。

『精神分析治療を受けてゐた或る患者、丁度夏休みで治療が中絕してゐたのが抵抗と不健康の狀態にあつた時期に當つてゐたが、その當時或る晚に彼は着物を脫ぐ折に、鍵束をいつものところに置いたつもりであつた。やがて彼はその翌日（治療の最後の日）には旅行に出なければならないことを想起した。治療の最終日と云ふので、謝金を拂はなければならないことも思ひ出した。それで彼は、金もしまつてある抽斗の中からなほ二三の物を取出したいと思つた。ところが肝心の鍵が――見えない。

彼は自分の大きくもない住居所を組織的に、併し段々亢奮しつゝ搜した。――どうしてもない。その時、彼は鍵の『置損ひ』が徴候行爲である事が、從つてまた故意的のものである事が分つたので、召使を起し「囚はれざる者」の助けを借りて搜索を續けることにした。一時間の後に、彼は搜索を打切り、鍵を失くしてしまつたのでないかと思つた。翌朝になつて彼は家具商に命じ、急いで合鍵を拵えさせた。家の方へ同車して來た二人の知人は、彼が車から降りた時、何か地上にガチリと音して落ちたのを思ひ出すと云つた。で、彼は鍵がポケットから滑り落ちたのだと思ひ込むやうになつた。夕方になつて召使は意氣揚々として鍵を彼にさし出した。鍵束は大部の書物と薄い小册子(私の一門弟の著作)との間に挾まつてゐた。彼はこの小册子を夏休み中の讀みものにしたいと思つてゐた。鍵束はまさかそこにあるとは何人も考へないやうな巧みさでそこに置かれてあつた。彼自身でもそれを元通り見えないやうに置くことは出來なかつた。祕められた、然し强烈な動機のために、或る品物を置損ふ無意識的の巧妙さは、人をして「夢遊病者の確實さ」を思はせる。その動機と云ふのは、勿論、治療の中絕したことを面白く思はなかつたのと、まだ病氣がよくもなつてゐないのにこんなに高額の料金を拂はなければならない事を私かに憤慨してゐたことゝである。』

(八)　ブリルは報告して曰く、或る男があつて、彼は自分の興味のない或る社交的會合に參加する

やうに妻君に强いられた。妻君の懇願默し難くて、トランクから衣服を取出さうとして、急に髯の剃つてないことを思ひ出した。さて髯をそつて歸つて見ると、トランクには錠が下してあつた。ところが、いくら熱心に搜して見ても、それの鍵が見付からない。錠前屋も日曜日の晩だからゐない。で、二人は會には遺憾ながら出席出來ない旨を報告してやらなければならなかつた。次の朝トランクを開けて見ると、失くなつた鍵はその中に入つてゐた。亭主は放心狀態で鍵をトランクの中に入れたまゝで錠前を下してしまつたのだ。彼はこの事が全然意圖的でなく無意識的であつたことを保證してゐるが、併し我々は彼がこの社交的會合に出たくなく思つてゐたことを知つてゐる。鍵の置損ひは、それ故に、全然動機がなかつたのではない。

アーネスト・ジョーンズは煙草を喫ひ過ぎて健康を害した場合には、何時でもパイプを置違へる習慣のあることを自分で氣がついたと云つてゐる。さう云ふ場合には、パイプはまさかと思ふやうな、また通常置きつけないところに置いてあるのであつた。

（九）或る無難な場合で、その動機を本人の承認してゐる實例をドーラ・ミュラー Dora Müller が報告してゐる。――

エルナ孃がクリスマスの二日前にかう話した。――『まア考へても下さい、妾は昨晚、妾の胡椒菓

子の包みから取出して喰べてゐたのですが、その時S孃（彼女の母親の社中の女）がお休みなさいを云ひに來たら、その菓子を少し分けてやらなければならぬと考へてゐました。本當は與りたくはなかつたのですが、併しそれでも是非さうしようと思つてゐたのです。程へてSさんが見えたので、妾は机の方に手をやつて包みを取らうと思つたのですが、そこにないのです。で、搜して見たら、妾の戸棚の中にしまつてありましたの。だつて、妾は自分で知らないで、その包みを片付けてしまつてゐたのですもの。』分析の必要はなかつた。本人は自分で這般の事情をよく承知してゐたから。お菓子を自分だけで持つてゐたいと云ふ感情は抑壓されてゐたのだが、それでもなほそれ自身の行爲となつて表れ出たのである。が、勿論この場合に於いては、續いて起つた意識的な行動に依つてその感情は戾されることになつたのである。（國際精神分析學雜誌、三卷、一九一五年）

（十）ハンス・ザックスはそのやうな置忘れのために嘗て仕事の責務から免れたことのある話をしてゐる。――『過ぎた日曜日の午後、私は仕事をしたものか、それとも散歩に出てそれからその足で友達を訪れることにしたものか、どうしようかと暫く迷つてゐた。ところがその思惑の後に、私は仕事をすることに決心した。約一時間の後に、私は自分の用紙の蓄へが盡きてゐるのに氣がついた。併し私は何處か抽斗の中に旣に數年來、一束の紙を保存しておいた事を知つてゐた。ところが、その紙を

探ねて私は自分の机の中やそれのありさうに思へるところをあちこちと捜し、これと思ふような古い本や小册子や手紙類などを引繰返して見たのだが、どうしてもない。そこで私は自分の仕事を中止して出掛けざるを得ないことゝなつた。夕方になつて家に歸り、ソーフャに腰を下して、眞前に立つてる書棚をぼんやりと考へながら眺めてゐた。その時、一つの抽斗が私の眼についた。さうして私はその抽斗の內容を隨分久しく調べて見なかつたことに氣がついた。そこで私は書棚に近寄つて、その抽斗をぬいて見た。一番上には革製手鞄があつて、その中に白紙が這入つてゐた。併し、私はその紙を取出して机の抽斗にしまつておかうと思つた時に、始めてこれこそ私が午後に捜しあぐんだその紙であつた事を想出したのであつた。なほ私は、他の事にはあまり仕末がよい方ではないが、紙の事となると非常によく氣をつけて扱ひ、まだ使へさうなのは僅かの殘りでもちやんととつておく方だと云ふことも云ひ添へておかねばならぬ。この時の忘却の本當の動機が失くなつた今、この忘却を直ちに是正してその在りかを告げたものは、本能的に培はれてゐるこの習慣であつたことは明かだ。』

置き忘れのいろ〳〵な場合を通覽すると、置き忘れなるものが常に一つの無意識的意圖の結果に外ならぬことを認めざるを得なくなるのである。

（十二）一九〇一年の夏、或る時、私は學問上の問題に關して當時盛んな思想的交換をしてゐた一

友に對してから云つて遣つた。――この神經症上の問題は、一個人が本來兩性的なものであるとの假定の基礎に完全に我々が立脚する場合にのみ、解決することが出來るのだと。それに對して私はかう云ふ返事を受取つた。――『それは僕が旣に二年半前に、我々があの夕方の散步をブル……でした時に君に云つたところだ。當時君はそれを聞かうとはしなかつた。』實際このやうに自分の獨創を放棄せよと出られることは苦痛である。私はそのやうな會話も、私の友がそんな說を吐いたことも思ひ出せなかつた。我々の內何れか一方が己を欺いてゐるのだ。ところが何方に都合がよいかの原則に從へば、欺いてゐるのは私でなければならぬ。實際、その次の週の間に、私は友の云つた通り一切を思ひ出した。私自身その當時に『私はそれほどには考へない、そのことは論議する氣持もない』と答へたことを想ひ起した。併し、この事あつて以來、私は當然自分の功績であるところの思想に關する醫學上の論文に自分の名の出てゐないことを見ても、寬恕することが一層出來るやうになつた。

妻君への批難――離れ〳〵になつた友情――醫者の處方箋の間違ひ――同業の故の排擠――他人の思想の剽竊など――これ等の苦痛な題目に觸れないと、手當り次第に擇んだ忘却の數々の實例の解決がつかないと云ふことは偶然ではない。誰でも自分の忘却の下に橫はる動機を調べて引出さうとするものは、これと等似た不快の見本カードをなほ差加へて行くことが出來るであらうと、私は思ふので

ある。面白からぬことは忘れようとする傾向は誰しも普く持つところであると考へられる。それをどの位にうまく忘れるかと云ふことは、勿論人によつてまち〳〵である。我々は醫師としての仕事をしてゐる内に屢々忘却を通り越して否定に遭遇するが、それはやはり忘却に歸することが出來ようと思ふ。(二)このやうな忘却に對しては、我々の考へ方では、否定と忘却との區別を純然たる心理的關係に限定するのである。さうしてこれ等二つの反應作用を同一動機の表現と見做すことが許されるのである。不快な記憶を患者の近親の者が否定する實例を私は屢々觀察し來つたが、その内特に變つた實例として私の記憶に殘つてゐるものがある。

【註】(一) 我々が或る人に、君は十年か十五年前に黴毒性の病氣に罹つたことがあるかと訊いたとする。その時相手がこの病氣を、例へば激しいリウマチスのやうな病氣と心理的には全然別な態度で扱つたと云ふことを、我々は甚だ忘れ易いものである。——神經症の娘の事に就いてその兩親が忘却してゐたことを想ひ出すのは、何處までが忘れてゐたことで何處までが匿されてゐたことか、その間の區別を正確に見るのは殆ど不可能である。何となれば、娘の將來の結婚の邪魔になるやうなことは兩親に依つて組織的に取除けられてゐるからだ、つまり抑壓されてゐるからだ。——最近に肺病でその愛妻を失つた或る夫が、醫者の質問に間違へて答へた場合を次のやうに私に報告してゐる。これなどは以上述べた忘却の理論に依つてのみ說明することが出來る。『私の妻の胸膜炎が幾週經つても去らないので、P

博士に來診を乞うた。病氣の經過を尋ねる内に、例に依つて、私の妻の家族中に何か肺の病氣に罹つたものはないかと云ふ問ひがあつた。私の妻はないと云つたが、私自身も思ひ出さなかつた。P博士が辭去しようとする際に、談はたま〱保養旅行の事に及んだが、その時妻はかう云つた、――えゝ、それにランゲルスドルフには私の兄の墓があるんで御座いますけれど、あそこまで行くのもなか〱大變な旅行で御座いますからと。この兄と云ふのは永年の結核をわづらつた後に、十五年ばかり前に死んだのであつた。私の妻はその兄を非常に好いてゐて、私にも屢々その兄の事を話して聞かせた。さう云へば、彼女の病氣が胸膜炎だと診斷された時、彼女は非常に心配して悲しげにかう云つたことを私は思ひ出した。私の兄さんもやつぱり肺の病氣で死んだのだと。併しその記憶は非常に強く抑壓されてゐて、前に述べた會話でランゲルスドルフへの旅行の話が出た後でさへも、彼女は家族にこの病氣の者のあつたこと云はうとはしなかつたほどである。私自身は、妻がランゲルスドルフの話を始めたその瞬間に、この忘却の事がチラと頭をかすめた。』――これと全く似たやうな體驗を、アーネスト・ジョーンズは本書中に既に引用した彼の著述中で述べてゐる。或る醫者の妻君が診斷上不明な或る腹部の病氣に罹つた時、その醫者は慰めるやうにその妻に云つた。『でも、お前の家族には結核の病人は出てゐないんだから、まアいゝやね。』それを聞いて妻君は非常に驚いて云つた。『ぢやア、あんたは忘れたのですか、妾のお母さんは結核で死んだし、私の姉も結核で醫者から見放されてからやつと治つたのですのに……?』

今では思春期にある息子の少年時代の事を私に話して、或る母親が云つた。その息子は彼の兄弟姉

妹たちと同じやうに少年時代中夜尿の癖があつた。この夜尿なるものは神經症患者の經過中に於いて憶に或る意味を持つてゐるのである。二三週の後、彼女が治療の具合は如何ですかと訊ねて來た時に、私はこの青年には體質上病的の素質の徵候のあることに就いて彼女の注意を促してゐたが、その時私は一時忘却されてゐて想ひ出した例の夜尿の話を持出した。すると驚いたことには、彼女は息子にはそんなことはなかつたと云ふのである。他の子供たちにもそんなことはなかつたと云ふのである。さうして遂には、どうしてそんな事を云ひ出すのかと私に反問するのである。已むなく私は、彼女が只今はこの通り忘れてゐるが、その少し前に彼女自身がそれを私に話したのだと云つて聞かせた。(二)

【註】(一) 私がこれ等の諸頁を書き下してゐた間に、次のやうな、殆ど信じ難い忘却の實例が私に起つたのである。一月一日に私は診察料の請求を出さうと思つて自分の診察簿を調べてゐると、六月一日の條下にM―Iと云ふ名前がある。これは誰の事だか、私にはとんと思ひ出せない。その帳簿を更に繰展げて見ると、私はその患者を療養所に於いて取扱ひ、而も幾週もの間毎日その患者の許に通つてゐると云ふのだから、愈々以て私の驚きは增した。そのやうな條件の下に扱つた患者を、醫者たる者が六ケ月經つや經たぬに忘れるものではない。それは男であつたかな、麻痺症患者であつたかな、それとも利益のない患者であつたかな、私は自問して見た。遂に、謝金受取のしるしがつけてあるのを見て、一切の事が記憶に蘇生つて來た。M―Iは十四歲になる少女で、私の後年の最も重要な研究對象であつ

て、私が到底忘れられない學問をした實例であり、またその成行が私には數々の苦痛の種となつた場合であつた。この少女はまがう方なきヒステリーに罹つてゐたが、私の世話で直ぐに、さうして完全に癒つたのであつた。このやうに全快してから、この少女は兩親に依つて私の許から引取られたのであつた。ところが彼女はなほも腹部の苦痛を訴へた。この腹部の痛みと云ふのは彼女のヒステリー症狀に於いて主な特色となつてゐた。二ケ月の後に、彼女は腹部の腺の肉腫のために死んでしまつた。殆ど先天的にヒステリーであつたこの少女は腫物を發病の源動力として採つたのであつた。さうして私は騷がしいが併し無難なヒステリーの顯現に惑はされて、醫者の眼を眩ます不治の病の最初の徵象を多分見落したのであつた。

我々はまた健全な、神經症ならぬ人間に於いても、苦痛な印象の想起や苦痛な思想の追憶は抵抗を受けるものであることの證據を豐富に發見するのである。(二)

【註】(一) ピック A. Pick は近頃『精神病及び神經症に於ける忘却の心理に就いて』の中で、記憶に對する感情的要素の影響を認め、また苦痛に對する防禦的努力が忘却に導くものである事を知悉してゐる學者たちの名を集めてゐる。併しこの現象とその心理的決定とを申分なく且つ有效に知つてゐたのはニイチェに勝るものはない。彼はその箴言集の一つなる『善惡の彼岸』の中でから云つてゐる。『「余それを爲せり」とわが記憶は云ふ。「余はそれを爲し丶筈なし」とわが誇りは云ひて一歩も退かず。遂に——記憶屈從す。』

併しこの事實の十分な意義は、我々が神經症的人物の心理に潛入した時にのみ評量し得るのである。苦痛なる感情を目醒めさせる思想に對して、我々はこのやうな根本的な防禦的努力を試みざるを得ないのである。この努力は苦痛なる刺戟に於ける逃避反應とのみ伍し得べきものであつて、やがてヒステリー症狀を示す機制の大黑柱の一つとなるのである。併し我々は苦痛な記憶に纏はられてそれから遁れることが出來ないとか、或は悔恨及び良心の苛責としてのそのやうな苦痛な情緒を退けることが出來ないと云ふやうな根據からして、かゝる防禦的傾向の受容を拒むには及ばないのである。この防禦的傾向が常に優位を占め、また心理的諸勢力の葛藤に於いて、他の目的のために反對の感情を搔き立てる諸要素をこの傾向が追出して斷然我意を押通すのだとは、誰も主張してゐないのである。心理的機構(裝置)の建築的原理として、我々は或る層成體を、相互に重なり合ふ個所(區劃)の築造を想定することが出來よう。さうしてこの防禦的努力は一つの下層なる心理的區劃に所屬して、上層の區劃からは禁壓せられてゐると云ふ氣がするのである。何れにもせよ、右に述べて來たやうな忘却の諸實例に就いて見られるやうな現象にまで辿つて行つて見ると、このやうな防禦的傾向の存在と勢力とは明かである。我々は多くの事柄がそれ自身のために忘れられる事を知つた。併しそれが可能でない場合には、防禦的傾向はその目標を轉じ、少くとも他の何等かの、それ程重要ならざるものを、卽ち本

來の不快なものと聯想的に結合されてゐるものを、忘却する。

茲に述べ來つた見方、即ち苦痛なる記憶は動機のある忘却に、特に容易に陷るものだとの見解は、ほんのいろ〳〵な方面に關係せしめて然るべきだのに、今日ではまだ何等とは云はないまでも、ほんの僅かの注意しか索いてはゐない。で、私は法廷に於ける證言の評價に於いて如何に鋭くこれを强調してもなほ足りないと思つてゐる。(一) 法廷の證言に於いては人々は證人の宣誓に彼の精神的諸勢力を純化する感化力をあまりに多く容認し過ぎてゐる事は明かだ。民族の傳統や傳說の發生に際し、國民感情に苦痛なる動機は記憶から取除かねばならないと云ふことは一般に認められてゐる。なほ巨細に調べて見ると、國民傳統の發展樣式と個人の嬰兒時代の追憶との間にも、多分全く類似の事が成立ち得るであらう。偉大なるダーヰンはこのやうな忘却の動機としての苦痛を觀破して、學者のため『黃金法』を規定してゐる。(二)

【註】(一) ハンス・グロース Hans Gross『犯罪心理學』(一八九八年)

(二) アーネスト・ジョーンズはダーヰンの自傳の中に次のやうな一節を指摘してゐる。これを見るとダーヰンと云ふ人は如何に學問に忠實でありまた心理的に鋭い人であつたかと云ふことが分る。――

『私は永年の間、黃金法と云ふのに從つて來た。と云ふのは、何時でも公表せられた事實、新しい觀察なり思想が私の眼につき、それが私の一般の結論と反對してゐる場合には、屹度直ぐにそれを覺書

きにしておくことなのだ。何故ならば、そのやうな事實や思想は、自分に都合のいゝ事實や思想よりは記憶から一層逸し易いものであることを、經驗に依つて私は知つたからである。』

名稱の忘却の場合と殆ど同じに、印象忘却の場合に於いてもまた思ひ出し損ひと云ふ事が生ずる。その場合もし自分に間違ひはないとの信念があると、それは記憶の間違ひと云ふことになるのである。精神病患者の記憶の間違ひ――妄想症に於いては、これが發狂の構成の契機としての役割を果すのだ――に就いては莫大な文獻が生れたが、それ等の文獻には間違ひの動機の何たるかに就いては全然見當らない。この題目はまた神經症心理學に屬するからして、只今我々の取扱ふ限りでない。その代りに私は私自身の經驗からして記憶の間違ひの特殊な實例を擧げておかう。この實例は無意識的な、抑壓された材料に依つて動機づけられてゐることを、またこの材料と動機との結付き方を、十分明かに示すものである。

夢の註釋に關する拙著の後半の諸章を書いてゐる間、私はたま〳〵避暑地にゐて圖書館や參考書を覗く事がなかつた。それで私は原稿の中へあらゆる種類の參考書や引用文を記憶をたよりに書込むより外はなかつた。併し勿論それ等をあとになつて直す心算ではゐたのである。白日夢に關する章を書く時、私はアルフォンス・ドーデー Alphonse Daudet の『ナバブ』Nabab の中の憐れな簿記係の著し

い姿が思ひ出された。この簿記係は作者が恐らく自分自身の白日夢を寓して描いたものであらう。私はこの男――その人を私はジョスラン Jocelyn 君と呼んだ――がパリの街をふらつきながら抱いてゐた一つの空想を判然と記憶してゐると想像した。さうして私は記憶に依つてそれを再現し始めた。この空想と云ふのは、如何にジョスラン君が奔馬の前に身を挺してこれを停止せしめたか、如何に馬車の扉が開いて或る偉大な人物が車室中から出て來、ジョスラン君の手を取つて、『貴君は私の救助者です。お蔭で命を拾ひました。何なりとお望みを協へて差上げたいと思ひます。』と云つたか、などと云ふのであつた。

この空想の再現に於いて多少不正確な點もあらうが、家へ歸つて書物を手にすれば容易に直すことが出來るのだからと思つて自ら慰めてゐた。ところがさて私の原稿の個所と比較するためにその『ナバブ』を繰展げて見ると、ジョスラン君のそのやうな夢を暗示するやうな何物もないのに私は大いに恥ぢ、且つ呆れた。實は、その憐れな簿記係はジョスランなどと云ふ名ですらなく、ジョアイウース Joyeuse 君であつた。

この第二の誤りはやがて第一の誤りであるところの記憶し損ひへの鍵を供した。ジョアイウースは女の名でそれの男名たるジョアイヨー Joyeux は、私の名フロイド Freud の可能なる佛譯語であつ

た。そこからして、それ故に私はこのやうな間違つた記憶の空想を惹起し、それをドーデーに歸したのであつたらうか。それは私自身の所産に過ぎなかつたのだ。私が自分で築き上げた白日夢に過ぎなかつたのだ。さうしてそれは意識的とならず、或は一度は意識的となつたにしても、またその後絶對に忘れられてしまつたのであつた。多分私は自分でそれをパリ市中で發明したのだ。パリでは私は隨分屢々一人で、誰か救助者はないか庇護者はないかと思ひつゝ市中を歩いてゐた。さうして遂にシャルコー Charcot の仲間に入れて貰つた。私はシャルコーの家で『ナバブ』の作者に屢々會つた。(一)

【註】(一) さき頃私のところへ讀者の内からホフマン Fr. Hoffmann の少年文庫の一冊を送られた。その中に私がパリで空想したやうな救助の場面の話が出てゐる。必ずしも普通の云ひ表はし方でもないのに細かいところまで一致してゐて、それが兩方に出てゐる。私がまだ極小さい頃、實際にこの少年文學を讀んだことがあるのだらうとの想像は全然拒否出來ない。我々のギムナジウム(中學校)の學生圖書室にはホフマン全集が具付けてあつて、それをあらゆる他の精神的營養の代りに生徒たちにいつでも提供してあつた。四十三歳の私が他の人の作を想ひ出したのだと信じたところの、さうしてやがてそれが三十九歳當時の自分自身の所業であることを認めざるを得なかつたところの空想は、して見れば明かに、私が十一歳から十三歳の間に受けた印象の忠實なる再寫であつたかも知れぬのである。私が『ナバブ』の中の失職簿記係の事だとした救助の空想は、實はたゞ自分自身の空想の道程に過ぎないこととなり、また恩惠者や支持者への待望を自尊心に抵觸しないやうにしたものであるのだ。で、私が

或る擁護者の恩惠に賴つてゐるとの思ひに對し、意識生活に於いて最大の防禦的努力を拂ひ、また似たやうな事の起きた二三の場合を描く置き違へたのだと云つても、人間の心理をよく知つた人は別にをかしくは思はないであらう。このやうな內容を持つた空想のより深い意味と、それ等の空想の殆ど到れり盡せりの說明とは、アーブラハムがその論文『神經症の空想影像に於ける父の救ひと父殺し。』（一九二二年、國際精神分析學雜誌、八卷）に見えてゐる。

記憶の間違ひのまた別の實例で、滿足の行くやうに說明され得るものがあるが、それは後に論及すべき fausse réconnaissance（誤てる再認識）に似てゐる。私は患者の一人で非常に名譽心の强い、且つ實力のある人に、或る若い學生が近頃『藝術家論、性心理學試論』„Der Künstler, Versuch einer Sexualpsychologie“と題する興味ある論文を物する事に依つて私の門下に這入つて來たと云ふ話をした。一年と三ケ月の後に、この書が印刷になつて出たときに、私の患者は私の始めて報告したよりも前に（一ケ月前か、或は半年前に）既にこの書の出版告示を何處かで、多分書肆の廣告で、見たことを慥に思ひ出すことが出來ると主張するのであつた。その廣告を見て彼は直ちに思ひ出したと云ふのだが、それのみならず、彼は著者が書名を變へ、『性心理學試論』„Versuch“……でなく『餘論』„Ausätze“……となつてゐたと確言した。併し、なほ細かく著者の事を尋ねたり、總ての時日に就いて調べたりして見ると、私の患者は何か不可能なことを思ひ出さうとしてゐるのだと云ふ事が分つた。その書物

に就いてはそれの印刷前に何處にも廣告などは出なかつた。少くともそれの出版前の一年と三ヶ月中には出なかつた。私はこの記憶の間違ひを註釋しないで放つておいたが、その内に本人がこの間違ひの、これまた價値ある改修を行つた。彼は近頃、或る書店の飾り窓に『臨場恐怖症（アゴラフオビー）』に關する一書を見たと思つた。さうしてその書物を調べられる限りの書店の目錄で捜したのだが見付からない。で、私は彼の努力が何故に效果がないかを彼に說明してやることが出來た。臨場恐怖症に關する著書はただ彼の空想中に、そのやうな書物を自分自身でも書かうとの無意識的決心としてのみ存在してゐるのだ。あの若者に負けないやうにやらう、俺もさう云ふ學術書を著して門下に入らうとの彼の野心は、あの二度の記憶の間違ひを生ぜしめたのである。彼はまた後になつて、彼の記憶の間違ひの契機となつた書肆の廣告には『創生——發生の法則』„Genesis, Das Gesetz der Zeugung“と云ふ書物の事が出てゐたことを思ひ出した。併し彼の云ふ書名が變つてゐるのは、實は、私のせいなのだ。何となれば私はその書名を擧げる時に『試論』の代りに『餘論』と云ふやうな不正確なことを敢へてした事を想出したからである。

（B）意圖の忘却

注意の缺乏と云ふことだけではやり損ひの説明には不十分であるとの命題を證明するには、意圖の忘却に勝る現象はない。意圖は行動への刺戟であつて、既に裁可を經てはゐるが、併しその實行は適當な時期まで延しておかれてゐるものである。さて、このやうにして中間の時期が生じて見ると、その間に動機に十分の變化が起きて意圖の實驗を妨げることがあらう。併しながら、意圖は忘れられてゐるのではなく、是正せられ止揚せられてゐるだけである。

何かする意圖でゐて忘れると云ふことは、日々あらゆる立場に於いて我々に起きることであるが、我々は平素それを動機の按排が變つて來たからと云ふ風には説明しないで、大抵は説明などしないで放つておく。それとも、心理的説明を試みるとすれば、實行の段取となつて行動のために必要なる注意（その意圖の生ずるためには缺くべからざる條件であり、またその當時に於いては當該行動の自由になつたところの注意）が、も早なくなつてゐるのだとの假定を下すのである。意圖に對する我々の正常の態度を觀察して見ると、このやうな説明の試みは出鱈目であるとして拒けざるを得ないのである。私が朝の中に一つの意圖を抱いて、晩にそれを實現しようとしたとすれば、私は晝間の間に二三度はそれを思ひ出すであらうが、併し晝間の中終始それを意識してゐなければならぬと云ふ必要はない。それの實現の時間が近付くと共に、突然それが私に思ひ出されて、その意圖せられたる行動のた

めに必要なる準備に取掛らしめることになる。もし私が散歩に行く時、投函しようと思ふ手紙を持つて出たとすると、私が常態の人間で神經症患者でないならば、必ずしもその手紙を手に持つて入れるべき郵便箱を捜し廻るには及ばないのである。私は大抵その手紙をポケットに入れて道を歩き、私の思想も勝手に移るまゝに移らせ、而も私は最寄の郵便箱を見れば自分の注意は動き、ポケットに手を入れて手紙を取出すやうになることを確信してゐるのである。健康者が自分の抱く意圖に對する態度は、丁度あの『催眠術後の暗示』と云つて、醒めて幾時かの後に被術中に受けた暗示の行動を爲すと云ふのと全然一致してゐる。(二) 我々はかゝる現象を次のやうに説明するのが普通である。――暗示せられたる意圖はその實行の時が近付くまで當人に於いて眠つてゐるが、その時が來ればそれは眼醒めて行動へと當人を驅るのだと。

【註】(一) ベルンハイム Bernheim 著『催眠術、暗示、並びに精神療法の新研究』(一八九二年)參照。

人生の二種の立場に於いて、心理學者に非ざる人でさへも、意圖せられたる目的に關しての忘却はこれ以上還元すべからざる元素的現象として見做さるべきものではなく、畢竟するに許されざる動機に基くものであることをよく承知してゐるのである。二種の立場と云ふのは、情事と兵役とを云ふのである。情人との媾曳に遲れた男は、すつかり忘れてゐたものだからと云つたとて、女の方ば承知す

るわけはない。直ぐにかうやられるにきまつてゐる。——『一年前には忘れやしなかつたぢやないの？もう妾のことなんかどうでもいゝんでせう？』と。そこでその男は、右に述べたやうな心理的說明を以て應へ、用事が重つてゐたものだからと云つて遁れようとしても、女の方からは——まるで精神分析醫のやうに鋭く——かう切込んで來られるにきまつてゐる。——『おや〳〵、一年前にはちつとも用事は重ならなかつたと見えるのね。』勿論、女の方とても忘れる事のあるものだと云ふことは否定しようとは思はないのだ。併し彼女は意識的逃避からと同じやうに、意圖せざる忘却からもまた、氣がないと云ふ推論が引出せると信じてゐるのであつて、これは滿更理由のないことではない。

同樣に、兵役に於いても忘却から來た怠慢と意識的無視の結果の怠慢との間の區別を認めない。これは當然である。軍務の命ずるところは、兵士たるものは何事をも忘却することが許されない。にも拘らす、彼がその命令を承知してをりつゝ忘れたとすれば、それは軍隊の命令を果さうと促す動機が、それとは反對の動機のために妨げられたゝめである。で、點檢の時にボタンの磨いてないのは忘れたためであると辯解する一年志願兵などは罰を受けるにきまつてゐる。併しこの罰は、彼がもし『こんな慘めな下賤な仕事は私には全然いやです』からと上官に云つた時に受ける罰に比べれば小さいものである。このやうに、云はゞ（苦痛を避ける）經濟的の理由から、罰を輕減するために、彼は忘却を

口實として用ふるか、或は妥協としてそれが出て來るのである。

軍隊の奉公と同じやうに女中の奉公に於いても、總て奉公に關したことは忘れたゝめと云ふことにしておく必要がある。そこで忘却は重要ならざる事柄には許されるが、重要なる事を忘却すると云ふのは本人が重要なることを重要ならざることゝして取扱はうとするものであるとの事を示す。つまりそれ等の事柄の重要さを認めないことゝなる。(一) 心理的價値評價の見地をこゝに拒まうとするのでは、實際に於いて、ないのだ。何人でも自分に重要であると思はれる行動は、心の働きがどうかしてはゐないかと人から思はれないやうな風に、遂行する事を忘れはしない。それ故に、我々の研究は多少とも第二義的の意圖に對してのみ向けられるのである。何となれば、如何なる意圖も我々にとつて絶對的に無關心なものではないからである。もし無關心であるならば、我々は抑々それを抱くことをしなかつたであらう。

【註】(一) バーナード・ショー Bernard Shaw は『シーザーとクレオパトラ』に於いて、シーザーがエヂプトを去るに當つて何事か爲忘れた事を不快に思つてゐることに依つて、シーザーのクレオパトラに對する無關心を描いてゐる。彼はその忘れた事を思ひ出した。それはクレオパトラに別れを告げることであつた。これは確かに史實と全然一致する。――シーザーは如何にエヂプトの一小女王を無視してゐたことか。(ジョーンズ前掲書、五〇頁參照。)

さきに述べて來た機能上のやり損ひの場合と同じやうに、今や忘却に依る放任（爲すべきことをしないでおく事）のいろ／＼な場合を自分で觀察したのを蒐集して、それを説明しようと試みたが、その間に私は、それ等が必ず何等かの不明なる、許されざる動機の干渉に基くものであることを發見した。換言すれば、一つの逆意志とも云ふべきものに歸することが出來るのを知つた。これ等の場合の多くに於いて、私は自分を奉公のやうな立場に、强制の下に於いて見出したのである。それに對して私は反抗することを全然諦めてはゐないものであるから、忘却に依つて示威運動をするのである。例へば誕生日、記念日、結婚、昇級などに對してお慶びの挨拶をするのを特に容易に忘れると云ふのがそれである。私は絕えず決心を爲直すのである。而も愈々以て忘れさうな氣がするのである。私はもう一切さう云ふことは廢して、さうして反抗する動機を意識的に容認しようと思つてゐる。その過渡の時期に於いて、私は自分の方へも喜びの電報を一定の時期に吳れろと賴んだ一友に對して、私は兩方とも忘れるかも知れないと豫め斷つておいたことがある。ところが、その豫言の的中したことは敢へて驚くことでもない。元來かう云ふ場合の悲喜の同情の表現はどうしても誇張されなければならないものであるが、それが私に出來ないのは、自分が人生で苦しい經驗を嘗めてゐるためである。何となれば、私の悲喜の同情が僅かしかないのに、それに相當の表現をなすことが許されないからであ

る。私は屢々他人の僞りの同情を本當だと思ひ違へてゐた事を知つてから、同情を表現する因襲に反逆するのである。が、勿論、それが社交上必要である事は私も認めてゐる。死の場合に哀悼を示すことはこの二重の分裂した取扱からは例外である。お悔みの決心をしたならば、私はそれを怠つたことはない。私の感情の働きかけが何等社交的任務と關係ない場合には、私は忘却に依つてそれを禁斷せられることはない。

これもそのやうな忘却の一つであるが、『逆意志』として始めに禁壓された意圖が顏を出して、その結果誠に具合の惡い立場になつた實例を、戰時の捕虜生活の中からT中尉が報告してゐる。――『捕虜將校の或る宿舍の最古參者が彼の仲間の一人に侮辱された。彼は爭ひの擴大を避けるために、彼の自由に用ひ得る唯一の勢力機關を利用して相手を遠ざけ、他の宿舍に移してしまつた。始めには彼の友人の多くの薦めるやうに、さう云ふ事はしないで、平然として大人の道を進まうと決心してゐた。とは云ふもの〻、さうすることは結局多くの不快を伴ふことであるから、この決心は彼の私かなる願望には反するものであつた。――その日の午前中、この隊長は監督機關の指圖の下に、士官の名簿を讀上げねばならなかつた。彼はその同宿の士官たちを既に長い間知つてゐたので、これまで嘗て間違つたことはなかつたのだ。今日は彼はその侮辱者の名前を讀み落してしまつた。で、相手は仲間の者

等が既に出て行つてしまつたのに一人その場所に殘つてゐなければならなかつた。遂にそれが間違ひである事が明かになつて彼も出て行つた。その讀み落された名前は或る頁の眞中どころに判然と載つてゐるのである。――この出來事は、一方からは故意の間違ひであると解せられ、他方からは、間違ひの如何なるものであるかを知るには誠に適當した苦しい偶然であると解せられた。併し後にフロイドの「精神病理學」を知るようになつて、本人もこの出來事に正しい判斷を下すことが出來るようになつた。』

他人に對する好意として爲てやらうと約束した事を爲忘れる場合は、同樣に因襲的任務に對する敵對と、內的に價値を認めてゐないことゝに依つて說明される。この場合にやがて必ず起ることは、好意を與へる方だけが忘却で辯解になると信じてゐるに對し、好意を乞ふ方は屹度正しい返答を、『彼には氣がないのだよ。でなければ忘れはしないのだ』との返答を與へると云ふことだ。世の中には忘れつぽであると云ふので、そのために、例へば近視眼者が街頭で挨拶をしなくても大目に見ておくやうに、ここ大目に見ておかれる人があるものだ。さう云ふ人間は自分のした小さな約束を總て忘れてしまふ。自分の受けた命令を總て果さないで放つておく。小さなことにはアテにならない人間であることを示す。さうして我々にこれ等の小さな缺點を惡くとらないでくれと云ふ。つまり、これを彼等の人

格のせいにしないで、頭のせいにしておいてくれと云ふ。(二) 私は自分ではかう云ふ人物にぶつかつたことはないし、またさう云ふ人物の行動を分析し、忘却を選び出してその動機を發見するやうな機會も持たなかつた。併し、私は類推に依つてかく斷ぜざるを得ない。この場合は、自分では容認してゐないのだが他人に對する輕視が普通以上に大きいと云ふのがその動機であつて、それが彼の本來の目的に對する契機を蠶食してしまふのだと。(三)

【註】(一) 婦人は無意識心理過程に就いて一層微妙な理解力を持つてゐるので、我々が彼女等を街上で見それ、從つて挨拶をしなかつた場合には、その間拔な男は近眼であるからとか、何か考へ事をしてゐて自分等が分らなかつたのだと云つたやうな、最も明白な說明を容認するよりは、槪して機嫌を損じてしまふ方である。彼女たちは、我々がも少し彼女等の事を何とか考へてゐたら、氣がついた筈だとの結論を下すのである。

(二) フェレンチ S. Ferenczi は、自分の事をかう云つてゐる。彼は平生よく『放心』してゐる方で、彼の知人も彼の失敗のあまり屢々であり、あまりに變つてゐるので呆れるほどである。ところが、彼が精神分析で患者を取扱ひ始めてから、この『放心』の徵象が全然消失してしまつた。で、彼は自分の自我の分析に注意を向けざるを得なくなつた。人間は自分の責任を多くの者に擴充するやうになればやり損ひはなくなるものであると信じたのである。そこで彼は放心は無意識のコムプレックスに依憑する狀態であり、從つて精神分析に依つて治癒することの出來る狀態であると考へたのであるが、こ

れは尤である。ところが或る日、彼は或る患者の精神分析に當つて技術上の間違ひをしたことに就いて自分を責めてゐた。するとその日には、以上の放心がすつかり再發してしまつた。彼は街路を歩いてゐてつまづいた。(治療上のつまづきの表象である。)手帳を家に忘れて來た。電車に乘らうと思ふと一錢だけ足りない。服のボタンが正しく掛つてゐない。等々。

(三)ジョーンズはこれに就いてかう云つてゐる。――『屢々抵抗がそこに働くのである。だから忙しい人は妻から托せられた――その時いさゝか不快だつた――手紙を入れ忘れる。丁度、彼が妻に頼まれた買物を果すのを「忘れ」やすいやうに――。』

他の多くの場合に於いては、忘却の動機はこれほど容易に發見出來ない。さうして發見して見ると一層驚くのである。さう云ふわけで、私は大分以前に、澤山の往診患者がある場合には、無料患者又は仲間の患者の許へ行くのは忘れても有料患者の許へ行くのは忘れないと云ふことに氣がついたのである。この事を恥ぢて、私はその日の往診先を朝の內に豫め書きつけておく習慣をつけたのである。他の醫師たちも同じ方法でかうした事をやつてゐるかどうか私は知らない。併しこれで分つたことは何故所謂神經症患者たちが醫者に報告したいと思ふことを手帳に書きつけて來るのかと云ふことだ。彼等は自分の記憶の再現力に信頼が出來ないのだ。それは慥に正しいのだが、場面は大抵かうして先に行つてしまふのである。――患者は色々な惱みや相談を非常に長々と繰展べる。それが濟んだあと

で暫く休んでゐて、さて手帳を取出し、辯解がましく云ふのである。――私は少し書付けて來ました。でないと何も覺えてをりませんので……。大抵は手帳を見ても、別に變つたことは書いてない。彼は總ての項を繰返し、さうして自分で自分に答へるのである。――さうだ、この事はもう尋ねた。彼は手帳に依つて恐らくたゞ彼の神經症狀の一つを、彼が如何に屢々仄暗き動機に依つて自分の意圖を妨げられるかと云ふことを、證明するに過ぎないのである。

私は更らに、私の大部分の知人の健康者の持つてゐる痛手に觸れることになるが、私は特に以前に於いては、借りた本を返すのを、得てして、また長い間、忘れたものだし、また支拂ふべきものを忘れてゐて延してゐたものだと云ふことを白狀しよう。ついさき頃の或る朝、私は毎日煙草を買ひつけてゐる煙草店から金を拂はずに出て來た。これなどは忘れたと云つてもまづ無難な方だ。何故ならば私を先方で知つてゐるのだから、翌日催促してくれることを期待出來たからである。併しこの些細な忘却、借りておかうとの試みも、私が前日中に考へあぐんでゐた遣繰算段と關係がなくはないのである。金錢や所有の問題となると、所謂品性の高い人々と雖も分裂的態度の跡を示すものである。何でもかんでも摑んで口の中へ押込まうとした哺乳動物の原始的貪慾は、文明と敎育とを以てしてもなほ概して不完全にしか征服されてはをらぬのである。(二)

【註】（一）主題の統一を期するために、姑く章節の區分を無視して、右に述べ來つたことに就いてなほ、人間の記憶は金錢問題に關しては特に遍頗な態度を示すものであると云ふことを附言しておきたい。何物かを既に支拂つたとの記憶の間違ひは、私が自分自身に就いて知るが如くんば、甚だ頑強なものである。利得を漁る意圖が人生の大きな興味から離れて、從つて本來遊戲として自由に赴く所に赴かしめられてゐる場合、例へばトランプの遊びの如き場合には、最も正直な人でも間違ひ、記憶し損ひ、勘定し損ひの傾向を示すもので、またどうしてだか分らない乍ら、小さな詐欺を働くものである。そのやうな自由さがあればこそ、遊戲には或る部分精神を爽かにする特質があるのである。我々は遊戲に際して人の性格を知ると云ふ格言は、それが顯在的の性格であると思ひさへしないならば、正しい。——もし勘定係が同じやうな間違ひをしたとすれば、それは明かに同じ機制に因るのである。——商人の間には、さうしたからとて自分等に何の利益もないのに、たゞ金の全額支拂や、請求書の支拂や、その他を延しておくものがある。これは心理學的に、金の支拂ひに對する逆意志の表現として解することが出來る。ブリルは這般の消息を箴言的の鋭さを以てかう云つてゐる。——『我々は小切手入の手紙よりも請求書入の手紙を置忘れ易いものだ』と。（ブリル著『精神分析、その理論と實踐的適用』一九七頁參照）

私は今まで與へて來た實例に就いては、甚だ平凡であつたやうな氣がする。併し、私は何人でも知つてをり、且つ何人もが私と同じに理解してゐる事柄を扱ひ得れば滿足するものである。何となれば

私の目的は日常的のものを集めてそれを科學的に利用するだけの事だからである。一般の人生的體驗の沈澱物たる叡智が何故に科學の成立に採用せられてならないのか、私には分らないのである。對象の雜多なることではなく、證明法の確實精嚴であり、出來るだけ廣汎に妥當するものを求めてやまぬところに學的勞作の本質的特徵は存するのである。

多少の重要さを具へた意圖と雖も、それと撞着する仄暗き動機が擡頭するや否や、忽ち忘れられてしまふことは、我々の一般に知つてゐる所である。これほど重要ならざる意圖に於いては、我々は忘却の第二の機制を認める。卽ち、他の事柄と意圖の內容との間に外的な聯想が出來上つて、そのために逆意圖が他の所から意圖の方へ移されるのである。次の實例の如きはこれに屬する。――私は美しい吸取紙を珍重する方であるが、今日午後市中へ出掛ける時には新しいのを買込んで來ようと思つてゐる。ところが四日間と云ふもの、續けざまに私はそれを忘れてしまつた。遂に私は自問したのである。この忘却は何の根據に基くのかと。それは私が „Löschpapier“（吸取紙）と書きはするが、„Fliesspapier“と云つてゐるのを氣付いたので直ぐ分つた。『フリイス』とはベルリンにゐる私の一友であるが、丁度その日に私に或る厄介な、心配な思ひの種を與へたのであつた。この思ひを私は振棄てることは出來ないが、併し防禦的傾向（本書、二二九頁參照）は言葉の相似をよすがとして關係

のない、從つて抵抗の少い意圖の方へ移ることに依つて現れて出たのだ。

直接的の逆意思と一層遥かな動機とが、次の遲延の實例に於いては、一つになつてゐるのが見られる。――『神經生活及び精神生活の限界問題』叢書のために、私は夢に關する短い一論を草した。この論に於いて私は自著『夢の註釋』の撮要を試みた。ボイスバアデンの出版者ベルクマンは私に校正刷を送り、クリスマス迄に出版したいから大急ぎでそれを返送してくれと賴んで來た。當夜、私はそれを校正した。さうして翌朝それを郵便局へ持つて行くやうに机の上に置いた。朝になつて私は總てそれ等の事を忘れてゐた。さうして午後になつて私の机の上に帶封があるので、始めて思ひ出した。ところが、午後になつても、晩になつても、その翌日の朝になつても、やつぱり私はその校正の事を忘れてゐる。漸く二日目の午後になつて私は遽てゝその校正を郵便箱へ持つて行つたが、さてこのやうに遲れてしまつたのは何のためであらうか、それが不思議であつた。勿論、私がそれを送りたくなかつたゝめであることは明かだが、何のために送りたくなかつたかゞ分らない。この散步の序に私は私の例の夢の本を出してゐるボイスの出版書肆へ立寄つて見た。一通り註文を終つた後、やがて私は突然思ひついたかのやうに云つた。――『僕はまた「夢」の本を書いたんだけれど、知つてゐるかね？』――『おや〳〵、それは是非お願ひしたいですね。』――『なに、大した事はないんだよ。これはほん

の短いものでね。レーヴェンフェルト・クーレルルラ叢書に頼まれたものだから……。』併し書肆の方ではそれでは納まらなかつた。自分の方の書物の賣行に關することを心配してゐた。私はそんなことはないからと云つて、最後に訊ねた。――『もしもつと早くその事を君の方に知らしてゐたら、君はその出版に反對したかね?』と。――『いゝえ、そんな事は決してありません。』

私は自分では總て正當に振舞ひ、別に一般的には何も惡いことはしなかつたと信じてゐる。併し書肆の方で云つたのと丁度同じやうな考へが、私をして校正を送るのを遲延させた動機であつたと云ふことは、どうも確かなやうに私に思へる。これにつれて思ひ出すのは以前の機會である。その時、私は大腦小兒麻痺症に關して以前に出した書物中の數頁をそのまゝ拔き出して、ノートナーゲルの小本中の同じ題目の書中に收めなければならないやうになつたので、先のとは別の書肆から苦情を持込まれた。併しその場合の批難もやはり何等問題にならなかつた。その時も同樣に、私は最初の出版者(『夢の註釋』のと同じ出版者)に忠實に私の意圖を通じておいた。

併しもしこのやうにして追憶の連りを辿つて行くならば、私には更にそれ等よりも以前の機會が思ひ起される。それはフランス語からの飜譯で、その時に私は實際上、出版に於いて考へらるべき版權を侵害したのである。私は原著者の許しを受けずに、本文に註解を附したのである。ところが數年經

つて、原著者はこのやうな勝手な眞似をされては困ると考へてゐるらしい事を知つた。
一般の人々の知慧を示した諺で、意圖の忘却は偶然なものではないといふ意味のがある。『一度仕忘れたことは、幾度でも忘れるものだ』と。

實際、我々が忘却や行り損ひに關して抑々如何なる事を云ひ得たにもせよ、それ等はみな人々には云はずと知れた自明の事として分つてゐるのだと云ふ氣がしてならない。而もそのやうな分りきつた事を意識の前に抑戻さねばならないと云ふは不思議な事でないか！私は人々がこんなことを云つてゐるのを屢々聞く。――『どうも忘れさうだから、どうぞそれは私に頼まないで下さい』と。後になつてこの豫言の的中すると云ふのは、慥にそれ自身何等不思議なことではない。かう云ふ本人が、この依頼を果すまいと云ふ意圖を抱いてゐるのだ。さうしてたゞその意圖を自分で認めることを拒んでゐるだけのことである。

意圖の忘却を更に一層明かにしたのは、『僞りの意圖を抱く』と人々の云ふところの事である。私はかつて或る若い學者の小著の批評を書いてやらうと約束したことがあつた。ところが心の內の、私には知られてゐない抵抗のためにぐづ〳〵してゐる內に、彼の催促に會つて、では今晩書いてあげようと云ふ約束をしなければならないやうになつてしまつた。私はやはりそれを書かうと云ふ考へは眞面

目に持つてゐたのだが、その晩是非とも延せない證言の起草をしなければならなかつたのを忘れてゐた。かうして私は自分の意圖が僞りであることが分つたので、私の抵抗に對する爭ひを思ひ切つて、その若い著者には斷つてしまつた。

第八章
行り損ひ

さきに擧げたメリンガー、マイヤー共著の書から、私はなほ次の一節を引用する。(九十八頁)――『云ひ損ひはたゞそれだけ他と無關係に存在するものではない。云ひ損ひは、人間の他の活動に於いて屢々起り、且つ愚かにも「忘却」と名付けられてゐるところの行り損ひと似たものである。』これで見ると、健康者の日常生活の一寸した機能障碍の背後に意味と意圖とを察知したのは、決して私が最初ではないのだ。(一)

【註】(一) メリンガーの第二番の出版書を後になつて見て、私は自分がこの人にこれほどの明智があると思つたのはこの著者に對しては不當であつたことを知つた。

明かに言動機能であるところの言語に於けるやり損ひに就いてそのやうな見方が許されるならば、我々の他の言動的機能の失敗に對しても同樣の見方が適用せられなければならぬ。私はこゝに、さまざまな場合の間に、二群の別を立てる。間違つた結果が寧ろ本質的のものと見える場合　つまり意圖

から逸脫したものは總てこれを『行り損ひ』(Vergreifen) と稱する。行動全體が目的に合はないやうな場合は『症狀行爲又は偶然行爲』と名付ける。併しこの區別はあまり截然とすべきものではない。實は吾人も、この論に於いて用ゐられたる一切の區分はたゞ記述上の意義あるのみであつて、この現象の分野の內的統一には撞着するものであることを認めざるを得ないのである。

『行り損ひ』を心理的に理解するために、これを『機能不整』„Ataxie"に、殊に『皮質的機能不整』„kortikale Ataxie" に換言することは、何等我々の知識を進める所以でない。吾人は寧ろ個々の實例をそれぞれの基く條件にまで跡付けよう。私はまたもや自己觀察を以てこれに進むであらう。併しその機會は私に於いては特に屢々だと云ふわけではない。

(a) 私は以前にはこの頃よりももつと往診に屢々出掛けたが、その時分に私は他所の家の扉の前に立つてこれをノックするかベルを鳴らすかすべきところを、ポケットから自分の家の鍵を引張り出し、大いに面喰つてそれを引込めると云ふやうなことがよくあつた。如何なる患者の家でこの事が起つたかを私の調べた時、私はこの行り損ひ――ベルを鳴らす代りに鍵を出す――が、この行り損ひをやつた家に對する敬意を意味することを認めざるを得なかつた。この行り損ひは『こゝへ來れば俺は自家へ來たやうなものだ』との考へに等しいのであつた。何となれば、さう云ふ行り損ひは、自分が

らしたことはない。）

好意を持つてゐる患者の家に於いてのみ起つたからである。（自宅の扉の前では、私は勿論ベルなど鳴

行り損ひは、それ故に、意識的に、眞劍に容認される事になつてゐない思想の象徴的表現である。

何となれば、實際に於いて、神經醫は、患者が自分のためになつてくれる限りに於いて醫者を期待す

るものであることを、また彼の患者に對する度を超えて熱心な興味も、心理的治療の目的のために過

ぎぬことを、よく承知してゐるからである。

鍵を以てまごついた意味深き失敗は決して私と云ふ人間に特殊なのではないと云ふことは、他の人

人の幾多の自己觀察に依つて明かである。

私の經驗と殆ど同一の繰返しをメーダーA. Maeder が書いてゐる。（Contrib. à la psychopathologie

de la vie quotidienne, Arch. de Psychol, VI, 1906）――誰にでもよくある事だが、特別に親しい友人

の門口へ來ると、自分の鍵の束を取出して丁度自宅へ來たと同じやうに自分の鍵で開けようとして謂

はゞびつくりするものである。何はともあれ、ベルを鳴らすべきであるから、これは一つの遲延であ

る。併しこれは人がかうした友人の近くでは自宅にあると同じやうな氣になる――或はなりたいと思

つた――證據である。

アーネスト・ジョーンズ（前掲書、五〇九頁）の報告。――鍵を用ふると云ふことは、かう云ふ出來事の屢々根原となるが、こゝにはその實例を二つだけ與へておかう。もし私が自家にあつて何か仕事に專心してゐる最中に、何か手續上の仕事を果すために病院に行かなければならなくなつたとすると、私は病院に於ける自分の實驗室の扉を開かうとするに自家の机の鍵を以てしようとすることがよくある。而も兩方の鍵は相互に全く同じでないのである。この誤りは、その瞬間に私が寧ろ何處に在りたいかを無意識的に示すものである。

數年前に私は或る病院で從屬的な地位で仕事をしてゐた。それの正面の扉は鍵が掛つてゐたから、這入るにはベルを鳴らさなければならなかつた。私は自家の鍵でその扉を開けようと一生懸命に試みてゐる自分を再三發見した。通つて來る幹部の者等はみな鍵を持つてゐて扉の前に待つの勞を避けることが出來た。私もその幹部の一員になりたくてたまらなかつたのだ。私の間違ひは、だから、彼等と同じ位置に立つて、さうしてそこで『自家にゐる』やうな氣持で納まりたいとの私の願望を表現してゐるのだ。

ハンス・ザックスも同樣な報告をしてゐる。――私はいつも鍵を二つ持歩いてゐる。その一つは役所の扉を開くものであり、他のは自家のを開くものである。二つはまぎれ易いやうなことは斷じてない

のだ。何となれば、役所の鍵は家の鍵よりも少くとも三倍がけの大きさがあるからだ。それのみならず、私は前者をズボンのポケットに入れ、後者をチョッキのポケットに入れてゐるのだ。それにも拘らず私は階段を昇りながら間違つた鍵を取出してゐる事を扉の前に達した時に氣の付いたことが一再でない。私は統計をとつて見ようと決心した。實は私は兩方の扉の前に立つた時、毎日殆ど同じやうな感情の狀態になるからして、兩方の鍵を取換へることもまた、（もしそれ等が心理上別の決定を被るべき筈となつてゐたとすれば）規則的の傾向を示さなければならなかつたのだ。その後の樣子を觀察してゐると、私は規則的に役所の扉の前で自家の鍵を取出すのであつた。たゞ一度だけそれが反對になつた。その時私は疲れて家に歸つて來たが、家には客が一人來て私を待つてゐる事を私は知つてゐた。扉の前で、私は勿論遙かに大きい役所の鍵でそれを開かうとして試みてゐた。

（b）私は六年この方、毎日二度一定の時刻に、或る一定の家の二階の或る扉の前に、それを開いて貰ふのを待つてゐた。その長い時期の間に私は一階高く昇り過ぎてゐた事が二度（而もその間隔は短く）もあつた。つまり、私は『昇り違へ』(versteigen)たのであつた。その一度は、私は自分が『愈愈高く昇り行く』名譽慾の白日夢を見てゐたのであつた。私はその時三階目への梯子段の第一の階段に足を載せた時、問題の扉が開かれたのであつたが、それを聞洩じた。二度目の時も、私は更に『物

思ひに沈み』過ぎてゐたのだ。私がそれと氣付き、引返し、私を支配した空想を捉へようと試みた時、私は自分の書いたものに對する(空想裡の)批難に就いて焦々してゐる自分を知つた。その批難は、私があまりに『行き過ぎ』てゐると云ふのである。で、私は今その『行き過ぎ』の中に、それよりももつと尊敬の缺けてゐる『昇り違へ』を入れてしまつたのである。

（c）私の机の上に幾年も前から、反射槌と音叉とが竝べておいてある。或る時、私は診察時間の切上を急いでゐた。何となれば、一定の列車に乗りたいと思つてゐたからである。私は、眞晝間であるのに反射槌（レフレクスハムマー）と音叉（スチムガーベル）とを取違へて上衣のポケットに入れたが、ポケットの重みに自分の間違へたことを氣付いた。そのやうな小さい出來事を考へて見ようとしない習慣の人は勿論、この行り損ひを急いだためと解釋してそれで安心してゐるであらう。併しながら、私は自分が抑々何故に槌の代りに音叉を取つたかと云ふ事を問題にして見たのである。戻つて來て槌を持つて行くのは時間の空費だから、急ぐと云ふことはこの行動を正しく果す動機の一つにも同様になり得るわけだと思ふ。

『誰が最後にその音叉を摑んだか』と云ふのが、忽ち私の頭に閃いた疑問であつた。その僅か數日前に私は或る低腦兒の感覺的印象に對する試驗を行つてゐたが、その兒がその音叉に非常に興味を持つて、それを子供から取上げるのに私は可成りの骨を折つたと云ふ事が偶々あつた。そこでその事は

私が低腦であつたと云ふ事を意味するのであるか。慥にさうらしい、何となれば、槌（ハムマー）に就いて私が次に聯想したことは „Chamer“（カマー）（ヘブライ語で「驢馬」「馬鹿」の意）であつたからだ。

併しこの批難語の意味は何であつたか。吾人はこゝで、その時の立場を研究して見なければならぬ。私は西部鐵道の或る所へ往診に急いで出掛けたのであつた。その時の患者は、彼が忘れてゐて思ひ出した事を後から手紙で報告して來たところに依ると、數ヶ月前にバルコニーから落ちて、それ以來歩くことが出來ないと云ふことであつた。私を招いた醫者は、この患者が脊髓傷害であるか、或は外傷神經症――ヒステリー――であるか分らないと書いて來た。その點を私は決定しなければならないのだ。であるから、この微妙な差別診斷に於いて、殊に用心深くあるやうにとの警戒が起つたことであらう。さらでだに同業者等は、人々がヒステリーよりももつと重症を取扱つてをりながら輕卒にヒステリーと診斷してしまふと考へてゐる。併しこの批難はまだ證據が十分に擧つてゐると云ふわけではない。さうだ、その次に思ひ當つたことは、同じ場所のその小驛は私が幾年前に或る若い人に會つた場所である。彼は或る感情の動搖を經驗して以來、歩くことが出來なくなつてゐた。私は當時それをヒステリーと診斷し、後にその心理的療法を引受けた。ところがやがて、私は勿論不當な診斷を下しはしないが、さりとて正しい診斷でもなかつたことが明かになつて來た。その患者の幾多の症狀はヒ

ステリー的であつた。さうしてそれ等の症狀は治療の間に忽ち消散してしまつた。併しその症狀の背後に、この療法では手に負へない、さうしてたゞ多發性硬化症にのみ歸せられ得べき殘物が見えたのである。患者を私より後に診た者は肉體上の影響を認めることが容易であつた。私はかうより外に扱ひやうはなかつたし、診斷の仕樣もなかつた。併し重太な誤診をしたやうな印象を與へた。私が彼に與へたところの全治の約束は、勿論果すことは出來なかつた。槌の代りに音叉を間違つて取つたことは、言葉に譯して見るとかうである。——低腦で驢馬のお前よ。今度はしつかりしろよ。さうしてお前が數年前に同じ場所で、あの憐れな男の場合にしたやうに、不治の病のあるヒステリーの場合を再び診斷しないやうに氣をつけるがよい! と。さうしてこの一小分析のためには幸にも、よしんば私の氣持にとつては不幸であつたにもせよ、この同じ人が重い痙攣的の足どりで、數日前に、例の低腦兒を診た翌日に、私の診察を受けに來たのである。

道具を間違つて持つて行つた事に依つて現れた今度の事は自己批評の聲であることを、吾人は氣付くのである。行り損ひと云ふものは、特に自己批難に適當してゐる。今度の間違ひは、他の所で犯した間違ひを表はさうとするものである。

(d) 行り損ひはまた他の多くの仄暗き(無意識的の)意圖の役に立ち得ると云ふ事は自明である。

こゝに第一の實例がある。――私は何かを壞すことは滅多にない。私は特別に器用な方ではないが、併し私の神經筋肉組織が解剖的に保全されてゐるため、好ましからぬ結果を招くやうな不器用な動作をするわけは明かにないのである。さう云ふわけで私の家には揃ひのもので壞れたやうな品物は何一つあるとは思はない。私は研究室は狹い上にそこには古代の土器や石器を多少蒐集してあつて、それが處狹く置いてあるので、甚だ窮屈な位置で仕事をしなければならない事が屢々であつた。それで、見てゐる人は私が何かを突倒して壞しはせぬかとの心配を洩したほどであつた。ところがさう云ふことはかつてなかつた。だのに私は嘗て自分の單純なインキ壺の大理石の蓋を床に落して壞したのは何故であらうか。

私のインキ壺臺は平たい大理石片で出來てゐて、そこに穴がくり拔いてあつてインキ壺が納まるやうになつてゐる。インキ壺には大理石の蓋が付き、その蓋にもやはり大理石の取手が付いてゐる。このインキ壺臺の背後には、青銅の鑄像や土偶像（テラコツタ）などが一團になつて置いてある。私は机に向つて書きものをしてゐたが、ペンを持つ手を妙に無ざまな風に外側へ動かし、既に机の上に置いてあつたインキ壺の蓋を床の上に落してしまつた。

その說明を見出すことは困難でない。數時間前に、私の姉妹が私の室へ來て、近頃手に入れたもの

を見て行つた。その時彼女はそれ等の品を大層美しいと譽め、さうして云つた。――『これで貴方の机も大層立派になつたが、たゞインキ壺がこれぢや釣合はないわね。もつといゝのを買はなくちや。』私は姉妹に跟いて室を出で、數時間の後に歸つて來た。ところがその時に私は、云はゞ宣告を下されたインキ壺に對して處刑を施したのである。私は姉妹の言葉からして、彼女がこの次のお祝事の節にもつと立派なインキ壺を贈る心算でゐるものときめ込み、さうしてこの立派ならぬ、古いのを壞すことに依り、彼女の口にした意圖を實現せしめようとしたものであらうか。もしさうだとすると、私の妙な手の振り動かし方は、たゞ外見上無細工であつただけで、實際に於いてはそれは非常に器用であり、目的意識的であり、その近くにあつた一切の高價なものをいとほしむ如く回避することを承知してゐたのである。

我々はこの一見偶然的な、無細工な手の運動の全體に對するこの說明を受容れねばならないことを、私は實際上信じてゐる。成程、そこには外見上、痙攣的機能不規則のやうな强制と粗暴さとを具へてはゐるが、而もそこには一つの意圖が働いてゐる事は明かであつて、意識的故意的の運動には概して指示することの出來ないやうな適確さを以てその目的を果してゐるのである。これ等二つの特質たる强制と適確とを具へてゐる點に於いては、この事實はまたヒステリー的神經症の言動的表現と共通し、

また部分的には夢遊病の言語動作と共通してゐる。この言語動作は夢想病に於いてもヒステリー的神經症に於いても、同樣に異常な神經現象の變化を示すものである。

私がそのやうな觀察を蒐集し始めて以來最後の數年に、多少の價値ある品物を壞したやうなことがなほ二三度起つた。併しそれ等の場合を調べて見て、未だ曾てそれが偶然や故意なき無器用やの結果であつたためしはなかつたと云ふ事を確信した。現に、私は或る朝、浴場着と藁のスリッパとを身につけて一室を歩いてゐた時、私は或る突然の衝動に驅られて片方のスリッパを足から脫いで壁に蹴りつけた。そのためにヴィナスの美しい小さい大理石像は腕木の上から顚落した。それが落ちて小片に碎けてゐる時に、私は全く冷然としてブッシュ Busch の次の句を口づさんでゐた。——

Ach! die Venus ist perdü——
Klickeradoms! ——von Medici!
あゝクリッカラドームのヴィナスは死せり、
メディチ家のヴィナスは死せり。

この氣狂染みた所業と損傷に對する私の落着拂つた態度とはその當時の事情に依つて說明がつく。私の家族に重病人があつて、私はそれの恢復には祕かに絕望してゐた。その朝、その病人が非常に快くなつたと云ふ報告に接した。ではあれもやつぱり命をとり留めたかな、と私は一人言を云つたのを知つてゐる。破壞的狂暴の發作は、それ故に、運命に對する感謝的感情の表現として役立ち、また恰も私が『もし彼女が快くなりましたらこれかあれかを犧牲として獻上いたします』と誓つたかのやうに『犧牲の行動』を果す機會を私に提供したのである。私がこの犧牲のためにメディチのヴィナスを選んだと云ふことは、慥に、全快しつゝあるものに對する婦人崇拜者(ガラント)的の敬意に外ならなかつたのだ。併しこの時もまた、私があれほど速く決心し、あれほど巧みに目標を定め、あれほど近くにあつたさまぐ\な品物の間に特にそれを目指したと云ふその事が私には分らないのである。

今一つは、私が、自分の手から落ちるペン軸を利用しての破壞であつたが、これまた一つの犧牲を意味したのであつた。併し、今度のは防禦のための祈願の犧牲であつた。私はかつて、或る信實のある、役に立つ友を非難するやうな羽目になつた。その非難とは、彼が無意識的にした或る事柄に解釋を下したと云ふだけの事であつたのだ。彼はそれを惡くとつて、私に手紙を寄越し、その中で私に、自分の友人を精神分析で取扱ふことは廢してくれと云つて來た。私は彼の云ふことが尤であると云つ

て、返事を遣つて彼をなだめた。この手紙を書いてゐた時、私は自分が最近手に入れたものを——小さな、美しい、釉藥を掛けたエヂプトの人形を前に据えてゐた。私はそれを先に書いたやうな風に壞し、さうしてやがて、私がより大きなものを避けるためにこのやうな失敗を演じたことを直ぐに知つた。幸にして友情も人形も、ついだ所が見えない程に接合することが出來た。

第三の破壞の實例はそれほど重要な關係のものでない。それは私の趣味に既に適さなくなつた或る品物の——フィッシャー Th. Vischer の(„Auch einer“)中の用語を用ふれば——假面を被れる『處刑』に過ぎなかつたのだ。暫くの間、私は銀の把手のついたステッキを突いてゐた。自分の失敗のせいと云ふわけではないが、薄い銀板は嘗て傷んで、甚だ拙い修繕が施された。ステッキが歸つて來た直ぐ後に、私は冗談に、自分の子供等の一人の脚をその把手で引掛けた。そのために把手はこわれて、私は勿論それを手離してしまつた。

我々が總てこれ等の場合に於いて結果した損害を、もし無關心に受容れたとすれば、それは慥にさうなるやうにとの無意識的願望が存在してゐた證據と解することが出來る。

(e) 品物を落したり、ひつくり返したり、それを壞したりすることは、無意識的思想の流れの表現のために利用せられることが甚だ屢々であることは、時々の分析に依つて證明せらるゝ如くである

が、併し更に、屢々俚諺に於いて迷信的に、又は戯れに、それ等の行り損ひと結びつけられてゐる解釋を表はすに役立つものである。鹽をこぼしたり、酒のグラスをひつくり返したり、床の上にナイフを落してそれが突立つたりすることが如何なる解釋を下されてゐるかは、既に人々のよく知るところである。私は後にそのやうな迷信的解釋に注意を拂ふことの如何に正しいかを論じるであらう。が、只今は、私はたゞ個々の無細工な行爲が決していつも同じ意味を持つものではなく、事情に依つてあれこれと別の意味を表はすに役立つものであることを論ずるに留めておかう。

近頃、私の家では無暗にグラスや瀬戸物の皿を壞す時期を經過した。私自身また大いにこの損害には與つて責任があるのだ。併しこの小さな精神的風土病は容易に說明することが出來た。それは私の長女の結婚前の幾日かの間のことであつた。そのやうな儀式の際には皿を割つて、同時に慶びを祈願する何等かの言葉を口にするのが習慣になつてゐる。この習慣は一つの犧牲を意味するか。或は他の何等かの象徵的意義を表はすものであらう。

召使の者がこわれ易いものを落して駄目にしてしまつた時には、我々は慥にまづそれの心理的動機を考へはしない。而も、何等かの明白ならざる動機がこの場合に於いてすらも、なさそうには思へない。敎養のないものにとつて、藝術竝びに藝術作品の評價ぐらゐ遙かなことはないのだ。これ等の制

作品に對して我々の傭人は一つの愚かしい敵意を抱かざるを得ないのである。殊に、彼等がその價値を洞觀し得ざる品物が一層彼等の勞働の種となる場合には然うである。ところがまた、彼等と同じ教養程度と傳統とを有する人物にして學問的組織内に傭はれてゐる者等は、彼等が已れをその主人と同一化し、その組織體の本質的部分であると考へるやうになるや否や、微妙な事物の取扱ひに非常な巧妙と適確さとを示すやうになるものである。

私はこゝに或る若い技師の報告を挿し加へておかう。これは物を壞すことの機制の何たるかを知るに多少の役に立つであらう。

『さき頃、私は多數の同僚と共に高等學校の實驗室に於いて、彈力質の問題に就いて込入つた幾つかの實驗をする仕事に從つてゐた。その仕事は我々が自分から志願してかゝつた事ではあつたが、さてやつて見ると思つたよりも時間が掛つた。或る日、F君と一緒に實驗室へ行く途中で、F君はこんなに暇をとられてはやり切れない、殊に今日は家でいろ〳〵しなければならない仕事が澤山あるのにと云つて不平を喞した。私も彼にすつかり同意することが出來た。さうして前週に起つた或る出來事に言及しつゝ冗談半分にかう云つた。――「機械がまた云ふことを聽かなくなつてくれゝば、我々は仕事を廢めて歸れるのだがなァ。」と。――仕事の割當としては、F君は壓迫辨の調節に任じてゐた。

つまり、辨を注意して開くことに依つて壓迫下の液體を水力溜めから水壓の圓管へと導入せしめることであつた。實驗の指揮者は壓力計の前に立つてゐて壓力が最大限に達した時に『止め！』と大聲に叫んだ。この指揮に應じてFは辨を摑み全力を込めて左に廻した。（一切の辨は例外なく總て右の方へ閉まつてしまつた。）このために水力溜めに忽ち全壓力が起つて而もその排口がなかつたので、聯結管は破裂した。この事は器械にとつてはほんの一寸した事故に過ぎなかつたが、併し我々をしてその日の仕事を中止させ、家に歸らせるには十分であつた。――それのみならず、暫く經つてからこの出來事を話し合つた時に、友のFは私が云つた言葉を、私は覺えてゐたが、彼は全然忘れてゐた。これまた著しい特徴である。』

同樣に、轉倒したり、失脚したり、滑つたりすることも、必ずしもいつも言動行爲の偶然的失策と解するには及ばない。これ等の言葉には言語上二重の意義があつて樣々な隱れた空想を示してゐる。それ等の空想は肉體の平行を失ふことに依つて現れ出て來ることが出來るのである。私は、女や娘が怪我もなく落ちて後に輕微な神經の苦惱を示しそれ等は落ちて吃驚したための外傷的ヒステリーとして考へた場合を澤山に想起する。その當時に於いても私は段々、これ等の條件が普通とは違つた關係を有し、墜落は既に神經症の準備であり、この症狀の背後に動く力と考へらるべき性的內容の同じ無

意識的空想の表現であるらしい感じがしてゐた。この事は『娘落ちる時は背で落ちる』と云ふ俚諺にその意味が表れてゐるではないか。

乞食に銅貨や小さな銀貨を與る代りに金貨を與つたりすることも、やはり行り損ひの一種であると云ふことが出來る。かう云ふ與り損ひの解決は甚だ簡單である。それは必ず運を開かうとか、厄を拂はうとか、云ふやうな犧牲的行爲である。優しい母や叔母が、子供の散歩に出る前に平常に似合はず非常に子供の健康を心配したりするのを聽くならば、この一見望ましからぬ事故の意味はも早疑ふことが出來ない。このやうにして、我々は失敗に依つて總てかの敬虔にして迷信的な習俗を實行する事が出來るのである。それ等の迷信は我々の不信なる理性の反對を受けるので、それに抗爭する必要から、意識の光りを避けなければならないのである。

(f)　偶然的行動も實は意圖的なものであることは、これを性的活動の分野に於いてその實證を得るにしくはない。この分野に於いては偶然と意圖との間の境界が殆ど判然しない。一見無器用な運動も性的目的のためには非常に微妙な方法で利用し得るものであることは、私自身の經驗した好個の實例に依つて證明することが出來る。或る友人の家で私は一人の若い娘の來訪者と出會したが、彼女は私が既にさう云ふ感情は自分に於いて消失してしまつてゐると久しく信じてゐた好いたらしいとの感

情を喚覺ました。かくて私は晴れやかな上機嫌な、テキパキした氣分になつた。その當時に私はどうしてから云ふ事になつたかを自省して見た。何となれば、私はこの同じ娘に一年前に會つたが、その時には私は別に何の印象も受けなかつたからである。さてこの娘の伯父に當る非常に年寄つた紳士がその室に這入つて來た時、我々兩人は立上つて室の隅にあつた一脚の椅子を老人のために取つて來ようとした。彼女の方が私よりも敏捷で、且つ椅子の近くにゐたので、まづ椅子に手を掛けたのは彼女であつた。彼女は椅子の背を自分の方に寄せ、兩手を腰掛けの端に掛けて持つて來た。私は彼女よりも後に椅子を摑んだが、なほも椅子を持つて行かうとの氣勢を失はず、突然彼女の丁度背後に立つて兩腕を以て彼女を背後から抱へ、一瞬間私の手は彼女の膝のところに觸れた。私は勿論その事が起きた瞬間にやめてしまつた。また誰しも、私がこの無細工な運動を如何に巧みに利用したかを感づいたものはなかつたやうである。

よく街頭で人と出會して一方が脚を出した同じ方へ他方も脚を出し、遂に兩方とも鉢合せをして『通せん棒』をすると云ふ誠に不快な無様な失敗を演ずることがあるが、それは以前の無作法な、挑發的な態度の繰返しであり、體裁の惡さの假面の下に性的意圖を果すものである事を容認せざるを得ない。

私は神經症患者を精神分析したところに依つて、青年や子供の無邪氣とされてゐるものは、彼等が存

分に野卑なことを云つたりしたりするための假面に過ぎない事を知つたのである。

ステーケル W. Stekel は自分自身に就いての全然同樣な觀察を報告してゐる。――『私は或る家に入つて、家の主婦に私の右手を差出した。その時、彼は非常に著しい行り方で、彼女の寛濶な朝衣を留めてある飾結びを解いてしまつた。私としては別に何等怪しからぬ考へなどは意識しなかつた。それにも拘らず私はこの無器用な運動を手品師の器用さを以て演じたのである。』

私は既に幾度も、詩人が行り損ひを有意味なもの、動機あるものとして認めること吾人と同樣であることを論證した。それ故に、如何に或る詩人がまた一つの無器用な運動を有意義なものとし、後の出來事の前徵となさしめたかの新しい一實例を見たからとて敢へて驚くに當らぬのである。

テオドル・フォンターネの小說『姦淫の女』の中にかうある。――『……さうしてメラニエは跳上つて自分の夫に、挨拶代りのやうに、大きな球の一つを投付けた。併し彼女の覘ひは外れて球はそれ、ルウベーンはそれを摑んだ。』この一小挿話は或る遠足の間に起つたのだが、この遠足から家路に着いた時、メラニエとルウベーンとの間に一つの會話が交された。その會話にはやがて發芽し來る一つの傾向の暗示があつた。この傾向はやがて情熱となり、メラニエは遂にその夫を振捨てゝ愛人に全然從ふことゝなつた。（ハンス・ザックスの報告。）

(g) 常態者の行り損ひから生じ來る效果は、概して非常に無難な性質のものである。恰もこの理由のために、眞劍な結果を伴ふやうな非常に重大な意義の行り損ひ(例へば醫者や藥劑師の失策の如き)が我々の見方の範圍内に入り來るかどうかを發見することは特に興味のあることであらう。

私は醫者としての指圖を與へるやうな立場には滅多に立つたことがないものだから、醫者としての自分自身の經驗からは行り損ひの一つの實例に就いてしか報告することが出來ない。私は非常に年取つた婦人を取扱ひ、彼女の許に數年の間毎日二回宛通つた。私の醫術的活動は二つの行動に限定せられてゐて、それを私は朝の往診の時に行つた。――私は一二滴の眼藥を彼女の眼に注入し、さうしてモルヒネの注射を行つた。私は毎日きまつて二本の罎を用意して行つた。一本は眼藥を入れた青い罎であり、他はモルヒネの溶解液を入れた白い罎であつた。これ等二つの任務を果す間に、私の考へは何か別の考へに支配せられてゐた。その別の考へは非常に屢々繰返して起るので、自ら注意が生じて來る程であつた。或る朝、私はこの機械人も仕事を間違へたことを氣付いた。私は點眼水を青罎でなく白罎に入れたのであつた。さうして眼の中に眼藥でなくモルヒネを注入してしまつた。私は非常に驚いたが、併しやがて、二プルツェントのモルヒネ溶解液の一二滴ぐらゐでは結膜嚢に何等の害を及ぼすことはないと信じて安心した。驚きの原因は明かに他の所に在つた。

この一寸した行り損ひを分析せんと試みるに當つて、私がまづ思ひ出したのは『婆さんを行り損ふ』と云ふ言葉であつた。これが解決の捷徑となつた。私はその前夜或る若者が私に話した夢に依つて印象を受けてゐた。その夢の内容は彼自身の母との性交からしてのみ說明することが出來た。（二）エディポス傳說が王妃ヨカステの年齡の事に就いて何も困つてゐるらしいところのないのは不思議であるが茲に生母を戀すると云ふは決して現在の姿を取扱つたものではなく、幼年時代から持越して來た若き母親の記憶の影像を取扱つたものであるとの我々の假定を以てすれば、この不思議は不思議でない。そのやうな不適合は、或る空想が二つの時期の間に流轉して、やがて一方の時期に結び付いた場合には、何時でも現れるものである。さう云つた風の考へに沈んで、私は自分の九十歲以上の老婦人患者の事に及んで行つた。私は神托が宣下したところの關係の相互性としてのエディポス物語の一般的な人間的特質を把握すべき途に多分出て來て居たに相違ない。何となれば、私は『婆さんで、又は婆さんを、行り損ふ』たからである。併し、この行り損ひはやはり無難であつた。私は二つの可能なる失敗の內、卽ちモルヒネ溶液を眼にさし、點眼液を注射する二つの內で、難の遙かにより少い手段を選んでゐる。人間と云ふものは重大な惡結果になりさうな行り損ひに際して、こゝに論じた場合のやうに、無意識的意圖を假定することが出來るかどうかと云ふことは、なほ疑問として殘る。

【註】（一）このやうな夢を私は常々エディポス型の夢と呼び慣はしてゐる。何となれば、この夢はエディポス王物語の關係を闡明すべき鍵を含んでゐるからである。ソフォクレースの原文に於いては、そのやうな夢の關係は王妃ヨカステをして語らしめてゐる。（『夢の註釋』參照）

材料はこゝのところで、大抵そんなことであらうと思つてゐた通り、私を見棄てゝしまつてゐる。で、私は想像と結論とを指示されてゐるのみである。精神神經症の一層重態の患者に於いては、自己傷害が時として病氣の症狀となつて現れ、また精神的苦鬪の結果、彼等が自殺してしまふことも敢へて珍らしくない。それ等は人のよく知るところである。で、そのやうな患者が遭遇する多くの一見偶然的と見えるところの災害は、實は自己傷害であることが分るのである。且つ、その事は實例をよく說明することに依つて證明することが出來るのである。何となれば、そこに不斷に虎視眈々たる自己懲罰の傾向があつて、それが平素は自己非難となつて現はれ、或は症狀形成に寄與してゐるが、或る偶然的な外的事情を巧妙に利用し、或はそれの望んでゐる傷害的效果の方へと促進するものだからである。そのやうな出來事は大して困難でない場合に於いてすらも決して稀ではない。さうしてそこに無意識的意圖の參與してゐることは、多くの特徵に依つて――例へば、その患者が事故に際して示す驚くべき沈着に依つて――漏れ出るのである。（二）

【註】（一）自己傷害は必ずしも全然の自己消滅を目ざすものではなく、我々の現在の文化狀態に於いては、偶然の背後に匿れ、何等かの自發的な病氣を模擬することに依つて發出するより外には、何の擇ぶべき途もないのである。昔は自己傷害は悲嘆の記號となる慣はしがあつたが、また或る時代にはそれは敬虔及び現世厭離の傾向となつて表はれた。

私は醫者としての自分の經驗中から澤山の實例を擧げる代りに、たゞ一つを細かく報告したいと思ふ。——或る若い婦人が乘車の事故のために膝より下の脚部を怪我し、そのために幾週間を病褥中に就いてゐたが、この實例の著しい點は彼女が何等苦痛の表情を示さず、その不幸を忍ぶことの沈着さであつた。この災害が契機となつて長い重い神經症が起つたが、この神經症は精神療法に依つて遂に全快したのである。取扱ひの間に、私は事故の前後の事情、竝びにそれに先立つて彼女に起つたいろいろな出來事を知ることが出來た。この若い婦人はその嫉妬深い夫と共に幾日かを、彼女の既婚の姉の農園に於いて過ごした。その時、彼女の彼の兄弟姉妹もそれぞれの配偶者と共に大勢で宿つてゐた。或る晩、彼女はこの親しい仲間の前で彼女の才能の一つを示した。彼女はカンカンを見事に踊つて親戚の者等を非常に喜ばせたが、併し彼女の夫は不機嫌であつた。彼は後になつて『またお前はあんな淫賣婦のやうな眞似をする』と彼女に囁いた。その言葉が利いたのだ。それがたゞダンスをやつたゝ

めのみであるかどうかは、今は問題にすまい。その晩、彼女は眠つてもよく寢付かれなかつた。さうしてその翌日の午後、馬車を驅つて出る決心をした。彼女は馬を自分で擇び、或る一對は拒んで他の方を採つた。彼女の一番下の妹は、彼女の乳呑兒も乳母を付けて連れて行かせようとしたが、彼女はそれを一生懸命に拒んだ。馬車の走る間、彼女は非常に神經的であつた。彼女は御者に馬がみな落着きがなくなつてゐると云ふことを警告した。さうしてこの神經質な動物が實際に或る一瞬、危ない事をした時、彼女は驚いて車中から飛出して脚をくぢいた。而も車中に殘つてゐた者等は何の怪我もしなかつた。これ等の細かい事情の判明した後には、我々はこの事故が實は計畫せられたものであることを疑ひ得ないが、併し事故をして罪に非常に適した罰を配せしめたその巧妙さには感心せざるを得ない。何故ならば今やカンカン踊りも彼女には永い間不可能となつたからである。

自分の自己傷害に就いては、落着いてゐる時にはあまり報告すべきことがないが、併し特別な條件の下に於いては私にもそれが出來る。私の家族の一員が舌を嚙んだとか、指を怪我したとか云つて訴へて來た場合には、期待してゐる同情を示す代りに、『どうしてそんなことをしたのだ?』と云ふ質問を發する。併し、或る若い患者が治療の間に、私の長女と結婚する心算(無論私はそれを眞面目にとらない)であると聞かされた後には、私は彼女が療養所にあつて生命が危篤であると云ふことを知つ

てゐるのに、自分の親指を痛くなるほど締めつける。

私の男の兒の一人は非常に活潑な氣質で、病氣の介抱などする時にはいつも甚だ困らせられるのであるが、その兒が或る朝、午後まで寢て居ろと命ぜられたと云ふので急に怒り出し、自殺すると云つて驚かした。――これは新聞から暗示を受けたことである。晩になつて彼は胸の脇に出來てゐる腫れたところを私に見せた。それは扉の把手に打付けて出來たものである。どうしてそんなことをしたのか、何の心算でしたのかとの私の皮肉な質問に對して、十一歳になる少年は說明して曰く『今朝云つた通り、僕は自殺しようと思つたんです。』と。併し自己傷害に關する私の見解が當時の私の子供に受容れられたとは信じてゐない。

半意圖的自己傷害――と云つたやうな無器用な言葉が許されるならば――の出來事を信ずるものは誰しも、從つてまたそこには意識的意圖的自殺の外に半意圖的――無意識意圖的――自己絕滅があつて、それは生命の脅威を巧みに利用し、それに偶然的不幸の假面を被らせ得るものであることを直ちに容認するであらう。さう云ふ機制は決して珍らしくはない。何となれば、自己絕滅の傾向はそれを實現する人々よりも遙かに多數の者等に於いて或る程度までは存在するものだからである。自己傷害は概して、この衝動とこれに反對に働くさまざまな力との間の妥協である。さうして實際に自殺とな

つて來た場合に於いてさへも、その傾向は多少弱い力を以て、或は無意識的、抑壓的の傾向として、永い間存在してゐたのである。

意識的な自殺の意圖でさへも、その時、その方法、その機會を選ぶものである。況んや無意識的自殺の意圖が一つの動機を——原因の一部を己れの內に採入れ、自殺者當人の防禦力を徵發することに依つてそれの壓迫から自殺の意圖を解放する如き一つの動機を——待つは、以上に照して全く當然の事である。(一) こゝに私の縷述することは無用なる談議ではない。私の知つてゐるだけでも、馬から落ちたとか、車から滑つたとか、一見偶然的の災難にして、その周圍の事情から見て無意識的にさし向けた自殺ではないかとの疑ひを是認する場合が一二に止まらぬ。現に、士官の競馬の時に或る士官が落馬して大怪我をし、そのため數日間病臥してゐなければならなかつた。彼の行動は、我に返つた後にも、多くの點に於いてをかしかつた。特に著しいのは事前の彼の行動であつた。彼は生母の死に依つて痛く沈んでゐた。彼の友達の集會で酒の痙攣に襲はれた。親友には世の中が嫌になつたと云つてゐた。役を棄てゝ、平素はあまり興味を持たなかつたアフリカの戰爭に出征することにした。(二) 以前には乘馬にかけては機敏であつたのに、近頃では出來るだけ乘馬を避けてゐた。それから、彼が是非とも競馬に出なければならないとなつた時には、その前に彼は或る悲しい豫感を洩した。この豫感が

的中したと云ふことは、我々の考へ方からすれば、少しも驚くに當らぬことである。そのやうな神經の弛緩した狀態に於いては、健康時に於けるほど巧みに馬を御し得ないものであることは實は容易に理解出來ると云へば、それには反對する向もあらう。私も全く同感であるが、たゞ私はこのやうに神經の具合に依つて言動の禁壓される機制を、こゝに力說し來つた自己絕滅の意圖中に求めんとするものである。

【註】（一）して見れば結局これは婦人が滿更でない男から性的襲擊を受けた場合と違はない。その場合の婦人に於いては男の襲擊は女の全筋肉力を以てしては防ぐことは出來ない。何となれば、襲擊せられた者の無意識的感情の一部分が直ちにそれに呼應するからである。そのやうな立場では女の力は痲痺するとはいみぢくも云つたものである。我々はたゞそのやうな痲痺の理由を與へる必要がある。その限りに於いてサンチョ・パンツアが自分の島の太守として宣下した聰明な言葉は心理的に正しくない。（ドンキホーテ、第二卷、第四十五章。）或る婦人は、自分の貞操を暴力を以て蹂躪したとされてゐる或る男に、法官の前で摑みかゝつた。サンチョは被告から取上げた重い財囊を女に與へてその損害の償ひとした。併し女が立去つた後に、彼は被告に彼女を追跡して財囊を奪ひ返して來てもよいと云つた。兩人は組打ちをして歸つて來たが、惡漢はその財囊を強奪することは出來なかつたと女は誇らかに語つた。その時サンチョは云つた。――『お前が自分の貞操を、この財囊の半分も懸命に守るならば、男はそれをお前から奪ふことは出來なかつたであらう』と。

（二）戰爭と云ふ立場は意識的自殺の意圖の要求に應ずるが、而も直接の方法を避けるものであることは明かである。『ワレンシュタイン』の中で、マクス・ピコロミニの死に關してスエーデンの大尉の云つた言葉――『彼は死にたがつてゐたと云ふことだ』――を參照せよ。

ブダペストのフェレンチは鐵砲で偶然怪我をしたらしく見える場合を分析して無意識的自殺の試みとして說明し、その公表を私に委讓してゐる。私も彼の考へ方に全然一致するものである。――

『二十二歲になる大工ヨット・アド J. Ad. なるもの、一九〇八年一月十八日私を訪問し來る。彼は一九〇七年三月二十日に彼の左の顳顬を射貫いた彈丸を手術に依つて取除くことが出來るか、また取除かねばいけないかを尋ねに來たのである。時々、あまり激しくない頭痛のする外は氣持は全く惡くないと云ふので、それに客觀的に調べて見たところでも、たゞ左の顳顬に特色ある銃丸の創痕ある外は別に異狀がないので、私は手術するには及ぶまいと云つた。その場合の事情に就いて尋ねて居た時に、彼は偶然自分で怪我をしたのだと云つた。彼は兄のピストルを持遊んでゐたが、**彈丸がこめてあるとは思はなかつた**。左手を以てそれを左の顳顬にあてがひ、（彼は左利きではない）、指を引金に掛けた、ところが彈丸は飛出した。**六連發で彈丸は三つ這入つてゐた**。どうしてそのピストルを持遊ぶ氣になつたのかと私は尋ねた。すると彼はかう答へた。それは彼の徵兵の時で、彼は戰爭が恐かつたか

ら、前晩にそれを宿屋へ持つて行つた。軍隊の檢査で彼は靜脈の異常擴張で兵役には不適當なものと認められた。

その事を彼は非常に恥ぢてゐた。彼は家に歸つてピストルを弄してゐた。併しそれで自分を傷害しようなどとは考へなかつたのだが偶然の事は突發した。なほも續けて、彼は平生自分の運命を滿足に思つてゐるかと尋ねると、彼は溜息を以て答へ、或る娘との戀物語を始めた。彼女の方でも彼を愛してはゐたのだが、それにも拘らず彼を振棄てゝしまつた。彼女はたゞ慾のためにのみアメリカへ出發してしまつた。彼は女を追はうかと思つたが、兩親に停められた。彼の情婦の出發が一九〇七年一月二十日で、つまり怪我のあつた丁度二ヶ月前である。

『總てこれ等の疑はしい契機のあるに拘らず、患者はその發射が一つの「偶然」であつたことを主張してゐる。併しながら、私は、そのピストルを持遊ぶ前にそこに彈丸がこめてあるかどうかを調べなかつたことも、自己傷害も、總て心理的に決定せられてゐたことを確信するものである。彼は不幸なる戀愛事件のために落膽して、まだその印象の下にあつたので、軍隊に這入つて總てを「忘れ」たいと考へてゐた事は明かだ。この望みもまた奪はれた以上は、彼は武器を弄することに――つまり自殺への無意識的試みに、向ふやうになつたのだ。彼がピストルを右手でなしに左手で取つたと云ふこ

とは、彼が實際にたゞ「持遊んだ」のであつて、つまり意識的には何等自殺を行ふ意志のなかつた事を明かに語つてゐる。』

こゝに今一つの一見偶然的の自己傷害の分析を觀察者自身が私が委讓してくれたのがある。これは『人を呪はゞ穴二つ』と云ふ俚諺を思ひ出させる。

『X夫人は中流階級の良家の出で、結婚して三兒を擧げてゐる。彼女はいさゝか神經質ではあるが、生活に不適當と云ふほどではないから、無理に分析取扱ひを必要ともしない。或る日、彼女は自分の面貌の非常に驚くべき、併し一時的の怪我に就いて、次のやうに確認した。――彼女は修理の濟んだ街で堆石の上に轉んで、自分の顏を家の壁に持つて行つて磨りつけた。顏面全體は磨り傷を受け、眼瞼は靑腫れになつた。そこで彼女は眼が何とか成りはすまいかと心配になつたので、醫者を呼びに遣つた。彼女はその點に就いて安心した時に、私は尋ねた。――「併し、何だつて貴女は倒れたりなんかしたのです?」彼女はかう答へた。彼女の夫は關節の病ひで幾月もの間惱んでゐたが、丁度この事故のある前に、彼女は夫に街上でよく注意するやうに警告を與へたのであつた。さうして彼女は他人に警告した事が不思議に自分に起る經驗を屢々持つてゐると云ふのである。

私は彼女の不幸を決定するものとしてこれだけでは滿足出來なかつたので、何かもつと話すべきこ

とがあるだらうと思ふがどうかと訊ねた。左様、丁度この事故の直前に、街の向ふ側の或る店に美しい繪のあるのを見付け、それを急に子供部屋の裝飾にしたくなり、直ぐにそれを買はうと思つた。そこで、彼女は街上を見ずに店の方へ横切つて行つて、堆石の上に躓き、壁に顔を磨りつけながら倒れたが、手で以て自分を守る努力は殆どしなかつた。繪を買はうとの考へは忽ち忘れてしまつて、彼女は急いで家へ歸つた。――「併し、何故もつとよく氣をつけなかつたのですか」と私は尋ねた。――「左様ですね」と彼女は答へた。「屹度、罰が中つたんでせう。貴方にはもう何もかもお話しゝてあるやうなわけでね。」――「では、その話の事を貴女はまだそんなに氣に病んでゐるのですか。」――「えゝ、後には妾はそれを大層悔みました。妾は自分をいけない、罪の深い、不道德なものだと思ひましたが併しその時分には妾は神經質のあまり、まるで氣狂ひのやうでした。」

彼女の云ふのは人工早産の事であつた。これは始めもぐり醫者が行つたのであるが、その仕上げをしたのは或る婦人科醫であつた。この人工早産は夫の贊成を得て行つたのである。兩人の金錢上の事情からして、これ以上子供を惠まれることは御免を被りたいと思つたからである。

「妾は屢々かう云ふ言葉で自分を責めました。――併しお前は子供を殺させたのだ、と。さうしてそのやうな罪は罰を受けずにはゐないと云ふことを恐れました。只今、先生は妾の眼に大事はないと

仰言つて下さいましたから、もう妾は十分罰を受けたのだと信じてをります。

この不幸はこのやうに、一方自分の罪に對する懲罰であるが、他方幾月もの間その下ることを恐れてゐた、どんなのだか分らないが、もつと大きな罰を遁れるためである。彼女が畫を買ふために店の方へ進んで行つた瞬間に、この話の全體の記憶は恐怖（彼女が夫に警告した時分に既に彼女の無意識中に活動してゐたところの）を伴つて愈々勢を得、さうして多分かうした言葉でそれを云ひ表はすことが出來たであらうと思ふ。――併し、子供を殺すやうなお前が、何故子供部屋に裝飾を欲しがるのか。お前は人殺しぢやないか。大きな懲罰は確かに今や近づきつゝある！と。

これ等の思想は意識的とはならなかつた。併し彼女はこの、云はゞ心理的の契機に於いて、思想の代りにその瞬間に於ける事情を利用し、お誂向きに見えた堆石に不思議に躓いて自を懲罰の資としたのである。そのために彼女は倒れる時に手を差出さうともせず、また非常に吃驚もしなかつたのだ。彼女の事故の第二の、併し多分より微弱な決定者は、明かにこの早産事件の罪の幇助者たる夫を亡きものにしたいとの彼女の無意識的願望に對する自己懲罰であつた。これは石が轉がつてゐるから街上では非常に氣をつけよと餘計な警告を與へたことに依つて露はれてゐる。何となれば、彼女の夫は脚が惡かつたのだから、歩く時は非常に氣をつけてゐたのだから――。』（こ

このやうに自分自身の安全と自分自身の生命に對する憤りが、一旦偶然的と見ゆる無器用さと言動上の不適當さとの背後に匿れてゐることがあるものとすれば、やがてその同じ考へ方を、他人の生命と健康とを危險に陷れるやうな失策に移し得ることを悟るためには、必ずしも大なる進歩を閲するに及ばない。この考へ方の妥當を證明するものとして私の提示し得るものは、神經症患者に就いての私の實驗から得來つたのであつて、從つて只今の要求には十分に應はない。こゝに私は一つの場合を報告するが、それに於ける行り損ひと云ふよりは寧ろ象徴行爲、又は偶然行爲と呼ぶべきものが、後に至つて患者の苦鬪を解決するの手掛りを私に與へたのである。

私は嘗て或る非常に聰明な人の結婚關係を改善することを引受けたことがある。彼が自分を優しく愛してゐる若き妻と調和しない眞の原因は直ちに突止めることが出來たが、併し彼の認めたやうに、それ等の原因ではその不調和を説明することは出來なかつた。彼は絶えず離縁の事を考へ續けてゐたが、併し小さな二人の子供の愛にひかされて、さう云ふ考へはいつも拒けてゐた。それにも拘らず、彼は常に離婚の決心に舞戻り、自分の境遇を堪へ得べきものとする何の方法をも講じなかつた。そのやうに煩悶の落着してゐないことからして、私は、相尅する諸々な意識的動機を强める無意識的、被

【註】（一）ファン・エムデン Van Emden,『墮胎のための自己懲罰』（『精神分析學中央雜誌』所載）

抑壓的の動機が旣にそこに存することを私は知つたのである。さうしてそのやうな場合に於いては、私はいつもその煩悶を精神分析に依つて根絕せんと企てるのである。その夫は或る日、殊の外彼を驚かした一小事件を物語つた。彼は一層可愛がつてゐる長男の方の子をからかつてゐたが、子供を高く投り上げてゐる内に、最後に子供の頭が重々しく垂下してゐるガス燈に殆ど打當るほど高く投上げた。殆どであつて全然ではなく、も少しでと云つてもいゝところであつた。子供には異狀はなかつたが、たゞ恐怖のために眩暈がしただけであつた。父親は子供を腕に抱えて棒立になつてゐたが、母親はヒステリーの發作に襲はれた。この不注意な運動の特殊な器用さ、兩親に於ける反應の激しさなどから見ると、愛する子供の不幸を望む心持の表現としての象徵的行爲としてこの事件を見るべきものであることが私には感ぜられたのである。

この父親が子供に對して實際は優しいと云ふ事は矛盾であるが、この父親が子供を害さうとしたのが、その子が唯一の子でありまたなほ小さくてそれに優しい興味を感ずる機會をまだ持たなかつた時分であつたと云ふ事に依つてこの矛盾は取除かれると思ふ。そこで、この夫は當時その妻君に非常に不滿を持つてゐたので、かう考へてゐたらうと云ふことは假定するに容易である。——俺が何の興味も持たないこの小さな奴が死んでしまつたならば、俺は自由になつて家内と離緣することが出來るの

だのに、と。非常に可愛がつてゐたこの子供の死に對する願望は、だから無意識的に續いてゐたに相違ない。こゝからしてこの願望の無意識的定着への途は容易に發見出來た。そこには實は、この父親の子供時代の記憶中に力强い決定要素があつたのだ。それは彼の小さい弟が死んで、それを母親は父親の不行屆きのせいにし、延いてはひどい爭ひとなり、別れ話まで持上つた程であつた。私の患者の結婚生活のその後の過程、竝びに治療上の成功は、私の分析の正しかつた事を證明した。

第九章

症狀行爲と偶然行爲

今まで述べて來た行動は、そこに無意識意圖の實現が認められるものであつて、それ等の行動は他の意圖的行動の攪亂として現れ、また無器用の口實の下に匿れてゐる。さてこれから述べる偶然行爲なるものが行り損ひと違つてゐる點と云ふは、それが意識的意圖の支持を拒け、また實際何等口實を必要とせぬにある。偶然行爲は獨立的に現れ、また人々はそこに目的意圖を想像しないが故に、これを默認しておく。人々は偶然行爲を『仕ようとは思はないで』たゞ『純粹に偶然的に』、『手が自然に動いて』行ふ。さうして右のやうなことで偶然行爲の意義は盡されてゐると思つてゐる。このやうな例外的な立場を享受するために、偶然行爲は最早無器用を口實とする必要はないが、その代りに或る條件を叶へねばならぬ。即ち、それ等の行爲は目立たぬものであり、效果も些少でなけ　ばならない。

私は自分自身や他人に就いてそのやうな偶然行爲の多數の實例を蒐集したが、それ等個々を巨細に調べて見て『症狀（又は徴候）行爲』„Symptomhandlung“と云ふ名の方が一層適當してゐると信ず

る。それ等の行爲は行爲者自身が思ひも寄らない或るものを、且つ行爲者が概して他人に知らすことの意圖はなく、寧ろ自分自身の内に祕しておかうと目ざしてゐる或るものを表現するのである。

そのやうな偶然行爲又は症狀行爲が最も豐富に見られるのは、とりわけ神經症患者を精神分析する場合である。私はかう云ふ性質を具へた二つの實例を示すことに依り、如何に遙かに如何に微妙に、これ等の平明なる出來事が、無意識的思想に依つて決定されてゐるかを示すことを禁じ得ないのである。症狀行爲と行り損ひとの限界はあまり截然たるものではなく、この實例の如きも前章に於いて論じて敢へて差支へはないものである。

（一）　或る若い夫人が分析取扱の間に思ひ出したと云つてかう云ふ話をした。彼女は昨日爪を切つてゐる時に『爪の膓の薄皮を取らうとしてせついてゐる内に、肉まで切込んでしまひました』と。こんなのは誠につまらぬ話で、何だつてそんな事を覺えてゐて、わざ〳〵持ち出したのかと我々は尋ねる程であるが、それ故にこそこれが症狀行爲と云ふものだとの結論を下すのである。この些細な不器用からして傷つけたのは、實は結婚指輪をはめる指である。それのみならず、その事のあつたのは彼女の結婚當日であつたので、このかすかな皮膚の負傷も一つの全然決定せられた、その意味の容易に判定し得る事となるのである。彼女はまた同時に一つの夢を物語つたが、その夢には彼女の夫の巧妙

ならぬことゝ夫人としての彼女の不感症とが仄めかされてゐた。併し、普通に人々は右手の指に結婚指輪をはめるのに、どうして左手の指輪指(リングフィンガー)を彼女は傷けたのであらうか。それは彼女の夫が法律家„Doktor der Rechte"(『右の學者』『權利の學者』)であり、娘時代の意中の人は醫者„Doktor der Linke"(たはむれて『左の學者』)であつたからだ。左手への結婚と云ふことは、またそれの一定の意義を持つてゐる。

(二) 或る未婚の若い女はかう話した。――『妾は昨日百グルデンの紙幣を二つに引割いて、片方を妾のところへ訪ねて來た女客に與へました。それもやはり症狀行爲で御座いませうか。』巨細に調べて見たところ、次のやうなことが明かになつた。百グルデンの紙幣――彼女は自分の時間と財産の一部分を慈善事業に捧げてゐる。或る他の婦人と共に彼女は孤兒の世話をしてゐる。百グルデンはその婦人から彼女への寄附であつた。彼女はそれを封筒に入れて、假りに机の上に載せておいた。

來訪の女客は名流の婦人で、その人とも彼女はまた別の慈善事業を營んでゐた。この婦人は慈善の助けを求めることの出來るやうな人々の名前を書きつけておきたいと云つた。そこには紙片はなかつた。で、彼女は例の封筒を机から取上げて內容の事は考へもせずにそれを半分に引割き半分は名簿表の寫しをとるために自分の方に留めておき、他の方を來訪者に與へた。

この出來事は不適當ではあるが無難であることに注意せよ！　百グルデンの紙幣は裂けても各片がチャンとしてをれば、價値に於いて何の損失もないことは分りきつてゐる。相手の婦人が紙片を投棄てゝしまはないことは、その上に書きつけてある名前の大切なことに依つて保證されてゐる。またその人が價値のある內容を氣付くや否や返してくるであらうこと同樣疑ふまでもない。

併し、忘れてゐたればこそ惹起されたこの偶然行爲は、如何なる無意識的思想に表現を與へたものであらうか。この場合の來訪者は、私がこの患者を治療するに就いて非常に確定的な關係を持つてゐたのである。病氣に惱んでゐたこの娘に醫師ならばフロイドがよからうと嘗て薦めたのはこの婦人であつたのだ。で、もし私の考へが間違つてゐないとすれば、私の患者はこの事に就いてこの婦人に感謝してゐたのだ。この半分に裂かれた百グルデンの紙幣は、多分彼女の仲介に對する謝禮を意味したのであつたらうか。これはなほ謎となつて殘つた。

ところがまた別の材料がそこに加はつて來た。一日前に、全然別種の仲介者が彼女の親戚の者に、お孃さんは或る紳士と御近付きになられる考へはないかと尋ねた。さうして翌日の朝になつて、丁度この婦人の來訪の一時間前に、求婚者の求婚狀が舞込み、そのため大變上機嫌になつてゐた。で、來訪者がこの娘の御機嫌は如何ですと訊ねることに依つて會話を始めた時には、娘は多分かう考へてゐる

たに違ひないと思はれる。――『貴女はいゝ醫者を御紹介下さいましたが、併しもし貴女が正當な夫を（やがてはまた、子供を）お世話下さるならば一層感謝するでせうに。』この抑壓せられた思想に於いては二人の仲介者は一人に混融せられ、彼女の空想に於いては他の方の仲介者に與ふべきものを、その時の來訪者の方に與へてしまつたのである。この解釋は、私がこの患者にその前夜偶然行爲又は症狀行爲に就いて話したのだと云ふことを思合せるならば、愈々以てこれを確信せざるを得なくなる。彼女はそこで、最近の機會を活用して、類似の行爲を行つたのである。

これ等の無暗に屢々起る偶然行爲竝びに症狀行爲を、習慣的のもの、或る境遇の下に於いては規則的に起るもの、竝びに孤立的のものとに分類することが出來よう。第一類（時計の鎖をまさぐつたり、自分の髯を引張つたり、等々）のは殆ど本人の特質と見なされ得るものであるが、多くの痙攣運動に關係がある。さうして、慥に後者と關係させて取扱ふに價するものである。第二類としては、私は自分の杖を玩弄すること、自分の鉛筆で落書をすること、ポケットの中で錢をチャラ〳〵音させること、泥土やその他造形的の材料を揑ね廻すこと、自分の着物をいろ〳〵にひねくり廻すこと、その他これに類した他の多くの行爲を數へる。心理的取扱ひの間にこのやうな遊びを行つてゐると、それは必ず他の表現の許されない意味がそこに匿れてゐるのだ。大抵は本人はそれに就いて何も知らない。彼は

同じ事を行つてゐるかどうか、或は自分の平常の遊び方に於いて多少の變化を加へてゐるかどうかを知らないでゐる。さうして彼はまた、これ等の行爲の效果を見落したり聞落したりするものである。例へば、彼は錢のヂャラ〳〵鳴る音を聞けども聞いてゐない。で、もしそれに注意を向けられると、吃驚してそんな音をさせたかしらと云ふ顔をする。醫師にとつてこれ等と同樣に意義あり、觀察の價値のあるのは、患者が氣付かずに自分の着物をいろ〳〵にまさぐる、そのまさぐり方である。服裝上普通とは違つたあらゆる點、一切のだらしのない點、例へばボタンを掛け忘れてゐる事、露出のあらゆる痕跡などは、服裝者が直接には云ふことを欲しない何物かを、普通には彼自身が全く無意識でゐるところの何物かを、表現せんとするものである。これ等の些細な偶然行爲の註釋、並びにその註釋の證明は、治療中の四圍の樣子から、話し合つてゐる題目から、注意が一見偶然のやうに行はれてゐる事に向けられた時表面に出て來る觀念からして、何時でも確實に與へることが出來る。さう云ふ次第であるから、私はこの場合、實例の報告並びにその分析を以て自分の主張を支持することは控へておく。が、併し、私がこの事を敢へて言及すると云ふのは、患者に於ける如く常態者に於いてもこの同じ意味が存することを確信するからである。

が、私は少くとも一例を擧げて、平常行はれる象徴的行爲が、常態人の最も內奥の、最も重要な生

活の部分と、如何に密接に關係させ得べきものであるかを示すのを禁じ得ないのである。(二)――

【註】(一) ジョーンズ『日常生活の象徴に就いて』(精神分析學中央雜誌所載、一九一一年)

『フロイド先生の敎へられたやうに、常態人の嬰兒生活に於ける象徴は、初期の精神分析の經驗が敎へたよりは遙かに大きな役割を果してゐるのである。この見地からして次の簡單なる分析は一般の興味を索くであらう、殊にそこに醫術上の前途の光明が認められるが故に……。

或る醫師が轉宅して自分の家具を置き直してゐた時に、一本の木製の「單耳用」聽診器を見付けた。何處へ置いたものだらうかと暫く考へた後に、それを彼の机の上に、而も自分の椅子と患者がいつも坐る椅子との丁度眞中どころに來るやうな風に、横たへて置かなければならないやうな感じがした。そのやうな行爲は二つの根據からしていさゝかをかしかつた。第一に、彼は聽診器をあまり屢々用ゐない。(彼は、つまり、神經醫である。)さうして聽診器が必要な時には、兩方の耳にあてがへる二重のを用ふる。第二に、彼の醫療上の道具や機械は總ていつも抽斗の中に納めてあるのに、これだけが例外であつた。併し彼はこの事を別に問題にもしなかつたのだが、或る日未だ木製の聽診器を見たことのない一患者が、それは何ですかと尋ねたので、自分でも考へて見るやうになつた。それは聽診器だと云はれて、患者は何だつてこんなところに置いてあるのですかと訊いた。別にそこに置かなければ

ならない事はないが、たゞそこへ置いたまでだとうまく答へた。併しこの事あつたゝめに彼は考へるやうになり、この行爲の内に無意識的動機があるだらうかと自省し始めた。彼は精神分析法に興味を持つてゐたので、この事を調べて見てくれと私に依賴した。

まづ最初に思ひ出した事は、彼が醫學生時代に、病院醫が診察室へ行くのにいつもその聽診器を手に持つて出掛けて行つた（そのくせ使ひもしないのだが）のを見て印象を受けた事であつた。彼はこの醫師を大いに尊敬し非常に傾倒してゐた。後に彼自ら病院醫となつた時には同じ習慣がついて、もし間違つて手ぶらで室を出ることがあると、非常に氣持が惡かつたものであつた。この習慣には別に目的のないことは、彼が平常用ふる唯一の聽診器は兩耳用の聽診器で、それを彼はポケットの中に既に入れてゐるのだと云ふ事實に依つてのみならず、また彼が外科醫となつて少しも聽診器の必要のなくなつた時でも、なほこの習慣が續いてゐたと云ふ事實に依つてもまた明かである。

して見れば、問題の用具の觀念は何等かの方途に於いて、常態の場合に於けるよりはもつと大きな意義がそこに賦與せられてゐる――換言すれば、その物は本人にとつては他の人々にとつてより以上のものである――事が分るのである。その觀念はそれが象徵化する他の何等かの觀念、さうしてそこからして自らの附加的意味を滿喫し來るところの他の何等かの觀念と、無意識的に結合せられてゐな

ければならない。この第二次の觀念とは何であつたか。それを云つてしまへば殘りの分析も判つてしまふのだが――つまりそれは性器的の觀念である。如何にしてこの不思議な聯想が成立したかは直ちに述べるであらう。聽診器を持つてゐなくて病院で不安であつたことや、またそれを前に置けば救はれたやうな、大船に乘つたやうな氣持になるのは、「去勢コムプレックス」と呼ばれてゐるものに關係がある。つまり、玩具が屡々取上げられるやうに、自分の身體の大事な部分が取上げられてしまひはせぬかとの嬰兒的不安が、形を變へて成人の生活中にも屡々續いて來てゐる、それを云ふのである。その恐怖と云ふのは、もし自分が、特に或る方面に於いてい丶子でないと、それを切取つてしまふぞとの父の威嚇に職由するのである。これは極めて普通のコムプレックスであつて、後年に於ける大抵の神經症と信念の缺乏とは多くはこ丶から來るのである。

そこでまた彼の家庭での醫者に關する、嬰兒時代のさまぐな記憶が出て來た。彼は小兒時代にこの醫者に非常になついてゐた。さうして分析してゐる内に、彼の妹の誕生に關する彼の四歲時分の二重の空想に就いての、長い間埋もれてゐた記憶が掘り出された。つまり、妹は（1）自分と母との間の子であり、父は與らぬと云ふ空想と、（2）自分と醫者との間の子であると云ふ空想とである。この空想に於いては、彼はつまり男の役目と女の役目とを果してゐるわけである。この出產と云ふ事件に依

つて彼の好奇心が惹起された時分に於いては、醫者がその事件の間にシテの役を演じ、父親はワキの役を演じてゐた事を氣付ずにはゐられなかつた。この事が彼の後年の生活に如何なる意義を有するかは、直ちに指摘せられるであらう。

聽診器の聯想は多くの關係から構成せられたものである。第一にこの道具の物質的外見、――眞直な、硬い、中空の圓筒で、その一端には小さい球形狀の頂が着き、他端は擴がつた基底となつてゐる――またそれが醫術上の七つ道具の肝心なものであり、醫者がその魔術的な面白い藝當を演ずる道具だと云ふ事實、これ等が彼の少年らしい注意を牽いた事柄であつたのだ。彼は六歲當時に、屢々この醫師に自分の胸を調べて貰つた。さうして醫師が頭を自分の方に近付け、聽診器を胸の方へ押入れ、アチコチと呼吸のやうな律動的な運動を以てそれを動かした、その肉的の感覺を明白に想起したのであつた。彼は醫師がその聽診器を帽子の中に入れて步く習慣にひかされたのである。醫者がその主要な道具を自分の身體の周りに匿して持つてをり、患者のところへ診に行つた時には何時でも手許にあつて、たゞ帽子（つまり衣裝の一部分）を脫いでそれを「拔き出す」のだと云ふ事は、彼には非常に面白い事に思へた。八歲の時には、彼は年長の少年から、醫者は婦人患者の寢床に這入る習慣のあるものであることを聞いて、强い感銘を受けた。慥に、若くて美男であつたこの醫者は近所の婦人の間

には、その內には、當人の母親も含まれてゐた——非常に人氣があつた。醫者と「道具」とは、それ故に、彼の少年時代を通じて大きな興味の對象であつた。

　多くの他の場合に於てもさうだが、掛りつけの醫者との無意識的同一化と云ふことが、當人の職業選擇の決定の主要なる動機であつた、それはこゝでは二重に條件づけられてゐる。（1）或る興味ある機會に於いて醫者が、（當人の非常に嫉妬してゐた）父よりも優位に立つてゐたこと、（2）禁斷せられた題目に就いて醫師は知識を持つてをり、且つ性的滿足の機會を持つてゐること——。當人は婦人患者に對して屢々性的誘惑を經驗したことを容認してゐる。さうして彼は二度戀愛に陷つたが、遂に一人と結婚した。

　次に思ひ出したのは或る夢の記憶であるが、それは明かに同性愛的、被虐性的（マゾヒスチッシュ）性質の夢であつた。その夢の中に於いて、或る男（それは例の掛りつけの醫師の代償であることがやがて分つたが）が「劍」を以て當人を襲ふて來た。劍の觀念は夢の中では屢々出て來るが、前に述べた木製聽診器に聯想せられたのと同じ觀念を代表してゐるのである。劍に就いての思想は、當人をしてニイベルンゲン物語中の一節を想起させた。その一節に於いては、シガード王は拔身の劍（Gram）を自分とブルンヒルダ姬との間に横たへて眠るのである。この事は常々彼の想像を非常に衝くのであつた。

症狀行爲の意味は今や遂に明となつた。當人は聽診器を自分と患者との間に橫たへたのは、丁度シグルド王が自分の劍（これまた同樣なる象徵）を己れと己れの手を觸るべからざる姬との間に橫たへたのと同じである。この行爲は妥協形成（Kompromissbildung）である。これは彼の空想中に於いて、魅惑的な患者と近しい關係を結びたいとの抑壓せられたる願望（性器を中間におくこと）と、同時にこの願望は現實とすべからざることを忘れないこと（劍を中間に置くこと）この兩者のために役立つてゐる。それは、云はゞ、誘惑に負けないやうにとの禁厭（まじない）である。

なほ私は、リットン卿の『リシェリウ』,Richelieu'中の次の一節がこの少年に非常に印象を與へたことを云ひ添へておきたい。――

,Beneath the rule of men entirely great
The pen is mightier than the sword'

「完全に大なる人の治下にては
筆は劍より力あり。」(1)

【註】（一）オールダム Oldham の "I wear my pen as others do their sword"（「他の人々の劍佩くごと我筆を佩く。」參照。

また彼は盛んなる著述家となり、異常に大きな萬年筆を用ゐてゐることも云ひ添へておきたい。こんな大きなペンを使つて何の必要があるのかと嘗て私の尋ねたに對し、彼は獨特の口吻で答へた。――「だつて隨分書くことがあるからね。」と。

この分析はまた我々をして、「無難」にして「無意味」なる行動が如何に深き洞察を精神生活中になさしめるか、また如何に人生の早期に象徴化の傾向が發展するものであるかを、思はしめるのである。』と。

私もまた自分の精神治療の經驗中から一つの實例を述べることが出來る。この實例に於いては、バンの碎片をいぢくつてゐる手が明白に物を云つたのである。私の患者はまだ十三歲に達しない少年であつたが、二ケ年間程非常なヒステリーに惱んでゐた。私は、彼が性的の經驗を持つてゐるに相違ない、また年齡相應に性的の問題で惱んでゐるに相違ないと睨んだのである。併し私は進んで自分の憶測を調べて見たいと思つてゐたから、彼にいろんな說明を與へて助けることは注意をしてゐた。であるから、私は彼の樣子に氣をつけて、そこに私の望んでゐるやうな材料の現れるのを待つてゐた。

或る日、彼は右手の指の間で何かを丸めてゐた。彼はそれをポケットの中に突込んで、そこでなほもそれをいぢくつてゐたが、やがてまたそれを引出したり、そんな風なことをやつてゐた。私は彼が何を手に持つてゐるのか尋ねはしなかつた。併し彼は突然手を擴げてそれを私に見せた。それはパン屑をこねて丸めたものであつた。その次の診察の時も、彼は丸めたのを持つて來て、我々の對談してゐる間中、彼の眼は閉されてゐたが、手では何か形を拵えてゐた。その拵え方が非常に迅いので、私は興味を索かれた。それは疑ひもなく人形であつて、丁度有史前の偶像のやうな不恰好なものであつたが、頭もあるし、手も二本あるし、脚も二本あるし、兩脚の間にはお添物まであつて、彼はそれの尖端を非常に長く延してゐる。この人形が出來上つたと思ふと、忽ち彼はまたこれを捏ねてしまつた。後には彼は人形をつぶさずにそのまゝにしておいたが、併し前のと同じお添物を背の平たいところに或は他の部分に付けて、最初のものゝ意味を踏晦しようとするのであつた。私は彼を理解してゐると云ふことを知らして遣りたかつたが、併し同時に、これ等の人形を能動的に作りつゝ何も考へてゐなかつたとは遁げさせまいと思つてゐた。この意向を以て私は急に彼に尋ねた、ローマの王様がその息子の使者に庭園内で無言劇的の返答を與へた話を覺えてゐるかと。覺えないが、それは頭の禿げに返答を書かれた奴隷の話かと訊いた。で、私は彼に云つた、『いや、それはギリシアの物語だ』と。

うして次のやうな話を述べた。――タルクヰニウス・シウペルブス王はその皇子ゼクストスを或るラテンの都市に忍び込ませた。皇子はやがて市中に足がかりを得て、王の許に使者を遣はし、これからどうすればよいのかと尋ねにやつた。王は何の返答もせずに庭に降り立つた。そこでまた質問を繰返させた。さうしてそこにある最も大きな最も美しい虞美人草の頭を默つて打落した。使者の爲し得る總ては、この事をゼクストスに報告する事であつた。ゼクストスは父を了解し、市中の最も重立つた市民を暗殺に依つて亡きものにするやうに仕向けた。

私の話してゐる間に、少年は捏ねるのをやめて、さうして王が園内で爲した事を私が話してゐた時に、「默つて打落した」と云ふ言葉のところへ來た時、彼は人形の首を電光石火のやうに素迅い動作を以て引ちぎつた。これで見ると、彼は私を理解したのである。さうしてまた彼も私に理解せられてゐることを氣付いたのである。今や私は直接的に彼に質問することが出來た。さうして彼の望んでゐる知識を與へた。かくして神經症は間もなく終りを告げたのである。

健康者に於いても神經症患者に於いても、症狀行爲は無限に豐富であるが、それ等の症狀行爲が我々の興味を牽く所以のものは一二にして止まらぬ。醫師にとつてはそれ等の狀態は新しい、今まで未知であつた條件を知るの價値ある指標として役立つことが屢々である。人間の觀察者にとつては、そ

れ等の行爲は屢々一切のものを、時としては彼が知らうと欲する以上のものを、呈露するのである。その適用に親熟したるものは時として自らソロモン王のやうな感じがする。東方の傳說に依れば、ソロモン王は動物の言語をも解したと云ふことである。

或る日、私は未知の青年をその母親の家に往診することになつた。彼が私のところへ來た時に、彼のズボンの上に大きなシミの出來てゐるのを氣付いた。その周邊が特殊な剛張り方をしてゐるので、それは玉子の白味であると分つた。暫くもぢ〳〵してゐた後、聲が嗄れたものだから生玉子を呑んだが、白味が多少着物の上に落ちたらしいと辯解をした。この辯解を確證するために、彼はなほ室內にあつた皿の上に載つてゐた卵の殼を示した。怪しげな汚點はこのやうに無難な說明を下されたが、併し母親が去つて我々が二人きりとなつた時、これほど診斷を私のために容易ならしめてくれたことは有難いと彼に話した。さうして直ちに私は、彼が自慰の惡效果のために惱んでゐるのだとの告白を我我の話の題目としたのである。

また或る時は、私は金持で吝嗇で馬鹿な婦人を訪れた事がある。彼女は常々、自分の容態の原因に端的に觸れる前に、山ほど愚痴を卿すことに依つて醫者に仕事をさせようとするのである。私が這入つて行つた時、彼女は小さな机の前に腰を下して銀貨を小高く積み上げてゐた。彼女が立上る拍子に

銀貨の幾つかは床上に轉び落ちた。それを拾ひ上げる彼女を私は助けてやつたが、併し彼女が自分の不幸を細々と語つてゐるのを遮りながら、私はかう云つた。——貴女の善良な養子は、これほど貴女のお金を費つたのですかと。彼女は困つてそれを否定してゐたが、暫く經つて、養子が贅澤であるために非常に困ると云ふ悲しい話を始めた。さうして彼女はそれ以來私を呼びに來なくなつた。相手の症狀行爲の意味を告げてやつて、いつも必ずその人と友人になれるとは限らないものである。

今一つの『行り損ひに依る告白』をハーグのエムデン博士 Dr J.E. G. van Emden (Haag) が報告してゐる。——『ベルリンの或る小さい料理店で勘定をする時に、給仕が或る食物の値段が——戰爭のために——十二ペニヒだけ高くなつたのだと云つてきかなかつた。では、どうして値段表にさう書いてないのかと云つたところ、それは屹度書き落したのでせう、併し慥にさうに違ひありませんと云ふ返答であつた。總額を納める時に、彼はへまをやつて、十二ペニヒの貨幣を私のために机の上に殘して行つた。

「併しこれで見ると、君は慥に僕に餘計に拂はせたことが分るよ。帳場へ行つて掛合つて來ようか。」

「ぢやァ、一寸待つて下さい……」と云ひすてゝ彼は去つた。

勿論、私は彼を行かせてやつたし、また二分間の後に、どうしたわけだか他の食物と間違つてゐま

して吳れてやつた。』

食事の時に、隣の人を觀察してゐると、非常に美事な、敎へられるところ多き症狀行爲をそこに發見することが出來る。

ハンス・ザックス博士はかう述べてゐる。――

『私は親戚の老夫婦の夕食の時に同席したことがある。夫人の方は胃が惡くて嚴格な絕食を強いられてゐた。夫君の前には燒肉がつけられたが、夫人の方にはこの食物は用はないので、彼は妻君にからしを取つて吳れと賴んだ。妻君は戶棚をあけて胃藥の小さい罎を取出し、さうしてそれを夫君の前に置いた。樽の形をしたからしのグラスと小さい藥罎とは殆ど似ても似つかぬものであるから、そのために間違ひが生じたとは說明されない。併し妻君は夫君が笑つて注意を促したので、始めて氣がついた。この症狀行爲の意味は別に說明を要しない。』

この種の好例を二つ次に擧げるが、これはギィンのダットナー博士の報告に負ふものである。觀察者は甚だ巧みに利用してゐる。――

『私は晝食の時、同僚の哲學者H博士と同席した。彼は試補生の不利に就いて話したが、その時彼

は學業を終る前に於いてすら、大使付の、つまりチリへの全權使節への祕書として据ゑられたことを言及した。「ところがやがて使節は轉任になり、私は新任者に會はうとも努めなかつた。」この最後のところを話してゐた時、彼は一片のパイを口のところへ持つて行かうと取上げてゐたが、無器用のためであるかのやうにこれを取落した。私は直ちにこの症狀行爲の匿れた意味を捉へた。さうしてこの、精神分析を知らない同僚に向つてかう云つた。――「實際、君はうまい喰ひものを取り損つたね。」併し、彼は私の言葉が彼の症狀行爲にも同樣に關係させ得るのだと云ふことを悟らなかつた。さうして彼は私が云つたのと同じ言葉を、恰も私が實際に彼の口からそれ等の言葉を取つたかのやうに、特殊な愉快さのある、驚くべき生彩を以て繰返した。――「實際、僕が逃がしたのは非常にうまい喰物だつたんだがね。」さうして彼をしてこの收入多き地位を失はしめたところの自分の無器用に就いて細々と物語つた。

この症狀行爲の意味は、この同僚が關係の薄い私に、自分の得損つた物質生活に就いて話すことを差控へようとし、さうして彼の抑壓された思想が症狀行爲を假面として、匿すつもりの事を象徵的に表現し、かくて彼が無意識から救はれたのだと云ふことを眼中に置いて見ると、一層明白に分るのである。』

一見その意圖なくして物を持去つたり、持つて行つたりすることに如何に意味があるかは、次の實例がこれを示してゐる。

ダットナー博士報告――『私の或る同僚が非常に尊敬してゐる幼馴染の女友達の許に彼女の結婚後の最初の訪問を試みた。彼はこの訪問の事を私に話し、その時いつものやうに一寸の間訪問しようと思つたのにそれが長くなつたのは不思議でたまらぬと云つた。さうしてまたその時彼が演じた非常に妙な失敗に就いて報告した。女友達の夫がやはり會話に加はつてゐたが、這入つて來た時にはたしか机の上にあつたマッチ箱が何處へ行つたかと捜してゐた。私の同僚もまたポケットに手を突込んで、若しやそこに入れはしなかつたかと捜して見たが無かつた。暫く經つてからそのマッチは實際ポケットから出て來た。ところが箱の中にはマッチは一本しかないのでをかしいと思つた。――二三日經つて見た夢には箱の象徵が出て、さうして幼馴染に關係があつて、これに依つて、私の說明を確證した。即ち、この症狀行爲に依つて私の同僚は自分の先取權を主張し、自分の所有（たゞ一本のマッチだけが內に這入つてゐた）の專らなることを表現せんとしたものである。』

ハンス・ザックス博士報告――『自分の女中は或る種のパイが非常に好きである。この事は疑ひの餘地がない、何となれば、この食料だけは如何なる場合にでも必ず備へてあるからである。或る日曜日

に、彼女はこのパイをテーブルまで持つて來、それをパイ皿に移し、今まで這入つてゐた皿の幾枚かを重ねて持つて行かうとしたが、その時、女中はその積み重ねた皿の一番上にパイを載せ、それを持つたまゝ臺所へ引込んでしまつた。我々は初めはそのパイを女中が何か手を入れ直すところがあるのであらうと思つてゐたが、一向出て來ないので妻がベルを鳴らして尋ねた。——「ベティーや、パイはどうしたの?」女中は質問の意を解し兼ねる風で答へた。「どうしたのつて、どうか致しましたか?」で、我々は彼女がパイを臺所へ持つて行つてしまつたぢやないかと云つた。彼女は皿の上にそれを載せて持つて行き、「氣がつかずに」片付けてしまつたのである。

その次の日、前日のパイの殘りを喰べようとした時、昨日殘したまゝ少しも減つてゐないことを妻が氣付いた。つまり、女中は當然自分の喰べていゝ好物を喰べることを肯じなかつたのである。どうして喰べなかつたのかと尋ねられて、女中はいさゝかどぎまぎしながら、すつかり忘れてゐましたと答へた。——兩度の場合に於いて嬰兒的の行り方が明白に認められる。最初には自分の好きなものは自分だけで獨占したいとの子供らしい貪婪さが現れ、次にはお前の方でけちけちするなら勝手にしろこつちはそんなものは要らないやと云ふ、これまた同樣に子供らしい意地張りが現れてゐる。』

偶然行爲又は症狀行爲が結婚生活に關して起ると、屢々非常に重要な意義を持つ。さうして無意識

心理を知らざるものは前兆が現れることはあるものだと云ふことを信ずるやうになる。若い夫人がその新婚旅行の途上で結婚指輪を失つたりすることは、よしんばそれが置忘れであつたり、直ぐに見付かつたりしても、あまり緣起のいゝことではない。

私の知つてゐる或る女で今は離婚してゐる人が、彼女の商務上の處理には屢々その生家の名を署する癖があつたが、幾年かの後に實際その生家の名を再び名乘るやうになつた。——嘗て私は或る新婚の夫婦の客となつたことがある。その時、花嫁は笑ひながら自分の最近の經驗を物語つて云ふに、丁度新婚旅行から歸つた翌日、夫が出勤の留守の間に、以前のやうに自分の唯一人の妹を連れて買物に出掛けた。突然、彼女は或る男を街の向ふ側に見付け、妹の方を小突きながら云つた。あら、あれはLさんぢやなくつて？　もう幾週にもなるのに、この男が自分の夫であることを彼女は忘れてゐた。この一寸した私はこの話を聽いてぞつとしたが、併しそこから何等の推論を引出す勇氣はなかつた。この一寸した話の結果は數年の後に現れて、彼等の結婚は果して非常に不幸なる終りを見た。

次なる觀察は、これを忘却の一例として取扱つても差支へないものであるが、メーダーに依つて佛文で發行せられた立派な著書中から引用したものである。——

『或る婦人が最近私達に話した所に依ると、彼女は自分の婚禮の服を着て見ることを忘れてゐて結

婚の前日の夕方になつてその事を思ひ出して、女の裁縫師は其の顧客に會へまいと斷念したと云ふ事である。この事はこの許婚の婦人が嫁入の着物を着る事を大して喜ばず、この苦しい考へを忘れようとしてゐたことを證明するに十分である。彼女は今……離婚になつてゐる。』

徴候を看破することを學んだ或る友が偉大な女優エレオノラ・デウゼに就いて私に物語つた。彼女はその役の中に症狀行爲の一つを導入してゐるが、それに依つて見ると彼女が如何に深いところからその演技を引出して來てゐるかゞ分る。それは姦通を取扱つた劇であつた。彼女は丁度その夫と議論をした後に獨白をしてゐる、そこへ誘惑者が立現れることになるのだ。その僅かの間に、彼女はその結婚指輪を弄んでゐる、彼女はそれを抜いたりはめたり、さうして最後にまたそれを抜いてしまふ。彼女は今や別のを迎へる用意が整つてゐる。

最後に、ライクが今一つ指輪の症狀行爲に就いて述べた實例を擧げておく。

『結婚生活者が結婚指輪を脱いだり篏めたりして演ずる症狀行爲を我々は知つてゐる。同樣な症狀行爲の幾つかを私の同僚Mは演じた。彼は自分の愛する或る娘から指輪を贈られたが、その時娘はその指輪を失はないで下さい、もし失つたらもう貴方は妾を愛してゐて下さらないんだと思ひますと云つた。その後、彼にはもつと重要な關心事が出來て、彼はその指輪を失ひさうであつた。彼が時々、

例へば顏を洗ふ時などに、拔いておいたりすると、必ず置き忘れて再び搜し出すのに可成り骨を折らなければならないのが屢々であつた。郵便箱に手紙を投函する時などには、指輪は郵便箱の緣に觸れて脫げさうな氣がしてならなかつた。或る時、彼は實際にその無器用を演じて、指輪を郵便箱の中へ落してしまつた。この時彼が出した手紙と云ふのは、彼のもつと以前の愛人への別れの手紙であつた。さうして彼はその愛人に對して濟まないと云ふ感じを持つてゐた。同時に彼にはこの娘に對する戀しさが眼覺めて來た。その戀しさが彼の現在の愛人に對する心持と矛盾したのであつた。』（國際精神分析學雜誌、一九一五年、所載）

『指輪』の事に就いては詩人は旣に云ふだけの事を云ひ盡し、精神分析を以てしても別に新しいことを云ひ得ないやうな感じがするほどである。フォンターネの小說『暴風雨の前』を讀んで見るとそれが分る。また指輪のやうな象徵的意味の豐富なものは、よしんば婚約指輪や結婚指輪でないにしても、意味深長な行り損ひに用ゐられるものであることは敢へて不思議でない。カルドス博士 Dr. M. Kardos は同じ種類の次のやうな一例を報告してゐる。

『幾年か前に、私よりも遙かに年少の男が私の精神的勞作の仲間に加はり、私に對して云はゞ師弟の間柄に立つた。私は或る機會に於いて指輪を一つ贈つたが、彼は我々の關係に於いて非難すべき點

を發見すると直ぐに、この指輪に關して症狀行爲、行り損ひを演ずることが屢々であつた。近頃、彼は次のやうな、殊に美事な、明白な實例を私に報告した。――我々は每週一回開かれる會合で屹度出會ふことになつてゐたが、或る會合の時に彼は何かの口實の下に出席しなかつた。彼は或る若い女との約束の方が望ましく思へたからである。その次の日の朝、家を出て旣に大分經つてから、彼は指輪をはめてゐないことを始めて氣付いた。彼は家ではその指輪を每晚手筥の上に載せておくので、そこに忘れて來たのであらうから、家へ歸れば在るのだと思つて別に心配はしなかつた。彼は家に歸ると直ぐにそれを搜したが駄目であつた。さうして部屋中を隈なく搜したが、これまた駄目であつた。最後に彼はこの一年以上このかた、その指輪を小刀と一緒に竝べて小筥の上に置き、さうしてその小刀をチョッキのポケットに入れて持步く習慣になつてゐることを思ひ起した。そこで彼は「うつかりしてゐて」その指輪を小刀と一緒にポケットの中に入れたのではなからうかと考へて見た。彼は早速ポケットの中に手を入れて見たら、指輪は果してそこに在つた。「チョッキのポケットに入れた指輪」と云ふのは、その指輪を贈つた女を男が欺かうとする時の指輪の持つて行き方を諺風に云つたものである。彼の罪障の感がまづ彼自身に自己懲罰(「お前はもう早この指輪を欲める資格がない」)を加へる。次に自分の不忠實の懺悔を單なる行り損ひの形でなさしめる。この事について報告しようとしてゐる内

に、彼の罪障の感はこの小さな「不忠實」を犯した事を懺悔するやうになつた。』

私はまた相當の年配の或る紳士が非常に若い女を妻君にし、結婚の夜は旅行に出ずに大都市の或るホテルに宿ることにしたと云ふ話を知つてゐる。ホテルへ着いた時に、彼は新婚旅行用の金を總て入れておいた紙入れを持つて來てゐないことを知つて吃驚した。彼はそれを置忘れたか、或は失つたに相違なかつた。併し家の下男に電話を掛けることが出來て、捜させたところ、主人が置いて行つた外套中にその紛失物が這入つてゐた。で、金(力)（フエルメーゲン）なくて結婚生活に這入つた主人が宿屋で待佗びてゐるところへ屆けた。彼はこのやうにしてその翌朝、若き妻と共に旅立つことが出來た。その當夜に於いてさへ、彼の恐れてゐたやうに、果して彼は『力がなかつた』（ウンフエルメーゲンド）のである。

人々が物を『失ふ』ことは症狀行爲の思ひも寄らぬ延長であり、從つてまた遺失者自身の祕かな意圖にとつて好ましいものであると云ふことを思ふのは慰めである。それは屢々、失はれたものをあまり大切に思つてゐないこと、そのものを祕かに嫌つてゐること、或はそれを呉れた人を祕かに嫌つてゐることの表現であり、或はこの品物を失はうとの願望が象徴的聯想に依つて他のもつと重要なる事物からこの事物に移されたのである。價値ある品物を失ふことは、さま〴〵な感情の表現に役立つ。そのやうな遺失は一つの抑壓せられた思想を表現する事にもなるし、つまり、我々の聞きたくないや

うな警めを繰返す事にもなるし、或は——何ものにもまして——運命の力に對して犧牲を拂ふことにもなる。運命の力に從ふと云ふやうなことはなほ我々の間に全然消滅してはゐない。

遺失に關するこの命題の說明として、ほんの二三の實例を擧げておく。——

ダットナー博士の報告。——『私の或る同僚の者が鐵筆を既に二年以上も使つて來、それが非常に質のいゝものであつたので大切にしてゐたのだが、思ひがけなく失くして了つたと私に云つた。これを分析して見たら次のやうな事情が分つた。——その前日に、彼は非常に不快な手紙を彼の義兄から受取つた。その手紙の文末にかうあつた。——「只今のところ僕は君のやうな不注意な怠惰者を助けてゐるやうな茶氣もないし暇もない」と。この手紙の及ぼした效果は非常に力强くて、その翌日に彼は義兄から贈られたこの鐵筆を犧牲にしてしまつたのである。兄の恩惠を思ふことが重荷になつたからである。』

私の知つてゐる或る婦人はその老母の喪中に芝居見物は遠慮することにしてゐた。その喪の年限のきれる數日前に彼女は、或る知人から話があつて、特に面白い出しものがあるからと云ふので切符を一枚とることにした。劇場の前へ着いた時に、彼女は切符を失つてゐることを知つた。後から考へて見ると電車から降りた時、電車切符と一緖にそれを棄てゝしまつたのであつた。この婦人は不注意の

ために物を失ふやうなことのないのを自慢にしてゐる人である。

そこで我々は、彼女の演じた忘却の今一つの場合もまた滿更動機のなかつたのではないことを假定することが出來る。

或る療養地に着いて彼女は以前に住んでゐたことのある宿舍を訪れることに決めた。彼女はそこで知人として迎へられ、待遇せられた。それで勘定をしようと思つた時に、彼女は自分をお客さんと考へてゐたことを知つたが、それは彼女には正當なこととは思へなかつた。何か女中に置いて行つて下さるなら置いて下さつてもよいと云ふことを宿舍の者が云つたので、彼女は一マルクの札を卓子の上に置くために財布を開いた。夜になつて宿舍の下男が五マルクの札を一枚彼女の許に持つて來て、これは貴女のお座りになつた卓子の下にあつたから多分貴女のものに相違ないと主婦が云ふのでお返しに來たと云ふことであつた。

彼女は女中のために心付を取出す時に、その札を落したのであつた。彼女はどうやら勘定を支拂ひたいと思つたらしいのである。

オットー・ランクは或る相當長い論文(こ)に於いてこの行爲の根柢に存する犧牲の氣持と、それのより深いところから來る動機とを、夢の分析に依つて明白にしてゐる。品物を紛失することのみならず發

見することもまた原因があるらしいとまで云つてゐるのは面白い。如何なる意味に於いてこれを理解すべきかは、こゝに私の擧げる彼の觀察からして分るであらう。捜した時に始めて出て來る物は失つた時に既に存在してゐることは明かである。

【註】（一）「症狀行爲としての忘却」（精神分析學中央雜誌所載）

『物質上兩親から獨立してゐる或る若い娘が格安の裝身具を買はうと思つた。彼女は店で自分の氣に入つた品物の値段を尋ねたが、殘念ながら自分の貯金よりはその方が高かつた。併したつた二クローネ不足なだけで、この小さな喜びが彼女に遮られてゐるのだ。がつかりして彼女は夕方の賑かな街を家の方へとぶら〳〵歸つて來た。最も人の込合つてゐる場所で彼女は――買物のことで深い思ひに沈んではゐたが――地面に落ちてゐる小さな紙片を見付けた。彼は振返つてそれを拾ひ上げて見ると驚いた事にはそれは折疊んだ二クローネの札であつた。彼女は考へた、これは運命があの裝身具を買へとて私に贈つたものであると。そこで彼女はこの考へに從ふために元來た道を喜々として引返した。その瞬間に、彼女は、その發見した金が使つてならぬ惡錢であるから、そんなことをしてはならないと獨語した。

この「症狀行爲」の理解に資する分析の一片は當人の個人的告白を俟たずとも、見えたまゝの事情

から定めることが出來る。娘は家に歸つていろ〳〵なことを考へてゐたが、就中自分の貧しさと物質上に限定されてゐることが表立つて考へられてゐた事であらう。而も彼女の壓迫的な事情を願望充足に依つて除きたいとの意味に於いて考へてゐたであらうことは我々にも想像せられる。どうしたら不足分だけの金を最も容易に得ることが出來るかとの考へは、彼女の願望の滿足に向けられた興味とあまり遠く離れてゐないであらうし、また發見の最も簡單な解決を彼女に導いたであらう。このやうな風にして、女の無意識(又は前意識)は「發見」の方へと差向けられることになつたのである。よしんばそれに關する思考は、彼女には――物思ひに沈んで注意が他方にそれてゐたために十分に意識されなかつたにもせよ……。さうだ、我々は同樣な分析上のさま〴〵な實例を根據としてかく主張することが許される、無意識に於いて搜し出す準備の出來てゐることの方が、意識的に注意をさし向けることよりは遙かに成功し易いものであると。でなければ、丁度その一人の人間が幾百人となく通つてゐるその間で、而も夕方の仄明りと人ごみの中と云ふ惡い事情の下に、自分でも驚くやうな拾ひ物をすると云ふ事が殆ど說明つかなくなる。如何に强い度に於いて無意識又は前意識の準備が事實上出來てゐるかと云ふことは、次の特殊な事實が證明してゐる。卽ち、この娘はこのやうな拾ひものをした後になほ、つまり何もかも濟んで了ひ意識的注意も引揚げてしまつた後に於いて、家路に就いてゐる

内に、郊外の街の仄暗い淋しい場所でハンカチを一つ拾つたのである。』(二)

【註】(一) 國際精神分析學雜誌(三卷、一九一五年)所載。

正にそのやうな症狀行爲は人間の最も祕奧なる精神生活を知るための最もよき通路を開くものであると、我々は云はなければならない。

個々の偶然行爲の中で、分析せずともそのより深い意味の明白な一つの實例を私は報告しておきたい。この實例は如何なる條件の下に於いてそのやうな症狀が最も自然に起るかを美事に說明すると共に、またそこに或る重要な實踐的な觀察が加へられるのである。或る夏の旅行の間に私は某地で暫くの間、自分の同行者の到着を待つてゐたことがある。その待つてゐる間に私は或る若い男と知合になつたが、彼もやはり一人ぼつちで喜んで私と友達になつたのである。我々は同じホテルに宿つてゐたので食事も散步も總て行動を共にしたのは云ふまでもない。三日目の午後に、彼は突然妻がその日の夕方の急行で着くと云ふことを報告した。私は今や心理的の興味を覺えた、と云ふのは旣に今朝、私の友は遠くへ出掛けようとの私の提言を拒け、さうして我々の一寸した散步に於いても或る徑はあまりに嶮しく危險であると云つて反對したからである。午後の散步の時彼は突然、私がお腹を空かしてゐるだらうから自分のために夕食を延したりしてくれるな、自分は妻が着いてから妻と一緒に喰べる

から云ひ出した。私は彼の心持を察して食卓に向ひ、その間に彼は停車場へと赴いた。その次の朝我々はホテルの玄關で出會つた。彼は妻を私に紹介し、さうしてかう云つた。——朝御飯を一緒に頂きませうね、と。私はその前に一寸次の通りまで用達に行つて來るが、併し直ぐに歸つて來ると云つた。後で私が食堂に這入つて見ると、夫婦は窓邊の小さな食卓に竝合つて就いてゐた。その向ふ側には椅子は一つしかなかつたが、その椅子には男の大きな重々しい外套が載せかけてあつた。私はこの外套の非意圖的の、而もその感じの愈々甚だ明白な置き方の意味がよく分つた。それは、君にはもう椅子はない、君はもう居なくてもよくなつたと云ふわけであつた。亭主の方は私が坐らずに卓子の前に突立つてゐるのを氣がつかなかつたが、妻君の方は直ぐに夫の方を叩いて、貴方、この方の席がないぢやありませんかと囁いた。

この場合もさうだが、これに類した他の場合に於いても私は一人で考へた事であつた。その意なくして行つたことでも必ず人間同志の關係に於いて誤解の原因となることのあるものであると。行爲者自身は自分の行爲に如何なる意圖が聯結されてゐるかを知らないからして、その意圖のことは問題にしないし、またそれに就いて責任があるとは考へない。ところが相手方は如何なる場合にでも先方の行爲をとつてその意圖や心持を計り、他人の心理的過程に就いては當人が自分で承認し得るよりも以

上に、またそのつもりでしたとは信じてゐない程のことまでも認識するに至るのである。先方は自分の症狀行爲からして引出されたこれ等の結論を自分に擬せられてゐるのを知ると憤慨する。彼は自分の所業に何等意識的の意圖を有しないから、彼はそれ等の結論が根柢なきものであると揚言する。さうして他人に誤解せられたと嘆ずるのである。仔細に檢べて見ると、そのやうな誤解はその人があまりに微妙な觀察者であり、あまりに多くを理解してゐると云ふ事實に基いてゐるのである。二人の人間が『神經質』であればあるほど、二人は容易に喧嘩し勝ちなものであるが、これは一方が相手に就いては直ぐに認めることを自分自身に就いては斷然拒否すると云ふ事實に基いてゐるのである。

さうしてこれこそは人間の內的不正直に對する懲罰であらう。人間は忘却、行り損ひ、沒意圖、などの假面の下に或る感情——自分で支配出來なくなつたならば、却つてよく自分にも他人にも分るであらう所の感情——を表現してしまふものであるが、その不正直さに對する懲罰であらう。實際に於いて、萬人は絕えずその隣人に向つて精神分析を加へつゝあるものであつて、またその結果各人は自分自身よりは相手の方をよく知るやうになるものであると一般的に云ふことが出來よう。汝自身を知れとの敎へに從ふべき途は、自分自身の一見偶然的な行爲や遺漏を調べることから始まるのである。

第十章

誤り

記憶の誤りと思ひ出し損ひを伴ふ忘却との區別は、誤り（思ひ出し損ひ）は誤りとして認識せられず、信念を持つてゐる點に存する。併し、『誤り』（イルチウマー）と云ふ言葉の用法はまた別の條件に依屬するやうに思へる。我々が『思ひ出し損ひ』と云はずして『誤り』と云ふのは、思ひ出さうとする心理的材料に於いて客觀的實在の特質が强調せられる場合である、つまり私自身の心理的生活の事實以外の何物かが思ひ出さるべき場合である、卽ち他人の記憶に依つて何物かゞ確認せられ推斷せられる場合である。この意味に於ける記憶の誤りの正反對をなすものは始めから知らない（ウンヴィッセンハイト）ことである。

私の『夢の註釋』（一九〇〇年版）に於いて私は歴史的材料、殊に事實的材料の誤りを澤山に犯してゐるのである。これ等の誤りを私は書物が出てから氣がついて大いに驚いたのである。私はこれ等を仔細に調べて見たところ、これは自分の無知のためではなく、記憶の誤りに歸すべきもので、それは分析に依つて明かとなつたのである。

（一）　初版本の第二六六頁に、シルレルの誕生地としてマールブルク Marburg の町を擧げてゐるが、この名はシタイエルマルクにもある。この誤りは或る夜行の旅の間の夢の分析で分つた。驛夫がマールブルクと叫ぶ聲で私はその夢を破られたのであつた。その夢の內容に於いてはシルレルの或る書の內容が問題となつてゐた。さてシルレルは大學町のマールブルクで生れたのではなく、シュワーベンのマールバッハ Marbach で生れたのである。私はその事を常々承知してゐたことを斷つておく。

（二）　一五五頁のところにハンニバル Hannibal の父がハスドルバール Hasdrubal となつてゐる。この誤りは私には特に腹立たしかつた。併しこのやうな誤りを理解するに就いては最も私の信念を固くした。この書の讀者は誰しも、この著者のやうに三度も校正を見てゐて見落すやうなことはなく、バルキーデの歷史には通曉してゐるであらう。ハンニバルの父はハミルカール・バルカス Hamilkar Barkas と云つて、ハスドルバールはハンニバルの兄弟の名であつた、また彼の義兄弟の名であり、先將軍の名であつた。

（三）　一七七頁と三七〇頁とに、私はツォイスがその父クロノスを去勢し、且つ王位から退けたと書いてゐる。この恐るべき事件を私は一時代だけ先に抑遣つてゐるのだ。ギリシアの神話に依ればその父ウラノスに對してこのやうなことを敢へてしたのはクロノスであつたのだ。（二

【註】（一）全然誤りと云ふわけでもない。ロッシャーの神話辭典に依れば、クロノスもまたやはりツォイスに依つて去勢せられてゐる。

ところで讀者も知られる通り、私は平常とは非常に變つた、飛離れた材料を大抵は扱つてゐるのにこれ等の諸點に關してこのやうな間違つた材料を私の記憶が供したと云ふのはどう云ふわけであらうか。更に一層わけの分らないのは、三度も校正してをりながら、まるで盲目にでもなつたやうにこれ等の誤りを見落したと云ふことだ。

ゲーテはリヒテンベルク Lichtenberg に就いてかう云つてゐる。――『彼が道化を行るのは、そこに一つの問題が匿れてゐる』と。同樣に、我々は私の著書中から引用した以上の個所に就いてかく主張することが出來る。――誤りのあるところ、その背後に一つの抑壓ありと。更に正しく云へば、畢竟するに抑壓に基くところの僞りと歪みとがあると。私はその處で報告した夢の分析に於いて、夢の思想が主題の性質のみに依つて、一方分析が徹底するまでの或るところで中絶しなければならなかつたし、他方また些細な歪みを與へることに依つて、離すべからざる一つの部分の際立ちを取去らなければならなかつた。私はかうするよりほか仕方がなかつたのである。また抑々實例と證據とを示さんとする以上、他に何とも採るべき途はなかつた。私の無理な立場は夢の性質からして必然的に由來し、

さうして被抑壓思想、意識となり得ざるものを表現したのである。それにも拘らず、もつと鋭敏な魂を惱ますやうなものが十分に殘つてゐるらしい。私自身にはなほ知れてゐるところの、連續せる思想を歪め又は匿すことは、何等かの痕跡を殘さずには成就されなかつた。私が抑壓しようと思つたところのものは私のとり上げたもの丶上に、私の意志に反して屢々のさばり出て來、私の氣の付かない誤りとなつて現れて來る。實際、右に擧げた三つの實例は何れも同じ主題に基いてゐるのだ。これ等の誤りは私の亡父に關する抑壓思想の結果であるのだ。

（第一例附言）二六六頁に分析せられてゐる夢を讀み通したものは誰しも、そこになほ分析し盡されてゐない或る部分の存することを發見するであらう。また或る部分、父に對する好意なき批評をさらけ出すやうな思想のところで中絶させてゐるらしいことを看破することが出來よう。この思想と追憶との途を辿つて行くとそこにいやな話があつて、その話では書物と父の商賣友達とが割役を果してゐるのだ。さうしてその商賣友達の名はマールブルクで、これと同じ名を南方の停車場で呼ばれたので私は眠りから醒めたのであつた。このマールブルクと云ふ人を私は分析に際して私自身からも讀者からも抑除けようと思つたのであるが、彼は出る幕でないところで出て來て復讐をした。かくてシルレルの出生地の名がマールバッハからマールブルクに變つてしまつたのである。

（第二例附言）　父の名の代りに兄弟の名が、ハミルカーの代りにハスドルバールが出て來た誤りは私の中學時代のハンニバルに關する想像と、竝びに『我々の民族の敵』に對する父の態度への不滿とから發源してゐるのだ。私は英國へ行つて、父の先妻の子である私の異母兄を知るやうになつてから私の父に對する態度が如何に變つたかを私は續けて話すことが出來たのだ。異母兄の長男は私と丁度同じ年であつた。そこで、年齡の關係は、俺は親爺の息子として生れずに兄貴の息子として生れてゐたらどんなだつたらうなァと云つたやうな空想を起す妨げにはならなかつた。かう云ふ空想が禁壓されてゐたので、私が分析を中絶した個所で私の著書の本文が誤り、父の名の代りに兄の名が出るやうなことになつたのである。

（第三例附言）　私がギリシア神話上の恐るべき事件を一時代だけ進めたのは、この同じ兄の記憶の影響のためである。私は兄からいろ〱の警告を與へられたが、その一つが永く私の記憶にこびり付いてゐた。――彼は曰ふ『人生に處するに就いて一つの事を忘れないでおき給へ。君は君の親爺の第二の時代でなく、第三の時代の子だと云ふことを……。』我々の父は相當の年齡になつてから再婚した、であるから第二の結婚に依つて生れた子供等にとつてはもう老人であつた。私は親子間の老道を論ずべき場合に、前述のやうな誤りを著書中で犯したのである。

私が友人や患者の夢を人に話したり、或は分析に際してその夢の事を言及したりするに際して、私が彼等と共通的に經驗した事を私が間違へて話してゐると彼等から注意を受けたことは一再に止まらぬ。これもやはり歴史の誤りである。そのやうな個々の場合を再度檢べて見て、私は事實に就いての追憶の信頼出來ないのは、私が分析に際して何事かを故意に歪めたり匿したりした場合だけであることを發見した。この場合に於いても、我々はまた、氣付かざる誤りを以て故意の匿しだて又は抑壓の代償としてゐるのである。

抑壓から生ずるこれ等の誤りを、我々は、實際に知らないために生ずる誤りから截然區別しなければならない。で、例へば私がヷッハウ Wachau に旅行した時、こゝは革命の指揮者フィショフ Fischof の居住地だと信じたのは、知らなかつたためだ。フィショフのエムマースドルフ Emmersdorf はケルンテン Kärnthen に在る。併し私はそのことを知らなかつたのである。

(四) こゝにまた一つ甚だ極まりの悪い、併し教へられるところ多き誤りがある。これは一時的無智とも云はゞ云ひ得べき一實例である。私は嘗て或る患者にヱニスに就いての書物を二冊與へようと約束したから、それを貰ひたいと彼は或る日私に云つた。彼は復活祭の旅行の計畫にその本を利用したいと云ふのである。私はその書物が手許にあるからと云つて、それを持つて來るために書庫に這入

つた。ところが實際は、それを捜しておくのを私は忘れてゐたのだ。何故ならば、私は自分の患者の旅行は分析上不必要な邪魔でもあり醫者の物質上の損害でもあると思つてゐたので、あまり賛成ではなかつたからだ。そこで私は書庫を見渡してその二冊の書物を見付け出した。その一つは『美術の都ヱニス』と云ふのであつたが、それの外に同じ叢書で歴史的の書物があつた筈だと思つた。果してそこにあつた。『メディチ家の人々』と題したものだ。私はそれを取つて患者のところへ持つて行つた。ところが恥づかしながら、私は自分の誤りを認めなければならなかつた。私とてもメディチ家の人々がヱニスに何の關係もない位のことは知つてゐる、併しその瞬間私には何も間違ひがないやうな氣がしたのであつた。今や私は公正に振舞はねばならない事になつた。私はこの患者自身の症狀行爲は非常に屢々註釋してやつたのであるから、私は自分の權威を保持するためには、何もかも正直に告げ、私が彼の旅行に賛成し兼ねてゐるのが匿れた動機となつてゐることを知らせないわけに行かなかつた。

人間が眞實を語らうとの衝動は通常人々の思つてゐるよりは遙かに強いものであることは、誠に一般の人々を驚かすに足ることである。とにかく私が噓を云ふことが出來ないのは、多分私が精神分析を行つてゐる結果であらう。私が何か偽りを行らうと思ふと、屹度私は何かの誤りで行り損ひを演ずるのである。さうしてそれに依つて私の不正直が暴露せられることは、この實例竝びにこれまでの諸

諸の實例が示す如くである、

誤りの機制は總ての行り損ひの內でも最も上つ面のものであるやうに思へる。つまり、誤りの出來るのは必ず、伴の精神的活動が何等かの邪魔する影響力と戰つたことを概して示してゐる。尤も、誤りの仕方は、まだ正體は分らないがとにかく誤りの原動力たる觀念の性質に依つて決定されてゐるのではないが——。併し我々がなほこゝで云ひ添へておきたいことは、多くの單純な云ひ損ひや書き損ひの場合もこれと同じ事情を取ることのあるものだと云ふ事だ。我々が云ひ損つたり書き損つたりする場合には何時でも、意圖以外の心的現象に依つて妨げられたと考へていゝのだが、併し云ひ損ひや書き損ひは屢々類似の法則、便宜の法則、或は加速度の傾向に從ひ、而もその際云ひ損ひや書き損ひに本人の個性の一部分が滲み出ると云ふやうな事はないのである。言語的材料は順應に敏なものであるから、そのためにまづ失敗の決定を可能ならしめるが、またその決定に限界をおくことにもなる。

專ら自分の誤りにのみ限定しないために、私はなほ二三の實例を報告しておきたく思ふが、これ等の實例はどちらかと云へば云ひ損ひや行り損ひの條下に於いて論じても差支へはないのである。併しこれ等總ての行り損ひの形式は同じ價値のものであるからして、こゝで報告しておいても同じことである。

（五）　私は或る患者に彼の別れたがつてゐる情婦と電話で話しすることをさしとめた。話しをすればそれだけ別れがつらくなるばかりだからである。彼はたゞ三下り半を書けばよいことになつてゐたが、さてその書いたものを彼女に渡すのが多少面倒であつた。彼は私を一時に訪れてこれ等の困難を避ける方法が發見されたと云つた。さうして就中、私が職業上の資格に於いて云ふからだと書いてもよいかと訊くのであつた。

二時に彼は斷りの手紙を書いてゐた間に、彼は突然手を休めて母親に向つてかう云つた。――『さて、僕は手紙の中に先生の名前を書いていゝかどうか訊くのを忘れた』と。彼は急いで電話口へ行き、呼び出してかう尋ねた。――『晝食を濟まされた後に一寸先生にお目に掛つてお話したいことがあるのですが、如何でせう？』これに對して如何にも呆れたらしい聲で『アドルフ、あんたは氣でも狂つたの？』と云ふのが聞えた。その聲は私がもう聞いてはならぬと命じたその聲であつた。彼はほんの『間違ひをした』のであつた。さうして醫者の電話番號の代りに情婦の番號を呼んだのであつた。

（六）　暑中休暇中に或る學校敎師であるところの、貧しいが立派な若者が都から來てゐる別莊持ちの或る令嬢を說き、娘は遂に熱烈な戀愛に陷つて、家族の者等を動かして、身分と民族の相異に拘らず、結婚することに取り決めた。そこでその敎師は兄弟に向つて或る日一書を認めた。その中にかう

あつた。――『その娘つ子は別に綺麗ではないが、可愛らしい女で、それだけにまた善良なものだ。併し僕がユダヤ人の娘と結婚する決心を固め得るかどうか、まだ分らぬ。』この手紙は娘の手に落ちて婚約は破談になつたが、兄弟の方では自分に向けて戀の反逆を說いたのが不思議でならなかつた。私に報告した人の確言するところに依ると、これは實に誤りであつて、狡猾なトリックではなかつたと云ふことだ。

私の知つてゐる今一つの場合に於いては、或る婦人が昔から掛りつけの醫者に不滿になつたが公然と斷るわけに行かないので、手紙の交換に依つてこの目的を果した。この場合、少くとも、私は、この誰しも知つてゐる喜劇の動機を用ひたのは意識的狡猾ではなくて誤りであつたことは確信を以て斷ずることが出來る。

（七）ブリルは、或る婦人が彼と彼女との共通の友のことを尋ねた時に、彼女がこの友のことを誤つてその娘時代の名で呼んだことを話してゐる。間違へたことに注意をされて、彼女はこの友の夫を好まず、その結婚に非常に不滿であることを告白せざるを得なかつた。

（八）『云ひ損ひ』とも云はゞ云ひ得べき誤りの今一つの例がある。――或る若い父親が戶籍吏の許へ行つて二女の登記を行つた。その兒の名前は何と云ふかと訊かれて、彼はハンナと答へた。併しそ

の名前の兒は一人既にあるぢやありませんかと戸籍吏に云はれた。そこで我々は、この二女はその時分に於いては長女ほどには父に歡迎されてゐないのだとの結論を引出すであらう。

（九）　私はこゝになほ二三、名前の取違への觀察を附加しておかう。これ等は勿論、本書の他の章下で取扱つても差支へはないのである。

或る婦人は三人の娘の母親であつたが、その内二人は既に片付き、季娘はこれからと云ふところであつた。懇意にしてゐる或る婦人が二人の娘の結婚の時に高價な銀製の茶道具を同じやうに贈物として呉れた。この道具の話が出る度に、母親は誤つてこれは三番目の娘のものだと云つた。この誤りは季娘も片付いて呉れゝばよいとの母親の願望を語るものであることは明かである。それは勿論、季娘も同じ祝物を貰ふだらうと云ふことを豫言してゐるのである。

また母親と云ふものは娘、息子、婿等の名をよく取違へるものであるが、これもその解釋は同様に容易である。

（十）　頑固に名前を混同する實例をJG氏が或る療養所に滯在中自分自身に就いて觀察して報告してゐるので、それをこゝに引例しておく。これの説明は容易である。――

『療養所の共同食卓に於いて私は隣席に來合せた婦人とあまり面白くもない會話を月並な調子で交

してゐた間に、特別に愛情のこもつた語句を使つた。その老孃も、私がそんなに彼女に愛情をこめ、また鄭重(ガラント)であることは平生の私らしくないと云はないわけに行かなかつた。この挨拶は私が常々もつと注意を拂つてゐる、我々二人とものの知合である或る娘への一方多少の遠慮からであると共に、他方また明白なあてこすりであつたのだ。私は勿論それを直ちに悟つた。それから後になほ會話を進めてゐる内に、私は相手を例の娘の名で呼んでゐると云ふことを幾度も注意されて、誠に私も困つた。

（十二）『誤り』として私はまた或る重大な背景を持つ一つの出來事を話しておきたい。これはその場に居合せた目撃者から私が聞いたのだ。或る婦人が一夕、その夫並びに二人の他人と共に野外に遊んだ。これ等二人の他人の內一人は彼女の祕かな友で、その事は併し、他の人達は何も知らないし、また知られてはならなかつたのだ。二人の友は夫妻を家の戶口まで送つて來た。扉の開くのを待つてゐる間に、彼等は互に別れを訣げた。夫人は二人の友に挨拶をし、手をさし延べて二三の謝辭を述べた。それから彼女は祕かに愛してゐる男の腕をとり、夫の方に向つて同じやうに別れを訣げた。夫はその場の調子に合はせて帽子をとり、「お暇申上げます、令夫人樣」と馬鹿丁寧に云つた。驚いた夫人は愛人の腕を放して、さうして扉の開くまでになほかう嚙く餘裕があつた。――いや、こんなことは誰でもあるものですよ。この夫は妻君の心變りなどと云ふことは凡そあり得ないことだと考へたがる

種類の亭主であつた。もしそんな場合が起きれば一つ以上の生命が危いぞと繰返し云つてゐた。そこで彼はこの誤りの內に存する挑戰を氣付くべくあまりに强い內的の抑壓を持つてゐた。

（十二）　これは私の患者の一人の誤りであるが、それの反對の意味への繰返しに特に敎へられるところが多い。――非常に苦勞性の或る若者が長い間考へ拔いた揚句、互ひに愛し愛された或る娘に結婚の約束を與へることにした。彼は婚約の娘を家まで送つて行き、彼女と別れて、非常に幸福な氣持になつて市內電車に乘り、車掌に切符を二枚吳れと云つた。半年の後に、彼は旣に結婚してゐたが、併しまだ本當に結婚の幸福を見出してはゐなかつた。彼は結婚したのは正しかつたかどうかを疑ひ、以前の友達關係をなつかしみ、妻の兩親をいろ〳〵に非難した。彼は或る晚、若き妻をその兩親の家から連れ出して來て、彼女と二人で市內電車に乘つたが、車掌に切符を一枚だけ吳れと云つた。

（十三）　心ならずも禁壓した願望が如何に『誤り』となつて出て來るものであるかに就いてはメーデルが好個の實例を述べてゐる。或る同僚が勤めのない日を全然煩はされることなしに樂みたいと思つてゐた。併し彼はヌルゥツェルンへ行つて或る人を訪問しなければならないとも考へてゐた。が、この訪問はあまり面白いこともなからうと知つてゐた。併し長い間考へた後で、彼はやはり行くことにきめた。車中の慰みに、彼はチウリッヒ――アルト・ゴールダウ間で日々新聞を讀んでゐた。アルト・

ゴールダウ驛で彼は汽車を乘換へ、なほ讀書を續けた。突然、車掌は彼が汽車を間違へたことを知らせた。つまり彼はルウツェルン行きの切符を持つてをりながら、ゴールダウからチウリッヒへ歸る汽車に乘つてゐたのである。(Nouvelleo contributions etc., Arch. de Psych., VI, 1908)

(十四) これと非常に似た狡計を私は嘗て自分でも行つたことがある。私は既に永い間果すべき筈になつてゐた長兄訪問のために英國の或る海濱に行く約束をした。時間がなかつたので私は最捷徑をとつて、泊まりなしに旅行しなければならない義務を感じてゐた。私は一日だけオランダに滯留したいと乞ふたが、併し兄は歸途に立寄つてもよからうと云つて來た。それで、私はミュンヘンを發してケルンを經てロッテルダム(オランダの鉤)に行き、そこから夜中にハルヰッヒ行きの船に乘る筈であつた。ケルンで私は汽車を乘換へねばならなかつた。私は汽車を降りてロッテルダム行急行に乘らうとしたが、汽車が見えない。いろ〳〵の鐵道の雇傭人に私は尋ねたが、プラットフォームをあつちへ行けこつちへ來いと云はれて私は大袈裟な絕望的の氣持になり、こんなことをして無駄に搜し廻つてゐる內に多分汽車に乘損つたらうと思つた。果して乘損つたことを確めてから私は今夜はケルンに宿るべきかどうかを考へた。この事は敬虔の感を喜ばせた。何故ならば、昔からの家傳に依ると私の祖先はユダヤ人迫害時代にこの町から放逐せられたからである。併し遂に私は別の決心をした。私はロッ

チルダム行きの後の列車に乘つたが、そこへ着いたのはもう遲かつたから、一日をオランダで過さねばならなくなつた。この日私は永年の願望であつたところのレムブラントの素晴らしい畫をハーグ竝びにアムステルダム國立美術館で見ることを果したのであつた。その次の午前になつて、英國の鐵道旅行の印象を私が蒐めてゐた時に至つて、漸く私は思ひ出した。私がケルンの驛で下車したところから僅か數歩のところに、實は同じプラットフォームに、『ロッテルダム――オランダの鉤』との大看板の出てゐたことを――。そこへ行けば私が旅行を續けることの出來た汽車が來てゐたのであつた。

私が兄の命令に叛いて途中でレムブラントの畫を見ようと實際は決心してゐたのだと假定しないまでも、とにかく明白な標示があるに拘らず私が慌てゝ別の列車を捜し廻つたと云ふことは理解し難き『眩惑』であると云はれても仕方がない。その他の一切の事は、私の都合のいゝ慌て方、ケルンで一夜を過ごさうと云ふ敬虔な意圖などは、私の決心が十分に實現せられるまでそれを匿しておくための工夫に過ぎなかつたのだ。

（十五）丁度これに似て、心ならずも棄てた或る願望を『忘却』に依つて、充足するやうにしつらへることをステルケは自分自身に就いて報告してゐる。（前掲書。）

『私は嘗て或る村で幻燈付の講演をしなければならなかつた。ところがこの講演は一週間延期され

ることになつた。私はこの延期に關する手紙に返事して、その變更せられた時日を手帳に書込んだ。私は旣に午後にはその村に着いて、そこに住んでゐる私の知人の或る文學者を訪問してゐた筈であつたのだ。併し遺憾ながら、今度の時日では午後を訪問のために割くことが出來なかつた。如何にも殘念に思ひつゝ私はこの訪問をやめることにした。

さて講演の晩になつたので、私はポケットに幻燈の寫眞を一杯つめ込んで大急ぎで停車場へ馳けつけた。私は停車場へ着くためにタクシを傭はねばならなかつた。(私はよくぐづついてゐては、汽車に乘るに就いてタクシを傭はねばならないやうなことになることが多かつた。)さてその村に着いて見ると、驛には誰も私を迎へに來てはゐなかつたのでをかしいと思つた。(小さな町や村で講演のある時には講師を迎へに出るのが習慣になつてゐるのに――。)忽ち私は講演會が一週間だけ延びたのであつたのに、私は最初に定めた日取で旅行に出たことを思ひ出した。私は自分の忘れつぽい事を腹立たしく思ひつゝ、次の汽車で家へ歸つてしまふかと思つた。が、更に考へ直してゐる内に私は今や兼々希望の訪問をなすべき絕好の機會であることを思ふて、それを決行したのである。その途中で私は、この訪問のための時間を持ちたいとの實現せられざる願望が美事な狡計をしつらへたことに思ひ及んだ。幻燈の寫眞でポケットを重くして飛廻つたり汽車に間に合ふやうに急いだりしたことは無意識の意圖

を愈々うまく隱蔽するための役に立つたことが分つた。』

私は本章に於いて誤りの種類に就いて說明を試みて來たが、人々は多分これ等の種類を特に數多いとも、また意味が深いとも考へない傾きがあらう。併し同じ見地はこれを押擴めて、比較にならぬ程より重要な（人々が生活上に學問上に犯す）判斷の誤りに適用することは根據のない事かどうか、人人の熟考に任せる。たゞ最も選良なる、最も均衡ある心の人のみが、外的實在の認識影像が個人の心理を通過する際に得てして歪められ易いのを防ぐことが出來るのであるやうに思はれる。

第十一章

複合的行り損ひ

最後に擧げた二つの實例、卽ちメディチ家の人々をヱニスに引張つて來た私の誤りと、電話で情婦と話してはならぬとの命令をすり拔ける方法を知つてゐた若者の誤りとは、實はまだ十分に論じ盡されてはゐないのだ。更に仔細に考究して見ると、それ等は忘却と誤りとの結合を示すものであることが分るからである。かゝる結合をなほ明白に示す實例を他に二三擧げることが出來る。

（一）或る友が私に次のやうな經驗を話して聞かせた。――『私は二三年前に或る文學の協會の委員の一人に選ばれることを承認した。私はその團體が、自分の戲曲の上演に就いて他日何かの助けになると思つたからである。あまり興味を持つてゐたのではないが、每週金曜日には極つてその會合に出席した。二三ヶ月前に私は自分の戲曲の一つがFに於ける劇場で上演されることを確實に知つた。さうしてその時以來、私は極つて協會の會合に出席する事を忘れるやうになつた。私は協會のこれ等の事の報告を讀んだ時、私は自分の忘却を恥ぢ、これ等の人々をも早必要としなくなつた後にもう出

なくなるのは卑しいことだとして自ら批難した。さうして次の金曜日には屹度忘れないやうにしようと決心した。絶えず私はこの決心を思ひ出し、遂にその時間が來たので、私は會合の室の扉の前に立つた。驚いたことには扉は鍵が掛つてゐた。會合は既に終つてゐた。私は日を間違へたのだ。それは既に土曜日になつてゐた。

（二）　次の實例は症狀行爲と置忘れとの複合である。これは大分迂廻して私のところに報告せられたのであるが、その出所は確かである。

或る婦人が有名な美術家であるところの義弟とローマへ旅行した。美術家はローマ在住のドイツ人から非常に歡迎せられ、就中、古代の製作に懸る黄金のメダルを贈物として貰つた。婦人は義弟がその美しい品物を十分に尊重することを知らないのを腹立たしく思つた。歸國してから荷を解いて見ると、どうしてだか分らないが、その黄金のメダルを持つて來てしまつてゐることを發見した。彼女は直ちにこの事を手紙で義弟に知らせてやり、明日ローマへ送返すからと云つてやつた。ところが翌日になつて見ると、そのメダルはどこへ置忘れたものかどうしても見付からず、そのため送返すことが出來なかつた。やがてその內、この婦人は自分の『うつかり』が何を意味するかゞ少しづつ分つて行つた。つまり、彼女はその品を自分のものとしてとつておきたかつたのである。

（三）行り損ひが頑固に繰返され、而もその際またその方法が變化する二三の場合を擧げる。――ジョーンズ曰く（前掲書、四八三頁）――自分には分らない動機からして彼は嘗て或る手紙を幾日も机の上に放つておいて投函しようとしなかつた。遂に彼はそれを投函したが手紙は宛名が書いてないと云ふので局から返送されて來た。宛名を書いて投函したらまた返送されて來た。今度は切手が貼つてなかつた。そこで彼はこの手紙を出すことに對する無意識の反抗を認めないわけに行かなかつた。

（四）內的抵抗に反對して或る行爲をなさうとの無駄な骨折りを非常に印象的に描いたものはカール・ヴァイス博士（ヸィン）の次の一小報告である。――

『無意識が或る意圖の實現せられることを妨げねばならぬ理由のある場合には如何に執拗にその目的を果すものであるか、またこの傾向に抗して守ることの如何に難いかは、次の出來事に依つて明示せられる。或る知人が私に書物を貸して吳れ、さうして明日それを持つて來て吳れと依賴した。私は直ちにそれを約束したが、その時は說明出來なかつたけれども明かに不快の感情を認識した。後にそれは私に明となつた。この知人は私から多少の金を借りて數年になるが、それを彼は返濟する考へは明かに持つてゐないのである。私はこの事に就いてはこれ以上考へを及ぼさなかつた。併しその次の日の午前中にその事を思ひ出したが、やはり同じ不快の感情が起つた。で、私は直ちに自分に云つ

た。——「お前の無意識はお前が本を忘れるやうに目指すであらう。併しお前は無愛想だと思はれたくないので、それを忘れないやうにあらゆる事をやるだらう。」と。私は家へ歸つて書物を紙に包み、それを机の上の手近なところに置いて手紙を二三本書いた。暫く經つて私は出掛けたが、數歩の後に私は、出さうと思つた手紙を机の上に置いて來た事を思ひ出した。（序ながら斷つておくが、その手紙の内の一本は私に不快なことを企てるやうに强要した或る人に宛てたものであつた。）私は引返して手紙を取つてまた出掛けた。電車に乘つてから私は妻のために或る買物をする筈になつてゐたことを思ひ出したが、幸にしてそれは小さな包みだからいゝと思つた。小さな包みの聯想は忽ち本を呼起し、やつとその時になつて私は自分が本を持つて來なかつたことを氣付いたのであつた。私が始めに家を出た時にそれを忘れたばかりでなく、その本の近くにあつた手紙を取りに行つた時にもまたそれを見落したのであつた。

（五） 同じやうなことはオットー・ランクが十分に分析してゐる次の觀察に於いて示されてゐる——『嚴しく規則的な、さうして衒學的なほど精確な或る人が次の體驗を報告してゐるが、これは彼にとつては全然異常なことであるのだ。或る日の午後、彼は街上で時間を知りたいと思つたが、時計を家に忘れて來たことを知つた。こんなことは彼の記憶してゐる限りでは今まで嘗てなかつたことであ

る。その晩は時間をきつた約束があつて時計をとりに家まで歸つてはゐられなかつたので、懇意にしてゐる或る婦人を訪問して當夜の用にとて彼女の時計を借りることにした。これは愈々都合のいゝことであつた。何故ならば、彼はこの婦人をその翌朝訪問するやうに前以て約束してあつたからだ。で、彼はその機會に返却することを約束した。ところが彼の驚いたことには、彼はその翌日、借りた時計を婦人に渡さうとした時にそれを家に置忘れて來たことを知つたのである。自分の時計をこの時は身につけてゐたのである。そこで彼は婦人の時計を同じ日の午後には返さうと固く決心したのである。さうしてまたその決心を履行したのである。ところが、いざ辭去しようとして時計を見ようとすると、彼はまた今度は自分の時計を忘れて來てゐるので非常に腹立たしくも思ひ呆れもしたのである。

『このやうに行り損ひを反復することは彼ほどの几帳面な人には非常に病理的に思へたので、何とかその心理的動機を知りたいと切に思つた。で、最初の忘却の起つた日に何か不快な經驗はなかつたか、またどう云ふ關係でそれが起つたかと尋ねられて、その動機は直ぐに發見された。彼の語るところに依ると、彼は食後、出かける少し前に、母親と話し合つたことがある。これまでにも彼に金錢上その他の迷惑を多くかけてゐた或る輕薄な親戚の者があつて、その者が自分の時計を質においたが家に必要だから出さうと思ふから金を貸してくれと云ふことであつたと母親は話した。この殆ど强請的な

金の借り方は本人の感情を非常に害した。さうして幾年この方この親戚の者のために被つた總ての不快な事柄が再び記憶に甦つて來た。

『彼の症狀行爲は、それ故に、いろ〳〵な要素に依つて決定されてゐることが分る。第一に、この表現の背景には恐らく次のやうな思想の流れがある。——そんな手で金をむざ〳〵巻上げられてたまるものか。もし時計が要ると云ふなら俺のを自家に置いておくから……と。併し彼は約束を果すためにその時計が入用であつたから、この意圖は無意識の途に於いてはたゞ症狀行爲としてのみ表れることが出來たのである。第二に、この忘却はまづ次のやうな感情を表現してゐる。——この碌でなしのためにいつまでも〳〵金の迷惑をかけられてゐては、しまひにはこちとらの方が駄目になつて何もかも投げ出さねばならないやうになつてしまふ。本人の報告では憤りは一時的であつたと云つてゐるが同じ症狀行爲を繰返したところを見ると、無意識に於いてはこの憤りはもつと激しく働き續け、これを意識的に表現すればかうならう。——私はこの話を忘れることが出來ない……と。（二）

【註】（一）このやうに無意識の中に働き續けることは一度は症狀行爲の後に一つの夢となつて現れ、今一度はそれの繰返しとなつて、或は是正の怠りとなつて現れたのである。

『婦人の時計も後には同じく忘れられる事になつたのは、無意識のこの態度を知つて見れば、敢へ

て驚くに當らぬのである。併し「與り知らざる」婦人の時計に轉嫁するに至らしめたには、なほ他に特別の動機があるかも知れぬ。最も近しい動機は多分、彼が自分の犧牲になつた時計の代償として取込んで置きたいと思つたことであつたらう。それ故に彼はそれを翌日返却するのを恐れたのである。また彼はその時計を多分その婦人への記念として喜んで納めておきたかつたのであらう。更に、婦人の時計を忘れたことは敬愛する婦人を再度訪問する機會を供したのである。何故ならば、彼は午前中に別の事で彼女を訪問することになつてゐたからである。さうして時計を忘れた事は、既に相當永い間とりきめてあつた訪問を、側ら時計を返すために利用するのが勿體ないやうな氣がしたのでもあらう。また自分の時計を再度忘れ婦人の時計をその代りに出來るやうになつたことは、本人が二つの時計を同時に持歩くことを避けようとするものであることを語つてゐる。彼はあまり豐富に見えることは親戚の者の貧窮とあまりに甚だしい對照をなすので、それを避けようと明かに思つてゐた。併し他方に於いて、彼は解除すべからざる義務に依つて自分の家族(母)に結び付けられてゐる事を思ひ出して、この婦人と結婚したいとの明かな意圖に對する自已警告とすることを心得てゐたのである。

『最後に、婦人の時計を忘れたことの今一つの根據を求めるならば、その前晩に獨身者なる彼が女持時計を携へてゐるのを友人に見られて甚だ極まりの惡い思ひをしたので彼はたゞ祕かにそれを眺め

またこのやうな痛くもない腹を何度もさぐられないためにその時計を持歩くことを好まなかつたことであつた。併し彼には時計を返すべき義務があつたので、その結果こゝでもまた無意識的になされた症狀行爲が生じたのである。この症狀行爲は抗爭する情緒と無意識法廷での高價に購はれたる勝利との間の妥協として出たものである。』(精神分析中央雜誌、二卷五號)

ステルケの觀察(前揭書)を一つ引用しておく。――

(六) 置忘れ・破壞・忘却の複合的行り損ひが抑壓せられた抗意志の表現となつた實例。――『或る科學的著作のための挿畫の蒐集の內から、或る日私は自分の兄弟に二三枚貸してやらねばならぬことになつた。兄弟はそれを幻燈の寫眞板として講演の時に利用したいと云ふのであつた。いろ〳〵苦心して自分が集めた複製のことであるから、如何なる方法にもせよ、私より先に公表して貰ひたくないと云ふ考へが一瞬間起りはしたが、とにかく賴まれたその挿畫を搜し出して幻燈板にしてあげようと約束した。――ところがこの陰畫を私は搜し出すことが出來なかつた。それに關係のある陰畫の這入つてゐる架箱を全部出して、殆ど二百枚の陰畫を一つ一つ手にとつて調べて見たが、自分の搜して居る陰畫はそこになかつた。一體、私は兄弟にこれ等の畫を貸してやりたくないものと見えると考へて見た。この好意なき思想を意識した後で、私は一番上の架を脇に置いてそれをまだ調べなかつたこと

を氣付いた。果してこの箱の中に求める陰畫は這入つてゐた。この箱の蓋には内容に就いての標示が短かく書いてあつて、さうして私はこの箱を脇におく前にこの標示をそゝうに見たものであるらしい。好意なき思想はまだそれでも十分に征服され切らなかつたものと見え、幻燈板を送り出す前になほいろ〳〵の事が起つた。幻燈板の一枚を手に持つてその硝子面を綺麗に磨いてゐる内に押潰してしまつた。（平生、私は幻燈板を壞したことなどない。）この板の新しい見本の仕上げをしてゐた時に、それは私の手から滑り落ちたが、私が足を出してゐたものだから、その上に落ちてわづかに壞れなかつた。私が幻燈板を組立てゝゐた時に全部をまたもや床に取落したが、幸にして少しも壞れなかつた。さうして遂になほ幾日もの間ぐづ〳〵してゐて、やつと荷造りして送り出した。その間私は毎日今日こそはと思ひつゝいつもまた忘れてしまふのであつた。』

ランクはまた『行り損ひと夢』（精神分析中央雜誌、二卷、二六六頁、及び國際精神分析雜誌、三卷、一五八頁）との間に興味深き關係あることを論じてゐる。併しこれ等の關係を調べて見るには、この行り損ひに關係のある夢の分析に立入らなければならない。私は嘗ていろ〳〵長たらしい關係に於いて、蟇口を失つた夢を見た。朝、着物を着換へてゐた間に確にそれを失つたのだ。夢の前夜、私は着物を脱いでゐた間に、「私はそれをズボンのポケットから取出していつものところに置くのを忘れたの

であつた。であるから、この忘却は私には知らないことではなかつた。多分それは夢の內容に現れるばかりになつてゐた無意識的思想に表現を與へたものであつたらう。(一)

【註】(一) 紛失や置忘れのやうな行り損ひは夢に依つて償はれる、つまり失つた品物が何處にあるかを夢に依つて知ると云ふことは夢の本人と紛失の本人とが同一人である限りは、靈驗と云つたやうなものではないのである。或る若い婦人がかう書いてゐる。『四ケ月ほど前に妾は——仕事臺の中で——非常に美しい指輪を失つた。妾は部屋の中を隈なく搜し廻つたが、それを發見することが出來なかつた。一週間前に、妾はそれが煖房の中の箱の側にころがつてゐるところを夢に見た。その夢で妾は勿論落着いてゐられなくなり、翌朝果してその場所にその指輪を發見した』と。彼女はこの出來事を不思議に思ひ彼女の思ひと願ひとは實現されるやうになることが屢々であると主張したが、併し指輪を失つたり再發見したりすることの內に、彼女の生活に於いて如何なる變化が生じてゐるのかを調べて見ようとはしなかつた。

右のやうな複合的の行り損ひの種々の場合から別に新しいことを、個々の場合に就いて知り得なかつたことを、學び得ると私は主張するのではないが、併し行り損ひの形式がこのやうに變つてゐると云ふことは(それでも結局同じ結果に到達するのだらから)一定の目的へと働く意志の變通自在さを示すのだ。さうして行り損ひは偶然的なもので何等說明を必要とするものでないと云ふやうな思想に對

して一層力強く抗爭するものである。これと同樣著しい事は、意識的意圖ではこの行り損ひの成立を阻止する力が全然ないと云ふことである。いろ〳〵やつて見たが私の友は結局文藝協會の會合に出席はしなかつたし、またかの婦人はメダルを思ひ切ることは出來なかつた。これ等の決意に反對して働く未知の何物かは、最初の途が閉られた後にはまた別の出口を發見したのである。未知の動機を征服するためには意識的にそれとは反對の意圖を以てするやうなことでは駄目で、それ以外の何物かゞ必要なのである。未知なるものを意識にまで知らしめるためには、一つの心理的の仕事が必要である。

第十二章

決定觀―偶然信仰及び迷信―種々の見地

以上述べ來つた個々の論議の總決算として、我々は次の如き原則を樹てることが出來よう。――我我の心理的行爲の何等かの不十分（それの一般的特質に關しては、やがてもつと確實に定義するであらう）並びに一見意圖なきが如くに思へる何等かの仕業が、これに精神分析の研究を適用すれば、實は立派な動機があり、意識には知られざる動機に依つて決定されてゐることが分る。

このやうな説明を受くべき現象の分類中に入り得るためには、一つの心理的の行り損ひは次のやうな條件を充たさなければならない。

（a）心理的の行り損ひは或る程度を超えてはならない。その程度は我々の評價に依つて確定せられ、また『常態の範圍内に於いて』との言葉に依つて形容せられる。

（b）心理的の行り損ひは瞬間的又は一時的障碍の性質を帶びてゐなければならない。我々は同じ行爲を以前にはもつと正確に爲し遂げてをり、またそれをもつと正確に遂行し得るとの自信が如何な

る時にでもなければならない。我々が他人から正された場合には、その是正の正しく自分の心的仕業の正しからざる事を直ちに認識しなければならない。

（c）我々が如何なる行り損ひにもせよ、一つの行り損ひを知つた場合には、我々はその行爲の何等かの動機を我々の內に知覺するやうでは行り損ひではない。寧ろそれを『不注意』のためと說明し或は『偶然』のせいにするやうでなくてはならない。

そこでこの群の中に殘るのは、よく承知してをりながら忘れたり、誤つたりする場合、云ひ損ひ、讀み損ひ、書き損ひ、行り損ひ、竝びに所謂偶然行爲などである。

これ等の現象の大部分は、これ等を表はす言葉に等しく『損ひ』„ver-“の付いてゐるのを見ても、內的に性質の相似してゐることが分る。併しながらこれ等の現象を說明するに就いては、そこに一連の觀察が附隨するが、それ等の觀察は部分的には更に立入つた興味を誘發する。

（A）我々の心的行爲の一部分を目的觀念からは說明し得ざるものとして放擲することは精神生活の決定性の範圍を見誤るものである。この決定性は心的行爲の件の一部分のみならず、更に他の分野にも及んでゐるものであつて、實に我々の想像以上である。私は一九〇〇年に文學史家マイヤー R.

M. Meyer の一論文の『時代』„Zeit" 誌上に公表せられたのを讀んだ。彼はその論文中で實例に就いて論ずらく、ナンセンスを意圖的にまた出鱈目に作ることは不可能であると。我々は或る數、または或る名前を全然出鱈目に思付いて見ると云ふことの不可能を、私は既に知ること久しい。例へば冗談に、或は陽氣に、位の多い或る數を一見氣儘に云つて見て、それを調べて見るとすると、それは非常に嚴格に決定せられてゐるものであつて、殆ど人々の不可能と思ふほどである。そこで私はまづ、出鱈目に選ばれた名の一實例を短く論じ、次いで『何の考へもなく口外した』數の、これと似た一實例を、更に細く分析して見ようと思ふ。

（一）　私の扱つてゐる或る婦人患者の症狀史を發表する準備をしてゐた時に、どう云ふ名前を著書中でその婦人につけたものであらうかと私は考へた。選ばうとするといくらでもあるやうに思へた。勿論、或る二三の名前は私は直ちに拒けた。第一に本名である、次に私の家族の名前も反對したかつた。また特別に奇妙な音のある名前もいけないと思つた。併し、これ等の名前を除いてしまふと、そのやうな名前に就いて惑ふ必要が何等ない筈であつた。ありとあらゆる名前が私の自由に取捨出來ると思はれるであらうし、私自身もさう思つた。ところがさうでなく、たつた一つだけが、他の名前を伴ふことなしに、飛出して來た。それはドーラ Dora であつた。

私はこの決定性に就いて自問して見た。――誰が他にドーラと云ふ名前を持つてゐるかな？　私の姉妹の子供の子守りがドーラと云ふ名前である事が思ひ出されたのだが、私はこの觀念を信ずべからざるものとして拒けようと思つた。併し私は十分に自己統御――或は分析の習熟をと云つてもよからう――を持つてゐたので、私は固くこの觀念を執つて進んで行つたのである。やがて、前夜起つたささやかな出來事が私の心をかすめ通つた。それに依つて求める決定要素が分つたのである。私の姉妹の食堂の卓子の上に『ローザ・ヴェーさまへ』„An Fräulein Rosa W.“ と宛名した手紙の置いてあるのを見屆けて、これは誰の名だと尋ねたところ、ドーラだと思はれてはゐるが本當の名はローザである、併し子守りになるに就いてはローザと云ふ名前は私の姉妹の名と着くので、それをやめることにしたのだと云はれた。私は同情して云つた。――可哀さうに、自分の本名すら保つてゐられないのだね。これを聞いて私は暫く默り込んでしまひ、あらゆる種類の重要な事柄に就いて考へ始めたことを今や私は思ひ出した。それ等の事柄は仄かなところに沈んでしまつたが、併し今は私は容易にそれ等を意識に齎すことが出來た。そこで、私が彼女自身の本名を保持することの出來ない人のために名前を選ばうとした時に、外ならぬ『ドーラ』が思ひ出されたのである。それのみならず、この場合特にドーラが出たと云ふことは、また、もつと確乎たる內的聯想に基いてゐるのである。何となれば、私の患

者の病狀史に於いては、分析取扱の過程に關して決定的な影響を及ぼしたのは他人の家に傭はれてゐる人であつたところの或る娛母であつたからだ。

このさゝやかな出來事が幾年の後に、豫期せざる連續を示したのである。既に夙く發表したドーラと云ふ名になつた娘の病狀史に就いて或る講義の中で論じてゐた間に、私の二人の婦人聽講生の一人が同じドーラと云ふ名前を持つてゐた事を思ひ出し、この名前を種々な聯想の場合に非常に屢々口にせざるを得なかつた。私は個人的に知つてゐるその若い女學生に向つて辯解した、彼女も同じ名前を持つてゐたとは實際思はなかつたし、また私の講義中では別の名で置換へるつもりであるのだと……。今や私は急いで一つ別の名を選ぶべき任務を持つことになつたが、私はそれに就いても一度その婦人聽講生の名を擇んで、精神分析に既に全く通曉してゐる級の者等に哀れな實例を提供するやうなことになつてはならないと考へた。であるから、ドーラの代りに『エルナ』Erna と云ふ名が出て來た時には私は非常にうれしく思つた。さうしてエルナと云ふ名をその講義の間使用した。講義が終つて後、一體この『エルナ』と云ふ名は何處から出て來たかを自問したが、さうあらうことを虞れた代償名稱の選擇は少くとも半分だけ實現されてゐることを知つて吹き出さゞるを得なかつた。他の婦人聽講生の名はルウツェルナ Lucerna で、つまりエルナ Erna はその一部分を成してゐるのである。

（二）或る友に宛てた手紙の中で私は『夢の註釋』の校正を見終つたことを、さうして『そこに二、四六七個の誤りがあらうと。』もうこれ以上變へたくないと云ふことを報告してやつた。私は直ちにその數を自分に說明しようと試みた。さうしてこのさゝやかな分析を手紙への返事として書添へておいた。自分の行ひの生々しかつた當時に捉へて書いたまゝを、こゝに引用しておくのが上々であらう。——

『日常生活の精神病理への寄與をなほこゝにざつと附加へておかう。夢の本の中に發見せられるであらう誤りの數として戲れにまた出鱈目に二、四六七なる數をこの手紙の中で擧げておいたのを君は發見せられるであらう。私の心算では、如何に誤りの數は多からうともと書く氣であつたが、するとこの數が出て來たのだ。併し心的生活には何等出鱈目なものや決定せられないものはない。だから君は當然、意識に解放せられた數を無意識が忽ち決定しようとしたものであると考へられるであらう。丁度この事あつた前に、私は新聞紙上で步兵大將たるＥＭ將軍が休職になつた事を讀んだのであつた。私がこの人に興味を持つてゐることを君は知つてゐる筈だ。僕が軍醫生として勤めてゐた間に、當時大佐であつた將軍は、或る時病院に來て軍醫に云つた。——「君は八日間に俺を健康にしてくれなくてはならない。俺は陛下の期待せられる或る事を果さなければならないからだ。」と。その當時に僕は

この人の經歷を辿らうと決心したのである。さうして考へても御覽なさい、今日(一八九九年)に於いて彼は步兵大將、休職となつて經歷を終つてしまつたのである。どれだけの時間に於いて彼はこの道程を步みつくしたかを計算して見たいと私は考へた。さうして私が彼を病院で見たのが一八八二年であつたと私は思つた。さうすると十七年になる。私はこの事を妻に話すと、妻はかう云つた。――「ぢやァ、貴方ももうさうして退職しなくちやなりますまい。」と。で、僕は答へた。――僕には神樣がついてゐるよ、と。かうした會話の後に、僕は机に向つて君への手紙を書いたのだ。併しそれまでの思想の流れはなほ續いてゐた、さうしてそれは當然だ。私の勘定は間違つてゐた。私はそれに對する確實な一點を記憶してゐる。私の成年の日を、私の二十四の誕生日を、軍隊の獄舍に於いて祝つた。(許可なくして外出したため……。)それ故に私は一八八〇年に彼を見たに相違ない。さうなれば十九年になる。そこで二、四六七の中の二四の數が分つて來た。さて、私の年齡を表はす四三と云ふ數をとつて御覽なさい、さうして二四年をそれに加へると六七になる。つまり、退職したいと思ふかとの質問に對して、二四年餘計に働きたいとの願望を表はしたことになるのである。私がM大佐に從つてゐた中間の時期には私は自分であまり仕事をしなかつたと云ふことは明かに私の不快に思つてゐるところである。で、彼は旣にお終ひになり、自分はまだ爲すべき總てを自分の前に持つてゐると云ふことに

就いて、一種の勝利の感がそこにあるのである。そこで我々は當然かう云ふことが出來よう、何の意圖もなく投げ出した二、四六七と云ふ數字でさへも無意識からの決定を缺いてはゐないのだと――。』（三）數を一見出鱈目に擇ぶことに就いての說明のこの最初の實例以來、私は同じやうな試驗を繰返して見たが、いつも同じ結果を得てゐる。併し大抵の場合は非常に祕密の內容を持つたもので、報告するに忍びないほどである。

併しこの理由のために、私は躊躇なくこゝに偶然思ひついた數の非常に興味ある一つの分析を附加するであらう。これはアードラー博士 Dr. Alfred Adler (Wien) が『徹頭徹尾健康なる』或る知人から受取つたものである。（一）

【註】（一） Psych.-Neur. Wochenschrift, Nr. 28, 1905.

その人の報告に曰く。――『昨夜私は「日常の精神病理」を讀んでゐた。もし私が注意に價する出來事に遮られる事さへなかつたならば、私はこの書を讀了してしまつたであらう。我々が一見全く氣儘に意識中に呼入れる一切の數もみな決定的な意味を持つてゐるものであるとの事をそこに讀んだので、私は一つ實驗をして見ようと思つたのである。私には 1734 なる數が浮んで來た。次に聯想はかう走つた。1734÷17=102；102÷17=6. そこで私はこの數を 17 と 34 とに分けた。私は 34 歲であ

る。私は青年期は三十四を以て終ると嘗て君に話したことがあると信じてゐるが、この理由のために私はこの前の誕生日には痛ましい感じがしたのだ。十七歳の終りは私の生涯の非常に好ましい、面白い時期の始まりであつたのだ。私は自分の一生を十七年宛の時期に分ける。その區分は何を意味するか。102 と云ふ數はレクラム叢書の一〇二號目がコッツェブーエ Kotzebue の戯曲「人間への憎惡と復讐」に當つてゐることを思ひ出させた。』

『私の現在の心理狀態は人間への憎惡と復讐である。レクラム叢書の六號目は（私は非常に澤山の號を空で覺えてゐる）ミュルナー Müllner の「罪(シュルド)」である。私は自分の能力を以てして成り得べきものになり得なかつたのは自分の罪であるとの考へに始終惱んでゐる。更にレクラム叢書の三四號は同じミュルナーの「カリバー」,Der Kaliber' と題する物語であることを私は思ひ出した。私はこの語を Ka(カ)—liber(リバー) に分けて見た。更にそこには ,Ali(アリ)' と ,Kali(カリ)' との言葉の含まれてゐることが思ひ出された。それにつれて思ひ出されたのは、私が嘗て自分の（六歳の）息子 Ali(アリ) と共に詩の押韻を考へた事である。私は彼に Ali(アリ) の韻語を捜すやうに要求した。彼は何も思ひ當らないから一つ捜してくれと云ふので、私は彼に云つた。「アリはヒペルマンカンサウレム・カリを以て口そゝいだ」と。我々は大笑ひをして、アリは非常に可愛(リーブ)かつた。その前の日に、私は腹立まぎれに彼のことを「ちつとも可愛く

ないアリだ ,Ka (kein) lieber Ali sei' と云つた。」

『今や私は自問した。レクラム叢書の一七號は何であるかと。併しそれは一向出て來なかつた。併し以前には確にこれを知つてゐたのだから、私はこれを忘れたがつたのだと假定した。いくら考へて見ても駄目であつた。私は自分の讀書を續けようと思つたが、併したゞ機械的に續けるのみで、一七の數に煩はされて一語をも解することは出來なかつた。私は火を消して更に探索を進めた。遂に一七はシェークスピアの戲曲であるに相違ないとの考へが浮んで來た。が、どの作であるか。私には ,Hero and Leander' が思ひ當つた。己れを困らせる明かに愚かしい我が意志の試みかな。私は遂に立上つてレクラム叢書の目錄を見た。一七號は『マクベス』であつた。驚いた事には私はこの戲曲に就いて何も覺えてゐないことを知つたのである。そのくせ、シェークスピアの他の如何なる作にも劣らず私の興味を惹いたことは事實なのだ。私はたゞこれだけの事を考へた。――殺人、マクベス夫人、妖女、'nice is ugly' それからシルレルの「マクベス」譯を非常にいゝと思つたことなど。疑ひもなく私はこのやうにしてこの作を忘れようとしたのである。それでも一七と三四とを一七で割れば、一と二が出ることを思ひ浮べてゐた。レクラム叢書の一號と二號とはゲーテの「ファウスト」である。私は夙くから非常に多くファウスト的なものを私自身の內に發見してゐた。』

我々の遺憾とするところは、醫者の愼み深さが我々をしてこれ等の思ひ付き(觀念)の意義を洞察することを許さぬと云ふことである。人間はその分析したものをうまく綜合してゐないとアードラーは云つてゐる。この分析は、それ等を續けて行くことに依つて一、七三四の數や諸々の思ひ當り(觀念)の理解を助けるやうな何物かゞ引出されるのでなければ殆ど我々には報告に價しないものである。なほ引用を續けよう。

『今日夙く私は固より一つの經驗を持つた。その經驗はフロイド的見解の正しさを明かに語るものである。夜中に私が起き上つたゝめに妻は眼を覺まして、レクラム叢書の目錄をどうしようと云ふのかと訊ねた。私は妻に一部始終を物語つた。妻はそんなことはみな詭辯だが、併し非常に面白いと云つた。彼女は一つの數を思つた時に、何も心に浮んで來ないと云つた。「では試みて見よう」と私は答へた。彼女は 117 と云つた。これに對して私は直ぐに應じた。「一七とは私が只今云つた數だ、」それのみならず、僕は昨日お前に云つた、妻が八十三歳で夫が三十五歳だとすると、それは非常な不調和だ。」と。それ以來、こゝ數日、私は妻にお前は八十二の老いたる母ちやんだと云つて揶揄してゐた。

82＋35＝117.』

この夫は自分自身の數は直ちに定めることは出來なかつたが、妻の方が一見出鱈目に選んだ數を擧

げると、直ぐに解決してしまつた。事實、この婦人は夫が如何なるコムプレックスからしてこの數を選ぶやうになつたかをよく承知してゐるのである。さうして自分自身の數を同じコムプレックスから選んでゐるのである。このコムプレックスは慥に雙方に共通するものである。何となれば、それは夫の場合に於いては彼等の相關的の年齢を取扱つてゐるからである。さてこゝまで來れば、この夫に起つた數を解釋することは容易である。アードラー博士が云ふやうに、それは夫の抑壓せられたる願望を示してゐる。その願望を明白に述べて見ると次のやうになるであらう。――『俺のやうに三十四の男に對しては十七の女が適當であらう。』

このやうな『遊び』をあまり人々が輕々しく考へないやうに、私はこゝに云ひ添へておかねばならないことがある。アードラー博士の報告に依ると、この分析の公刊せられた年の後にこの夫婦は遂に離別になつたと云ふ事である。(二)

【註】(一) レクラム叢書十七號の『マクベス』の説明としてアードラー博士の報告に依ると、この男は十七歳の時に無政府主義の結社に入つたが、その結社の目的は帝王弑虐にあつた。多分このために彼はマクベス劇の内容を忘れたのであらう。同じ人物はその當時に、暗合文字を發明したが、それに於いては數字が文字の代用をなしてゐた。

（四）無氣味な數の出來る事に就いての同様な說明をアードラーが與へてゐる。また所謂『好きな數』„Lieblingszahlen“の出來ることも當人の生活に關係がなくはないし、また多少の心理的興味を缺いてはゐない。一七と一九との二數に對して特別の偏愛を持つてゐる事を承認してゐる或る人が暫く考へて見た後に、彼は十七歲の時に豫々憧憬してゐたアカデミィの自由生活に入つて大學生となり、また十九歲の時には始めての大旅行を試み、その後間もなく彼の最初の科學的發見をなした事が知れた。併しこれ等偏愛の定着には、二つの樂しい出來事が後に重なつてゐるのである。その出來事に於いては同じく十七と十九の二數に彼の戀愛生活に於ける重要な意味が纏はつてゐるのである。

實は、我々が特別な關係で非常に屢々、また一見出鱈目に、用ふる數でさへも、分析に依つて辿つて見ると意外の意味に到達することが出來るのである。このやうな次第で、私の患者の一人が或る日自分が不滿の時に特によく、それなら僕は君にもう十七回から三十六回まで話したぢやないと云ふ癖のあることを氣付き、それには何か動機があるのだらうかと自問してゐた。やがて彼は、月の二十七日に生れてをり、彼の弟は二十六日に生れてをり、さうして人生の多くの福利をこの弟のために運命が自分から奪つたことを喞つべき理由を持つてゐたのである。かくて彼は自分の誕生の日數から十を減じ、それを弟の誕生の日數に加へる事に依つて、運命の偏頗を表はしてゐたのである『俺は兄貴で

あるのに、こんなにへづられてゐる。』

（五）私は數の思ひ當りに就いてなほ多少論じて見たいと思ふ。何となれば、意識が全然與り知らざる思想現象にしてこれほど立派な組織を得たもの丶存在をこれほど容易に證明する個々の觀察は他にあらうとは私には思へないからである。他方また、醫者の手傳ひ（暗示）が問題にならない分析の實例としてそれほど好適なものは他にないからである。それ故に、私はこゝに私の患者の一人の數の思ひ當りの分析を（本人の承諾を得て）報告しておくが、それに就いてはたゞ本人が澤山の子供の内の最年少者でまた幼年時にその尊敬する父を喪つたと云ふことを附言するに止めておく。特別に快活な氣分で彼は 426718 との數を彼は思ひ出した。さうしてかう自問した。『さて、これで俺は何を思ひ當るかな？　まづ私の聞いたことのある洒落だな、「鼻感冒（はなかぜ）は醫者に掛れば四十二日、掛らなければ六週間」と云ふやつだ。』これはこの數の初めの桁に相當する。（42＝6×7）、まづかう云ふ解決がついたが、さてそのまゝ行詰つてゐるので、その間に私は、彼の擇んだ六桁の數が 3 と 5 との外一以上の數の一切を含んでゐるとの事實に彼の注意を呼んだのである。彼は直ちにこの解決の續きを發見した。『私たちは七人兄弟で、私が最年少者です。3 の數は私の姉の A に相當します。5 は兄の L です。二人とも私とは大の仲惡です。子供の時分には毎夜私は神に祈つて、これ等二人の意地惡い靈を私の生活から取除

けてくれるやうに願つたものです。私はこの願望を一人で充足してゐるやうです。3と5、即ち惡い兄と憎らしい姉とは無いものになつてゐるからです。』――その數が兄弟姉妹たちを表はしてゐるものとすれば、しまひの 18 は何の意味でせう？　君はまだ僅かに七つであつたのでせう。――『私は屢々考へたことでした。もし私の父がも少し長生きしてゐたら、私は季つ子ではなかつたでせう。もしも一人生れてゐたならば我々は8人になつてゐたわけです。さうして私が兄貴風を吹かせる事の出來る弟が一人出來たわけです。』

これでこの數の說明はついた。併し我々はなほ解釋の最初の部分とそれに續く部分との間の連絡を發見したいと望んだ。これは終りの方の桁のために要求せられた條件――もし父が長生きしてゐたら――からして甚だ容易に發見された。42＝6×7 は父を救ふことの出來なかつた醫者に對する嘲弄を意味してゐる。さうしてこのやうにして父の生存に對する願望を表現してゐる。その數全體は實際に於いて、彼の家族たちに關する彼の二つの願望の充足に相當してゐるのである。つまり、彼の惡い兄と姉とは死んで、も一人小さな子が自分より後に生れて來ればよいとの二つの願望である。或は簡單に云ふならば、これ等二人が父の代りに死んでゐてくれさへするならば――。(二)

【註】(一)　なほこの外に同樣適當な、この患者のあい間〳〵の思ひ當りがあつたのだが、私は話を簡明にするた

めに省略してしまつた。

（六）今一つの數の分析を私はジョーンズ（前掲書）から採る。彼の知合ひの或る人が986と云ふ數を思ひ當り、自分の思ひ付く何事かと關係させて見てくれと挑んで來た。『被驗者の最初の聯想は、久しく忘れてゐた或る戲談であつた。六年前の或る暑い日に新聞紙は寒暖計が華氏986。を示してゐると記事に書いたものである。これは勿論、實際の寒暖計の示す98.6を可笑しく誇張したものである。我々はこの會話の內非常に熱い火の前に坐してゐたが、彼はその火からすざつたばかりで、この非常な熱さでこの記憶が出て來たと、多分正しいことを云つた。併し私はそれだけでは滿足せず、何故にこの記憶が直ぐに思ひ出されるほどそんなに生々とこびりついてゐたかを知りたいと思つた。何故ならば、大抵の人に於いて、何等かの他のより重要な心的經驗の聯想がなければ、かう云ふ記憶は呼覺すことが出來ないやうに忘れられてしまふものだからである。彼の話では、それを讀んだ時彼はドッと哄笑し、また後にそれを思ひ出す度に愉快になつたと云ふことである。併し私にはこれが特別に戲談としてよく吞込めなかつたので、その背後に何か祕密の意味がひそんでゐるのではないかとの私の期待は愈々强められて行つた。彼が次に考へたことは、熱が彼にはいつも非常に重要なものと思へると云ふことであつた。熱は世界に於いて最も重要なものである、生命の根原である等々。平生は非常

に冷靜なこの若者のこのやうな熱狂ぶりはいさゝかをかしいと思つたので、私はなほ彼の自由聯想を續けてくれと云つた。彼がその次に思ひ付いた事は、彼の寢室の窓から見える或る工場の煙突であつた。彼は夕方などによく窓邊に立つてその煙突から出る煙や焰を眺めては、エネルギーのこのやうな浪費に就いて考へるのであつた。熱、焰、生命の根原、高く突立つた圓筒からのエネルギーの放散——これ等の聯想からして、熱と火との觀念は彼の心の中に於いては象徴的考へ方の常として戀愛の觀念と結び付き、また强い自慰コムプレックスが數の思ひ當りの動機をなしてゐることを察知することはさして困難ではなかつたのである。彼は私の察知を直ちに承認したのである。』

數の材料が無意識的思想に於いて如何にして仕上げされるかに就いてよき印象を得たいと思ふ人には、私はユング C. G. Jung の論文(『數の夢に就いて』„Ein Beitrag zur Kenntnis des Zahlentraumes")とジョーンズの論文(『數の無意識的繰縦』„Unconscious manipulation of numbers")とを推薦する。

この種の個人的分析に於いて二つの事が特に著しいと私は思つた。第一は、私が未知の目標に進んで行き、勘定的の思想の流れに沈んでやがて探ねる數に達するその夢遊病者的の確實さと、その後の仕事の全體を完成する素迅さとである。併し第二は、私が勘定下手で年號や番地などを覺えることに非常に困難を感ずるのに、私の無意識的思考にとつては數は非常に容易に扱ふことが出來ると云ふ事

情である。それのみならず、數に關するこれ等の無意識的の心的所業に於いて迷信的傾向のあることを發見したが、それの起源は久しい間私に分らないまゝになつてゐる。（二）

【註】（一）ミュンヘンのルドルフ・シュイナダー氏はそのやうな數の分析の證明力に對して興味ある抗議を提出してゐる。（數の思ひ付きに就いてのフロイドの分析的研究、國際精神分析學雜誌、一九二〇年、一號。）シュナイダー氏はさまぐ\な實驗からして二つの結論を擧げてゐる。第一は『心理作用は數に對しては概念に對すると同樣な聯想の可能性を持つてゐる』と云ふこと。第二は、自發的な數の思ひ付きに於いて決定的な思ひ付きが現れると云ふことは、この數が『分析』に於いて發見せられた思想中から出て來たと云ふ證明には少しもならないと云ふこと。第一の結論は疑ひもなく正しいが、第二の結論はいさゝか極端である。

數のみならず、他種の言葉の思ひ付きも、これを分析的に調べて見ると必ず十分な決定的要素を有することが證明せられたとて、別に我々は驚くに足らぬのである。

（七）何となく氣にかゝる、つまり追蒐けられるやうな言葉の生ずる美事な實例としては、ユングの發見に懸るものがある。(Dianost. Assoziationstudien, IV,S. 215)『或る婦人が私に話すことに、二三日前から "Taganrog"（タ－グアンロ－グ）と云ふ言葉が頻りに口頭に上るのだが、どこからそんな言葉が出て來たか見當がつかないと云ふ。ずつと幼い時分に何か感動を強めた出來事や抑壓せられた願望はなかつたかと、私

はその婦人に尋ねた。暫く躊躇した後、彼女は „Morgenrock“（朝衣）を非常に欲しいと思つたことを話した。ところが彼女の夫はそれに對して一向興味がなかつた。„Morgenrock“ Tag-an-rock（朝衣、晝衣）我々はそこに部分的に意味及び音の關係を見る。またロシア語の形から來る決定がそこに現れてゐる。多分これと同じ時分にこの婦人は Taganrog から來た或る人と知合ひになつたのである。

（B）　一見氣まぐれに擇ばれた名稱や數の決定性をこのやうに洞觀することは、今一つ別の問題の闡明に恐らく寄與することが出來る。一掃的な心的決定說に對しては、多くの人々は、世間周知の如く、自由意志の存在に就いての特別な信念的感情に基いて反對する。この信念的感情は存在して、決定說の信仰に對しても屈しない。總ての常態的の感情と同じく、この感情もまた何物かに依つて是認せられなければならない。併し私の觀察し得た限りに於いては、この信念的感情は偉大な重要な意志的決斷に於いては出て來ないものである。かうした機會に於いては、人々は心的强迫の感覺を持つもので、且つその感覺に喜んで賴るものである。（ルッテルの言、『我こゝに立てり、また他に如何ともすべからざるなり。』）

他方に、我々は一つの事柄をまた別の遣り方で行動出來るとか、何等の動機なき自由意志で出來る

とか感じるのは、些細な、どちらでもいゝやうな決心の場合である。我々の分析に依れば、我々は、自由意志に就いての信念的感情が正しいか正しくないかなどと云ふ事に就いて論爭する必要はないのである。意識的動機と無意識的動機とを區別するならば、意識的動機は我々の一切の動機的決意を掩ふものでないとの信念を持つやうになるのである。Minima non curat praetor. このやうに一方から自由になつたものも他方からは、即ち無意識からは、その動機を受けてゐる。さうして心的領域に於ける決定性は不斷に實施されてゐるのである。(一)

【註】(一) 一見出鱈目に見える行動にも嚴密なる決定性があるとの見解は心理學に對して——多分また裁判に對しても——既に豐かな結果を與へてゐるのである。ブロイラーとユングとはかう云ふ意味で、所謂聯想實驗に於ける反應を理解する方法を樹てゝゐる。この實驗に於いては被驗者は一つの語が與へられるとそれに連れて思ひ付く語(刺戟語反應)を云ふのである。さうして始めに與へた語と應への語との間の時間(反應時間)を計るのである。ユングはその『診斷上の聯想研究』(一九〇六年)に於いて、このやうな聯想的實驗を試みれば心理狀態に對して如何に微妙な試驗をなし得るかと云ふことを明かにしてゐる。プラーグの刑法學者グロース Hb-Gross の二門弟たるヴェルトハイマーとクラインとはこれ等の實驗からして事實診斷の技法を發展させてゐるが、この技法は今や心理學者及び法律家が試驗しつゝある。

（C）さきに述べた如き行り損ひの動機に就いては意識的思想は全然與り知らないとは云へ、この動機の存在することを心理的に證明しようとするのは望ましいことであらう。實は、無意識をより深く知ることに依つて得たさまざまな根據からして、そのやうな證明が何處かには發見せられ得るのである。實際に於いて現象は二つの分野に於いて證明される。それ等の分野はこの動機の無意識的な、從つてまた轉位せられた知識に相當するものゝ如く思はれる。——

（a）他人の行動の極細かしい節々を最大の意味あるものゝ如く思ふのは、妄想症患者の態度に於ける著しい、また一般に認めらるべき特徴である。普通の人が見落すやうな細かしいことを取上げてそれに何とか解釋を施し、遙かな結論を導き出す基礎として利用する。例へば、私が近頃見た或る妄想症患者の如きは、彼が停車場を出る時、人々は一方の手で何か或る運動をしたので、彼等はみな自分の境遇を知つてゐるに違ひないとの結論を下したのである。また他の患者は人々がどんな風に街を歩いて、どんな風にステッキを振り廻したとか、さう云つたことに氣をつけてゐる。（一）

【註】（一）別の見地から出發して、我々はこのやうに、他人の非本質的な偶然的な表現を判斷することを『關係妄覺』と名付けることにしてゐる。

何等の動機なき偶然の範疇を、常態の人々は己れの心的活動の一部分として、行り損ひとして認容

するけれども、妄想症患者は、以上述べた通り、これを他人の心的顯現に適用することを拒むのである。總て彼が他人に於いて觀察するところのものは意味がある、總て說明することが出來る。併し如何にして彼はこれをそのやうな風に看做すやうになつたのであるか。他の凡そあらゆる類似の場合に於ける如くこの場合にも多分、彼は自分自身の無意識的活動中に存するものを他人の心的生活中に投射するのであるらしい。常態の人間又は神經症の人間に於いては精神分析を俟つて始めてそれが無意識中に存することの證明されるに過ぎない多くの事柄が、妄想症にあつては意識の中にのさばり出て來るのである。(二) 或る意味に於いて妄想症患者はこの場合、正しいのである。彼は常態者が見逍してゐるあるものを認識するのである。彼は常態の知的能力ある者よりも銳く見るのであるが、彼がかく認識した事情を他人に轉嫁するので彼の認識は無價値となるのである。で、あらゆる妄想症患者の解釋を私が是認するものであるなどとは思はないで頂きたい。併し偶然行爲をこのやうに考へることに於いて妄想症患者は正しいと認めるならば、妄想症患者が總てこれ等の解釋を奉ずる信念を心理的に理解せんとする我々のためには大いに役立つのである。そこには慥に何等かの眞理がある。病的とは云ひ難い我々の判斷上の誤りとても、そこに信念的感情の存するのは、妄想症患者と同じやうな方途に依つてこれを獲たに外ならない。この感情は誤てる思想列の或る部分に、又はその思想列の源泉に

對して是認せられると、やがて我々はそれを他の部分にまで押擴めるのである。

【註】（一）ヒステリー患者が性的虐待竝びに殘酷なる扱ひに關しての空想は分析に依つて意識的にされるが、例へばこのやうた空想は追跡妄想症患者の惱みと總ての細部に於いて屢々一致するものである。變態性慾者がその慾望の滿足のために工夫する中にも實在として同じ内容の存するのを我々の見るのは珍しいことであつて、而も全然期待すべからざることではない。

（b）偶然行爲や行り損ひの動機が無意識的に、轉位的に分つてゐることの今一つの證據は、迷信の現象である。これ等の思索の出發點となつたところの一小實驗を論述することに依つて、私は自分の意見を明白にしたいと思ふ。

休暇から歸ると、私は直ぐ、今年の仕事始めに扱はねばならぬ患者たちのことを考へた。私が最初に往訪したのは或る非常な老婦人で（二七一頁參照）、この婦人のために私は幾年もの間每日同じやうに醫術を施して來たのであつた。この單調のために、無意識的思想は、この患者の許へ私が行く途上で、また彼女を取扱つてゐる間に、屢々現れ出るのであつた。彼女は九十歲以上であつた。で、每年の初めに、彼女はまだこれからどれぐらゐ生きてゐようと云ふのかと云ふことが、つい考へられた。私の話すその日は、私は急いでゐたので車に乘つて彼女の家の前まで行くことにした。車の溜り場の

御者たちはみなその老婆の住所を知つてゐた。彼等の何人もが屢々私をそこへつれて行つたことがあるからである。今日は偶々御者は彼女の家の前で車を停めず、近隣の、實際外觀の似た、平行街の同じ番地の或る家の前で停まつた。私は間違ひを氣付いて御者に小言を云つたら、御者は辯解をしてゐた。

さてその老婆のゐない家に私が伴れて行かれたと云ふことは何か意味があるか。私としては慥に意味がなかつたが、併しもし私が迷信的であつたならば、私はこの出來事の中に一つの前徵を、本年は老婆にとつて最後の年であらうとの運命の指標を、見たでもあらう。歷史の傳へてゐる幾多の前兆は別にこれ以上の象徵に基いてゐるわけではない。何れにもせよ、私はこの出來事を何等これ以上意味のない偶然事として說明する、

もし私が徒步で行き、何か『考へ事』をしてゐたり『放心』してゐたりして平行街の違つた家へ行つたのだとすると、この場合は全然違つて來る。私はそれを偶然とは說明せず、何かな解釋を要する無意識的意圖ある行爲として說明するであらう。私はこのやうな『行き損ひ（フェルケーヘン）』に對しては多分、もうこの老婆に會はなくともよい時が早く來ればよいとの期待を持つてゐたとの解釋を下すであらう。

それ故に、私と迷信家との相違は次の如くである。――

自分の心的生活がその成立に與らざる出來事は、未來に於ける現實の形成に關して何等かの祕やかな事を敎へ得るとは私は信じてゐない。私は寧ろ、私自身の心的活動の非意圖的顯現は慥に私の心的生活にのみ屬する匿れたる何物かを包含してゐることを信ずる、つまり私は外的（實在的）偶然を信ずるが、內的（心理的）偶然を信じないのである。迷信家は丁度この反對である。──彼は自分の偶然行爲、行り損ひの動機に就いては何も知らない、彼は心的偶然性の存在を信ずる。それ故に彼は實際の出來事となつて現れた外的偶然に意味を賦與し、また彼以外の何等かの匿れたものを表はす意味を偶然の中に見る傾きがある。私と迷信者とは二つの點に於いて違つてゐる。──第一に、私は動機を內に見るのに、彼は動機を外に投出する。第二に、私は出來事を思想に辿るのに、彼は出來事に依つて偶然を解釋する。併し、彼にとつての匿れたるものは私にとつての無意識と一致する。さうして偶然を偶然として放任せずに、これに解釋を下さずに居られない點は我々兩方に共通する。（二）

【註】（一）なほこゝに非常に美事な實例があるからそれを書き添へておく。これはオシポウ N. Ossipow が迷信、精神分析、竝びに神祕的考へ方の相違に就いて論じてゐるところで引用してゐるものである。（國際精神分析雜誌、八卷、一九二二年）彼はロシアの或る地方の一小都市で結婚し、その後直ちに新婦を連れてモスコーへ旅した。目的地に達する二時間前に或る停車場で、彼は驛の出口まで行つて街を一

聲して來ようとの考へが起きた。汽車は彼の歸つて來るまでは十分停車してゐる筈だと彼は考へてゐた。ところが數分の後に歸つて見ると、新婦を載せた汽車は既に出てしまつてゐた。家にある彼の老母がこの話を聞いた時、首を振りつゝ述懷した。――『この結婚は普通には納まるまい』と。オシポウは當時この豫言は一笑に附してゐた。ところが五ケ月の後に彼はこの妻君と訣れる事になつたので、汽車を乘り捨てたことをこの結婚への『無意識的抗議』と解し直さざるを得ないやうになつた。彼がこの行り損ひを惹起した町は一二年の後に彼にとつて非常に重要な意味のあるものとなつて來た。何となれば、彼が後にその運命を結び合はせることになつた人物はこの町に住んでゐたからである。この人物は、いやこの人物の存在すらも、彼には當時知られてゐなかつた。併し彼の態度を神祕的に解釋するならば、彼がこの町に於いて新婦の載つてゐる汽車を乘捨てたのは、將來この人物との關係が生ずると云ふ事が分つてゐたからだと云ふ事になる。

そこで私は、心的偶然性の動機に就いての意識的無智と無意識的知悉とが迷信の心理的根柢の一つであると云ふことを容認するのである。迷信者は自分の偶然行爲の動機に就いて何事をも知らないが故に、また事實としての動機が彼の認識中に一つの場所を求めて已まないが故に、彼はこれを外的世界に轉位することに依つて片を付けざるを得なくなるのである。もしそのやうな關係が存在するならば、この場合だけに限られる筈がない。實際、私は、神話的世界觀の大部分は、竝びにこの神話的世界觀から遙にその傳統を受けてゐる大概の近世宗教は、外界に投出せられたる心理に外ならないの

である。無意識の心理的諸要素並びに諸關係の仄かなる認識(云はゞ、內面心理的知覺)(一)――と云ふより外仕方がない、妄想症との類似をこゝでは參考にしなければならない――は超感覺的實在の構成に反映してゐる。で、この超感覺的實在は科學に依つて無意識の心理中に逆戻りさせられることになつたのである。

【註】(一) これは勿論、何等認識としての性質を具へてゐない。

我々は天國と人間墮落の神話を、神、善惡、不死その他の神話を、敢へてこの方法で說明する。つまり形而上學(メタフイジク)を超心理學(メタプシコロギ)に變形する。妄想症の轉位と迷信のそれとの間の隔たりは一見大きく思はれさうだが實は小さいのである。人間は物事を考へ始めると共に、外界を神人同形同性說的(アントロポモルフイツシユ)に、已れに似たる多樣なる性格として、解釋せざるを得なかつたことは人々の旣に知るところである。彼等が迷信的に解釋した偶然なるものは、このやうに當人の行爲であり表現であるのだ。それ故に彼等は丁度他人の大したことでもない樣子から結論を引出して來る妄想症患者のやうに、また他人の意圖もない行動をその人格評量の基礎として當然ながら認める一切の常態人のやうに、振舞つてゐるわけである。迷信はたゞ近世の自然科學的の、併しまだ決して完成はしてゐないところの人生觀にとつて、排斥すべきものと思はれただけのことである。自然科學以前の各時代及び諸國民にとつては、迷信は當然の、

ものであり辻妻の合つたものであつたのだ。

ローマ人が鳥の氣味惡く飛ぶのを見て重要な企てを中止したのは相對的には正しかつた。彼はその行動をその豫想に一致させたのだ。併し彼がもし自分の敷居に躓いたがためその企てを中止したのならば、(„un Romain retournerait")我々迷信を信ぜざる現代人よりも絶對的に優れてゐる。我々はいくら努力しても、彼等はなほ優秀な心理知悉者だ。何となればこの躓きは彼にとつては一つの疑ひの存在、彼の內部にあつて彼自身に反抗するものゝ存在を證明するからだ。この反抗するものゝ力は彼の意圖の力の實施せられる瞬間に於いてこれを殺ぐことが出來るのである。總ての心的諸勢力が一つとなつて目指す目的に競ひ向つてこそ我々は完全な成功を收めることが出來るのである。シルレルの丼ルヘルム・テルは息子の頭上から林檎を射落すことを長く躊躇してゐたが、太守から第二矢を用意してゐるのは何のためかと訊かれた時、何と答へたであらうか。

可愛い息子を射落したならば、その時は
この矢で――あんたを殺るつもりだつた。
あんたをなら慥に、やり損ひつこないだ。

（D）　誰でも精神分析に依つて人々の匿されたる心の動きを研究する機會を持つたものは、迷信となつて表はれる無意識的動機の性質に就いてもまた何等かの新しい事を語ることが出來る。强迫的な思想や强迫的な狀態に惱んでゐる、頭のいゝ、神經質な人ならば、迷信が敵對感情や殘酷なる衝動が抑壓されてゐるためにそこから出て來てゐることを最も明白に認識するのである。迷信は大部分は兇事の期待である。で、他人に對して屢々その不幸を願ひ、而も善への敎育に依つてそのやうな願望を無意識中に抑壓してゐる者は誰でも、そのやうな無意識的惡に對する懲罰が外部から襲ひ來る災害の形で己れに加へられることを期待する傾向が殊に强い。

右に述べ來つたところに依つて我々は未だ必ずしも迷信の心理を云ひ盡してはゐないと認めるとするならば、我々は他方に於いて少くとも次の諸問題を解かなければならない。卽ち、迷信の眞の根柢などは全然ないと主張すべきか。豫感、豫言的の夢、靈感的經驗、超感覺的諸勢力の顯現などは慥に存在しないか。迷信と云ふ現象に關しては碩學知識が多くの精細な觀察を下してをり、またその觀察は慥になほ立入つた研究の基礎となるべきものであるからして、私は一概に迷信の現象を簡單に片付けて了はうとするものでは毛頭ない。寧ろこれ等の觀察の一部分を、無意識心理過程に關する我々の現在の知識を以つて說明して、而も我々の現在の見解に何等根本的變改を加ふる必要のなからむこと

を望んでゐるものである。なほまた他の、例へば精靈說信者あたりの奉ずる現象を證明しなければならない場合に、新しい經驗によつて我々の『法則』の改變が必要になるならば改變するであらうが、世の中に於ける諸事物の關係に就いては別にまごつきはしない。

これ等の分析の範圍に於いては、こゝに提出せられた諸問題に對して私はたゞ主觀的に、つまり私の個人的經驗に照して、答へることが出來るばかりである。ところが困つたことに私は、精靈もその前に出ては活動をやめると云ふ誠にやくざな人間の部類に屬するので、そのため私は奇蹟を信ぜざるを得なくなるやうな何事かを經驗するやうな目には嘗て會つた事がないのである。私も人並に豫感を持ち、災難を經驗したことはある。併し、これ等二つは互ひに離れ〳〵になつてゐて、豫感があつても何事も起らず、そのくせ災難は豫報なしに襲つて來る。若い頃私は一人で外國の或る町に住んでゐたが、その時に私はまがう方なき近親者の聲が私を急に呼び立てるのを屢々聽いた。で、私はその幻覺の起つた時刻を正確に記しておき、その時刻家にある者等に何事が起つたかを心配して訊いてやつた。ところが何事も起つてはゐなかつた。さうかと思ふと、その後私は患者を相手に靜かに仕事をしてゐて何の豫感もなかつたが、その間に私の子供は血を出して殆んど死なんばかりであつた。また私は患者から豫感だと云つていろ〳〵な事を報告されたけれども、嘗て本當の現象と認め得たことは

ない。

豫言的な夢を信ずる人は隨分澤山にあるが、それは夢の願望が始めに語つた通りの事が實際に起きると云ふ事實に依つて支持されるからである。併しその點に就いては別に不思議はない。さうして夢と充足との間には遙かな差異があるのだが、それは夢の當人の盲信性が寧ろ無視することを好むのである。正に豫言的と呼ばれて然るべき一つの好個の實例を、十分に分析してくれとて或る知的な、眞理を愛する婦人患者が私のところへ齎した。彼女は以前の友にして掛りつけの醫者であつた人に或る街の或る店の前で出會つた夢を見た。ところがその翌朝市中に出掛けて行くと、夢の中のと同じ場所で實際にその人に會つたと云ふのである。この不思議な一致は後に續いた體驗に依つてその意義を證するのではない、つまり未來に起ることに依つて是認せられるのではないと私は云ふのである。

仔細に調べて見ると、この婦人は例の夢をその夢の夜の翌朝に、つまり散歩と邂逅との以前に、想起してゐたと云ふ何らの證據もないことが明かになつた。この事情が明かとなつてこの挿話から一切の不思議なものが失はれ、さうして唯興味ある心理上の問題のみが殘ることになつた時、婦人は何の反對をも唱へることは出來なかつた。彼女は或る日の午前、或る街を歩いてゐた。某の店の前で彼女の家の昔の掛りつけの醫者に出會つた。さうして彼を見た時、彼女は前夜この場所でこの人に會つた

夢を確に見たとの信念を得た。分析をしてゐる内にやがて、彼女が如何にしてこの信念を得たかゞ大凡ながら分つた。が、固よりこの信念とても、一般的の法則に從へば、多少の信用のおけるものではあるのだ。前に期待してゐた通り或る場所で會つたと云ふのは實は或る媾曳の事實なのだ。昔の掛りつけの醫者は彼女の昔の記憶を呼覺した。その時分にやはりこの醫者の友である第三者と會ふと云ふことは彼女にとつては非常に重要なことであつたのだ。その時以來彼女はその紳士と關係を續けて來たが、さきに述べた夢の前日には彼女は到頭待ちぼけを喰はされたのであつた。這般の事情をもつとこゝに報告することが出來るならば、以前の友に會つて思ひ出したといふ豫言的な夢なるものは、多分これを次のやうな言葉で云ひ表はす事が出來るであらう。――『アラ、先生、先生にお目に掛つて妾は昔の事を思ひ出しますわ。あの頃はNと媾曳の約束をして待ちぼけを喰はされたことなどはありませんでしたよ。』

自分が丁度考へてゐるその人に出會すことはよくあるが、私はこの『不思議な邂逅』を自分でも經驗して容易に説明出來た。これは類似の場合のよき典型であると思ふ。私が『教授（プロフェッソール）』の稱號（この稱號は君主國に於いてさへ非常な權威を帶びてゐる）を得て後數日、市中を散歩してゐた間に或る親夫婦（エルテルンパール）に對して復讐をしてやらうと云ふ誠に子供らしい考へが突然起つて來た。數ケ月前に彼等は

私を招いて彼等の小さな娘を診てやつてくれと云ふことであつた。その娘は或る夢を見た結果、興味ある强迫症の現象が出てゐた。私はこの患者に非常に興味を持つた。その發病の起源を洞察することが出來たが、併し兩親は私の取扱ひに對して好意がなく、催眠術で癒す或る外國の權威者に任せたいと思つてゐるからとて私の諒解を求めた。そこで私は彼等兩親がこの試みに失敗し、私の取扱ひをもう一度行つて見てくれるやうにと依賴し、今度は全然私を信賴するなどと空想してゐた。併し私はかう答へた。——えゝ、私が今度プロフェッサーになつたから貴方がたは信用なさるのです。稱號は私の能力に對して何の加ふるところもありません。貴方がたは講師（ドツエント）としての私を用ふることが出來なかつたのだから、プロフェッサーとしての私だつて別に用はない筈ですよ。——と、こゝまで考へた時私の空想は『今日は、先生（プロフエツサー）』と云ふ挨拶の聲に遮られた。で、顏を上げて見ると、今まで私が復讐してやりたいと空想してゐた當の親夫婦が行き過ぎるところであつた。

これは一見奇蹟的に思へるが、その次に浮んだ考へがこれを打壞した。私は彼等夫婦の方に向つて眞直な、殆ど人通りのない道を歩いてゐたのだ。多分二十歩ばかり離れたところをチラと見て、私は彼等の堂々たる風體を瞥見し認識したのであつた。併しこの認識は、消極幻覺の型に從つて、感情的に强調された動機のために推退けられ、一見自發的に浮び上つて來た如き空想の形となつて已れを保

持したのである。

今一つ『一見豫感と思れる事の解決』をオットー・ランクの報告に從つて玆に載せておく。——

『自分が考へてゐたその人に偶然會ふあの「不思議な邂逅」の一つの珍らしい變種をさき頃私は自分で經驗した。私はクリスマスの直ぐ前にオーストリ・ハンガリ銀行へ行つて贈り物に使ふために十個の新しいクローネ銀貨に換へて貰はうとした。銀行の建物の中に積上げられてゐる黄金の山と對比して自分の貧しさを思ふことから名譽慾の空想に耽りながら、私は銀行のある狹い銀行小路を折れて入つた。扉の前には自動車が立つてゐて、多くの人々が出入りしてゐた。私は行員が直ぐに私の十クローネのために手配をしてくれるだらうと思つた。何れにもせよ私は手早く紙幣を差出して、どうぞ金貨(ゴールド)にして下さい！　と云はうと考へてゐた。——と、私は自分の間違ひに氣付いた。私は銀貨(シルヴァー)と云ふべきだつた。そこで、私は自分の空想から醒めた。私はまだ入口から數歩のところにゐた。さうして或る若い男が自分の方に近付いて來るのを見た。彼は私の知つてゐる男らしいのだが、併し自分は近眼であるため、まだ慥には認識することが出來なかつた。近付くまゝに見ると、彼は私の兄弟の學友で、名を金(ゴールド)と呼び、彼の兄弟たる或る有名な文學者から、私は自分の文筆生活の始めに於いて遙かに推擧して呉れることを期待してゐたのである。ところがその推擧は當てが外れ、それと共に期待

してゐた物質上の成功も序に當てが外れてしまつた。而も、その物質上の成功を私は銀行への途上で空想してゐたのである。つまり私は自分の空想に耽つてゐて、ゴールド（金）氏の近付き來るのを無意識的に統覺してゐたのである。さうしてこの事が物質的成功に就いて夢想してある自分の意識に對して、私が出納係に向ひ價値の低い銀の代りに金を要求しようとしたとの形で現れ出たのである。併し他方にまた私の無意識は對象を正しく知覺することが出來たのに、自分の眼は後になつて漸く認識したと云ふ矛盾の事實があるが、これは或る部分まではブロイラー Bleuler の期待コムプレックス（Komplexbereitschaft）で說明出來る。私の期待コムプレックスは物質上の事に纏綿してゐたし、私の知識を向上させるのとは反對の方に向つてゐた私の步みは始めから、金貨や紙幣の交換される建物の方へと傾いてゐたからである。』（精神分析中央雜誌、一卷五號）

不思議と氣味惡さとの範疇にはなほ、我々が或る瞬間や或る場合に於いて經驗する奇體な感情をも加へることが出來る。さう云ふ時には我々は、旣に同じ經驗を持ち、また以前にも同じ立場に身を置いたことがあるやうな氣がするのである。併し我々はそれ等の以前の經驗や立場を明白に想起することは、如何に努力しても及ばぬのである。そのやうな瞬間に、我々を刺戟するものを感じ（Empfindung）と呼ぶのは、單にだらしのない言語の習慣に從ふに過ぎないと云ふことを私は承知してゐる。

これは勿論一つの判斷であり、また實に一つの認識判斷でもある。が併し、それにしてもこれ等の場合はそれに固有の特質を具へてをり、またその他、我々が尋ねるものゝ何たるかを斷じて想起し得ないと云ふ事實も我々は無視してならないのである。この親熟感（デジャヸウ）(Deja vu) の現象が、個々人の以前の心的存在の證據として嘗て眞劍に提示せられたかどうかを私は知らない。併し心理學者たちはこれに興味を持つたものと見えて、實にさまざまな思辨的な方法でこの謎を解かうと試みたのであつた。提示せられた說明の試みは何れも私には正しいものとは思はれない。何となれば、何れの試みも隨伴的顯現並びにこの現象を起すに好都合な條件を問題にしてゐるに過ぎないからである。私の觀察に依れば、デジャヸウの說明に適應する唯一のものである心理的諸現象は——つまり無意識的の空想は——なほ今日の心理學者たちの概して等閑に附するところである。

嘗て一度何事かを經驗したとの感じを錯覺として了ふことは正しくないと私は思ふ。それどころかそのやうな瞬間に於いては我々が旣に經驗した何事かに實際に觸れてゐるのだが、只それがまだ曾て意識的となつた事がない故に、それを意識的に想起することが出來ないだけだ。約言すれば、デジャヸウの感じは無意識空想の記憶に相當する。萬人が個人經驗に依つて知つてゐるところの無意識的空想(白日夢)がある。丁度そこにまた同樣な意識的の創造があるのと一般である。

この對象は非常に精細の研究を要するものである事をよく承知してゐるが、併し私はこゝではその感じが激しさと持續性とを有するのを特質とするところのデジャヸウの實例を唯一つだけ分析するに止めておかう。三十七歳になる或る婦人が云ふところに依ると、彼女は十二歳半の時に或る級友を田舍に始めて訪れ、その家の庭に入るや否や、自分は以前にこゝへ來た事があるとの感じを直ちに持つた。この感じは居間の方へ通つた時にも繰返された。で、彼女は次の間がどれ位大きく、その部屋から外を見たらどんな景色かと云ふことなどを豫め知つてゐると信じた。併しこの再見の感じはこの家や庭を以前に訪れた事に、多分極まだ幼い時分に、訪れた事にあるのだとの信念は、彼女の兩親の語るところに依つて絶對的に拒けられ、反證せられた。この話をした婦人は別に心理的の説明を求めたのではなく、このやうな感じの現れたるはこゝの家の友が後に彼女の感情生活中に占めた重要さに豫言的な關係を認めたのであつた。ところがこの現象が如何なる事情の下に彼女に現れたかを考究して見たところ、我々はまた別の見解への道に導入せられたのであつた。

この訪問をしようとの決心をした時、彼女はこの家の娘たちが唯一人だけ兄弟を持つてゐて、その人が重病であることを知つてゐた。この訪問の間に彼女は彼を面識したのである。彼女の見たところでは非常に容態は惡く、間もなく死ぬだらうと彼女は一人で考へてゐた。ところが偶々、彼女自身の

唯一人の兄弟が數月前に重いヂフテリアに襲はれ、彼の病氣中彼女は幾週間もの間、兩親の家を離れて親戚の家に同居してゐた。この田舍への訪問には彼女の兄弟も同行したと彼女は信じた。またこれは彼の病後の始めての大旅行であつたとさへ想像した。而も彼女の記憶はこれ等の點に關しては非常に曖昧でありながら、總ての他の細々した諸點、就中彼女が當日着て行つた着物は非常に明瞭に彼女の眼底に殘つてゐた。分析の知識ある者にはこれ等の暗示からして、兄弟が死ぬだらうとの期待がこの娘の當時の心に大きな役割を演じ、またそれが嘗て意識的とならなかつたが、或は病氣好轉後非常な勢で抑壓されたか何れかだと云ふことは、これを結論するに困難ではなからう。他の事情で彼女はまた別の衣裳を――つまり喪服を――着なければならない事が時々あつた。彼女は同樣な立場をその友の家に於いて發見した。彼等の唯一の兄弟は近く死にさうであつたが、暫く經つてそれが果然現實の事件となつて來た。彼女は數ヶ月前に同じやうな立場に遭遇したことを意識的に記憶したかも知れない。が、併し抑壓に依つて禁斷された事を想起する代りに、彼女はその記憶感情をその地方に、その庭に、その家に轉嫁し、彼女がそれと正しく同じことを旣に經驗したとの『誤てる再認識』fausse reconnaisance に陷つたのである。抑壓の事實からして我々は、彼女の兄弟の死を以前に期待したことは願望空想の特質とあまり緣遠いものではないと結論することが出來る。さうなれば彼女は一人子

になるであらう。その後の神經症に於いて彼女は兩親を失ふことの恐怖感に激しく襲はれたのである。この恐怖の背後には例に依つて同じ內容の無意識的願望のあることが、分析に依つて闡明せられたのであつた。

私自身の瞬間的の『デジャヴュ』の經驗は、同じやうに、その瞬間の感情群にまで溯ることが出來る。『デジャヴュはまたかの（無意識的にして未知なる）空想を呼覺す一つの原因であらう。その空想は時時自分の立場をよくしようとの願望となつて私の內に浮んで來るのである。』デジャヴュのこの說明はこれまでたゞ一人の觀察者に依つてのみ問題とされた。本書の第三版はフェレンチ博士から多くの價値ある評論を受けたが、同博士はデジャヴュに就いて私にかう書き送つた。――『私は自分自身並びに他の人に就いて見てかう云ふ信念を得ました。說明し難き親熟の感は實際の立場に於いて無意識的に想起する無意識的空想にまで關係をつけることが出來ると。私の患者の一人に就いては、この現象は一寸違つてゐるやうに見えましたが、實際に於いては全く類似のものでした。この感じは私に甚だ屢々歸つて來ましたが、必ずその前夜の夢の忘れられた（抑壓された）部分から發源してゐることが分りました。そこでデジャヴュは白日夢からばかりでなく、また夜の夢からも發源して來ることのあるものゝやうです。』と。

その後私は知つたが、一九〇四年にグラッセ Grasset がこの現象に就いて一つの説明を與へてゐて、それが私のに甚だよく似てゐる。

一九一三年に私は一小論文(一)に於いて、デジャギウに非常に似てはゐるがこれとは別な或る現象に就いて説明を試みた。それは „Deja raconte“(デジャラコント)(嘗て話した)であつて、つまり何事かを既に話したと錯覺することで、これが精神分析の取扱中に出て來ると殊に面白い。患者は自分の主觀の確かなことの徴證をいろいろ擧げて、既に話したと主張するが、醫者の方はそんな事はないとてその反對を確言し、大抵は患者の誤りを納得させるのである。この興味ある行り損ひは多分かう説明することが出來る。患者はその話しをしておかうと云ふ衝動と意圖とを持つてゐたのだが、併しそれを實行することを怠つてゐた。さうして彼は今や第一の方の記憶を第二の方の、意圖の實行の代償として置き換へてしまつたのである、

【註】(一)『精神分析中の誤てる再認識(デジャラコント)』(國際精神分析學雜誌、一卷、一九一三年)

(E) 近頃私は哲學の素養ある一同僚に向つて名稱忘却の二三の實例を分析と共に話したところ、彼は急いでかう答へた。——それは成程尤だが、併し僕には名前の忘却に就いては自ら説ありだと。

勿論かう簡單に片付けるわけには行かない。私の友が嘗て名前の忘却の分析に就いて考へたことがあらうとは信ぜられない。また、この現象が彼に於いてどう違つてゐるかを云ふことも出來はしなかつた。而もなほ彼の云ひ草は、多くの人々がまづ前方へ持出して來る傾向のある問題に觸れてゐる。行り損ひや偶然行爲に就いてこゝに與へた解決は一般に適用し得べきか、或は個々の場合にだけか。もし後者だけであるとすると、それが他の現象の說明にも適用出來るのは如何なる條件の下に於いてゞあるか。

この問題の答へには私の體驗ではおぼつかない。私はたゞ、この提示されたる關係は滅多にないものだと考へるやうなことのないやうに警めることが出來るだけだ。何となれば、私自身に就いて、また私の患者に就いて試驗して見た限りでは、いつでもこゝに報告した實例に於いてと丁度同じやうに證明せられたからである。少くともこれを主張すべき十分な理由があつたからである。併しながら、總ての場合に症狀行爲の匿れたる意味を發見するに成功しなかつたからとて怪しむことはないのである。解決に逆ふ內的抵抗の大きさが決定的の要素として考へられねばならないからである。我々はまた自分自身に就いて、患者に就いて、一切の個々の夢を解釋する事が出來るものではない。この理論の一般的妥當性を認めるためには、匿れたる關係の中に僅かたりとも透入することが出來れば足るの

である。翌朝起きて解釋しようと試みてもいつかな分らぬ夢でも、一週間なり一ヶ月の後に、その間に起つた現實上の變化の結果として、相互に抗爭する心的諸要素が融けたならば、自然その祕密の知れることも屢々あるものだ。これと同じことが行り損ひと症狀行爲の解決にも妥當する。『ヨーロッパを樽で旅行』（一五二頁參照）と讀み損つた實例に就いて見ても分る通り、始めには解くことの出來ない徵候（症狀）も被抑壓思想への現實的興味が去つてしまつたならば、これを分析することが出來るやうになるのである。羨むべき稱號を私の弟が私より先に受けるかも知れない事情が存續してゐる限りは、件の讀み損ひは如何に努力しても反覆してもこれを分析することは出來なかつた。かう云ふ好遇がどうやらなさゝうだと分つた後に、これの解決への道が忽ちに開けて來た。であるから、分析に抵抗するあらゆる場合に就いて、こゝに闡明した心理的機制以外の機制に依つてそれ等が生じ來ると斷ずるのは誤りであらう。そのやうな假定を下すためには消極的證據以外のものを要する。更にまた大抵の常態者が行り損ひや症狀行爲の別の說明を信じ易いと云ふことは何等の證明にもならな　ことである。それは明かにこの祕密を生んだのと同じ心理的勢力の表現であつて、從つてそれの保障せられることには乘出して來るが、それの闡明せられることには抗爭するのである。

他方また我々は、抑壓された思想感情が症狀行爲や行り損ひとなつて現れるのは獨立的にさうなる

のではないと云ふことを看過してはならない。神經作用がそのやうに滑ることの技巧は神經作用から獨立的になされ得るものでなければならない。するとやがて、意識化しようとする意圖を持つ被抑壓者が、この滑りを得たりとばかり利用するのである。そのやうな意圖の自由になる機構上及び機能上の諸關係は何であるか。これこそは云ひ損ひの場合に就いて哲學者や言語學者たちが立入つた研究をなすところの事柄だ。行り損ひ及び症狀行爲の條件に於いて無意識的要素を、それと共働する生理的及び精神生理的關係から區別するならば、健康の範圍內に於いてもなほ他の契機が（生理的關係の途上に於いて無意識と同樣に、それの代りに、行り損ひと症狀行爲とを生み得るところの契機が）なするかどうかとの問題が明かに殘る。この問題に答へるのは私の任務ではない。

（F） 云ひ損ひに就いて論じて以來、我々は、行り損ひには匿れた動機がある事を十分に證明し、また精神分析の力に依つて、この動機を知ることの道を辿つて來たのであつた。これ等の症狀行爲となつて現れた精神的諸要素の一般的性質、竝びに特徵は、我々も今まで殆ど考へても見ず、放任しておいた。何れにもせよ我々はそれ等の諸要素をもつて正確に定義しようともしなかつたし、その合法性を調べて見ようともしなかつた。また只今もこの題目を根本的に片付けて了はふと思ふものでも

ない。何となれば、一歩を踏み出すや否や我々は、この分野ならば他の方面から一層容易に入込み得ることが分つたからである。(二)こゝでは我々は幾多の問題を提示することが出來る。で、私はそれ等の問題を掲げて、その範圍内で解釋を加へたいと思ふ。(一)行り損ひ及び偶然行爲となつて現れる思想感情の內容及び起源は何であるか。(二)思想感情をして表現の手段としてこれ等の行爲を利用せしめ、またさうするやうな位置に思想感情を驅るところの條件は何であるか。(三)行り損ひの仕方と行り損ひに依つて表現にまで齎される思想感情との間には、常に必ず一定の關係を認めることが出來るか。

【註】(一) この文は全然一般人に分るやうに書いて、實例を多く示すことによつて、無意識的ながらも效果ある心理現象を承認せざるを得ないやうにその途を地ならしし、さうしてその無意識の本性に關する一切の理論的考察を避けたのである。

私はまづ、最後の問題への答への材料を纏めることから始める。云ひ損ひの實例を論じた時に、我我は云はうとした言葉の內容以上に亙ることの必要を知つた。さうして意圖以外に言語障碍の原因を求めねばならなかつた。後者の方は二三の場合に就いて全然明瞭で、話者は自分でよく知つてゐた。最も單純自明と思はれる實例に於いては、何故に一が失はれて他が表面に出て來たか(メリンガー、

マイヤーの所謂汚染(コンタミナチオン)が何人にも分らないでゐて表現の障害されるのは、同じ思想を音は似てゐるが別な風に考へたものであつた。第二群の實例に於いては、或る考への差控へが一つの顧慮に依つて動機を與へられてゐる。併しその顧慮は十分に差控へをなすには力が足りない顧慮なんである。(„Zum Vorschwein gekommen“) 差控へられたる考へはまた明白に意識されてゐたのだ。第三群に就いて我々は始めて割引なく主張することが出來る、失敗をさせる思想と意圖せられたる思想とが別物であり、また本質的(と思はれる)區別を樹てることが出來る。失敗をさせる思想と失敗をさせられる思想とは思想聯絡に依つて關係づけられてゐる（内的抵抗に依る失敗）か、或は本質的に全然無關係であるかだが、また丁度その失敗させられた言葉は失敗させた(屢々無意識的の)思想と、緣遠き外部、の聯想に依つて關係づけられてゐる。私の精神分析した中から擇んだ實例に於いては、全體の話は、同時に能動的となつたが併し全然無意識的である思想の影響の下に立つてゐる。その無意識的の思想を私は失敗に依つて自分で洩す(Klupperschlange—Kleopatra)か、或は無意識的に意圖せられた話の個個の部分をして他の部分を失敗させ得しむることに依つて、そこに一つの間接的な影響あることを示すのである。(Asenatmen, Hausenauerstrasse 或るフランス女への追憶がその背後にある。) 云ひ損ひの出た抑々の、差控へられた、即ち無意識的の思想はさまぐ\なところから發源してゐる。これを一

般的に調べて見たところが、何等確定的な方向を示すものではない。

讀み損ひ、書き損ひの實例を比較研究して見ると、同じ結果に到達する。何れの場合も、云ひ損ひに於けると同じく、動機なき凝縮に起源してゐる。(例へば、Der Apfe の如く。) 併し我々は、夢に於いては當然であり覺醒生活に於いては錯誤であるところのそのやうな凝縮が起るためには、特別の條件が充たされねばならないのではないかと云ふことを知るのは喜びであらう。それに就いては、實例自身からは何等の知識を得ることは出來ない。併し私はそのやうな條件、例へば意識的注意の弛緩の如きは、そこにないとの結論をこゝから引出すことには反對である。何となれば、自律的行爲なるものは正確さと信頼し得べきことゝに於いて特質があることを私は他のところで知つたからである。私は寧ろ斯く强調したい、生物學に於いて非常に屢々然るが如く、この場合に於いても、常態的關係又は常態的に近き關係は、病理的のものよりも研究の對象として都合の惡いものである。この最も容易に起る障碍の説明に當つて不明のまゝに殘つてゐるものは、もつと重要な障碍の説明に依つて明白にされるであらうと私は期待してゐる。

また讀み損ひ書き損ひの場合でも、遙かな錯雜した動機の認められるやうな實例がなくはない。『樽に入つてヨーロッパ旅行』は、縁遠い、非本質的な思想の影響に依つて説明のつく讀み損ひである。こ

の思想は抑壓された嫉妬や名譽心の感情から發したものであり、また „Beförderung“（運輸、昇級）てふ言葉の『手形』を、重要ならぬ、無難な題目との結合に利用してゐる。Burckhardt（ブルクハルト）の場合に於いては、名前そのものが一つのそのやうな『手形』であるのだ。

言語機能の障害は他の心理的行動よりも一層起り易いものであり、障碍を起させる力を勞することの少いのは見易いことだ。

本來の意味に於ける忘却、即ち過去體驗の忘却を調べる場合はまた別の根據に立つのである。（第一章及び第二章に於ける如き、固有名詞や外國語の忘却は『滑り』„Entfallen“と呼び、故意の忘却は『遺漏』„Unterlassen“と呼ぶことに依り、この場合の忘却 sensu strictiori と區別することが出來よう。）忘却に於ける常態的過程の根本條件は未知である。（こまた我々が忘れて了つたと思つてゐることでもその總てを忘れてしまつてゐるのではないことを氣付くのである。我々がこゝで說明するのは重要ならぬことは忘れ重要なことは覺えてゐるものだとの法則を危ふするやうな忘却に出會して我々の驚く、さう云ふ場合だけである。特別な說明を要するかのやうに見えるこれ等の忘却の實例を分析して見ると、忘却の動機は必ず、苦痛な感情を呼覺す何物かを想起することを好まぬことである。で我々は、心理生活に於けるこの動機は全然普遍的に發現しようと努めてゐるのだけれども、これに抵

抗するさま〴〵な諸勢力のために、如何様にか正規的に發現することを遮げられてゐるのだとの推定に到達する。このやうに苦痛な印象の想起を好まぬことの範圍と意義とは、これを骨折つて心理的に調べて見るだけのことはありさうに思へる。個々の場合に於いて忘却を遍く保持せしめてゐるものは如何なる特別の條件であるかとの問題は、このやうな廣汎な關係からは解決出來ない。

【註】（一）本當の忘却の機制に關しては私はまづ次のやうに云ふ事が出來る。――記憶材料は概して二つの影響即ち凝縮と歪みとを被る。歪みは精神生活を支配する諸傾向の仕事であり、記憶痕跡中に殘存する感動基礎に對して殊に、立向つて行く。この記憶痕跡は凝縮に對しては一層抵抗的な態度をとるものである。どちらでもよくなつた痕跡は反抗することなく凝縮の過程中に埋沒する。なほまた我々は、その上に歪みの傾向は出たいと思ふところで出られなかつたから、どちらでもよい材料を喰物にしてゐると云ふことが出來る。これ等凝縮と歪みとの現象は長い間續き、その間に總ての新しい經驗は記憶內容を變形させるものであるから、記憶を不確實に不明瞭にするものは時であると我々は考へる。忘却に於いては時の直接機能と云ふ事は殆ど問題にならないらしい。――抑壓せられた記憶痕跡に就いて、我々は、それ等が最も長い時の經過の間にすらも何等の變化を被つてゐないことを證明することが出來る。無意識は本來、時のないものである。精神的定着の最も重要な、且つ最も特異な性質は、一切の印象が一方それの受容せられた時のまゝの形で保持されてゐると共に、またその後の發展につれてとつた形でも保持されてゐると云ふ事實は存する。這般の事情は如何なる他の分野と比較して見

ても別にはならないのである。この說に從へば、記憶內容の一切の以前の狀態もかくて復活することが出來る。よしんば、一切の始めの關係は新しい關係に依つて既に長く置換へられてゐようとも——。

意圖忘却の場合にはまた別の契機が前景に現れて來る。不快な記憶を抑壓する時には葛藤が生ずると推定されるが、その葛藤はこの場合にはよく把握出來る。で、實例を分析して見ると、そこには必ず逆意志(ゲーゲンキル)があつて、それが意圖を妨げはするが全然それを廢絶はしないことが分る。以前に述べた行り損ひの場合と同じやうに、この場合にもまた我々は心的現象の二つの型を認識する。逆意志は直接意圖に向つて反抗するか(重要な意圖の場合)、或は意圖それ自身には實質的に無緣であるが何かの外的聯想に依つてそれと關係のつくか(あまり重要ならぬ意圖の場合)である。

同じ葛藤は行り損ひの現象をも支配してゐる。行動の障碍となつて現はれる衝動は屢々逆意志である。而も行動の實施に際して已れ自身を表現するためにその機會を利用するものは、一層屢々無緣の衝動である。障碍が內的矛盾の結果である如き場合は一層意味深き場合であつて、また更に重要な活動に對して起るのである。

內的矛盾はそこで、偶然行爲又は症狀行爲に際して愈々背後へ引込む。意識には思ひも及ばぬ、さ

うして全然看過されてゐる言動的表現が、無數の無意識的又は差控へられたる感情の表現となつて出る。それ等の言動的表現は大抵は、象徴的に空想と願望とを表してゐる。

行り損ひとなつて表れる思想感情の起源に關する第一の問題に對しては、我々はかく答へることが出來る、多くの場合に於いて障碍する思想の起源は心理生活の被抑壓感情に直ちに辿ることが出來ると。健康者に於いてさへも、利己的、嫉妬的、敵視的感情並びに衝動は道德教育の重荷に壓されて、行り損ひの道を利用することに依つて、高級心境は知らないが確に存在はしてゐる力を何とか表現するのである。これ等の行り損ひや偶然行爲を放置しておくことは不道德的な感情に對して大いに息抜きになる。これ等の被抑壓感情の內では、さま〴〵な性的要素が小さからぬ役割を果してゐる。私の實例中で分析に依つて發見せられた思想の內にそれ等の性的要素があまり出なかつたとすれば、それは材料上の偶然である。私は自分の心的生活からの多くの實例の分析を企てたからして、選擇は始めから偏してゐたし、また性的なことを避けるやうに心掛けた。別の時には、障碍する思想は非常に無難な反對や考慮から發源してゐるやうに思はれる。

今や我々は第二の問題に答へるべき段取となつた。一つの思想が完全な形で現れず、云はゞ寄生的の形で、他のものゝ變形又は障碍となつて現れねばならないと云ふは、如何なる心理的條件のためで

の『被抑壓』あるか。行り損ひの最も著しい實例に就いて見ると、この條件は意識能力への關係に、即ち材料の多少とも明確な特質中に求められねばならないことは甚だ明かである。併し多くの實例に就いて調べて見ると、この特質は愈々多くの判然せぬ要素から成り立つてゐることが分る。或る事が閑潰しだからとて無視しようとする傾向——或は問題の思想が、實は所要の事柄に屬さないと考へること——などは、反逆的感情に對する道德的批難と同樣に、或は絕對的に無意識的な思想群の起源と同樣に、或る思想禁壓のための役目を果す。但しこの禁壓された思想は後になつて、他のものゝ障碍を奇貨として已れ自身を表現するのである。行り損ひ及び偶然行爲の條件の一般的性質への洞察は、かゝる方途に於いては獲られない。併しかゝる探究に依つて我々は唯一の意義ある事實を知ることが出來る。行り損ひの動機が無難であればあるほど、行り損ひとなつて現れる思想が愈々明白でなく、從つて意識となり難いものであればあるほど、我々がそれに注意を向けるならば、その現象を解決すること愈々容易となるのである。云ひ損ひの最も單純な場合は、直ぐに氣がつくし、また自發的に訂正することが出來る。實際に抑壓された感情に依る動機を扱ふ場合には、解決には非常に分析上骨が折れる。さうして時々困難に遭遇するか、或は不成功に終ることがある。

それ故にこの最後の探究の結果からして次の事實を讀みとることは至當である。行り損ひ及び偶然

行爲の心理的條件を滿足の行くやうに說明するためには他の方途で、他の方面からせねばならぬと。それ故に寛大な讀者はこれ等の論議の中には、この題目がもつと廣汎な關係から解釋されてゐる、その一斷面の存在を認めることが出來る。

(G) このもつと廣汎な關係への方面だけでも指示するために數言を附加へておきたい。分析を適用することに依つて我々の知り得たところでは、行り損ひ及び偶然行爲の機制は、最も本質的な諸點に於いては夢の形成の機制と一致するものであることが分る。この機制に就いては夢の註釋に關する、拙著中の『夢の仕事』の章に於いて私は論じておいた。行り損ひの場合でも夢の場合でも、我々はそこに凝縮と妥協形成(『汚染(コンタミナチオン)』)とを發見する。それのみならず、立場が殆ど同じであつて、無意識思想は異常な方途に於いて、外的聯想に依つて、他の思想の變形として已れを表現する。夢の內容の不調和、矛盾、誤謬(それ等の結果、夢は心的行爲の所產として殆ど認識すべからざるものとなるのだが)などは、同じ行方で生ずるのだが、勿論我々の日常生活の一般的失敗よりは既存材料を更に一層自由に驅使するのである。夢の場合も行り損ひの場合も、一見不正な機能と思はれるものは二つ又はそれ以上の正しい行爲の特異の干涉に依つて說明される。

この結合からして一つの重要な結論が引出される。――我々が夢の內容中にその驚くべき所業を認めるところの特異な仕事の行り方は、我々の覺醒時に行り損ひの形となつて活動してゐることの證據が十分にある以上は、睡眠狀態の心理生活にのみこれを歸すべきものでないと。同じ關係からして我我はまた、變態的であり不思議であるとの印象を與へるこれ等の心的現象が心的活動の深處に於ける頹廢、又は機能の病的狀態に依つて決定されてゐるものであると考へ得ないやうになる。(二)

【註】(一)『夢の註釋』(大槻憲二譯、二九二頁參照。)

夢の影像と同樣、行り損ひを生ぜしめるこの不思議な心理的の仕事を正しく理解することは、精神神經症的症狀、殊にヒステリーや强迫神經症の心理的形成がその機制に於いて、この働き方の一切の本質的特長を繰返すことを發見して後に、始めて可能となるであらう。で、我々の探究を連續することはこのところから始めねばならない。

行り損ひ、偶然行爲、症狀行爲をこの最後の類似の光に照して考察するに當つて、我々には今一つ特別の興味がある。これ等の行爲を精神神經症及び神經症的症狀の機能に比較すると、またしても出て來る二つの主張が意義と支持とを得る。卽ち、神經質的常態と變態との境界は漠たること、また我我は總てみな多少とも神經過敏であること。あらゆる醫師的經驗はともかくとして、このやうな單に

さう云へば云へるやうな神經質——神經症上の名目のみの形式 formes frustes ——のいろ〳〵な型を解釋することも出來よう。そこにはほんの僅かな症狀しか現れない場合もあらう。或は稀に現れる場合、おだやかな形で現れる場合もあらう。輕減は病的顯現の數に、激しさに、或は一時的の發作に移される。また、健康と病氣との中間を最も屢々掛橋する丁度この型は決して發見せられないと云ふこともあらう。この掛橋型の病的顯現は行り損ひ及び症狀行爲の形をとるのであるが、この型は症狀が最も重要ならざる心的活動に移されて、而もより高い心的價値を要求し得る一切は何等障碍を受けないと云ふのが、その特質である。症狀が逆に出來てゐる場合は、つまり症狀が最も重要な個人並びに社會的活動に於いて、食物攝取、性的關係、職業生活、社會生活等を障碍するやうな風に現れる場合は、重い神經症に見られる。さうして病的顯現の多樣性や活潑さなどよりは、もつとよくこれに特質を與へる。

最も輕微な場合、並びに最も惡症の場合に共通する特質は、症狀行爲や偶然行爲にも見られるが、この特質は歡迎せられざる、抑壓されたる、心的材料にこの現象を歸し得ることに存する。この材料は意識からは押退けられてゐるけれども、併しそれ自身を表現する一切の力を奪はれてはゐない。

『日常生活の精神分析』終

昭和 五 年十月二十日印　　刷
昭和 五 年十月廿五日發　　行
昭和 十 年九月三十日改訂第二版
昭和十五年十月三十日第 五 版

フロイド精神分析學全集（日常生活の精神分析）

定價金壹圓八拾錢

譯者　大槻憲二

發行者　和田利彥
東京市日本橋區通三丁目八番地

印刷者　龜谷良一
東京市本郷區眞砂町三十六番地

印刷所　日東印刷株式會社
東京市本郷區眞砂町三十六番地

發行所
東京市日本橋區通三丁目八番地
株式會社 春陽堂書店
振替東京一六一七　電話日本橋五一番

『日常生活の精神分析』終

昭和 五 年十月二十日印　　刷
昭和 五 年十月廿五日發　　行
昭和 十 年九月三十日改訂第二版
昭和十五年十月三十日第 五 版

フロイド精神分析學全集（日常生活の精神分析）

定價金壹圓八拾錢

譯　者　大 槻 憲 二

發行者　和 田 利 彦
東京市日本橋區通三丁目八番地

印刷者　龜 谷 良 一
東京市本郷區眞砂町三十六番地

印刷所　日東印刷株式會社
東京市本郷區眞砂町三十六番地

發行所
東京市日本橋區通三丁目八番地
株式會社 春陽堂書店
振替東京一六一七　電話日本橋五一番